
葉牡丹の花～青潟大学附属シリーズ中学編

舞夜じょんぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葉牡丹の花―青潟大学附属シリーズ中学編

【Nコード】

N6700E

【作者名】

舞夜じょんぬ

【あらすじ】

中学二年二月。水鳥中学生徒会と青潟大学附属中学評議委員会との交流準備のため、親友関崎乙彦と出かける佐川雅弘。目障りな女子に惚れられ困りはてた乙彦のため、雅弘はいろいろ手を尽くすが、自分も初恋と出会ってしまい舞い上がる！目障りなのはわかっていても消えられない、彼、彼女の行く末は？

もし、おとひっちゃんと中学で出会っていたら、僕は親友でいられただろうか。

今年に入ってからいつも思うのは、おとひっちゃん……僕の親友 関崎乙彦の仇名だ……が、どうしてこうもおばかなことばかりしているのかってことだった。

たぶん僕だったら、もっと楽なやり方するのにな、どうしてこんな面倒なことばかりするのか。いつもそんなことを考え、いつのまにか話を聞き流すくせがっていた。

おとひっちゃん、もごもごしてないで言っちゃえばいいのに。
「雅弘、聞いてくれないか」

とうとうおとひっちゃんが口を切った。ずうつと三十分くらい、僕は待っていた。やっとだやっと。

「うん、いいよ。おとひっちゃん」

僕は少し笑顔をこしらえてみた。にっと笑ってみた。こうするとおとひっちゃんは機嫌よくなるってことを、十年間の経験上、よく知っているからだ。

「来週の日曜、悪いんだけどな、一緒に着いてきてほしいんだ」
「どこに？」

野球とかサッカーの試合を観にいくと誘っているんだろうか。悪いけど、それは勘弁してほしい。やっと風邪が治って学校に行く前日なんだって奴にだ。

「あそこにだ」
「あそこってどこ」

ははあ、もしかして、この前言ったことかなあ。

僕の直感は大抵当たる。先週、本当だったら行くはずだったんだけど、キャンセルせざるを得ない事情があって、行けなかった、あ

そこだ。

「雅弘、青大附中に付き合ってくれないか」

先週から僕は、ひどい風邪を引いて寝込んでいた。インフルエンザではないけれど、熱も出たしすっかり学校も休んでしまった。そんな中、違うクラスのおとひっちゃんは毎日、僕のうちへプリントだとか、ノートだとかいっぱい用意して来てくれた。そろそろ熱もひいた頃だし、学校へ行ってもいいかな、というちょうどこの時期だった。

「いいけど、けど俺が行っていいの」

「いいに決まってる。最初からお前と一緒にいくつもりだったんだ。っていうか、生徒会では今回動けないし」

おとひっちゃん、また熱くなってるな。

外の雪も一気に溶かす、関崎乙彦水鳥中学生徒会副会長様。

僕はだまって話を聞いていた。パジャマのままで炬燵に入り、みかんの皮をむきながら。おとひっちゃんは片膝を立てて、学生服の襟を外した。こうやるとなんとなく、おとひっちゃんも学校の番長っぽくみえる。こうすれば総田と見かけだけでも、対張れるのにな。

「お前が学校を休んだ次の日さ、俺と総田とふたりで行ったんだ。本当は雅弘だけ連れて行くつもりだったけど、お前が倒れたんだったらしょうがねえよ。あれだけ乗気でない総田がだぜ、ぎりぎりになって付き合うなんて言い出したから」

きつと修羅場だったんだろうなあ。

あとで総田幸信……水鳥中学生徒会、もうひとりの副会長様で、かつおとひっちゃんのライバルだ……に電話をかけておこう。こっそり決めた。

「で、青大附中に行ったんだけどな。なんか、評議委員会の方で、渉外の仕事は担当することにもう決まってるんだとさ。総田はあんまりいい顔してなかったけどな。とにかく、そのの評議委員長と話

して、今週もういちど、集まろうってことになったんだ」

「じゃあ総田とか、あと内川会長と行けばいいのに」

天敵総田よりも、一年下の生徒会長・内川くんといきやあ一番丸く収まると僕は思う。おとひっちゃんのことを慕っている、数少ない味方のひとりなんだから。

「いや、内川も、三月の卒業式式典の準備でてんでこ舞いなんだ。

手が空いているのは俺だけだし、総田はもう行く気ないみたいだし」

だからなんで俺が行くんだ？

前からおとひっちゃんには、青大附中との交流会に参加するように頼まれていた。僕は一切生徒会とは関係がない。単におとひっちゃんの親友だつていう、それだけだ。なのに、総田にしる内川にしろ、僕にしょっちゅう頼みごとをしてくる。単純なおとひっちゃんだったらしかないと思つて手伝うけれど、それ以上の見る目持つている総田がなんで僕なんかに頭下げるんだろう。まあそっちの方が一番丸く収まるってこともあつて、僕はしょっちゅうおとひっちゃんの目を盗んで連絡を取り合つていた。

「そうか、じゃあいいよ。もう病院でも、学校行つていいって言つてたし」

まだ鼻水が垂れてきて、ティッシュが手放せない。くずかこの中はくしゃくしゃのティッシュで一杯だ。あとで捨ててこなくちゃいけない。

「あれ、おとひっちゃんどうした？　なんかこう、すつごくほつとしてるようなんだけど」

僕は鼻の下を人差し指でこすつた後、おとひっちゃんの顔を見つめた。

気付かれないけれどゆつくりと、注意深く。

「なあにがほつとしてるだよ。お前、昨日までは具合悪いって布団の中から出てこなかったくせにさ」

おとひっちゃん、心配してくれてるんだよな。

ほこつと、嬉しくなる。

「じゃあな、期末試験用のノート、四組の分と、ほら、三組の分、両方持ってきた」

「両方ってなんだ？」

昨日まで持ってきてくれたのは、おとひつちゃんのクラス……僕は二年三組で、おとひつちゃんは四組。別なのだ……の授業ノートだけだった。全くないよりはましだけど、先生によって出題範囲が異なるから困ったなあ、とは思っていた。

おとひつちゃんは顔の筋肉を妙に引き締めつつ、つながた。

「水野さんが、たまたまノート取ってたって話してたから、そっちもコピーしてもらったんだ。技術と保健体育だけは別だけどな」

さっきたんかあ。

水野五月さん、通称さっきたんが、おとひつちゃんとういう風に話をしていたんだろう。ちょこつと気になる。一瞬だけ想像し、すぐにイメージが湧いてやめた。わかりきってる。きつとさっきたんはおとひつちゃんに、はつかねずみの表情で見上げたんだろうな。その一撃でおとひつちゃんは、ぼおつとしてしまって夢うつつつか。

「ありがとう。おとひつちゃん、こういうところがすごいよな。俺ならそこまで気付かないよ。ごめん」

「じゃあな、明日、朝、迎えに行くからな」

「ちよつと、いいよ。大丈夫だよ」

おとひつちゃんは首を振って、手も軽く振って、僕の部屋から出て行った。食べ終わったみかんの皮が散らばっている。皮を出さずにみんな飲み込むのがおとひつちゃん流の食べ方だ。僕はくずかごにそれを詰め込み、袋の口を閉じた。

机のノートとコピー、両方を開いた。

おとひつちゃんは今回、コピーじゃなくて、自分のノートを全部手書きで写してくれたらしい。学年トップを譲らないおとひつちゃんのノートは貴重品だ。けど、でも。

実はさっきたんの方が使い勝手いいんだよな。

コピー紙のきれいな文字。ノートごと借りたんだろうか。もしそうなら僕は断言したっていい。おとひっちゃん、僕の分の他、絶対自分用にもコピー取っているはずだ。

窓の雪が凍っている。

咳き込みながら窓の外を眺めると、おとひっちゃんが背中を丸め、ジャンバーに手をつ込みながら歩いていくのが見えた。

僕のうちはおとひっちゃんとかから近いけれど、一週間毎日、わざわざ僕の部屋まで上がってきて、ぶっきらぼうな言い方で元気付けた後帰っていくなんて、そう簡単にできることではないと思う。僕だけじゃない。きつと、おとひっちゃんにとって友だちといえる奴には、きつと誰にでもそうするんじゃないかって思う。

そういう奴だ。おとひっちゃんは。

だから僕の親友なんだ。

インフルエンザかもしれないのに、期末試験前だっていうのに、関係なく僕の側にきてくれるなんて、まずいやしない。

おとひっちゃん、いい奴だ。けどな。

寝すぎてちょこつと痛む片一方の頭をさすりながら、僕はもう一度ベットにもぐりこんだ。病人の特権を利用して、もう少し寝てみよう。

水鳥中学生徒会が行った昨年度の大イベント「学校祭三日目・自主企画」は、いろいろ修羅場もあったにせよ、喝采の中終わった。おとひっちゃんの爆弾発言を初めとして、かなり衝撃が走ったことも多かった。でも、なぜかわかんないけれど、水鳥中学の先生はあまりうるさく言う人がいなかった。僕もこれは意外だなあ、と感じた。

どうやら、おとひっちゃんの燃やした情熱の炎が、大人にはすうっと伝わったらしい。

肝心要の生徒たちには全くだったけれども、それは気付かせない

ようにしておけばいい。

その辺は総田副会長がうまく立ち回って片付けたらしい。

その後生徒会改選は、おとひっちゃんの後輩・内川くんがあっさり信任投票で生徒会長に任命され、二年副会長も自然と再選。書記と会計も一年がひとりずつプラスされた以外はあっさりとスライドした。なあんだ、あれだけおとひっちゃんが悩む必要もなかったってわけだ。僕としてはおとひっちゃんを会長にしたい気持ちでいっぱいだったのだけど、今思えばそれは危険なことだったと思う。

純粹で、ひたむきで、不器用なおとひっちゃん。

幼稚園の頃から、僕をかばっていじめっ子たちに立ち向かってくれたおとひっちゃん。

今日も、見舞いに来てくれたおとひっちゃん。

すっごく、すっごくいい奴なのだ。僕はおとひっちゃんが大好きなはずなのだ。なのに、こうやって寝ていると、妙な気持ち湧いてきて、気持ち悪くなる。熱がまた出てしまいそうだ。

おとひっちゃんがもし、俺の親友じゃなかったら。

炬燵の上におきっぱなしのコピーを、ベットから無理やり手に取った。さっきさんのノートコピーだ。

明日、学校に行ったらありがとうっていつとこうかな。

さっきさんとは小学校五年の時に、同じクラスになって以来、女子の中でもちよくちよくおしゃべりするようになった。きちんと男子にも「くん」付けで呼んでくれるし、誰に対してもやさしいはつかねずみっぽい笑顔を見せてくれる。僕に対しては、ほんの少しだけど、サービスしてくれているような気もするけれど、友だちづきあい長いんだからしかたない。そのくらいは、嬉しいこととしてもらうところ。

でも、おとひっちゃんは相変わらず気付いていないのかな。

さっきさんにはもろにばれてるってこと、気付いてないんだろ？な、あの調子だと。

僕は信じて疑わない。

おとひっちゃんの想い人がさつきたんであることと、それがすでに、生徒会役員全員にばれてるってことを。みな、同情を持って内緒にしてくれている。紳士同盟だ。

僕だったらたまったもんじゃないな、ってなんとかしようとするけどなあ。

それすらしようとしないおとひっちゃんって、やっぱり、なんというか。

続けると、僕は親友としてあるまじき言葉を口走ってしまう。

もしかして僕はおとひっちゃんのことを見下してるんじゃないだろうか。

裏表のないこない奴を、せせら笑ってるんじゃないだろうか。

もやもやしたものが抜けきらず、僕は慌ててテレビをつけた。落ち着かない時に限って、画像は映らない。白黒のままでかえっていらいする。すぐに消してラジオを入れた。これもだめだ。電波が悪天候のため受信しづらくなっているみたいだ。

ああ、全くなんだよ！

もう風邪が鼻以外に残っていないせいか、むしように動きたくってならない。病人の時間は終了だ。僕はベットの上に投げっぱなしの青いはんてんを羽織り、そつと階段を降りた。父さんも母さんもまだ店に出ているはずだ。僕ひとり、誰にも聞かれないように電話ができるのは、この時間帯だろう。期末試験一週間前は、生徒会活動もお休みだ。もちろん部活もそうだけど。

僕が電話したのは、もうひとりの生徒会副会長、総田幸信だ。

今年こそ、万年二番順位返上に燃えているんじゃないだろうか。邪魔したら悪い、とおとひっちゃんには思う。でも総田には全然そんなこと考えないですむ。勉強だけが命じゃないだろ、ってことだ。運よく、一発で総田が電話口に出た。相変わらずへらへらした口調に凄みが増している。

この調子だと日々おとひっちゃんと遣り合っているんだろう。あ

っさり勝利なんだろう。

「佐川かあ、お前、一週間寝込んでるって聞いたけど、元気そうじゃねえか」

「うん、明日から学校行くよ」

僕はまだかすれた声で答えた。

「それより、今いいかな。ちよっとおとひっちゃんのことでも聞いたことあるんだけど」

「おおさ、なんだ」

声は明るい。生徒会室での戦いは勝利の連続に違いない。

「この前、青大附中におとひっちゃんと一緒に行ってたって聞いたんだけど、その時なにかあったのかなあ。ちよっとだけ気になったんだ」

「ちよっとだけってなんだよ。関崎がまたぐちってたのか」

「いや、そうじゃなくてさあ」

天井の木目が少し濃くにらみつけてくる。僕は見上げながらぐつと腹に力を入れた。

「なんで総田、青大附中の交流会に乗気じゃないのかなあって思ったんだ」

ぐつと言葉に詰まったようすだ。ふうつと息を吹く気配があった。

「俺が乗気にならないとおかしいか」

「いや、総田のことだから、なんか考えてるんだろうなって思っただけだ。けど、おとひっちゃんだけに全部任せとくなんて、何かまずいってことあるんじゃないかなあ。俺はおとひっちゃんにそういうこと、言う気なんて全然ないよ。ただ」

ちよっと咳き込んだ。まずい、店に聞こえないようにしなきゃ。

「俺も青大附中にくつついて行く以上、総田に迷惑かけるようなへま、したくないからなあ」

思いつき気の抜けた声を装った。僕の得意技と、人はいう。別に普通に話をしているだけなのに、総田はものすごく僕を買ってくれているらしい。

「へまな。確かにな」

総田は沈んだ声で返事した。

「まあなあ、佐川と一緒にいくんだったら、一安心ってとこか。関崎は俺の想像をはるかに越えることやらかして、大騒ぎに仕立てちまうから、正直なところ心配ではあったんだ」

「だから一緒に行けばいいのに。それかさ、内川会長だけでもさ」

「いや、待て、俺の話を聞けよ。佐川参謀殿」

参謀か。

少しじらして、相手に話をさせるのがコツ。

あとは一切口を挟まず、最後まで聞くこと。

総田にせよおとひっちゃんにせよ、自分でしゃべりたくてなんないことがたくさんありすぎるのだ。そういう奴にはとことん、聞き役に廻ってやって、気持ちよくさせればいい。そうすれば大抵の情報は簡単に手に入る。どうしてふたりとも、こんな簡単なことに気付かないんだろう。僕もあまり教えてやらないから、わからないのかもしれないけれど。

咳払いをした後、総田の口はするすると僕の聞きたいことを吐き出してくれた。

僕はずっと耳に受話器をつけて、寒気が走るのをこらえていた。

「佐川がぶっ倒れて青大附中の評議委員会にいけなかった時のことなんだな。実は」

総田の言い方は秘密めかしていたけれどたいしたことじゃないようにも聞こえた。

「関崎ひとりで舞い上がらせておくのもいろいろまずいし、内川にうまく話をつなげてやることも必要かなと考え直して、俺もくっついていくことにしたんだ。関崎のことだ、青大附中の連中たちの顔を見て、赤い布をひらつかされた牛状態にならないとも限らんしな」

今年の一月に、一度生徒会同士の交流ということで出かけたことはあると言っていた。その時は生徒会役員全員で青大附中へと乗り

込んだわけだ。ただ、総田はその時あまり、いい印象を受けなかったらしい。おとひっちゃんとは正反対にだ。

「関崎本人は非常に、青大附中の連中に対して仲良くしたいような顔をしてたな。向こう側の連中ってのは、やたらと女たらしで一本ねじの抜けたような奴が多くて、どうも見ていて虫唾が走るタイプだったんだな。女子はともかく、男子連中、お前ら男だろ、もっとしゃきつとしろよ！って怒鳴りたくなるような感じなんだ」

おとひっちゃんとは正反対ってことかな。

なんとなく、わからないでもなかった。僕は黙って聞いていた。

「で、今回は生徒会を抜きにして、向こうの評議委員会ってこと
直接交流会をいたしましょう、ってことで話が来たわけだ。おい、
評議委員会ってなんだよ、って聞いたらな。単なる水鳥中学の学級
委員の集まりときたもんだ。おい、なんで生徒会が学級委員と仲良
しこよしなくちゃいけないんだって、俺としてはかちんと来たわ
けだ」

評議委員会、と学級委員会とは別なんだ。

その辺はよくわからない。やっぱり、私立中学にはいろいろある
んだろう。

いきなりまた声を潜め出したのは、総田にもさしさわりのある話
題なんだろう。

「でもまあ、関崎が機嫌よく話を聞いて、向こうの評議委員長と仲
良くしゃべっているの、害はないだろうと俺も安心していたわけ
だ。単なるお友達づきあいを止める気ねえよ。女子は別だしな」

総田好みの女子がたくさんいたんだね、きつと。

僕は思わず咳払いで笑いを隠した。

「四月以降少しずつ、青大附中の部活動関係のイベントとかに参加
させてもらおうとかいろいろ話は盛り上がった。うちの中学、
バスケ部だけはやたら強いだろ。それ、向こうの評議委員長も知っ
ててさ、ぜひ一度練習を一緒にさせてもらうことできないかとか、
交流を部活動中心でどうだろうとか、提案してくるんだ。やたら

と！」

全国大会出場したもんな。去年の中体連で。

水鳥中学バスケット部を絶賛されたからには、総田はもとより、おとひつちゃんだって機嫌よくなるだろう。ずいぶん、青大附中の人は水鳥中学のことを調査している。

「けど、本当に盛り上がるのは俺たち二年連中が引退してからのことになるだろうってことも言ってたな。やっぱりいろいろよんこるなき事情ありありなので、すぐに交流会をやるのは、青大附中でも難しいんだそうだ。ま、俺も一応は来年受験生だし、あまり生徒会にもかかわつてられないしさ。とりあえずは内川にバトンを渡すだけでもいっかということ、その場は納まった。それにしてもあいつら、野郎のくせに、お茶、出すんだぜ」

「お茶って、出すって？」

言っている意味がわからず問い返した。

「ほら、家庭訪問の時なんかうちの父ちゃん母ちゃんが、先公に出すような感じだぜ。すっげえ濃い緑色の液体を、茶碗に入れて持ってくるんだぜ。お茶くみって奴」

「それを、男子がやるのか？」

「そうなんだ。俺だつたら会計連中にやらせるようなもんだが」

総田、それって男女差別だよ。川上さんの前で言つたらまずいよ。うちの父さんも母さんに夜、番茶入れてあげて飲んでるよ。

知ったことじゃないけれど、心の中ではちゃんと注意しておいた。

「とにかく、青大附中は変だ。絶対、変だ。なにがおかしいって、まず茶道の授業があるだろ。委員会活動はほとんど部活動と一緒に、評議委員会は別名演劇部なんだと。要するに学級委員会がいきなり下手な演劇やらかすようなもんだぜ。あと、規律委員会ってのがあるんだけど、こつちでは生活委員会とおなじこととしていらしい。ちゃんと週番もあるんだぜ。違反カード切つて制服のことぐたぐた言うだけじゃないんだ。あいつら、暇があると洋服屋に出かけて、『青大附中ファッションブック』ってもん、作るんだぜ！」

「『青大附中ファッションブック』って何？」

全く謎だ。青大附中の理解できない組織関係に僕も思わず問い返してしまった。

「ほら、漫画ばっか描いて集まってる連中いるだろ。いかにももてないって感じの奴。そう奴らがコピー取って本を回したりするだろ。ああいうことを、委員会の経費で堂々と落として、イラスト本作ってるんだ！ 佐川想像してみろ！ お前のクラスの水野さんがいきなり、漫画同人誌を生活委員会の主催で作り出した、なんてことになっただろうする」

さっきたんなら、描くんでなくて、モデルになって描いてもらうほうじゃないかな。

総田、そういう案もらってきたんだっただろうして利用しないのかなあ。

僕はさらに続く青大附中の委員会最優先主義疑惑を聞き流した。

おとひっちゃんに内緒で、生活委員会をうまく丸め込んで、さっきたんをモデルにした「違反防止のファッションについて」みたいな冊子を作るようもちかければいいんだ。おとひっちゃん、喜ぶぞ。校則最優先主義にも反しないし、おとひっちゃんは舞い上がる。総田にも迷惑がかららない。一石三鳥じゃないか、そういう風にどうして総田、利用しないのかなあ。もったいない。

核心に進むにはまだ十分くらい時間が必要で、僕も風邪がぶり返しそうな寒い廊下で足をばたばたさせていた。そんなに青大附中が変わった学校だっただけを聞かなくなっただけいいのだ。総田だって本音を言っちゃえば、

「どうみたって情けない連中が、なんでこうも好き勝手やってるんだばっかやろう！」

ってとこだろう。僕も聞いていて、面白そうだなとは思っただけ。やることは面倒そうだけど、これだけイベントが揃っていたら、水鳥中学の生徒も喜ぶんじゃないだろうか。

「で、おとひつちゃんは何て言ってたの」

僕は無理やり話を引き戻した。

「あいつか？ もう、度真面目の極地で話を聞いてたぜ。相当、あのうすらぼけ評議委員長と相性が合ったみたいでな、『ぜひ自分たちの代で、青大附中との交流を軌道に乗せたい』と烈火のごとく語っていたぞ。まあ、いつものことながら、どうでもいいことに熱をあげるのが関崎のいいところなんだろうが、振り回される俺たちの身にもなってみろ。これからどうする？ 顧問の萩野先生あたりに話を持って行って、拝み倒すのか？ 青大附中の連中は受験がないけどな、俺たちには地獄の公立入試って奴があるんだ！ どうするんだよいったい」

公立高校入試か。

そういえば、総田は公立にするんだろうか、それとも私立に……。おとひつちゃんと対を張る成績なんだから、青大附属高校を受験しないとも限らない。ちなみに青大附属中学・高校ともに、青潟市では難易度ナンバーワンレベルの学校だ。僕にはおよびじゃない。

「総田、今のところ青大附属を受ける気ないのかなあ」

「ねえよ、あんな金のかかるとこ、誰が行くかって！」

即座に却下だった。

「俺はな、自由にやりたいことができる公立で十分なんだ。もっとも落ちたらしゃれにならねえけど、青大附属みたいなぬるま湯階級の連中としゃべくってたら、もう腹が立ってなんねえよ。なあにが、自慢下に『奇岩城』だ？ 女子と抱き合ってポーズとってビデオ撮るなんて、お前らなにか欲求不満なんじゃねえかって突っ込みたくなるぜ」

女子と抱き合ってポーズ？ なあんだ、そういうことか。

総田には悪いけど、本音が透け透けた。

さっきから総田は女子のことにやたらこだわってたよなあ。やっぱり、川上さんと仲良くするだけではものたりないのかなあ。女子と抱き合ってポーズしてみたいのかなあ。なんか今話している

総田、かなり、欲求不満なんだね。川上さんも親切にしてあげればいいのに。ノートをコピーしてあげるとかすればいいのにな。さっきたんみたいに。

長話をした割には、得るものは少なかったというのが正直なところだ。

要は、総田が青大附中の連中と相性が合わなかったという、ただそれだけのことなんだろう。僕もそれは想像がつく。おとひっちゃんと仲よく話をしている評議委員長ってことだから、きつと器用な奴ではないだろう。かなりとろい奴だったのかもしれない。でもおとひっちゃんはそいつと仲良くしゃべりつづけ、次回の青大附中訪問をOKしてしまったという。それはそれでいいんじゃないだろうか。どうせ総田が文句言いながらも、萩野先生にごますってお願いすることだろうし、おとひっちゃんはそれを自分の手柄だと勘違いして、青大附中にせっせと通うことになるんだろう。おとひっちゃんの居ぬ間に総田は内川会長を懐柔すればいい。万万歳だ。

「佐川、もしあの学校に行くんだったら、ひとつだけ注意しとけ」
もう一度、声がひそやかに聞こえた。車の音が響き、聞き取れずに大声で聞き返した。

「注意ってなんだよ」

「ひとりな、ちよつと、やばいのがいる」

「やばいつてなんだよ」

最重要情報かな。

みしつと天井が軋んだ。雪が積もって落ちる寸前なのかもしれない。

「一回目、二回目と共通して、評議委員にひとり、なんともいえず、いやあな感じがするのがひとりいるんだ」

「ふうん、性格が悪いんだ」

「いや、そういうわけじゃあないだろ。性格悪だったら、うちの川上以上の奴はいない」

愛の裏返しだね。

この辺はつつこまずに僕も流した。

「さっき俺が、お茶を出してくれたとか言っただろ。評議委員の野郎連中が」

「うん、すつごく濃い緑色のお茶を出してくれたってね」

「俺には一杯だったんだけどな、関崎には五杯くらい出したんだ」

そんな飲んだらおながちゃばちゃばになっちゃうよ。

おとひっちゃんに同情しつつ、気になるものをどんと待つ。

「それがな、佐川」

総田は少し黙って、言葉の準備をしているようだった。こういう言葉が、大切だ。

「二杯目からは、その女子が十分ごとにお茶を、関崎の分だけ代えていったんだ」

女子？

なんか、総田の話には「女子」が絡んでいて困る。

こういうのって、半年前の学校祭でもいやというほど経験した。

また変な方向に話が進むといやだ。

「そのいやな奴って、女子なの」

「そうだ。お前も見たらわかる。あの雰囲気といい存在といい、なんとも言えない」

総田はその女子に対して、それ以上話さなかった。やはり、男たるものの言葉を慎みたいんだろう。言わないってことは、言葉に尽くせないってことだ。言葉に尽くせないってことは、そうとうの、むかむかするタイプだってことだ。

「総田、ひとつ聞きたいんだけど、その女子のお茶を、おとひっちゃんに飲んだの？」

「全部、無理して飲んでたな。あいつのうち、どういうしつけしてたんだ？ お茶は全部飲まなくてはならないとも思ってたのかよ。一気に飲み干すもんだから、その女子がすぐしゃしゃり出てきて、また濃いお茶を持ってくるんだ。で、関崎もしかと飲み干して、

まるでわんこそばみたいなことしてるんだよ」

おとひっちゃんらしいや。

人のうちで出されたものは、きちんと食べきらねばならないというしつけをされていたのは、僕も知っている。おとひっちゃんの性格上、そういうきつちりしたところは抜けていない。でも、お茶を五杯つても飲み過ぎなんではないだろうか。帰りのバスで、ものすごくトイレ行きたくなったに違いない。

「でもそれは、その女子が問題あったんじゃないかって、おとひっちゃんに問題があったんじゃないかなあ。飲み終えてからになってたら、気を遣って出す人もいるしさ」

「ああそうだな。うちの川上とは大違いだな」

やたらと川上さんの名前が出てくる。もう笑う寸前で僕は片腹を押えた。

「でも、あの女子は違うぜ。なんというかなあ、ねばっこい。じつと関崎の手元を見詰めていて、隣りであの評議委員長の茶碗がからからになっていても全然気にせずに、ただ関崎だけ見つめてるんだ。まあな、悪いことしているわけじゃねえから俺も何も言わなかったけど、とにかくお茶はちびちび飲むように心がけたぜ」

「変わった女子なんだね。評議委員なの」

「らしい。二回目のご訪問時は俺たちも用心して、できるだけお茶を注がれないですむように、ほとんど手付かずにおいたんだ。関崎もそうしてた。けどな、相手はもつと上手だった。冷めたんだろ、ってことでまたお茶の準備をして、関崎の茶碗だけ持っていくんだ。それも全く手をつけずにだぜ」

僕も行く時は、お茶を一切飲まないようにしようと決意した。

「けど、なんでおとひっちゃんにだけ、そんなお茶注ぎ攻撃してくるのかなあ」　まさか、という直感が走った。こういう時の僕の直感は百パーセント当たる。総田に答えを言わせたかった。

「まあ、あいつにも、新しい春が来たってことかねえ。どうですかい、佐川の旦那」

おとひっちゃんはさっきたん命だつて、知ってるくせに。

ラスト五分の興味深い情報を耳に納め僕は受話器を置いた。

すっかり風邪をぶり返しそうで、あわててベットにもぐりこんだ。母さんにばれたら大変なことになる。また、怒られて学校を休まなくちゃなんなくなる。学校好き嫌いあるかもしれないけど、僕は勉強以外学校って大好きだ。

さっきおとひっちゃんは、あまり乗り気じゃない感じで僕を誘ってたよな。

おとひっちゃんに関する情報について、僕は誰よりも持っているつもりだ。

なにせ付き合いが半端じゃない。幼稚園の頃からあいつは僕のことを守ってくれたし、今でも「雅弘、お前は俺の一番の親友だからな！」と言ってくれている。

おとひっちゃんが今、誰のことを好きで、誰を信頼していて、何をどうしたいか、不思議なくらいわかるのは、たぶん一緒に過ごした月日の長さにもあるのだろうと、僕は思う。

そう、ほとんどのことはそうだと思うんだ。

ただ、ひとつだけわからないのは。

どうして俺は、おとひっちゃんみたいな奴と親友でいたいんだろう。

もちろん理由はたくさんあつて、数え切れないくらいだ。小さいころからの仲良しだから一言で片付けることもできないはない。けど、中学に入って以来僕としては、おとひっちゃんのお間抜けなところばかりが目について、かつてのかっこいいおとひっちゃんの姿が見えなくなってきている。自分でも、それはやだなあと思う。元陸上部だから運動万能は折り紙つきだし、成績は学年トップだし、性格さえ見なければかっこいい奴の部類に入るだろうし。

でも、おとひっちゃんがなんで、自分の行動がみえみえだつて

ことに気付かないのが不思議だった。僕がいつも、おとひっちゃん
のしたことについて影で動いていることすら、想像していないんだ
ろう。ばれないように気を遣ってはいるけれど、僕は総田としょっ
ちゅう連絡を取り合っている。いつばれてもしかたないのに。そう
だ、さっきたんのことだってそうだ。おとひっちゃんは堂々と隠し
ているつもりかもしれないけれど、実は当のさっきたんにも、好き
って気持ちを気付かれているなんて知らないんだろう。クラス全員
にお見通しだってことすらも。

まったく、おとひっちゃんは僕よりずっと、ガキだとしか言い
ようがない。

影で立ち回っているのが僕と総田だと知ったら、きっとぶっちぎ
れるだろう。

絶対に、これを知られてはならない。

僕はおとひっちゃんの親友でありたい、大好きなおとひっちゃん
だと思っていきたい。

でも、だんだん僕の中でずるずると下降気味な価値ランク。

ごめん、おとひっちゃん。けど、どうしようもないよなあ。

布団の中で思いつきくしゃみをした。廊下にいた母さんに気付
かれて、また苦い粉薬を飲まされた。ああ、やっぱり早く学校行き
たいよ。

その気持ち悪い女子ってどんな女子なのかなあ。きっと兎を
がぶつと食べてしまうようながっつちりした人なのかもしれないあ。
さっきたんとは正反対だよきっと。相変わらず今でも、おとひっち
ゃん、さっきたんの前に出るとろくに口、利けなくなるし。お茶く
みの女子のことはなんとも思っていないよなあ。

おとひっちゃんがなぜ、僕を連れて行こうとしたのか。

ふたりで行こうと誘ったのか。総田じゃなかったって、僕には見
え見えだ。

ん。

今度はジュースを一缶、もって乗り込もうよ。おとひつちや

僕は口直しに甘いみかんをもう一つ皮むき、ほおばった

天井が果てしなく高い青潟大学附属中学の体育館。しかも広い。水鳥中学の体育館とは大違いだ。床もてかっているし、しかもつるつるだ。

スポットライトが天井全開の中、おとひっちゃんは一ひたすら体育館内を全力疾走していた。

ひとりではない。

もちろん僕でもない。

僕は入り口付近でもたれながら眺めていただけだった。

おとひっちゃん、息、切れないよなあ。

元陸上部でしかも長距離ランナーだったのだから。今はだいぶ身体もなまっただと言っているけれど、高校に入ったら陸上に復帰したいようなことを話していた。

一緒に背中にくっついて白い息を吐いているのは、伸びかけのスポーツ刈り頭をきりりと整えた、青大附中の男子だった。制服のブレザーではない。濃い青に白い線の入ったジャージ姿だった。

しかし、挨拶もそこそこに、

「じゃあ、少し一緒に走りませんか」
はないよな。

おとひっちゃんも即座にOKした。僕には理解不能だ。

何が楽しくて、「体育館三十周持久走」やるうって言うんだろう。

ふたりとも顔は険しい。がはがはと白い息を吐きながら、それでもフォームを崩さないところが、やはり運動部。あと五周回ればゴールだ。疲れてるんならいいかげんやめろよ、誰も誉めるわけでもないんだから、と僕は思う。でもおとひっちゃん、無駄な努力が大好きなんだからしかたない。

けど、日曜だつてのになんでこんなことしてるんだろ。

後ろの方でまたひとり、入ってくる気配がした。髪の毛をお下げ編みにして、耳のところでくるくる巻いてカンフー映画の女の子みたいな感じにしている女子だった。この人はちゃんと制服できたらしい。軽く頭を下げてくれたので、僕も帽子を脱いで挨拶した。

「水鳥中学の人ですか？」

おっとりした口調で聞かれて、僕もつい笑顔で答えた。

「あと、向こうのひとりと一緒に」

女の子はこつくり頷くと、黙ったまま持久走を観戦し始めた。青潟大学附属中学の評議委員かなんだらう。唇が少し光っている。瞳もきよんとしているけど大人みたいだった。なんとなくだけど、さっきさんに似てると思った。

持久走は大詰めだ。マツチレース、と思わず実況を試みたくなった。僕の前を走り抜けたふたりの顔を見るとまだまだ余裕が感じられる。ただちょっとだけ相手の男子、分が悪そうだ。歯を食いしばり、あごが出ている。おとひっちゃんはもくもくとフォームを変えていない。あと二周。

ちよつと相手が悪かったよな。

勝利はまず、おとひっちゃんの手にありつてとこだ。

青大附中の彼も相当馬力あると思うけど、やはり陸上部上がりの長距離走者と勝負するというのは、かなり無謀だそんなこと知るわけないだろうから持ちかけたんだとは思うけど。おとひっちゃんの性格上、遊びでも手は抜かない。どんな時も全力投球。

たとえこれから、青大附中評議委員会主催で、お茶を注がれつつ交流準備会が行われるとしてもだ。

また後ろから人の入る気配がした。横目でちらつと伺うと、ブレザー姿の男子がひとりと、一緒に連れられてもうひとり女子が姿をあらわしていた。僕の隣りにいる女の子も同じく視線を向けた。男子の方は僕とその子へ礼をしてくれたけれど、もうひとりのポニー

テール女子はつんと向こうを向いたままだった。態度悪い。

もしかして、例の彼女だろうか。

いよいよラスト一周。ここで声をかけなくちゃ。

「おとひっちゃん、勝負だ！」

はっと、隣りの女の子が僕の方を見た。

おとひっちゃんはまったく無視。しかし踏み出す足が心持速くなつたように見えた。たぶんラストスパートだ。

「健吾、がんばって！」

僕の隣りでちろつとえくぼをこしらえてみせ、女の子もかすかな声をかけた。もちろん体育館内には聞こえる。そいつ……たぶん健吾という名なんだろう……はその子に向かい、何かを言いたげな視線を送ってきた。

もしかして、おつきあいの人なのかな。

帰ったら総田にこの話どう伝えようか、ちよこつとだけ考えた。

ラストスパートの直線でおとひっちゃんは形相変えて二メートルくらい引き離れた。勝負をあきらめたのか、健吾くんは距離を無理に縮めず、立ったままゴールした。僕の立ち位置がゴールだ。

僕の目の前で、見事全力疾走。水鳥中学元陸上部の血は、見事に青大附中の覇者を倒したってわけだった。

後ろで数人、まばらな拍手あり。立ったまま両膝に手を当てて、かがみこんではあはあ言っている青大附中の彼に、僕の隣りの女の子は近づいていった。

「おとひっちゃん、こんな本気出してどうするんだよ。これからだよ」

答えはない。とにかく、心臓が相当苦しいらしい。学生服を脱いで、ワイシャツ一枚汗ぐつしよりかいたままで倒れている。こういう時はタオルを渡すのがベストなんだろう。僕はおとひっちゃんの学ランを上からかけてやった。ついでにポケットティッシュを袋こ

と渡した。

「雅弘、ありがと」

僕はしゃがみこみ、まじまじとおとひっちゃんの横顔を眺めた。マラソン大会後に精魂尽き果ててぶったおれているおとひっちゃんと同じだった。髪の毛は汗で濡れていた。息も大きい塊が白く浮かんで消えていた。

まったく、おとひっちゃん、手抜きできないからなあ。

「関崎さん、すげえ、あんたやっぱり、すげえよ」

おとひっちゃんよりもダメージが低そうな彼が近づいてきて、側にしゃがみこんだ。今度はおとひっちゃんをはさむ形でさっきの女の子が、僕の前に立っていた。ちょうど足首の細いところに目が行った。すぐに逸らしたので気付かれてないはずだ。

「やっぱしなあ、生徒会でもこういうすげえ奴がいるから、水鳥中学のバスケット部ってすごいんだよなあ。ほんと、負けました。俺、尊敬します！」

うちの学校では絶対に言ってもらえない台詞だな。お

とひっちゃんが腕立て伏せの要領で起き上がった。そのまま座り込み、いつのまにか円陣をこしらえている集団ひとりひとりに目を向けた。

「いや、俺もひさびさ、真剣勝負できて、すげえ楽しかった。ありがと」

だいぶ息も落ち着いたらしい、座ったまま、おとひっちゃんは手を差し伸べた。勝負相手の彼も、唇をぎゅっとかみ締めたまま、それでも笑みは隠し持ったまま、手を握り合った。また、周りから拍手が沸いた。いつのまにか青大附中評議委員会の連中がみな集まっていたらしい。

あと、ぽんぽんと二回、タイミングのずれた手招き。

「時間です、立村先輩、早くしてください」

盛り上がったのになあ。

握手中のふたりが、その声に思いつきり顔をしかめていた。おと

ひつちゃんはすぐ無表情にもどったがもうひとりの彼はにくにくしげに一点を見つめていた。例の声が聞こえるところに。

「そうだな、では、場所を変えましょう。とりあえずみな二年D組へ集合」

別の声……男子だった……が後をひきとる格好で指示を出した。

円陣を構成していた連中がひとり、ふたりと固まって入り口に流れていく。最後に残った僕とおとひつちゃんと、勝負相手の健吾くと彼女らしく女の子、そしてポニーテールの女子がひとり。

「一緒にきてくれないか。二年の女子たちと一緒に準備手伝ってほしいんだ」

「わかりました」

廊下から聞こえるのは、やはり指示を出していた男子の言葉。ポニーテールの女子は僕たちをじつとにらみ据えた後、ひとつの場所を見つめるような形で、入り口から出て行った。

なんか、変だなあの人。

僕だけじゃない。残っていた他の連中も同じことを考えていたらしい。姿が見えなくなったとたん、ほおつと息をついたのがその健吾くんだった。

「うざつてえなあ。気持ちいいことやってるとこだつてのに」

意味ありげに、隣の女の子へ視線を投げ、すぐに唇を一本に結んだ。

「健吾、じゃあ私、部室で待つてるね」

「ああ、すぐ連絡するからな」

女の子は僕とおとひつちゃんにまたこくつと礼をした。手を口元に当てて僕の方をじつと見つめ、また笑った。

「ほら、早く行っちゃえ」

照れ隠しってやつだな。これ。

浅黒い肌が少しほてっているみたいだ。これは僕がよく、総田を恋愛ネタでからかう時、よく見る肌の色だった。

見送った後、彼は膝をまたばんぽんと叩いた。

「じゃあ、二年D組まで案内します」

おとひっちゃんも急いで学生服をまとい、ボタンをかけないままジャンパーを羽織った。おまぬけな格好だ。おとひっちゃんの名誉のために、この姿が総田一同に見られなくて本当によかった。つくづくそう思った。

生徒玄関ロビーに赤いじゅうたんが敷かれているとことか、廊下を歩いてもそれほど寒くないことか、壁が白く明るいところとか、目が奪われっぱなしだった。僕もほとんど、他の学校に足を踏み入れたことがない。どこの学校もみな、木目の焦げ茶壁、風が吹き抜ける窓、冬場に廊下出る時は、防寒を完璧にしないとひどい目に合う。学校ってそういうもんだと思い込んでいたんだけど、やはり青大附中は別世界だ。

やっぱし、私立は違うよな。

「さっきの人、評議委員じゃないの」

「違うっす」

またまた、照れた風に答える健吾くん。後ろで小さく、

「雅弘、黙れ」

とささやくのはおとひっちゃん。はしゃぎ過ぎと思われているようだ。おとひっちゃんは自分で仕切りたい性格だ。その辺は忘れないようにしておかなくては。

「あ、今日は最初だけ顧問の駒方先生がいますけど、すぐにいなくなつてあとは、俺たちが好きにやっていいってことなんで、気楽にお願いします。あと、それとですね」

敬語を使ったり妙にフレンドリーになったり、変わった男子だ、

「もし、無理に飲みたくないとか食べたくないとかだったら、一切無視していいです。まじで俺もいらんもの飲めっていわれたら、相手にぶっかけるし」

ははん、例の「お茶五杯わんこそば事件」を知ってるんだな。

隣りで学ランの金ボタンを必死にかけつつ、おとひっちゃんは無言だった。

答えられるわけ、ないだろう。

一応僕の提案で、おとひっちゃんと僕の分、缶コーヒーを二本用意してきた。ちゃんと領収書ももらって。緑色濃いお茶なんて、怖くて飲めないし。

階段を上がって一番奥の教室へ向かった。扉式の教室に健吾くんとおとひっちゃん、それからきんぎよのふんみたく僕が入って行った。すでに青大附中の評議委員が八人くらい、机をコの字型にならべて席についていた。各一席ごとに、全員の分、お菓子が紙皿にセツトされていた。なんとなくお誕生会の延長って感じだった。椅子もみな、白っぽい。いろいろと名前の彫りこみとか、カンニング用の英語の落書きも残っていたけれども、雰囲気はさっぱりしているのだけは強く感じた。

まずは、教壇のパイプ椅子に腰掛けている、おじいさんっぽい先生に、おとひっちゃんが挨拶した。

「水鳥中学生徒会、副会長の関崎乙彦です。本日はお招きいただきありがとうございます。よろしく願います」

元陸上部。腹から出した声。僕の方をちらつと見て続けた。

「今日は生徒会外なんです、渉外を担当してもらってる佐川雅弘も連れてきました。どうかいつもよろしく願います」

ちゃんと僕だって挨拶するつもりだったけど、無理やり肩を小突くようにするのはどうかと思う。ま、そういうところがおとひっちゃんだけ。

先生は口を結んだまま、にこやかに僕らを眺めていた。ふんふん頷きつつ、

「こちらこそ、よく来たね。青大附中は委員会活動の方が活発だから、今回評議委員会とお付きあいをお願いすることになったけれども、堅苦しいことはいいからな。ゆっくりと、まずは友だちにな

つて帰ってもらえれば大成功だよ。さ、どうぞ」

右の一番端っこにいる、色のやたらと白い人形みたいな男子生徒に頷いてみせた。

「委員会の交流会とはいうが、今日は日曜日だ。無理に堅い話をする必要はないよ。私は職員室で待っているから、ゆっくりとおしゃべりをしていきなさい」

立ち上がった男子生徒は、きちんと一礼して、先生を見送った。他の連中もつられて起立。もちろんおとひっちゃんも、僕も。

ずいぶん、いいかげんな学校だよなあ。気楽なことは確か一方で、僕としてはちよっぴりほっとしたんだけど。

扉が閉まり、足音が消えるまで青大附中の連中は立ちっぱなしだった。だいぶかすかに聞こえる程度のところで、僕ら水鳥中学ふたりに向き直った。

「今日は本当に、わざわざいらしてくださってありがとうございます」

おとひっちゃん、そして僕にまた一礼した。先生もいないのに、ずいぶん形式ばったことする奴だ。

僕たちふたりの席は、窓際だった。首すじが冷える以外はあつたかった。

青大附中の制服は少し茶の入った灰色のブレザーにネクタイだった。遠めで見ると、会社に向かうおじさんたちに似ている。おとひっちゃんがああいう格好をしていたら、本当に歳がわかんなくなっちゃうんじゃないだろうか。思いつつ、僕はお菓子をつまみ始めた。チョコレート、ポテトチップス、クッキー、家でお客さんに出すようなお菓子ばかりだった。

隣りのおとひっちゃんはというと、手をつけずにノートとカンペンを取り出して、じっと例の蠟人形男子生徒に合図を送っていた。どうやらそいつが、総田の言う「うすらばけ評議委員長」らしい。胸に貼り付けている金の名札を読むと「立村」とかかれている。「

たちむら」だろうか、それとも「りつむら」だろうか。僕の視線に気付いて、一瞬目を合わせた。でもすぐに逸らし、隣りの男子連中と二言三言話をしていた。紙コップにジュースを注いでくれたのは男子だった。お茶ではなかったみたいでほっとした。かばんの缶コーヒーも無事なようだ。僕が座っている席は、蠟人形の彼の斜め左だった。真つ正面にいるのがおとひつちゃん。今日の話し合いはたぶん、おとひつちゃんと、蠟人形との語り合いになるんだろうな。真面目なんだろうけど、やっぱり、すこしばーっとしている感じするなあ。

僕は少し考えつつも、注がれた炭酸のグレープジュースをなめた。青大附中の評議委員……いわゆる学級委員……がなぜ、そんなに交流を求めるのか、僕にはよくわからなかった。おとひつちゃんに前もって聞かせてもらってはいたけれども、そんなだったら生徒会同士で友だちになればいいじゃないか。けど、青大附中の評議委員会は顧問の先生も、その形でいいと思っているみたいだし、あまり深いことは考えない方がいいんだろう。

なによりもおとひつちゃんの顔ときたら、すっかり溶けている。水鳥中学生徒会室ではいつ爆発してもおかしくない地雷状態の顔してるくせにだ。

もしかして、おとひつちゃん、青大附中でものすごくリラックスしてる？

口を尖らせながら、おとひつちゃんはさらさらと何かを書いていた。ページが左側、ぼわつとふくらんでいた。

「あの、水鳥中学生徒会からの、まず挨拶をしていいですか」

おとひつちゃん、やっぱり仕切り屋の本能発揮だ。大抵水鳥中学だと、総田や川上さんが「けっ」つとばかりに冷たい相槌を打つのだろうが、やはり青大附中、その点大人だ。全員、きちんと机の上に手を組んで、身を乗り出してきた。

「すみません。この前の続きですね」

みな敬語を遣っている。蠟人形がかすかに笑みを浮かべている。

細くて人形みたいだった。委員長らしくない。

「そうです。まず、この会は水鳥中学生徒会と青大附中評議委員会の交流準備会、だと思ってます。それでいいですか」

当たり前だろ、そう言っただけにさ。

ばかみたいなこというおとひっちゃんだ。僕はチョコレートを口に放り込み、がりとかんだ。

「そうです。まだ、しばらくは、『交流準備会』扱いでやりたいと思っっています」

「それはいいんですが、うちの学校は」

おとひっちゃんは言葉を切り、紙コップのジュースを一気に飲んだ。おとひっちゃん分はどうも炭酸入っていなかったらしい。オレンジジュースだった。「やっぱり、公立なので、公立高校入試があります。僕の学校では、生徒会の改選が十月にあります、その後は三年生が一切参加できない形になります。受験勉強があるからです」

そうだよ。おとひっちゃんの言うとおりだ。

「たぶん、合同で何か集まりができるとしたら、一学期だけじゃないかと思います」

そうだな。けど、誰がこれ提案したのかな。

たぶん、総田あたりからの案だろう。おとひっちゃんは総田に吹き込まれたことを、自分が考えたんだと思い込んで話すぐせがある。「また、六月の最初に中間試験、七月の頭に期末試験があるので、できれば五月か六月の半ばにやってもらいたいと思っってます」

思います思いますって、おとひっちゃん、見てみるよ。他の連中よくわからない顔しているよ。こういう時はちゃんと相手の学校に説明させてからの方がいいってのにな。

つつこみはしなかった。だって、おとひっちゃんの顔、見事に真っ赤だ。さっき走った後だとは分かっているけれども、なんかかんかあるとすぐ頬を火照らせるのはみっともない。こういう場所ではむしろ、総田の方がずっと分かりやすく説明できるだろうになあ。

けど、意外にも、目の前の蠟人形委員長は笑みを絶やさなかった。遅れてきた女子ふたりに席に着くよう、指先で合図し、その後はずっとおとひっちゃんを見つめていた。総田も言っていたけれど、前回、前々会の集まりでは、妙にこいつとおとひっちゃんが盛り上がっていたらしい。なんか、わかるような気がした。

おとひっちゃんのせられやすいからな。

おとひっちゃんのわかりづらい説明に見切りをつけたのかどうかわからない。でも蠟人形委員長はもう一度大きく頷いて、隣の男子にまたささやいた。「あらよつと」とつぶやいた相手方は、コピーした紙かなにかを渡している。

「ありがとうございます。実は今日、青大附中評議委員会でもあまり話を通じていない人がたくさんいるので、あらためて説明します。関崎くん、繰り返しになりますけれど、よろしくお願いいたします」

やっぱりわけわかんなかったんだ。なるほどな。蠟人形委員長さんもおとひっちゃんに手を焼いてるんだ。

僕は立村評議委員長の顔を見上げた。いわゆる男子たちがしている普通の髪型に前髪といった感じだった。ただ色が白すぎて、一瞬女子っぽく見える時がある。女子の好きな漫画だったらきっと人気ものになりそうなんだけど、男子からすると、すぐに骨折しそうでめんどくさそうな奴に見えた。僕もそう思われているところ、あるのかもしれないけれど、幸い学習委員のみの担当だから目立たないですむ。青大附中評議委員長というのはいやおうなしに目立たなくてはならない地位だから、大変だろう。ちよつとだけ同情した。

「それでは、説明します。始まりは去年の十月に、学校祭を通じて水鳥中学生徒会のみなさんが青大附中生徒会を訪問してくださったことです。その時に、水鳥中学生徒会顧問の萩野先生と、評議委員会顧問の駒方先生がぜひ一度交流みたいなことを行いたいという話合いを持ったそうです。この段階ではまだ、評議委員会の出番はありません」

そうなんだ。最初は生徒会きっかけだっと思ってたもんな。

立村評議委員長はちらつと僕に目を向けた。すると僕のひとつ置き隣りに座っていた女子がチョコレートをつたつみつつ、僕の紙皿にのつけてくれた。包み紙が机に山積みとなっていたのをチェックしたんだろうか。神経質な奴らだ。

「ただ、青大附中の場合、生徒会よりもむしろ、委員会活動の方に力を入れているところがあります。通称『委員会最優先主義』と言われています。先日関崎くんにはお話しましたが、部活動が低迷している理由として、運動部に入りたい人がみな委員会活動に吸い取られてしまうという問題が挙げられています」

ちつと、舌打ちする音。発信源はどこだと覗くと、僕の斜め左の席でふんぞりかえっている健吾くんの姿。ジャージ姿。浮いている。仲、悪そうだなあ。気付いたのか、ちらつと視線を健吾くんに向ける評議委員長。

「そこで、今年からは他の中学と交流を持つ時にお互い部活動のレベルアップも図れるような仕組みをつくりたい、と僕は考えています」

核心だ。

おとひつちゃんと話していて今ひとつわからなかったことが、やっと解けた。

「生徒会同士での交流もいいとは思ったのですが、ただできれば、他の部活動や委員会活動、それと個人個人の生徒たちとのいい付き合いもできればベストではないか、というのが僕なりの考えです。もちろん僕の任期中にすべてできるとは思ってませんが、せめて踏み出すためのきっかけくらいはこしらえておきたいというのが本音です」

なんていうか、無駄なこと考えてるよなあ。おとひつちゃんとおんなじだ。

僕はもらったばかりのチョコレートをさらに口へ放り込んだ。「そこで、今回あえて評議委員会の集まりにお招きしたのは、その交流準備会をこれから九月までの間、少しずつ進めていきたいから

です。今、関崎副会長もおっしゃりましたが、公立と私立との学校事情はみな異なりますし、決して無理にということとは言えませんが、何度か顔を合わせて互いの学校の違いや問題点について話し合う機会を持つことができれば、もっといい方法が見つかるはずだと信じています。ここでうまくいい方法が見つかったら、あらためて生徒会同士の改まった交流会を行ってもいいと思いますし、六月中旬くらいに一般生徒たちを含めた集会を行っても面白いでしょう。でも、急がないでゆつくりと、先を見据えて話し合うことが、今の両校には必要なことではないかと思っています。だいたいこんなところでどうでしょうか」

最後の一言に力をこめ、立村評議委員長は席についた。こういう時拍手するもんなんだろうけれど、他の連中は黙って聞いているだけで何も言わなかった。悪意がなさそうなのは丸見えで、立村評議委員長の両隣にいる男子たちが軽く背中を叩いたり小突いたりしているのは見える。おとひつちゃんも真剣にノートを取っていた。別に取り必要もないことなのに妙な奴だ。唯一、椅子にふんぞりかえっている健吾くんが、僕たちの方をみて、肩をすくめて見せているのが笑えた。

暖房効きすぎで暑い。

「もう一つ付け加えておくと」

今度は意味ありげに、立村評議委員長は黒板の上にくつついているスピーカーを指差した。

「今日話している内容なんです、全部、職員室の駒方先生のとこに筒抜けです。別に聞かれてまずいことしゃべるわけではないのですが、その点、心に留めておいてください」

だれか驚けよ！

知らないのは僕だけらしい。おとひつちゃんもちらつと視線を向けただけだ。当然青大附中の評議委員連中も落ち着いたものだった。僕ははっとして、立村評議委員長の顔をまじまじと見詰めた。

俺だけのために、今の長つたらしい演説聞かせてくれたって

わけか。

蠟人形には脳みそが入っていたってことだ。人を見かけで判断してはいけない。僕は深く反省し、炭酸の抜けたジューズをちびちびなめた。

ちゃんと先生に盗み聞きされているとわかっていても、青大附中の評議委員連中の発言は遠慮がなかった。敬語を遣ったり僕たちに「関崎くん」「佐川くん」と呼んだりするところは、いろいろ考えるところあるのかなと思う。話し合いそのものは面白かった。おとひつちゃんも打ち解けて言いたい放題しゃべっていた。水鳥中学生徒会室にいる時よりも楽しそうだった。向かい側の立村評議委員長に何度も発言を求めたり、いきなり話を脱線させて運動部部活動関連の話に燃えたりしている。

「うちの学校は、バスケ部だけが誉められてますけど、他の運動部もそれなりにがんばってます。僕も、前は陸上やってましたけれども……」

ひとり、浮き上がっている奴。健吾くんがこのあたりの話題だけは目を輝かせておとひつちゃんを見つめている。机から身を乗り出さんばかりというのが笑えてならない。

「だから、運動部の練習試合などを通しての交流会を行うってのもいいんじゃないでしょうか」

「賛成賛成！」

立村評議委員長は静かに発言源の健吾くんに視線を送った。

「そうっすね。やっぱり、水鳥中学バスケ部の人たちと一度、まともに話をしてみたいっていうか、練習の方法とかそういうことについて話を聞かせてほしいってか。うちの先輩連中だとほとんど、話が盛り上がりがないし、レベルも上がらない。やはり外部の風がほしいんですね」

わざわざ立ち上がり、おとひつちゃんにだけ話し掛けている。心なしか、他の男子評議委員連中は冷めた顔で頬杖ついていたりして

いる。仲、よくないんだろうな。きつと。

「そうだな、新井林。まずは三月あたりに部活動同士の交流から開始した方がいいかもしれない。そのあたり、運動部の顧問の先生に頼まないと難しいですか、関崎くん」

新井林か、あいつの苗字って。

健吾くんもとい、新井林くんは鼻をごしごしと指でこすり、席についた。

おとひっちゃんの方を見る。

シャープを何度もぐるぐると回している。

「難しくない、思います」

どこがだよ！

おとひっちゃんは言葉を切って、立ち上がった。また演説だ。

「公立受験関係が絡まなければ部活動関係での交流は問題ないと思います。水鳥中学の場合、一般生徒はあまり活動に関心がないので、もつと情熱のある人たちを中心に動いた方が、最初がいいと思います」

要するに、部員同士で友だちになってもらえば十分って奴だな。

けど、どうやって顧問のみなさまを説得するんだよ。また総田に尻拭い頼むのか？

いつも総田に

「また関崎のおぼっちゃんに押し付けられたぜ。関崎よりも俺の方が先生転がしできるからか？　しかもあいつ、自分の手柄だと勘違いしてるんだぜ。ま、そういうところがあいつだし、無理に俺も文句言う気ねえけどな」

と愚痴られている。

「最初はできれば、バスケット部でお願いできますか」

立村評議委員長はもう一度、新井林くんに細い視線を向け、おとひっちゃんに答えた。

「今、うちの新井林も発言していましたが、青大附中で今少しずつ、

部活動のレベルアップが叫ばれてます。新井林は次期青大附中バスケット部を率いることが義務付けられてます。評議委員でかつバスケット部ということだと、ちょうど一石二鳥ということで、かなり活動に幅が出るのではないかと思います。いきなり繋がりのない部活動と交流活動するのはなんだと思うんですが、もしよければ、ぜひそちらからお願ひしたのですが、どうでしょうか」

ふかぶかと一礼した。

「新井林」と立村評議委員長が口にするたび、他の連中が顔をしかめるのが目立つ。ここにいるのがほとんど、二年評議委員だと考えると、相当新井林くんは、青大附中評議委員会で立場のきつい思いをしているのだらう。相性が合わなさそうなのはわかる。きっと新井林くんも蠟人形立村委員長を馬鹿にしているに違いないし、そういう気持ちも僕にはわかる。当然だ。

まあおとひつちゃんのことだから、大喜びで受けるんだろうな。

「わかりました。バスケット部交流が成功したら、今度は陸上部でお願いします」

おとひつちゃんもまた、頭を机につくぐらい下げた。

総田のしかめつつらが思い浮かび、僕はふっとため息をついた。

なんとなく気になっていたのだが、ジュースやお菓子を注ぎ足してくれる連中……男子も女子もいるが……の中に、体育館で目にしたポニーテールの女子がいなかったのはなぜだらう。ねめっちまなざしと納豆みたいな匂いのしそうな感触。

僕はあまり女子の悪口言うの好きじゃない。けど、さっきの持久走後、体育館の中で初めて、「いるだけでむかつく」という感情を経験した。

お茶のわんこそば事件って、たぶん。

間違っていたら恥ずかしいので口には出さないでいた。

さっき立村評議委員長に「女子たちと準備を手伝ってくれないか」と指示されていたところみると、学校の中にはいるんだらう。

待ち伏せしてるなんて言わないだろうな。

いないんだったらそれに越したことはない。おとひっちゃんも安心してジュースをがぶがぶ飲んでるようだし、隣の青大附中男子にもいろいろと語っている様子だし。僕だけがひたすらチョコレートを食べつつづけているだけだ。

ふと、斜めに位置する立村評議委員長と目が合った。今日、何度目だろうか。

妙に僕の方を観察している。でもすぐに逸らす。

何か言いたいんだったら言えいいのにな。

生徒会と関係ない僕をうさんくさく思っているんだろうか。

それとも、やたらとチョコレートばかりぱくついている僕がおかしく見えるんだろうか。

全くしゃべらないわけにもいかず、食い気をそこそこに、隣の席の男子と互いの学校について話したりしていた。あまり生徒会関係のことに突っ込まれないでよかった。なにせ僕は万年学習委員なんだから。

「今日は女子の参加者っていないのかなあ」

いきなり無言になるのが気になる。

「これからはどっさり参加すると思うけど、でもなあ。今日は特別な事情があつてな」

意味ありげにむっとり顔でささやく隣の男子。二年のバッチを胸につけていた。いろいろ、青大附中にも事情があるんだろう。

全部先生に筒抜けになっっているにも関わらず、みんなそんなこと忘れてしゃべりまくっているうちに、一時間くらい経った。立村評議委員長が立ち上がり、心持スピーカーに向かう格好で締めのお言葉を述べた。

「では、第二回、青大附中評議委員会と水鳥中学生徒会の合同交流準備会を終了させていただきます。次回はお互いの期末試験が終わった頃を予定してます。できるだけ早く行いたいですね。関崎くん」

俺の方ばかり見てたくせに、なぜおとひっちゃんだけなん
だろ。

でもとりあえずはこれにて終りだ。

「こちらこそ、どうもお招きいただきありがとうございました」

空の紙コップとペットボトル、食べ散らかしたお菓子包み、すべてを男子連中がみな、燃えるごみ、燃えないごみにより分けて片付けていた。女子のひとりがこっそり身をかめて出て行ったのを僕は気になって目で追った。窓辺に近づいて見下ろすと、すうっと伸びた雲がくるくるうねっているのが見えた。晴れている。空はすっきりしている。今日来た時には、雪がゆるみかけていた。道が悪くなつてないといいんだけどな。

立村評議委員長が例の蝋人形みたいな顔をほころばせるようにして、おとひっちゃんに近づいた。

「本当に今日はありがとう。また、来てくれるよな」

いきなりこいつ、ため口たたいてるよ。

おとひっちゃんはそういうところ、礼儀を重んじる性格のはずなのだが、僕の気付かないところで立村とお友だち感覚を通じ合わせているらしい。

「ああ、もちろんだ。三月、絶対ここに来る」

「それまでには、できるだけ青大附中の方も公立にあわせられるようタイムスケジュール組んでおくから」

「どうも、助かる。じゃあまた」

ぶっきらぼうながらも、おとひっちゃんは機嫌よく答えた。僕の見る限り、生徒会関連でここまで顔をほころばせているところは見たことがなかった。情熱の炎だけが燃え盛りわめきちらしているところばかり覗いていたせいかな、なんとなくおとひっちゃんが違う人みたくなった。

「それでは、またあらためて」

他の二年男子たちに片手をあげて合図すると、立村評議委員長はすばやく扉を開けたまま教室を出て行った。

「ごみの片付け終わってないのに先に帰っちゃうんだ」

「ばあか、何考えてるんだ」

こつんと小突かれた。

「最初に言ってただろ。附中の委員長、顧問の先生に終わってから報告しに行くってな」

ああそつか。スピーカーで丸聞こえなんだもんな。
スピーカーの電源切ってもらわないとしゃれにならない。

ひとりだけ、片付けに入らず僕たちをじっと見つめている視線に気付いた。しゃつきりした髪型の健吾くんだった。

「あの、すいません、いいつすか」

どまじめに、僕たちに近づいてきて、どすの利いた声でささやいた。

たぶん、ビニール袋を結んだりしている二年生たちには気付かないだろう。

「これから、少しだけ時間もらえないっすか」

時間はある。バスで帰るつもりだけでも、たぶん本数はまだあるだろう。チェック済み。

あとはおとひっちゃんの気持ち次第だが今なら何でもOKだろう。
「別にかまわないけれど、何か」

「二年連中にはばれないように、少しお話したいことがあるんだけど」

敬語と友だち言葉、混ぜ合わせた感じの、微妙な言い方だ。

「バスケ部の交流会のことか」

さすが元陸上部。運動部に関する話題にはアンテナがはたらくおとひっちゃんだ。まだ頬が緩んでいる。ひきしめてない。

「それもあります、しかし」

健吾くんは時計をちらつと眺めた。教壇側で、視線の塊がぶつかってくる気配を感じた。他の男子三人、じとつと健吾くんをにらみつけている。

「新井林、何しゃべってるんだ」

「あ、すみません、じゃあお先に」

ここだけ大声で。おとひっちゃんにはかすかな声で。

「じゃあ、ちよつと玄関ロビーのところで待っててもらえますか。そこから案内します。今日は俺が水鳥中学の人たちの案内役です」

じゃあ別に隠さなくたっていいのにな。

僕は、おとひっちゃんが頷くのを待って、大きくこっくりした。

健吾くんがわざとらしくでかい声で、

「じゃあ、ごみ捨て場にごみ捨ててきます。それでいいですか」

もごもご、曖昧な返事をする二年生男子。やはりどこの学校も、人間関係いろいろあるんだろう。隣りでおとひっちゃんは、机をきちんとならべ直しながらつぶやいた。「やっぱり、やる気のない奴は連れてこれないってことだ。わかったか、雅弘」

単に総田に邪魔されたくないんだろ。せつかく手に入れた天国みたいなところ。

挨拶して廊下に出た。健吾くんに対してよりも、ずっと愛想よく笑顔一杯の返事が返って来た。ってことは、また来てもかまわないってことかな。

言われた通り僕とおとひっちゃんは、生徒玄関のロビーで健吾くんを待っていた。でっかい柱の周りを囲むような椅子が備え付けられていた。二年たちが片付けをしている間に、健吾くんが帰り送ってくれる手はずになっているらしい。

「雅弘、今日の会、どう思った」

「おもしろかったよ、おとひっちゃんもそうだろう」

「まあな」

おとひっちゃんはそれ以上何も言わなかった。最近無口になりつつあるおとひっちゃんだけど、「青大附中交流準備会」に参加するに当たってはかなり熱心だったと聞く。もちろん総田からの情報もあるし、僕が観察したものもある。とにかく燃えている。

「やっぱり、学校全部暖房入ってるっていいよね。風邪ぶり返すか
と思ったけど、大丈夫そうだ」

「雅弘、もう大丈夫なのか」

話がそれた。おとひっちゃんのかばんから、すっかり冷えた缶コ
ーヒーを僕にくれた。

「とりあえず飲まずにすんだからな」

「よかったよ、ほんとにね」

深い意味はある。あえて言わないのがおとひっちゃんだ。

なにはともあれ、「お茶のわんこそば事件」が繰り返されないで
よかった。

さっそく一気に飲もうとした。口をつけたとたんだった。

「関崎さん、待ってください!」

関崎さん?

おとひっちゃんのことをそんな呼び方する奴は、僕の知っている
限り全くいない。

女子の声だった。妙に棒読み調、端々に陰しいものが響く。

隣りのおとひっちゃんと顔を合わせる。明らかにおとひっちゃん、
顔色が鈍く変わっている。心持、顔が四角くなった風に見えた。

「呼んでるの、誰?」

「隠れられないか」

隠れられるわけないよ、何言ってるんだよ!

呼ばれた以上は振り向かないと失礼だ。僕が先に顔を向けた。向
かって右側に伸びている階段を降りたところで、紺色のワンピース
姿の女子が何かを抱きかかえて立っていた。

「おとひっちゃん、女子がいる」

「わかってる」

小さい声で答えるおとひっちゃん。まだ振り向こうとしない。し
かたないので、僕が先に声をかけた。

「関崎はここだけど、何か用ですか」

「私は関崎さんに用があるのです」
すごい失敬な女子だ。

一步、また一步と近づいてくる。僕は片手でおとひっちゃんの膝を叩いた。なんかわかんないけれど、僕の片手に握り締められている缶コーヒーが少しこぼれた。

あの子だ。

納豆みたいなまなざしを向け、にこりもしないで、じつとらみついていた女子だった。一瞬誰かわからなかったのは、髪の毛を長く解いていたからだだった。腰まで伸びる髪の毛。どろんとした瞳の色が怖い。幽霊が取り付きそうなおかつば髪の毛の人形だ。夜中に髪の毛が伸びそうな市松人形だ。紺色の上下繋がったスカート姿で、とうとうおとひっちゃんの前に立ちほだかった。距離として五十センチくらいの接近。かわいそうにおとひっちゃん、腰を抜かしたみたいで立てないでいる。

「また、お会いできたんですね」

手元の物体が、妙に毒々しい薔薇みたいな花の鉢植えだったと気付いたのはこの時だった。

おとひっちゃんはその子の顔を見ないで、花ばかり見つめている。一言、

「ああ、この前はどうも」

「私は今日、男子たちに今までずっと閉じ込められてました。せっかくお会いできるのに、出るなと言われてました。でもやっと、関崎さんにお会いすることができました」

「ああ、こちらこそ」

完全におとひっちゃん、思考能力失っている。

鉢植えには白いビニールのカバーが半分かかっている。手提げみたいになっている。しかし顔を出しているのは、見たことのない平べったい花だった。一見、花なのだけれども、真っ二つに切ったキヤベツに色づけしただけのようにも見える。ぐしゃぐしゃと薄い紙

を折って、ティッシュの花を作って卒業式の準備をした、そんな感じの花だった。一輪だ。

「私はずっと、男子は救いようのない馬鹿か不細工しか存在しないと思っていました」

ゆっくりと手揚げ部分をおとひっちゃんに差し出す。

「立村先輩だけはまともだと思っていましたが、結局新井林のような馬鹿男子だったことを知りました。そういうものです。男子はみな狂ってます」

いや、狂っているのは……。

すっかり変なことを口走ったら何をされるかわからない。たぶん彼女は僕の方なんて一切眼中にないだろう。かすかに夢を見ているような、酔っ払ったような……酔っ払ったことなんてないけど、うちの父さんが酒飲んだ時の状態に似てるので……目をしている。学校で酒飲んだなんてことないだろうな。

おとひっちゃんも何かを言いたそうだったが、言わない。単におびえてるだけに決まってる。「でも、関崎さんだけは、まともだって信じられます。人間として、男として、確かな私のローエングリン様として」

ローエングリンってなに？

身体をひくひくさせているおとひっちゃん。片手で僕の膝をなんどかつついていて。でも僕だって怖い。女子にここまで接近されるのも経験ないけれど、なぜかこの子がいると空気がゼリー状になりそうで苦しい。

「どうか、また、いらしてくださいませ。私、関崎さんのことをずっと、人間らしい人間のいない青大附中でお待ちしてます。それまでどうか、この花を私だと思って、お側に置いてくださいませ」

完全にこの子、変だよ。おとひっちゃん。

相槌を求めたいけど、おとひっちゃんはただ、口をあけたままじっと花を一点凝視しているだけだった。きつとどうしていいのかわかんないんだ。僕だってそうだろう。これがいわゆる「恋の告白」

だったら、僕だって気を利かせて椅子から立つただろう。せめて一言、

「すみません、関崎さんとふたりにしてもらえますか」

くらい言ってくれば。でもこの女子はそういう手続きを一切、取っ払っている。単刀直入に、演劇の台本みたいなしゃべり方をしている。今時こんな白々しい台詞のラブストーリー、ないぞ。

僕はあらためて思い当たった。

なんで僕をおとひっちゃんが誘ったのか。

なんで、僕と一緒に来たかったのか。

三度もこんな、おぞましい迫られ方、したくないよ。わかるよおとひっちゃん。

ドラマに取り込まれてしまったおとひっちゃん。

僕だけが現実の視聴者だった。

早く逃げようよ、おとひっちゃん。

チャネルを替えたい。僕は一気に缶コーヒーを飲みほした。

ずん、と花の手提げをひったくった。結構重かった。

「おとひっちゃん、良かったよね。この花、さっきたんにあげなよ」

市松人形っぽい女子を背に、僕はあらためておとひっちゃんに手渡した。

「さっきたんって花、大好きだって話してたんだ。きつとプレゼントされたらすごく喜ぶよ。ほら、せつかくだからもらっちゃおうよ。な」

肩越しにちらっと振り向き、僕お得意のガキっぽい笑顔を繰り出した。

「ごめん。おとひっちゃん、こういうの慣れてないからびっくりしてたけど、花が大好きな女子の友だちがいるから、きつと喜んでると思うよ。な、おとひっちゃん」

僕の顔を見つめつつ、数回、口を開け閉めするおとひっちゃん。

かなり情けない。

「で、この花の名前、なんていうの？」

もう一度、今度もあどけない感じで尋ねた。すでに「さっきたん」という言葉を出した段階で、市松人形の彼女は微動だ似せず、ただ手を下ろしていた。僕の持っている手提げ花を覗き込み、ぽつりと答えた。

「そんなことも知らないのですか」

「うん、俺、あまり花の種類知らないし。おとひっちゃんもそうだろう」

頷くだけ。やっぱりおとひっちゃん場慣れしてない。

よくよく見ると、唇に赤いものがちらちらした。おとひっちゃんを撃墜するためにすべて勝負してきたんだろう。

けど、この女子はわかってない。おとひっちゃんには意味がない。

「葉牡丹です」

一言だけ、棒読みでつぶやいた。

「教えてくれてありがとう。さっきたんに言おうよ、この花、葉牡丹だっ」

僕はもういちど、「さっきたん」という言葉に力を込めて、おとひっちゃんに告げた。

「水鳥中学のみなさん、こっちです、急いできてください！」

救いの声だ！

僕より先に、おとひっちゃんが飛び上がった。ジャンパーとかばんをひつつかみ、なにやら「あ、あ」と発音した後、

「ありがとう」

と無理やり絞り出した。

そんなこと言うことないよ。押し付けられたんだから。

僕はからの缶コーヒートをポケットにつっこみ、一声高く返事した。「わかりました、今すぐ行きます！」

一刻も早く、あのねめつちい視線から逃げ出したかった。もらっ

た以上は持つていくしかない。返すのも変だ。おとひっちゃんの手をぎゅっと引き、僕は健吾くんの声がする職員玄関まで走った。重たい葉牡丹の鉢植えて腕がひっぱられた。いやな重力だ。

「やっぱり、間に合わなかったすか。すみません」

健吾くんが玄関で、もうひとりの女子と一緒に待っていた。

僕と一緒に、体育館でおとひっちゃんと健吾くんの持久走を眺めていた、あの子だった。

泥でぐしゃぐしゃの体育館脇抜け道を通った。ちっちゃな足跡が残っていた。梅の花みたいだ。きつと猫のだ。

おとひっちゃんと健吾くんが屋根の下を走り抜けていった。屋根からぶらさがっている氷柱が落ちないうちに、早く、ってことだった。バスケ部と元陸上部の足に追いつけるわけもなく、僕ともうひとりの女の子はこのこと雪道を進んでいった。

「さつきはびつくりしましたよね」

おしゃべりする余裕はあった。僕はほっとして頷いた。

「呼んでくれなかったらどうしようかと思った」

「健吾が……新井林くんが、一生懸命走ってたんですけど、間に合わなかったって」

呼び捨てにしてるんだ。

やっぱり、そういうお付きあいの人なのだろう。僕はあらためて隣の女の子を見つめた。「女子」なんだろうけれど、なんとなく僕にとっては「女の子」と呼び分けたいタイプの子だった。

髪を編み上げてくるくる巻きにし、耳の上にのつけている。

ちよつと頬が赤らんでいて、感じふわふわしている。

さわつたらたぶん、ぎゅつとやわらかいんじゃないかな。ほっぺとか。

やらしいこと、考えてると思われるかもな。

僕としてはそんなつもりない。比較している相手が相手なだけだ。

人形みたく、気持ち悪くない人だなあ。

振り返っているふたりに僕は、わざとらしく息を吐いてみせた。

急いでたんだと強調するためだ。

「遅えぞ、佐賀」

健吾くんが女の子にもう一言何かを言った。「さがわ」か「さが」かわからないけれど、その子の苗字なんだろうか。コートで名札が

隠れているのでわからない。ちょこつと気になった。

「雅弘、悪い。走らせちまったな」

おとひっちゃんは一瞬間に心配してくれた。なにせ病み上がりなんだから。さっき押し付けられた重たい鉢植えだつてぶら下げているんだから。僕は膝のところに、キャベツみたいな花を抱えるようにして、もう一度息を吐いた。

「とにかくここは誰もいないから、入ってください。佐賀、悪いけど電気ストーブの電源入れてくれ」

「うん」

女の子ははにかみながら頷いて、目の前の木造建物の中に入つて行つた。木造で、かなりぼろぼろ、地震がきたら一発でつぶれそうなあばら家だつた。青大附中にもこんな建物が残っていたんだ。意外だつた。

「寒いけど、入ってください」

おとひっちゃんと僕も促されるまま、中に足を踏み入れた。

右脇にはサッカーボールのつぶれた山と、野球の木製バット、白線引き用に使うチョークみたいなもの。その他スコアボード、などなどいろんなものが置きっぱなしになっていた。たぶん体育用具室なんだろう。

「ここじゃないっすよ。今、ここどかしますから」

床にしゃがみこんでボールを片付けている女の子を小突いてどかし、健吾くんはすばやくサッカーボールの山をくずした。スペースを広げた。隠れて見えなかったんだけど、引き戸の手が出てきた。意外とほこりは被っていない。佐賀さんが素早くすべりこんでいった。

「ほとんど使つてねえつてことだからかまわねえし、今日はどこの部活も練習試合でこんなとこにこねえし。なによりも、運動部以外の人間こんなところ知らねえし」

隠れ家みたいだなあ。

秘密の基地みたいで、胸がどきどきしてきた。こういうのを発見すると、僕は思わずもつと掘り進んでみたくなる。おとひっちゃんもきつとそうに違いはない。目が輝いている。さっき、葉牡丹を押し付けられた時とは違う。

「さ、入ってください」

健吾くんの後について僕たちも上がった。背のないベンチとダンボールでこしらえたテーブルらしきもの。体育道具の残骸も転がっていたけれども、外よりは整理されていた。窓はない。佐賀さんが僕の足下に赤い電気ストーブを持ってきてくれた。電気は通っているらしい。動いた後なのでそれほど寒いとは思わなかった。

おとひっちゃんと健吾くんが向かい合い、その隣りに僕と佐賀さんという女の子。

四人顔を合わせたたん、急に笑いたくなり、にっこりしてしまった。

「なあににやついてるんだよ、雅弘」

「いやあ、ごめん」

一緒ににっこりしてくれたのは佐賀さんだった。さっきからそうだけど、佐賀さんの頭を見ているとむしろように笑いたくなるのだ。おとひっちゃんに言うのと誤解されるので黙っておくけれども。おとひっちゃんは咳を数回した後、健吾くんに頭を下げた。

「さっきはどうもありがとう」

「いや、俺の方がへましちまったもんで、すみません」

このふたりについては真面目な雰囲気崩さない。どうも健吾くんは、葉牡丹の彼女とおとひっちゃんを会わせないようにしたかったらしい。そうしてくれたら助かったけど、追いかけれちゃったんだものしかたない。健吾くんのせいではない。あの、気持ち悪い女子のせいだ。

「で、今から俺が話すことなんです」

健吾くんは唇を噛み、目を伏せた。鼻をすすり上げた。お互い風邪がはやってるってことだ。

「青大附中の評議委員会についての恥さらしだつて気がしてなんねえんだけど、でも、ここで言つとかねえと、あとあとろくでもねえことになると思う。だから、すげえ恥ずかしいけど、聞いてください。お願いします」

健吾くん、また頭を下げた。隣りの佐賀さんも健吾くんの方を心配そうに見つめていた。やっぱりお付き合いつてこういうもんなんだろうなあ。

「今から話すことは、悪いんだけど、二年の連中にはしゃべんないでくれると助かります。こう言つたらなんだけど、俺、二年の連中とはあまりうまくいつてないんです」

同じ二年のおとひつちゃんには妙に懐いてるのか？

驚いている様子のおとひつちゃん。こういうところが鈍い。

「二年と、つてことは、立村とも？」

すでに呼び捨てにしているおとひつちゃん。

「いや、立村……さんとは、去年の段階で決着つけたし。それはいい」

「決着つて？」

割り込んだ。おとひつちゃんが「よけいなこと言うな」という目でにらんだ。

「そのことも含めて、全部話します。で、ひとつだけお願いがあるんですが」

「お願いって」

健吾くんが両腕をテーブルのダンボールにくっつけて立ち上がり、おとひつちゃんを見下ろした。目が必死だった。

「この話を聞いて、きつと青大附中の連中は馬鹿野郎ばかりだと思ふんじゃねえかって思います。けど、きつちりと交流活動したいと思つてる奴もたくさんいるし、俺はなんとしてもバスケットとの交流を成功させたいって思ってます。裏話ばかりで情けねえけど、どうか、交流を止めようだなんてことだけは、言わないでやってください！」

あれ、泣いちゃってる。

隣の佐賀さんがコートのポケットから、桃色のハンカチを取り出した。下から手渡しした。握り締めた健吾くんは鼻と目を交互に拭いた。

すすり上げる鼻声に、おとひっちゃんは口を一文字にし、大きく頷いた。

「わかった。交流活動はこのままでやる。だから、話を頼む」

青大附中評議委員会に関する内部事情は、僕にとって頭の痛くないことばかりだった。もちろん僕とは関係なく、おとひっちゃんの方にとばかりがくる内容のものだけれども、たぶん処理するのは僕と総田の方だろう。総田も計画していることがあるだろうし、またふらふらされるのはたまったもんじゃないだろう。

困ったよな。おとひっちゃん。

足下の葉牡丹はストーブの隣りに転がしておいた。

青大附中学生徒会がもと、力のない組織だということはおとひっちゃんから聞いていた。去年の十月、そして今年の一月に生徒会としておとひっちゃんたちが訪問した時に評議委員会へ話を押し付けられたのにはそこに原因があるらしい。

「俺もその辺はよくわからねえけど、青大附中の場合生徒会活動や部活動よりも、委員会最優先主義ってのが貫かれちゃって、実力のある奴ほど委員会に吸い取られちゃうって仕組みになってるんです。うちのバスケット部をはじめとして、他の部活動がいつもぼろ負けしてるのは、運動部で活躍できる奴らがぜんぜんこっちにこねえで、委員会に燃えちまうおとなんです」

おとひっちゃんだって陸上部と生徒会、一緒にできなかったもんなあ。

僕は身乗り出し、おとひっちゃんは黙って見つめるかっこうで。「けど、そんなのはやっぱおかしいってことで、去年の代から少しずつ、部活動に力を入れるようにしようってことで、先生たちが動

き出したってわけっす。例えば、各学年の委員は半年ごとに改選されますけど、青大附中の場合、一年の一学期に決まった委員がずうっと、スライドして三年まで進む方式をとっていたんです。いや、誰が決めたわけでもねえけど、暗黙の了解って奴で」

俺も学習委員やってるから似たようなもんかなあ。

「けど、そんなのはやつぱおかし。委員はその都度選挙できっちり選ばれるべきだと思うし、合わねえ奴はどんどん外すべきだと思う。で、俺たちの代からはこれから委員をどんどん変えていこうってことになったわけです」

「委員、って、当然評議委員もだな」

「そうです。たぶん二年はこのままでいくと思うけど、俺のクラス…… B組なんですけど…… 女子は別の奴になります。担任がそう言い切ってます」

「B組の女子？」

おとひっちゃんと言葉にした後、全身硬直させた。

「まさか、あの、さっきの」

「そうです。あの女は絶対に降ろされます」

肩がだんだんゆっくりとなだらかになっていくおとひっちゃん。分かりやすい奴だ。

「けど、担任が言い切ってるってどういうことだ」

「あの女は、ここにいる佐賀のことを七年間いじめつくすだけいじめてきてたんです。小学校の頃から俺と佐賀と、あの女とは同じクラスでした。めちゃくちゃな腐れ縁でしたが、今まではなかなか佐賀のことを守ることができなかった。けど、今の担任はすげえ男で、親とあの女をあっさり成敗して、二年以降の評議委員から降ろし保健委員にしたいとまで言ってます」

「保健委員？」

青大附中の委員会組織ってよくわからない。なんで保健委員なのか？

「あ、うちの委員会はこの前も話したように、くせがあるんです。

評議委員会が交流関係と隠れ演劇好き集団で、規律委員会は洋服関連のファッション雑誌作り倶楽部、保健委員会は主に、将来医者や看護婦になりたい奴が勉強するための集まりって感じなんですよ。ま、そればっかじゃねえけど三年間おんなじでないと話にならないってのはそういうことです。一種の部活と一緒にすることで」「でもそうになると、委員会活動としてはかなり問題なくないか？」

「あります。委員会内でごたごたしても、部活みたいにやめることが一切できません。今回のように担任が辞めさせるなり降ろすなりしない限りは無理です」

たまったもんじゃないなあ。

僕は自分なりの整理整頓をしながら話を聞いていた。

「とにかく、さっきの葉牡丹くれた子は、二年以降交流会に来ないってことなんだ」

「そうです。それは安心してください」

力強く断言する健吾くん。おとひっちゃんは口にしないけれど、だんだん目がやわらかくなってきたってことは、相当安心したってことだろう。

「ただ、問題は、あと一ヶ月ってことです。ま、評議委員会も影でいろいろありますから俺も大きいことは言えねえけど、二年の女子とかあと、一部の男子とかがもしかしたら、関崎さんにあの女を押し付けようとするかもしれない。まともな男だったらあの女なんてけつとつばかけたい気持ちもありますけど、やはりなんとかしてうまくごまかしたいっていうのもあるみたいですし」

一呼吸、ふっと吐き、おとひっちゃんが尋ねた。

「立村は、どっち側なんだ」

じじっと、電気ストーブの焦げ臭い匂い。どうやら葉牡丹の入っているビニールがストーブの赤い部分に触れて焦げてるみたいだ。慌てて引き離れた。

「立村……さんは、わかんないっす」

言葉を濁した。でも話したさそうだ。僕は方向を変えて聞いて

みた。

「もしよかったら、なんで委員長とごたついたのか、聞いていいかなあ」

蠟人形をぶっこわしたくなるのはわかるような気、するしな

あ。

健吾くんは目を潤ませたまま、大きくくしゃみをした。

身体が冷えてきて寒い。僕はおとひっちゃんの方にくつついた。

「まあ、俺もガキだった。早い話、俺と立村さんとは、四月以降の評議委員長を奪い合ってたってことなんです。やっぱしこれも、青大附中特有のもんですけど、委員長つてのは上の先輩が八月に指名して、それから半年間じつくりしごいていくってやり方を取ってるんです。これも、来年確実に委員として選ばれるってことが前提になってるけど」

思い出すなあ、去年の学校祭の騒ぎ。

思い出してないんだろ。おとひっちゃんはずっと話を聞いているだけだ。

「で、一応三年の先輩委員長は、立村さんを指名したってわけですけど、俺にはどう見たって頭の回転がとろい、ぼけた奴にしか見えなかったんです。二年連中からはすげえ評価されてるけれど、なんつかつこう、馬力ないっていうか」

いいたいことわかるよ。健吾くん。

「何よりも、立村さん、あの女のことをその頃からめちゃくちゃ可愛がつてたんです。女の趣味が変わってるのは別にいいとしても、自分にはすげえ出来た彼女がいるってのにあの女をひいきして、へたしたら自分の次に評議委員長にしようとかくらくらんでいたくらいが、なきにしもあらずって感じで」

やっぱりそうか。体育館でも自然な感じで話し掛けてたもんなあ。ああいうことしてた男子って、立村だけだったな。

「先輩委員長もその辺は心配してたらしくって、俺と立村さんを今年の三月まで並び立てる格好にして見比べて、どっちがふさわしい

かを指名しようってやり方に変えました。だから、一応今の段階では立村さんが委員長だけど、四月以降は俺になる可能性もありありっす」

俺、って、健吾くん、一年なのにか？

僕が口走る前におとひっちゃんが立ち上がった。

「立村が委員長から外れるのか！」

「いや、そういうことはないっすよ。安心してください。関崎さん、落ち着いている様子はまさに、委員長になってもOKって感じの態度だった。立村には悪いけれども、それが実はふさわしいんじゃないだろうかと僕は思ったりもした。」

「俺がもし指名されたら、立村さんに譲ります。その点では去年、思いっきりぶつかり合いましたし、立村さんも俺にかなり譲歩してくれたし、なによりもまんざらあの人、ばかじゃないってことがわかったんで、やっていけると思ったからです」

口を少しあけたまま、おとひっちゃんはまたつぶやいた。

「まんざらばかじゃないって」

「杉本を下ろすことを桧山先生に提案したのは、どうやらあの人らしいです。で、来年以降の評議委員長は俺にしたいってことも言っていました。つまり、評議委員からあの女を降ろして、評議委員会をまっとうな形に戻したいということで活動してたみたいです。ただ俺もそれなりに譲歩しなくちゃいけねえこともあったけどな」

「それはなにになに？」

これは僕の質問だ。健吾くんは両腕を組み、ぶるつと身体を振るわせた。

「あの女を、決していじめの標的にしないようにすること。たとえば杉本が佐賀を始め迷惑をかけて俺たちをぶち切れさせようとしても俺たち一年B組は、あの女とおなじようないじめを一切しない。これは卒業するまで、正々堂々と勝負する、最後の手段だということです」

正々堂々とか。

おとひつちゃんは黙っていた。鼻をなんとかすすり上げ、もう一度尋ねた。

「その、杉本さん……は、そんなひどいじめをしていたんですか」
健吾くんではなく、佐賀さんに向かって。

「私、梨南ちゃんがいじめをしていた意識はないと思ってます。たぶん、私のことを守ろうとしてくれてたんだと思います。ただ」

言葉を切る。僕に向かいちらつと視線を向け、耳元の髪に触れた。
「梨南ちゃんと縁を切った時から、私のしたいことがいっぱいできるようになったのも、確かなんです。本当に自由になったんだなって、今は思ってるんです」

りなちゃん？

どうでもいいけど、健吾くんの口が妙に緩んでいるのが気になる。目もなんとなくとおしげ。すっかり、ほれ込んでるって感じた。中学一年。総田もこんな風に川上さんと接すればいいのになあ。今度からかってやろうと決めた。

「要は女子たちのよくやる無視です。俺と佐賀が付き合いだしたのが気に食わなかったらしくて、入学そうそう仲の良かった佐賀を無視し始め、同じクラスの女子連中にもそうさせるようにしたってことだけです。たいしたことじゃないかも知れねえ。どうせ俺はあの女から佐賀が離れればそれにこしたことはねえと思ってた。けど、佐賀がひとりぼっちでさんざん悪口言われていることだけは許せなかった」

素直に「付き合いだした」なんて言うなんて、すごいよなあ。もう僕たちの方なんて見ていない。健吾くんは手元のハンカチを握り締めこぶしを見つめた。

「ま、そういうことで俺と立村さんとはいろいろあったにせよ、今は良好な関係が保たれてるってわけっす。ただ、二年連中はやっぱり俺のことを毛嫌いしてるみたいです。それはしゃあねえし。問題は、あの女を可愛がる女子連中のことです」

話があっちいたりこっちいたり混乱していた。僕は頭の中

で全部片付けを行っているからいいけれど、おとひっちゃんは大変だろう。ただもくもくと聞いているだけだ。

「立村さんはあの女を降ろす代わりに、他の仲良し女子連中のところに預けて、俺たちの迷惑にならないよう気を遣ってくれてるようです。それは正しいと思います。俺も、あの女の顔さえ見なければそれに越したことはないですし、自分の手を汚したくないですしね。ただ、その方法のひとつとして、関崎さん、あんたとくつつけようとする動きがあるのも確かなんです。信じられねえけど、本当のことです」

おい、おとひっちゃんとかくつつけるって！

感嘆句「うそ！」しか出てこない。健吾くんの顔を見ればうそじゃないってことは見え見えだ。おとひっちゃんの目も見ひらき、宙を舞っている。狂喜乱舞ではない。絶体絶命、オーマイゴット、そのもんだ。

「この前の一月に青大附中にいらしてくれた時、すげえひでえ目にあっただと思うんですけど覚えてますか。ほら、お茶を異常なほど注ぎ足された時のこと」「ああ」　　かわいそうなおとひっちゃんも感嘆句しか出せない。

「俺たちも、他の男子連中もあれ見ててぞっとしました。あれって嫌がらせとしか思えねえって感じです。けど、女子連中によれば、あれは杉本の愛情表現であり、関崎さんのことを気に入っているからということでした。けど、冗談じゃねえ。関崎さん、ああいう時はためらうことなく熱湯を顔にぶっかけてやって正解だった」

それはやりすぎだと思っよ。

「その後すぐに、俺は立村さんのところに行って、言うこと全部言っておきました。たぶん立村さんは、杉本のことを気持ちとしてはひいきしてますから、もしかしたら関崎さんにくつつけるように手はず整えるんでねえかと思ったから。けど、俺からしたら関崎さんの顔には、露骨にいやだってサインが出てました。ですよ。そうですね」

強引だなあ。

おとひっちゃんは答えなかった。さすがにそれは失礼だと思ったんだろう。でも、僕はひそかに賛成していた。今、となりにいるおとひっちゃんの様子を見ても、明白だからだ。健吾くんもそういうところは鋭い。

「別に俺は、あの女が誰にほれ込もうが知ったことじゃねえ。もし、関崎さんでなくて別の奴だったらふーんってことで無視してた。他の学校のところにあの女が関心を向けてくれて、B組や評議委員会に迷惑をかけないようになればこちらだって、よけいなこと考えなくていいことだし。けどなあ」

こぶしを振り上げ、ダンボールを思いっきりぶったいた。へこんでいる。

「せっかく評議委員会と水鳥中学との間で、すげえいい関係が作れそうな時に、あの女が関崎さんに嫌がらせかなにかしてぶつつぶしたら、たまったもんじゃねえ！ 関崎さんが望むならそれはしかたねえと思うけど、こんないじめをしかして、さんざん問題を起こし、相手の嫌がることばかりやらかすあの女が、また他の学校の人たちにまで被害を及ぼすなんて、俺は許せねえ！」

で、何したの？

心で思っているだけじゃなくて、僕は口で尋ねた。

「今日は関崎さんが来るって聞いていたんで、まず体育館で集合して、それから教室へ行こうと決めてました。二年連中も俺のことはともかく、杉本が害獣だつてのは理解していたみたいなんで立村さんにも話をしてくれたみたいです。ただ、二年女子たちからは大顰蹙かったらしくて大変だったって聞いてますが。とにかく立村さんは、関崎さんと杉本が顔を合わせないように、二年女子たちと一緒に職員室か別の教室かで準備をなにかさせたいらしいです。二年女子が結局さっきの集まりにふたりしかいなかったってのはそういう理由です。杉本の見張り役に残されてたらしいです」

すごい。完璧だ。

僕は素直に驚いた。

「会が終り、立村さんが先生と閉じ込められている教室との両方に連絡をして、関崎さんたちがいなくなるのを待ってから解放しようということになっていました。けど、あの女が制服じゃなくてあんなとんでもない格好をして、気持ち悪い毒花を手渡すってことは、何か手違いがあつたんだではないかという気がします。俺ももっと早く、何も考えずに外に出せばよかったって思うけど、その辺は本当にすんません。とにかく、俺なりに精一杯迷惑をかけない方法は探つたつもりですが、見事失敗で情けないです。本当に関崎さん、すみませんでした」

君は、すべきことをみんなしてくれたよ。健吾くん。佐賀さんと僕が同じような感じで健吾くんを見つめていると、また涙ぐんでいるらしく目を数回こすつた。

「わかつた。運動部の交流についてはこれから、すぐになんとかするから」

おとひつちゃんがつきらばうに、これだけつぶやいた。電気ストープだけでは耐えがたい冷たさで、僕は足を踏み鳴らした。それが合図で、僕たちは立ち上がった。おとひつちゃんとふたり、今度こそは誰もいないグラウンドで、健吾くんたちと別れた。

「じゃあ、今度は三月に。こんなひでえミス、もうしませんから」

そのことに関する返事はしなかつた。おとひつちゃんは深く頷いてみせた。佐賀さんが見えないので挨拶したくて立ち止まったら、駆け足の音が聞こえた。

「ごめんなさい、これ」

わざと忘れてつたつてのになあ。

わざわざ葉牡丹を持ってきたくれた。よけいなお世話と言いたかつたけれど、持って来てくれたのが佐賀さんである以上受け取らなくちゃいけない。おとひつちゃんと目で合図し、僕が受け取つた。「そんなの捨てちまえよ」

「だめよ、健吾」

また、名前で呼ぶ。

自信ありげな顔で佐賀さんは答えた。

「きつと梨南ちゃんは、関崎さんにこの花が元気かどうか聞くと思います。もちろん新井林くんが押えるでしょうけど、梨南ちゃんは何をするかわかんない子です。もしかしたら立村先輩から住所を聞き出して、家までおじゃましようとするかもしれません」

背筋が凍るってこのことだ。がたがたと肩が震えた。

「その時に花がなかったり、捨てたなんて言ったら、梨南ちゃん何をするかわかりません。私も梨南ちゃんと七年間一緒だったからよくわかります」

「そんな怖い女子なの？」

僕がかろうじて言葉を搾り出す。おとひっちゃんは言うまでもなく硬直状態。

「梨南ちゃんは、好きになればなるほど、意地悪をする子なんです。そして」

佐賀さんの目はさらに真剣だった。

「裏切られたと思ったら最後、とことんうらんでしまっんです。どんなにこつちが友だちでいたいと思っても」

ってことは、もしかして俺。

痛恨のミスを犯したってことだろうか。おとひっちゃんはきづいていないかもしれないけれど。僕は真剣に震えるのを止められなかった。

「だから、本当に気を付けてください」

逆恨みされるってことかよ！

たぶんおとひっちゃんは、僕が震え上がった理由なんて想像してないだろう。しかたなく葉牡丹をぶら下げてバス停に向かい、時刻を確かめた。

「まだ時間あるね」

「雅弘、さっきのことだけだな」

誰もいないベンチに腰掛け、おとひっちゃんはじろつとにらんだ。

「なんだよ」

「なんで、水野さんのこと言った」

おとひっちゃん、気付いてるじゃないか。

さっきの痛恨のミス、そのものである。

「いや、だってさ、僕がもし花とか上手に育てられるんだったら、さっきたんが一番かなって思っただけなんだ。ほら、さっきたん、小学校の頃から教室にお花もってきて飾ったりしてただろ？ だからこういう花も、きつと大切に育ててくれると思うんだ。おとひっちゃんのところ、あまり花とか飾るのって苦手だろうし、俺もあんまり好きじゃないし」

もしかしたらおとひっちゃんは、葉牡丹を持ち帰りたいなんていうんじゃないだろうか。別に本人の勝手だから僕が口出しするつもりはないけれど、ただ、どうしても僕はそうさせたくなかった。第一、おとひっちゃんみたいな大雑把な奴が、キャベツみたいな毒花とはいえ上手に育てられるわけがない。万が一、杉本さんに「あの花元氣ですか」と聞かれたら、言い訳できない。おとひっちゃんは物言いかけたけれども、飲み込んだ。

「だからさ、さっきたんにあげちゃおうよ。きつと喜ぶよ。おとひっちゃんからだって言うともつと喜ぶよ」

「いい、勝手にしろ」

「じゃあ、ちよつと電話かけてくるよ」

「どこにだ」

迷ったけれど、言うておいた。

「さっきたんにさ。これから寄っていきつよ。きつと喜ぶよ」

すぐにゆでタコ状態で赤くなるのはおとひっちゃん、全く精神状態変わってないってことだ。僕はバス停端の電話ボックスまで走っていった。見上げると青潟大学の校舎が夕暮れの色をちかちかせているのがはつきりと見えた。

「もしもし、水野さんですか？」

僕は女子に電話かけるのって結構慣れている方だ。おとひつちゃんのだわりに苦手な女子へ連絡網を回してやったことだってある。今日はお母さんが先に出て、すぐにさっきたんへ代わってくれた。

「佐川くん、どうしたの？」

やつぱりさっきたんは優しい声だなあ。ちゃんとしゃべりに波があるよ。

どうしてだろうか。つい比べてしまった。

「うん、実は、今日、おとひつちゃんとふたりで青大附中に行ったんだ。で、今帰りのバス待っているとこなんだけど」

「そうなの」

あまり関心のなさそうなさっきたん。一応、おとひつちゃんがさっきたんのことを想っていることは承知だろうけれど、それから半年間、特段変わった動きはなし。おとひつちゃんも動かないし、さっきたんも「あら、そんなことあったの」って顔で普段どおり流しているからだ。僕もクラスの連中と一緒にば抜きやつたりして遊んでいるけれども、さっきたんがたまに僕の隣りにくるのは偶然だ。一緒にいるところを見ておとひつちゃんがまた真っ赤になるのも、またいつものことだ。

「それで思い出したんだけど、さっきたんってお花、好きだよな」

「ええ大好きよ」

「青大附中の人たちから、花をもらったんだ。葉牡丹って知ってる？」

あの毒花と、口には出さないでおいたけれどさっきたんの声は明るかった。

「うん知ってる。葉っぱが花びらになっていて、お正月によく飾るのよ。華やかなのよ」

違うよそんなきれいな花じゃないよ。

「俺もおとひつちゃんも、そういう花もらっても困るだけだから、

よかつたらさっきたんにあげようか、って話してたところなんだ。これからさっきたんの家に行って持っていくけど、いいかなあ」

かなり事実関係を曖昧にして説明した。いやな感情、さっきたんに伝わっていないといいな。

よかった。さっきたんは素直に喜んでいる。

「嬉しい！　ありがとう佐川くん」

受け取ったのはおとひっちゃんただけだな。

銀色のバスがロータリーに入ってくるのが見えた。大至急電話を切り、僕はおとひっちゃんの後に続いて乗り込んだ。

すっかり疲れ果てていねむりこいているおとひっちゃんの隣り、一番奥の席。

僕は膝に葉牡丹の鉢植えを抱えたまま考えていた。

葉牡丹の花びら……葉が花びらになっているとさっきたんが言っていたつけ……を何度見ても、「華やか」「お正月に飾る」というプラスのイメージが湧かない。　　さっきたん、花に詳しいからそう言ったのかなあ。

僕の中から何度見ても、毒々しいキャベツの出来そこない、という感じしかない。

もちろん、花にはいろいろあつて、好みもあるし、僕好みでないだけなのかもしれない。こないやな気持ちで花を見たのは初めてだった。

おとひっちゃんもきつと、いやだったんだろうなあ。

僕はかなり正確に、おとひっちゃんの考えていることを見抜くことができる。十四年間の集大成といえはそれまでだけど、本当に丸分かりなんだものしかたない。

あの、葉牡丹の女子……杉本さんと言っていたつけ……の顔を見た時、おとひっちゃんがすっかり度を失って身を引いていたのを、僕はちゃんと見ていた。露骨に受け取り拒否をしたくてなんない顔をしていたのも覚えている。おとひっちゃんを知らない友だちだったら、ただ告白されて照れてるだけと思うかもしれないけれど、ど

うみたって「側に寄るな！」の合図だった。杉本さんはそういうのわからなかったから、あんな風に分けのわからない言葉で話し掛けたのかもしれないけれども。

そうだ、あの人、しゃべり方もなんか、変だった。

思い返すたび、今までにあんなおかしなしゃべり方をする人がいなかったと再確認してしまふ。もちろんいろいろ変わった人とも話したことあるけれど、なんで「ローエングリン」だとか「私だと思つて」とか、常識では考えられない言葉を口にしたんだろう。学校の演劇で、「なんだよくさすぎる」と馬鹿にされそうな言い方を、なんでしたんだろう。

もしかして、杉本さんのしゃべり方って、ああいう感じが多いんだろうか？

僕はあらためて、健吾くんの聞かせてくれた話を整理して組み立てた。

健吾くんが言うことを鵜呑みにする気はない。僕の直感と事実関係だけだ。だって健吾くんも佐賀さんも、杉本さんのことが大嫌いだからこう悪口言っているわけであつて、たぶん七割くらいは嘘っぽいところもあると思うから。

信じていいと思えるのは、「青大附中の評議委員から杉本さんが外される」ということ。

「健吾くんと立村評議委員長はけんかしていたが今は仲直りしている」ということ。

「佐賀さんが杉本さんにいじめられていた」ということ。

佐賀さん……あの中国風の髪型をしていた女の子……は、「いじめていた気は本人ないんじゃないか」みたいなことを言っていた。その辺は想像だからわかんないけれども、杉本さんとはなれてから幸せになつたってことだけは確かじゃないかと思う。健吾くんと付き合うことができるようになったんだから。

もうひとつ気になつたのは、杉本さんの格好とお化粧だ。

あんな裾の長いスカートで学校の中を歩くなんて、それこそ変だ。僕が最初に体育館で見た時は、普通の制服だったはずだから、どこかで着がえたに違いない。本人は「男子たちに閉じ込められていた」と言っていた。健吾くんや立村評議委員長がどこかの教室に閉じ込めていた、と考えれば納得がいく。

じゃあ次だ。

どうして杉本さんはおとひっちゃんを見つけることができたんだろっ？

健吾くんは僕たちをロビーで待つように指示した。もし杉本さんの顔を見ないようにして連れて行きたかったのだしたら、どうしてもそんなことしたんだろっ？ 佐賀さんを迎えに行きたかったからだろうっか。

その辺も曖昧だ。あそこにいないでさっさと学校を出てしまったら、すべて丸く収まったんだから。まさかぐるになっっているなんてことは？ ちょっと考えすぎだろうっか。

そしてなによりも。

俺、性格悪い奴かもしれないよ。

がおつと響く足の下。だんだん人が乗り込んできている。

今までそんなこと一度も考えたことなかった。

さっきの健吾くんの話を冷静に思い返してみると、どう考えてもひとりの女子を集団でいじめているようにしか見えない。どんなに杉本さんが問題のある人だとしても、会いたい人に会わせないとか、別の部屋に閉じ込めてしまおうとか、普通あっちゃいけないはずだ。それはわかってる。

けど、実際は違うんだ。

ダンボールを挟んで四人で話をしていた時、なんとなくだけどほのぼのとした雰囲気が漂っていた。みんながみんな、「その通り！」と喝采を叫びたいという感じだった。おとひっちゃんも言葉にはしなかったけれど、杉本さんに押し付けられた花を可愛いとは思って

なかったみたいだし、僕も。

僕も同じことを思っていた。

いじめはよくない。絶対によくない。健吾くんがすることは絶対にいけないことなんだ。けど。やっぱりざまあみろって思っている。本当に気持ち悪かった。側に寄ってこられるのだっていやだった。

健吾くんたちにお礼言いたかった。そう、杉本さんが評議委員から外れるって聞いた時、ものすごく、ものすごく嬉しかった。あの顔を見ないですむってのがほんとにうれしかった。

今までこんないやなこと考えたことなんてない。女子に対してもそうだ。好き嫌いはあるけど、僕の周りにいる奴はみない人ばかりだ。よつぼど意地悪されたか嫌がらせされたか、そうでなければ嫌いになんてならなかった。

でも、あの杉本さんという人だけは違った。前に立ちはだかった瞬間、もわっと気持ち悪いオーラが流れてきた。

なんでかわからないんだけど、本当にぞっとした。だから思わず口走ってしまったんだ。

この花、さっきたんに上げようよって。

たぶんおとひっちゃんには通じないだろう。想像すらしてないだろう。もう、明日以降どうやって総田を使って、バスケット部の交流会に持っていくかのことで夢見ているだろう。僕がこんなにおびえているなんて知らないんだ。

杉本さんって女子に、おとひっちゃん、逆恨みされたらどうしよう？

もちろん佐賀さんの言うことをすべて信じようとは思わない。女子が自分に都合のいいことを言うくせがあるってのは、わからなくもない。

総田と川上さんを見ていればなんとなく。

佐賀さんと健吾くんが付き合い始めたのがきっかけで、杉本さんのいじめが始まったとするならば。親友だった友だちをいじめるとのは相当、心がすさんでないとできないんじゃないだろうか。となると、もしもおとひっちゃんのことを本気で杉本さんが好きだったとして。

僕の「さっきたん」という言葉をどう受け取ったかによって。

杉本さん、振られてもきつと追いかけてくるタイプの女子だよな。

そんなことになったらおとひっちゃん。

初めて感じた気持ち悪い感覚に戸惑って、へまな言葉を発した僕の責任だ。

なんとかしなくっちゃ。

僕は葉牡丹を膝に抱いたまま、腹に力をこめた。

「ね、さっきたんのところ、おとひっちゃんも行くだろ？」

「いや、俺これから用事あるから」

せっかくおとひっちゃんのためにチャンス作ってやったのにな。

無理じいはず、僕はさっきたんの家の前で手を振った。そんな慌てて走っていかなくたっていいのに。全くいいかわかんない元陸上部だ。

さっきたんの家のよびりんを鳴らしたついでにもう一度曲がり角に振り向くと、ジャンパー姿のおとひっちゃんが見え隠れしていたいつものことだ。知らんふりを決め込んだ。

「きれいな花！」

桃色のセーター姿で迎えてくれたさっきたんが僕の顔と、花を交互に見つめた。手提げの中を覗き込み、ふわあとした笑顔で迎えてくれた。

「佐川くん、ありがとう。私、大切にするわ」

お礼を言うのはおとひっちゃんへ、なんだけどな。

さっきさんの手の中だと、葉牡丹はちっとも「毒花」っぽく見えなかった。

予想がつかなかったわけじゃなかったけれど、学期末試験前日におとひっちゃんが学校を休むとは思わなかった。葉牡丹プレゼントシヨック、ただでさえ寒いところに長時間いて、さらに帰り際、さつきたんの家の前まで行って、おとひっちゃんが冷静なままでいれるとは僕も思っていない。けど、学年トップを入学以来保っている以上、意地でも学校には来るだろうと思っていた。

「で、どうだい、関崎副会長のお迎えセレモニーは」

昼休み、給食もそこに僕は生徒会室へ向かった。試験前で話がゆっくりできる場所だったら、生徒会室しかなかった。総田が相変わらず石炭ストーブに火箸を突っ込んでがしやがしややっていた。めずらしい、今日は川上さんがいない。

「今日は誰も来てないね」

「来させなかった。まあ、座れや」

ストーブの側だけ過剰に暑い。僕は学生服の襟ホックを外した。

「見たよ、あの女子」

「そうか」

万感の思いを込めてつぶやいた。

「すごい女子だね」

「だろう？ またやられたか。わんこそば攻撃を」

困った。言うべきかわざるべきか。僕としては総田にすべて丸ごと報告するのが筋だと思っている。

お茶わんこ側攻撃は幸い、青大附中の連中が食い止めてくれた。が、しかし。と。

しかたないので僕は、曖昧に答えた。

「青大附中の人たちがその女子を別の教室に閉じ込めてくれたみたいなんだ」

「閉じ込めた？ ってことはなにか、牢屋みたいなところか」

「わかんないけど、おとひっちゃんと顔は合わせないようにしてくれたみたいなんだ」

総田の頬が、針金いれているみたいにぐぐつと曲がった。横顔だ。「それは正しい。まんざらアホじゃねえな、あいつらも。関崎のこただ。また相手側に乗せられてへらへらしてたんでねえだろうなあ？」

「仕事は増えたよ。総田」

この辺は話しても大丈夫だ。僕は数箇所だけはしよって、だいたいの状況を説明した。もちろん教室での出来事のみだ。ロビーおよび体育用具準備室での内密な話題はカットした。

「ははん、そつか。むこうさんはとにかく俺たちと交流がしたくてなんねえと。すげえ必死こいてるって感じだなあ」

一通り聞き終えて、総田は学生服の裾をぱたぱた仰ぎ始めた。裏にはちゃんと、竜の裏地がちらついている。生徒会副会長にあるまじき制服だ。

「青大附中の委員長、おとひっちゃんを持ち上げたり誉めたりいろいろして、結局バスケット部の交流会を開くって約束させちゃったよ」

「あのうすらばけ野郎がか。単に女たらしってだけじゃねえんだなあ」

いや、女たらしかどうかわかんないよ。

立村評議委員長の蠟人形顔を思い浮かべた。

「うちのバスケット部ってことだったら問題ねえか。なんてったって全国大会出場してるからな。青大附中のバスケット部なんて、ろくに中体連で勝負できたことねえんだろ。そりゃああがめたくもなるわな。ああ、あの、運動馬鹿って感じの奴だろ。バスケット部のキャプテンってのは」

健吾くんが、運動馬鹿か。

妙に笑えて僕は頷いた。

「とにかく、おとひっちゃんはこれから何しなくちゃいけないかっていうとき」

総田副会長へのお仕事依頼だ。

「とにかく、期末試験後にバスケ部との練習試合と交流会を用意してもらわなくちゃってことなんだ。けど、おとひっちゃんそういうのって、どうかなあ。おとひっちゃんは一応元陸上部だけど、言い方間違ったら先生たちからかなり顰蹙かっちゃうよなあ。三年になったら受験勉強に専念しなくちゃいけないのに、お前何考えてるんだって」

匂わせるだけで総田には通じる。きいろとだいだいの絡み合った炎が総田の頬をおもいつきり照らす。

「なにか？ 俺が間に入れたのか」

「一応、約束してきちゃったからね」

前髪をぐいとオールバックにして頭をかかえる総田の図。笑える。「正式にはおとひっちゃんが学校に復活してから、うまくやっていくつもりなんだろ」

「だからやだったんだ。あいつを渉外なんかにしちまうのは！」

「だったら総田、今からやったらどうだろ。俺も思っただけどさ」
ここだ。僕は両足を椅子の上にのつけて、膝をかかえるような格好で座った。椅子の上で安座、って感じた。指を絡めてみた。顎をのせて、ちょこつと総田をにらみつけるようにしてみた。

「あのままだとおとひっちゃん、向こうの委員長の言いなりって感じだよ。俺もちょつとまずいなあって思った。うちの学校は公立だから公立高校の入試があって、六月以降の行事はたぶんできないって、おとひっちゃんは言っただけ。でも、向こうの委員長はとにかくやりたいってことばかり言うんだ。青大附中の行事とかも調節するからって。生徒が行事の調節なんてそう簡単にはできないよね。要するに向こうは、なんとかこつちと仲良しになりたいってことで必死なんだ。どうしてそこまでしたがるのか俺もわかんないけど。おとひっちゃんはその評議委員長のこと気にいつてるみたいで、た

め口叩いてるけどさ。でもこの調子だとおとひっちゃん、どんどん引きずり込まれていって、引退までずうっとその活動に熱中しちゃうよ」

総田、来たかな。

僕はもう一度、じつと目に力をこめた。

「六月でいったん終り、つてことにした方が楽だよ」

これ以上は何も言わなかった。だって、総田があとは決断するだけなんだから。

「佐川。そうしたい気持ちは山々だったのは、わかってくれるよな
あ」

「だって、ちょっとこのままだと、向こうに引つ張られるよ。俺、そんな気がする」

「佐川の言うとおりだ。相変わらず、切れるな」

総田が言葉を濁す。こういう時が、大切だ。

「だが、これはあの単細胞野郎に全部丸投げさせたいってのも、わかってくれるよな、佐川」

あらら、だめかよ。

かなりがっかりした。口を尖らせた。唇の皮があぶくみたいにくらんできた。しばらく総田は僕を申しわけなさげに眺めていた。また火箸で火口を激しくかき回した後、がしゃんと床に置いた。曲がった火箸の先が甘い飴色に染まっていた。

「なあ佐川、お前があのだ単細胞と一緒に青大附中に行っている間、俺は何してたと思う」

「どうせ、試験勉強だろ？ 最後の最後でトップを奪うぞって」

白々しいことを僕は言つてのけた。当然、総田は吹き出した。

「んなことすると思うかよ、俺がそんなあいつみたいに必死こいてやんねばならないほど、ガリ勉かと」

「だってそうでなかったら次に総田のすることは一つだろ？」

意味ありげに覗き込んでやった。唇をひんまげて、僕の顔を覗き

込む。

「川上さんとも連絡取らなくちゃいけないしね」

思いつきはたかれた。よかった、火箸じゃなくて。

「お前何俺のこと誤解してるんだ？　だからあの女とは関係ねえだろ」

「いや、俺も今、もしそういうこと知ってなかったら、これからのこと相談できないなあと思ってて。ごめんごめん」

引っ掛けすぎた。やっぱり痛いのはごめんだ。僕は頭をさすりながらくしゃみをした。

「おとひっちゃん、実はさ、あの子にすごいこと言われちゃったんだ」

　　一か八か、勝負だな。

「あの子？」

「うん、あの、子」

変なところで切って、もう一度僕は総田の側に近づいた。おとひっちゃんはいなくても、どこではれるかわからない。水鳥中学は青大附属と違って木造だから、結構音がもれやすいんだ。

「まさか、あの女子か。何言われた」

　　答えた方がいいかなあ。

かなりこれは迷う。僕はとぼけることにした。

「言われたっていうか、プレゼントもらっちゃったんだ」

「今度は食い物か。まんじゅう怖いかな」

「うっんと、花だよ。鉢植えの花。持ってきて渡してくれたんだ」

総田は唇で「花だと」とつぶやいた。

「なんでだよ」

「知らないよ。とにかく、帰り際にいきなりおとひっちゃんへ花をプレゼントしてくれたんだ。今回お茶汲みわんこそばでできなかったみたいだから、そのお返しなのかなあ。俺、そういうのってよくわかんないからさ、総田に相談したかったんだ。できれば川上さんとの実体験から教えてもらえたら、きつと今後の活動に役立つかなあ

って思ってたさ」

話がだいぶ強引だけど、総田はこういう形で持っていくとすぐに頷いてくれる。ちゃんと分け前を渡す代わりに、僕の役にも立ってくれるってわけだ。

「そうか、花な。愛の告白で薔薇でも持ってきたか」

「ううん、葉牡丹」

「はばたん？」

総田は花の種類に疎いらしい。

「キャベツの親戚みたいな花だったよ。きつとお土産に食べてくださいってことなんだろうな。だから俺もおとひっちゃんの代わりに言っておげたんだ。花を育てるのが得意な子がいるから、預けるよって」

「佐川、おい」

僕はさっそくとどめをさした。ちょっとばかり早いけど仕方あるまい。

「だって、おとひっちゃん露骨におびえてたよ。お茶わんこそばもすごかったけれど、きつとキャベツもらってどう返せばいいか、わからなかったんだと思うんだ。必死にこらえてた。必死にありがとうってお礼、言ってた。たぶんあの子、おとひっちゃんがよろこんでくれたんだって誤解していたかもしれないけれど、おとひっちゃんはとんでもない、だれか助けてって顔、してたよ。もしこれ以上近づいてこられたら、青大附中との交流会止めたいって顔、してたよ」

ここだな、問題は。

「そうか、あいつも相当、あの女子を」

火箸を数回、ストーブの火の中でかき回し、また赤くした。

「総田はあんまり乗り気じゃないって言ってたけど、でもせっかく盛り上がったってらんだったらやらない手、ないと思うんだ。内川だって大変だしさ、総田だって今更おとひっちゃんがこっちに戻ってきたら困ると思うんだ」

そうだろ、総田。

ひっかった。火箸の曲がった先がゆっくりと黒くなった。持ち上げて僕の方を指すのは熱いからやめてほしい。

「相変わらずだな、佐川」

今度は頭をぐりぐりなでた。おとひっちゃんがやるみたいになつた。

「天才参謀佐川雅弘、健在なりってことか」

僕が天才なのかどうかはわかんない。総田が言うには、たぶんおとひっちゃんよりは上だってことなんだろう。気分はいい。でも調子に乗ったら口をつぐまれる。僕はわけわかんない顔をして、半ば口をあけた。

「今、俺が内川と何やってるか、知ってるか」

「三月の、卒業生を送る会の準備だろ」

ちょうど公立高校入試一週間前だった。終わってからすぐにやらなくちゃとは聞いていた。ただし、おとひっちゃんが交流会関連中心で立ち回っている関係で、ほとんどタッチできない状態だとも聞いている。

「関崎抜きでずっと話を煮詰めてきたってわけだ。内川もぼんぼんの顔していて結構おりこうさんだ。関崎の前ではばか顔をしまくってるが、ほんとのところはどうかなくてとこらしい。本人も自覚してねえけどな」

僕も内川会長は、ただのおとひっちゃん大好き少年としか思っていないかった。

「関崎はまだまだあれやこれや手を出したいみたいだが、俺としては今のうちから、内川ひとりでどんな企画をまとめたり話をしていったりする方がいいと思うんだな。俺たちも三年になったら少しはマジにならねばなんねえし。けど関崎がいれば内川はほよおんとしたままだ。ただ甘つたれてしまっただけだ。で、今から俺は少しずつ活を入れてるってわけだ」

「活って、例えばどんな？」

ストーブを火箸の先でこつんと叩いた。石炭入れ口の隙間をふさいだ。

「関崎がいる時だったら書類関係はみいんな、あいつが片付けるよな。うちの会計の分まであつというまに完成させちまう。楽では有る。しかし、今は関崎がいない状態だ。誰がやる？俺がやるってのか？冗談じゃねえ、お前やれ、ってことで、内川は毎日書類にひいひい言ってる」

「こき使い過ぎたんだよ。内川くん、だから一月に倒れたんだよ」
彼もインフルエンザに倒れたひとりだった。

「でもな、よく考えてみるよ。あのまんま過保護に関崎が面倒見つづけてみる。後で泣きを見るのは内川だぞ。覚えてるか。俺たちがいきなり副会長につけられて、さんざんバトル繰り返して、必死に覚えてきたことってなんだよ。こんなのを一年のうちに覚えられれば、もっと要領よくできたぜ。あの関崎ですらも、勘違いしたこと口走らないですんだだろうしな」

言ってるよ。本当にそうだ。

僕が頷くと、総田は後ろに回って肩をもむようなしぐさをした。
本気でマッサージし始めた。

「だろうだろう。愛の鞭って奴だ。会計、書記、今の一年みな似たようにしつけてるとこだ。けど関崎が戻ってきてみる、またみーんな、あいつがひとりで片付けて、一年坊主はやることなし、改選の段階で何やればいいんだかわからねえ、情けねえの三拍子。冗談じゃねえよなあ」

総田の本音に僕は強く共感した。伝わったのか、肩がほぐれた。
「思いつきりもんでいいよ」

「よしてきた！」

休み時間終わるぎりぎりまで、僕は総田に肩をもませたまま炎を見つめていた。

おとひっちゃんがものすごく後輩に対して面倒みがいいことは有名だ。僕をかばっていた時と同じことを、内川会長をはじめみんなにしているわけだ。実際、総田もおとひっちゃんがいる時はある程度気をつかって、あまり内川くんにも口出しをしないようにしているようだ。よけいなけんかはしないようにしているみたいだ。

でも、おとひっちゃんが渉外の仕事に専念し出してからは、ありとあらゆることを内川くんに仕込んでいる。はつきり言って、それは正解だと思う。おとひっちゃんのぶきつちよなところを真似たつて、内川くんが損するだけだ。むしろ、総田のように女子受けもよく、ちよつとのほほんとしたとこなどを生かして、「愛される生徒会長」を目指せばうまくいきそうな気がした。少なくともおとひっちゃんのように「陰で物笑いされるかわいそうな生徒会副会長」にはならないですむ。精神的にもほんと、楽だ。

総田は言った。

「あとで泣きを見るのは内川だぞ」

ほんと、その通りだ。おとひっちゃんくらい仕事の頭がよければどんどん片付けられるのかもしれないけれど、誰もがそんなことができるわけない。僕だって、おとひっちゃんのやり方を真似るなんていわれたらたまったもんじゃない。

だから総田としては必死に、内川くんへ自分の経験とか方法を教え込んでいるんだろう。よけいな奴がいない間に、総田幸信流のやりかたを。正しい判断だ。

けど、まだ内川くんは生徒会に入って半年も経っていない。何かなんだか本人だってまだわかんないだろう。一応は生徒会長といわれているけれども、実質処理しているのはおとひっちゃんと総田なんだから。今のうちに時間稼ぎして、総田のやりかたを覚えてもらい、今年の十月改選以降……よっぽどのことがない限り、あっさり信任投票で決まる……内川くんのやりかたで勝負すればいいと思う。よけいなことを言うおとひっちゃんがない方がいい。それはよくわかる。

邪魔だよな。そりゃそうだよなあ。

僕があえてそれ以上何も言わなかったのにはもうひとつ、理由がある。

総田の本心だ。

おとひっちゃんがあのだ杉本さんという葉牡丹の少女に付きまわ
れて、げんなりしていることを知って、もし総田だったらどうして
いるだろうか。僕だったら、まずためらうことなくおとひっちゃん
を杉本さんと仲良くさせるべく努力するだろう。いいところを無理
にでも見つけて……ものすごく難しいとは思うけど……付き合っ
てもらうところまで持つていく。杉本さんの性格が悪いところとか、
そういうのは関係ない。とにかく、内川くんへの帝王学教育が終わ
るまではなんとかしたいだろうし。おとひっちゃんだって、自分を
好いてくれる人をまんざら無視もできないだろう。とにかく、青大
附中評議委員会との交流を最優先する形にして、その間はひたすら
こらえる。耐える。いや、がまんしてもらう。

むかつく女子であろうがなんであろうが、総田にとっては、厄介
なおとひっちゃんの視線を逸らしてくれる相手だ。感謝以外の何も
でもない。僕が総田だったら、必死に杉本さんのいいところ情報を
たくさん手に入れて、おとひっちゃんをその気にさせてしまっただ
ろう。

僕に出来ないことじゃない。もちろんだ。しかし。

しかしなのだ。僕にはどうしても、そうしたくない理由がある。
総田の言った「天才参謀」という肩書きはありがたく受け取るけ
れど、もうひとつ僕には「関崎乙彦とは大親友」という言葉が重く
のしかかっている。

おとひっちゃんとは小さい頃から一緒に遊んでいた。当時僕の身
体もちっちゃくて、幼稚園から小学校一年くらいまではよく他の男
子から泣かされていた。男子の世界は腕力だから。けど、そういう

時に飛んできてくれて、あっさり連中をのしてくれるのがおとひつちゃんだった。僕相手だけじゃなかったけれど、気が付いたら僕に手を出す奴は一切許さない、とばかりににらみをきかせるようになった。僕はだいぶ、楽になった。いつのまにかおとひつちゃんの側から離れなくなった。おとひつちゃんも喜んだ。それだけといえば、それだけのことだ。

成績も学年トップだし、黙っていればかっこいいタイプに入るし、僕にとっては自慢の親友だった。「だっておとひつちゃんがそう言うってたよ」と一言口にすれば、あっさり大抵のことはOKが出た。「おとひつちゃんと一緒にハイキングに行くんだ」と言えば、うちの父さん母さんもみな納得でお小遣いをくれた。

今だって僕は、おとひつちゃんのことを大好きなはずだ。おとひつちゃんが僕を大切な友だちだと思ってくれることがわかるから。

要領の悪い奴だとあきれていても、やっぱり僕はおとひつちゃんのことを大好きなのだ。

そんなおとひつちゃんに本人がやりたくないことを求めるなんてことできるだろうか。

僕が感じた限り、杉本さんへの感情はもろ、マイナスだ。

おとひつちゃんにとって、好きな女の子、といえるのはひとりだけだ。

もし、葉牡丹を差し出された時、狂喜乱舞しそうな相手はひとりだけだろう。

もちろん「たいして好きじゃない子」程度だったら、もちろん素直にごめんとか言えるだろう。おとひつちゃんもその辺は男だ、はつきりしている。

問題は「嫌い」なタイプの場合だ。

僕はまだ、おとひつちゃんにそのことを確認していない。できればしたくない。けど、杉本さんが葉牡丹の鉢植えを差し出した時、

おとひっちゃんときたら完全におぞけをふるっていた。できればこれ以上一步も近づいてほしくなかったんだろ。おとひっちゃんが女子の前で露骨にびびっていたのは初めて見た。

その後で健吾くんから「杉本さんの過去」について聞かされた。聞いたことを丸呑みするおとひっちゃんのことだ。おとひっちゃん「嫌いな女子に追いかけられる」というのがまんできないに違いない。ずっとお茶わんこそばをされたり、変な花を押し付けられたりして、それを耐えながら青大附中に通わなくてはならないこと。どんなにしんどいか、想像はつく。

総田はおとひっちゃんにそのまま涉外係専念お願いしたいとこだろ。

けど、僕はおとひっちゃんの為に、なんとか杉本さんから縁を切らせてやりたい。

冗談じゃないよ。僕だって、あんな子とおとひっちゃんが一緒にいるとこ、見たくないよ。

実はそれが一番の本音かもしれない。

教室でさっきさんと少しだけ話をした。

とりわけて僕とべったりしているってわけじゃない。僕は別にもっとしゃべっていいと思うんだけど、さっきさんがちょうどいい距離でいてくれる。すごく楽だ。

妙にくつついてくるってわけじゃない。たまたますれ違ったから挨拶する、ちようど帰るところだったから途中まで歩く。偶然ばかりだ。僕もさっきさんのことをうつとおしいとか思わないですむ。僕があげた葉牡丹の鉢植えについて、わざとらしく話題にしてくることもない。本当に、いい人だ。だから僕の方から話題を振ってみる。

「さっきさん、昨日の花、どうしてる？」

ふわあつと笑った。やっぱり、喜んでくれたんだ。

「今日は玄関に出したままなの。玄関口は冷たいからちようどいい

かなあつて思つて」

「あれ、寒いところでもいいのかなあ」

さつきたんはさすがに花に詳しい。

「そうよ。葉牡丹はね、冬、外に出したままでも大丈夫だって、本に書いてたわ。それでね」

周りを気にするようにして、さつきたんは僕の隣りで小首をかしげた。

「今度のお休み、お天気よかったら、うちの庭に植え替えようかってお母さんと話してるの。大切に育てなくちゃって」

どうせ捨てるつもりでいたんだから、そんな大切にしなくたってかまわないんだけど。

「あ、でも変な花でごめん」

「ううん、佐川くんが持つてきてくれたんだもの、ちゃんと育てるわ」

だからあれはおとひっちゃんがもらったもんなんだって！

すっかりさつきたんは、葉牡丹を僕がわざわざ持つてきてあげたつて思い込んでいる。

たぶん、そう思いたいんだろう。

一応、僕なりに説明はしたけれども、信じたりなんてしないんだろ。

女子って、どこか自分の都合のいいことばかり信じてしまつくせがあるみたいだ。

おとひっちゃんのうちに寄つて、給食のパンと牛乳だけ届け、僕はさっさと家に帰った。

まだ二年だから受験も先だし、ということで、店の手伝いをさせられる。僕のうちは青潟駅前で小さな本屋さんをしている。雑誌とかコミックとかもあるけど、結構学校の参考書や教科書なんかも扱っているの、お客さんは入ってる方だと思う。今の時期だと、青大附中受験用の参考書とかが売れるって、うちの父さんが話してい

た。あんまり近くには、学校の教科書を扱う本屋が少ないんだそう
だ。よくわかんないけど、教科書なくしてもこまらないなと思う。
部屋でシャツとセーターを重ね着して、あったかくした後店に下
りていった。父さんたちが返品作業中だった。床に積み上げた本を
ダンボールにより分けている。今の時間は学生が多いので合間に打
つレジもせわしない。しかたない。僕もレジ脇でカバーをかける手
伝いをすることにした。受け取って「カバーつけますか？」とお客
さんに尋ねて、OKだったらいそいそと紙のカバーを表紙の上から
挟み込む。たまにはビニールの袋に入れてあげる。一時間くらいば
たばたしていた。だいぶ人がはけてきた時だった。

「あのう」

女の子の声が、僕の真ん前でした。ピーク時間最後のお客さんか
と思つて、目を向けずに返事した。

「はい、少々お待ちください」

「佐川さん、ですよ」

やっぱりかすかな声。僕は顔を上げた。カバーをかけ終わった本
をその前にいたお客さんに渡し、あらためてその子の顔を眺めた。
見覚え、あるある。

耳の上にまあるく編みこみした髪の毛をまとめている。カンフー
映画に出てくる女の人みたいな髪型の子。忘れるわけない。紺のコ
ートで隠されているけれど、きつと青大附中のブレザー制服を着て
いる。ほわほわつと首のあたりがあつたかくなつた。言葉がうまく
出てこない。まずは挨拶を。

「ええっと、この前はどうも」

女の子の名前が出てこない。確か僕の苗字に似ていた記憶はある
んだけど。一緒にいた男子は「健吾くん」だつて覚えているのにな。
肝心要の記憶力が弱すぎる。

隣りで父さんがやっと僕の顔を見やった。なんか誤解してるの
かもしれない。ここできちんと説明しとかなくちゃなんない。

「この前、おとひっちゃんと青大附中で会った人だよね」

「覚えていてくれたんですか！」

声が弾んでいた。僕の方がびっくりするくらいだった。誤解が一層広がりそう。

父さん、見えないところで僕をひじで小突くのはやめてほしい。なんかうずうずする。

この人助けてくれたんだよな。まずはお礼だな。

言葉を慌ててつなげた。

「あの時はほんとに助かった。ありがとう」

一年だったはずだ。昨日、体育器具室でダンボールを挟んでここにこしあったあの子だとはわかるのだけど、肝心要の名前が思い出せない。

「あの、今少し、いいですか」

迷っている間に女の子は僕を真つ正面からすうつと見た。じいっと、って感じじゃなかった。葉牡丹の彼女のように、にらみつけるのではない。僕の方がもつと見ていたっていう角度に、さらさらと。

父さんは完璧に昨日の出来事を誤解したらしい。結構、家の父さん、女子とのことか目ざとくて、しょっちゅうからかわれている。「雅弘、おとひっちゃんとお前、どっちがもてるんだ？」といきなりちよっかい出すのはやめてほしいと常々思っている。たぶん今、僕の方がもてもてだと勘違いしまくっているはずだ。勝手にしろだ。

「じゃあ、雅弘、だいぶ空いて来たから、もう戻っていいぞ」

なにがもう戻っていいぞ、なんだよ！

頼むから、下手なウインクするのは止めてほしい。女の子の前、そんなことは言えない。もう勝手に返品作業でこてこてに疲れてろってんだ。僕は頷くだけ頷いて、さっさとレジコーナーから出て行った。あぶなく返品用のダンボールに躓くとこだった。あの子の前でこけないでよかった。

「いいけど、なあに」

女の子は児童書コーナーの本棚前へ歩いていった。コミックコーナーだと僕と同じくらいの奴がたくさんいて落ち着かないし、雑誌コーナーも同じだし、ってところだろう。児童書だったら、うろついているのはお母さんと子どもくらいだし、ちょこまかして子どもの騒ぎ声はBGM代わりにもなる。僕がもし、店の中で内緒話したいとしたらたぶん連れてくるのはそこだ。

「ごめん、あそこでにやにやしてたのうちの父さんなんだ。」

「佐川さんのお家なんですか」

一目でわかる「佐川書店」。なんのひねりもない。

「うん。うち本屋だつて、昨日しゃべったかなあ」

「今日はたまたま参考書を買いに寄ったんです。まさか、佐川さんに会えるなんて思わなかったんで、驚きました。いきなり声をかけてしまいごめんなさい。アルバイト中だったんですか」

アルバイト、ときたか。単なるうちの手伝いなんだけどな。

女の子はずっと僕に敬語を使う。一年上だからなおさらなんだろう。僕なんて背も低いしがきつぽい顔してるし、一年の中に混じっても変じゃないと言われている。先輩扱いなんて、めったにされたことがない。あらためて気付いた。この子、背がちょっと高い。

「うっん、うちの手伝いだよ。だから、大丈夫なんだ」

何が大丈夫なんだか、自分でもわからないことを口走っている。どうしてかわかんないけど、髪巻き上げの女の子を見ると僕ひとり、ひとりでぺらぺらしゃべってしまふ。ラジカセの早回しボタンと再生ボタンと一緒に押したみたいだった。女の子はまた耳に手を当て、髪の毛に触った。

「で、俺に話つてなあに。昨日のことかなあ」

偶然、というのを僕は信じていなかった。

昨日の今日、たまたま僕がレジにいたからといって、いきなり声をかけるなんて大胆なこと、できる子ではないと思うのだ。おとな

しそうで、どこかさつきたんっぽいところあるはにかみぶりを見て
もそうだ。健吾くんの指示だろうか。

騙された振りしてやってもいいけど、嘘つくのはよくないよ
なあ。

絵本と児童書の境目が四角くコーナー取りされていた。立ち読み
している格好で僕は女の子の隣りに立った。小さな声でささやいた。
「もしおとひっちゃんにばれたらまずいってことだったら言わない
よ」

「あの、私」

女の子が目をまんまるくして僕を見つめている。いつもそうだ。
何気なく、「こうじゃないかな」と思ったことを女子に言くと、大
抵おんなじ反応をする。別にやなことを話したつもりじゃないんだ
けど。

「わざわざ来てくれたってことは、本当に知られたらまずいってこ
とだね。ほんとだったら生徒会と関係のない俺よりも、副会長や
ってるおとひっちゃんの方が話通じるはずだもん」

ちよつと意地悪なことを言ってしまった。

「俺、勘違いしたこと言ったかなあ」

まずい。嫌味いっぱいだと思われてしまったかもしれない。そう
思われたくない。

手持ちぶたさの片手を、本の背に滑らせた。

「佐川さん、私」

床に座り込んではいでいるちっちゃん男の子が絵本を広げて
いる。騒ぎ声に混じって女の子の言葉は聞き取りづらかった。

「新井林くんには内緒なんです」

新井林？ ああ、健吾くんのことか。

でも、お付きあいしている奴に内緒ってことは。やはり今の再会
は計算ずくなんだ。

「おとひっちゃんのことを聞き出すために、わざわざここに来たの
？」

やはりだ。予想はついていたけれども、ぐっさりきた。女の子はうつむいた。ほんとに泣いちゃいそうだった。学生かばんを両手で抱え、ゆっくりと僕を見上げた。本当に泣いているみたいだった。

「今日のこと、誰にも言わないでください。でないと私」

「別にいいけど、けどどうして」

言いかけて、その前に聞かなくちゃいけないことを先にした。

「ごめん、俺、言いすぎた。名前、もっかい教えてほしいんだけど、いいかなあ。俺は佐川雅弘。あ、もう知ってるよね」

泣き笑いめいた表情で佐賀さんは僕を見つめた。ほわほわともやのかかった、やわらかい湯気がかかっているみたいだった。白くて豆のような小さい花。たくさん集めてぽんと渡されたような感じだった。

「佐賀、はるみ、です」

「女の子」じゃなくて、「佐賀さん」と心で呼ぶようになった瞬間だった。

僕は黙って佐賀さんを、自動ドアの出入り口に連れて行った。

一緒に外へ出ることにした。

外に出ようと思ったのは、やはり店の中で親から向けられる視線がうざったかったことと、佐賀さんの立場を考えたからだった。

他の男子と一緒にいるところを見られたらかなり誤解されるだろう。

別に僕はそれでもいいんだけど。悪いことなんもしてないし。

隣で佐賀さんがくしゃみの声を押し殺していた。どこか中に入った方がよさそうだ。

「ちよつと歩くけど、郷土資料館に行こうと思うんだ。いいかな」
小首を傾げて僕を見た。

「店でお客さんに渡している無料招待券があるんだ。けど、あんまり行く人いないみたい。人気ないんだよ」

「私はかまいません」

「あそこ、中に入ると、展示室のどまんかに大きな机があるんだ。閉館時間まで座っていられるんだよ」

総田と落ち合う時によく使っている場所だった。店のレジで配っている無料招待券をくすねてきてこっそり連絡を取り合う。大人が数人うろついている以外は見事に静か。館員の女の人が座っているくらいだろうか。安心して機密情報を交換できる場所だった。

佐賀さんは唇のはしにえくぼを作った。

「ありがとうございます」

「いいよ。けど、青大附中からだったら遠かったよね。自転車、今の時期は使えないし」

「バスで来たんです」

「じゃあやっぱり、狙ってきたんだな。」

佐賀さんとしては、「偶然本屋に立ち寄ったら僕がいた」という設定を守りたかったみたいだけど、不自然なことをしたってろくなことはないと思う。

偶然出会った人をいきなり、そんなふたりつきりになれそうな場所へ引きずり込むなんてこと、できない。

目的があるからこそ、できることってあるはずなのだ。

「バスの時刻は調べた方がいいよね」

「大丈夫です。最終、見てます」

完璧だよ。

水鳥中学の知り合いには会わずにすむよう、近道を使った。五分钟左右歩いたところに、「青潟市郷土資料館」と木目の看板が出ている建物がある。見た目は目立つけれども、中に入ると受け付けのおじさんが黙って招待券をもうでくれた。コンクリートの壁ばかり目立つ、かすかにピアノの曲が流れているところだった。主に青潟市のなりたちとか歴史とか、水害地震など天変地異の話とかのパネルが張り巡らされていた。時代劇に出てくるような紐綴じの本とか、形をなしていない木造の板とか、見ても面白くない。僕たちはわき目も振らずに茶色のソファアに向かった。青潟市全域の立体地図を背に座った。髪の毛の白い男の人が、ゆっくり歩いている以外は誰もいなかった。

「ここ、五時半までいても平気だよ」

「はい」

僕もジャンバーを着ないまま来てしまったので、かなり寒さが答えた。中は暖かいけれど、暑いほどではない。佐賀さんもコートを羽織ったままだった。手袋だけ脱いで、両手で握り締めていた。

目的って、なんなのかなあ。佐賀さん。

僕にだけ用があるのは確かだ。

おとひつちゃんのいないところで、もつというなら恋人の健吾くんすらはさまないところで話さなくてはならないこと。

昨日教えてもらった話は全部焼き付けてあるけれども、今日につながることもなかろうかがはつきり結論付けられなかった。

まあいいや。わかんなかったら、聞けばいい。

単純なことだ。

「佐賀さん、俺、少しずつ質問していくけどいいかな」

「聞いていくって」

片手をまた耳元に当てて、佐賀さんは首をかしげた。わざとらしくない。髪の毛の角度が三角定規の先っぽ程度に傾いたくらいだった。

「俺、謎解きが好きなんだ。推理小説とか、ドラマとか見て犯人当てるのがすごく好きなんだ。だから、佐賀さんの話、ちょっとだけ当ててみたいんだ」

わざとらしい言い訳だけど佐賀さんはうつむいて、小さくうなづいた。

「外れてたら言ってくればいいよ。おとひつちゃんと、葉牡丹くれた人のことかな」

「葉牡丹、梨南ちゃんの」

すぐに反応が返ってきた。僕は畳み掛けた。

「帰り、俺たちを送ってくれた時、言ってたよね。葉牡丹くれた人が逆恨みすると大変だから葉牡丹を持っていつてほしいって」

かすかに唇を開き、佐賀さんはふたたびはあつと息を吐いた。

でも言葉には出さない。僕は気づかない振りしてさらに続けた。

「俺とおとひつちゃん、ちゃんと持って帰ったよ。けど、男子は基本的に花育てるの苦手だろ？ 枯らしたらあとで大変だって聞いたから、別の知り合いに預かってもらっただ」

「その人、男子ですか、女子ですか」

答えた方がいい。即断した。

「女子だよ。同級生で、やさしくていい人なんだ。おとひつちゃんも、その人にだったら預けたいって言ったんだ」

少しゆっくりめに力をこめて言った。

特に「やさしくていい人」「その人にだったらいい」というところはアクセント記号を思いっきりつけて。

「やさしくていい人、なんですか」

かすかな声で、目を伏せたまま佐賀さんが問い返した。

「うん、関係ないけど、おとひつちゃんの好みって、やさしくておとなしくっていい人が好きなんだ」

くどいようだけど、アクセント記号をつけさせていただいた。

「やさしくって、おとなしくって」

また佐賀さんが繰り返した。勘違いしてるんじゃないかって気がしたので、慌てて僕は軌道修正した。

「うん、けど俺はおとひつちゃんと好み違うかもしれないなあ」

無意識に口走った振りをした。

「佐川さんがですか」

「うん、俺ってあまり女子に興味がないんだ。いい人だったらみんな男子女子関係なく、いい人だから好きっていう。それだけなんだ」
なんでそんなこと言い訳したのかわかんないけど、口が勝手に動くのだからしかたない。

「そうなんですか」

「もうひとつ、おとひつちゃんって、すごい度真面目野郎で、曲がったことが大嫌いなんだ。いじめをする奴は男子女子関係なく、絶対許さないな。たとえ自分が好きだった子だったとしても、そういうことをしているんだったら、縁を切るか、もしくは殴るか、しちゃうなあ。俺、おとひつちゃんと幼稚園の頃からの親友だけど、そういうところはずいぶん変わってないんだよ」

匂わせてみた。昨日の話を丸ごと信じると、葉牡丹の君こと杉本さんは、僕の隣にいる佐賀さんを思いっきりいじめていたらしい。佐賀さんの反応もあいまいだけど、事実関係を認めているって感じだった。現場を見ているわけではないので判断できないけれども、やりそうな人だなあという気はたしかにした。気に入らないことだったら文句をつけて押し通しそうなタイプ。違っているかもしれないけれど。僕なら、たぶん違うんじゃないかと疑問符はつけるつもりでいる。けど、おとひつちゃんがあんまり話を聞いて、それでも杉本さんのことをかばうとは思えなかった。いじめをして堂々としてい

ることや、担任にも嫌われて次期評議委員会から降ろされているということもマイナスの点数を増やしているんじゃないだろうか。

「俺、思っただけど、健吾くんは杉本さんのことが大嫌いなんだよね。だから、かなり悪口に乗せしているとあるんじゃないかなって思っただ。だから話を少し低く見積もって聞いてただ。」

僕は続けた。よく総田に話し掛けるような感覚で。

「俺がはつきりと本当だっと思ってたのは、健吾くんと佐賀さんが、杉本さんのことを大嫌いだっということなんだ。違ってるかなあ」

「違ってます。私、梨南ちゃんのことを嫌ってなんかいません」

慌てて早口に否定する佐賀さん。頬が真っ赤だった。首を激しく振った。

「梨南ちゃん……杉本さんのことなんですけど、あの子は私と小学校一年の時から一緒だったんです。本とか百科事典とかそういうのをたくさん読んでいて、成績もよくって、それに可愛くって。小学校の時は目立ってたんです。新井林くんも言っていましたけど、確かに私は梨南ちゃんにひっぱられてたところってあったと思うんです。梨南ちゃん男子が大嫌いでなのしりあいのけんかばかりしてたから。私に話し掛ける男子を見ると、すごい勢いで文句まくし立てて追っ払ってました。馬鹿と話すと馬鹿になるからって」

やつぱり杉本さん、佐賀さんをいじめてたんじゃないか。

確信、さらに深まる。

「でも、梨南ちゃんはそれを私のために、っていつも言っていました。だから私も、そうなんだなあって思っただけで、言う通りにしてました。けど、新井林くんからそれは違う、悪意なんだって言われてから、だんだん考え方が変わってきたんです」

俺から見てもそれって嫌がらせだよ。健吾くんのしたことは当然だよ。

おとひっちゃんも杉本さんをぶつとばしていただろう。

「けどけど、私、考え方が梨南ちゃんとは違ってるんだってことを伝えただけなのに、ものすごく怒られてしまったんです。小学校の

卒業式前に、私、靴の中に蛆虫を入れられたことがあったんです。梨南ちゃんじゃありません。他の男子が梨南ちゃんの靴だと思って間違ってしまったんです」

男子だっていやだ、女子だったらもつとすごい騒ぎだっただろう。「泣いちゃった？」

僕の顔を横目でにらむようにして、佐賀さんは頬を押さえた。

「だって、足の上からいっぱい小さな虫が上がってきて、私、何かなんだかわかんなくて」

「男子だってパニックになると思うよ」

「その時、梨南ちゃんは私の靴を脱がせようとしてくれたんです。梨南ちゃんは善意だったと思ってます。けど、その時に新井林くんが来て、梨南ちゃんを突き飛ばして、私をおぶって教室につれていってくれたんです。そして」

頬を今度は両手で押さえた。

聞きたくないけど聞いてみた。

「なんか言われたのかなあ」

「私とお付き合い、したいって」

それだけ言っていると佐賀さんはうつむき震えた。

そうなんだ。やっぱり、付き合ってるんだ。

なんで佐賀さんが、健吾くんとのかきかけを、会って二回目の僕に打ち明け始めたのかわからなかった。関係はあるんだろう。たぶん杉本さんのことで何かあるんじゃないかと思う。けど、僕としてはどうでもよかった。関係なかった。

「で、杉本さんとはそれからけんかになったんだ」

「はい。あれ以来梨南ちゃんは私と口利いてくれなくなりました。けど、それはしかたないんです。新井林くんと付き合いってしまった私が悪いんです。私、関係なく友だちでいられると思ったけど、梨南ちゃんは絶対に許せなかったみたいなんです」

先に彼氏を作ってしまったから悔しかったのかな。

佐賀さんが杉本さんよりも早くそういうお付き合いしたというのだったら、納得だ。

もしどっちを選べとか言われたら、僕も、たぶんおとひっちゃんも同じ選択をするだろうから。

「どうして許せなかったのかなあ。理由、あるのかなあ」

ぼけぼけした調子で僕はさらに尋ねた。

「たぶん、なんですけど」

ほつれた耳もとの髪の毛を、人差し指で押さえるようにして、僕の顔をじつと見つめた。

目が合った。そらせなかった。

「梨南ちゃんは今井林くんのことを七年間、好きで好きでならなかったんです」

そういうことが。

思わず、ひざを打った。

キーワードが見つかる僕の中のものではものすごい勢いで答えがまとまっていく。これって無意識なんだけど。

「だから健吾くんは、杉本さんのことを嫌ってたんだ」

「小さい頃からそうでした。新井林くんは梨南ちゃんのことが大嫌いだったんです。でも梨南ちゃんはずっと新井林くんのことばかり考えてて、一生懸命関心ひこうとして、赤ちゃんみたいなことしてたんです。なんとなく、四年生くらいからそうかなって思ってたんですけど、梨南ちゃんと友だちでいたかったから言わないであげたんです。なにか機会があったら、新井林くんと仲良くするきっかけあるかなとも思ってた」

「けど、そういうのはなかったんだ」「蛆虫の事件だって、もし私がいなかったら、梨南ちゃんも新井林くんの方が本当のこと言ってるんじゃないか、って感じたんです。でも、梨南ちゃんとも友だちでいたかったし、それで、私」

言葉の切り方が僕には、テレビドラマの人みたいに聞こえた。

「佐賀さん、俺、思うんだけど」

途中でさえぎりたくなった。

「別に俺、杉本さんのことを佐賀さんが嫌いになってもおかしくないと思うんだけどなあ」

あくまでも、気抜けした風に。目の前をゆっくり通り過ぎていくおじさんを目で追いながら。

「無理に好きにならなくなっただけいいなって思うけど、そうはいかないの」

「だって私、梨南ちゃんがずっと小学校の時から、私をかばってくれてたんだと思ってたし」

勘違いだ。僕はその点で、完璧健吾くんと同じことを考えていたんじゃないかって思った。

なんか言わなくちゃ。佐賀さんの言葉とずれているものが、乾いた空気の中にふわふわ漂っているような気がした。彼女本人はぜんぜん気がついていないみたいだった。女子って意識しないで平気で怖いことを言う。男子だと「これってまずいかもなあ」ということを、さらっと言う。

「俺、あまり杉本さんって人のことよくわかんないけど、健吾くんがしたことは当然だって思うよ。佐賀さん、杉本さんのことを友だちだと思ってるだろうけれど、男子からしたらとんでもないなあって感じるしさ。こういうことしてたのかなあ」

佐賀さんの手は、ずっと手袋をひねりつづけていた。

「男子たちと話をしていると、『他の女子たちに嫌われるからやめなさい』って言うてくれたりとか。あと、品のない可愛いノートを使うと頭が悪くなるからやめなさいとか、漫画よりもちゃんとした辞書を読みなさいとか。それからそれから」

とんでもない人だな。

ほとんど杉本さんと話をしていない僕が言うのもなんだけど、これだけ聞けば十分だ。

もちろん、佐賀さんがうそをついている可能性だってないわけで

はない。

ただ僕の見る限り、佐賀さんの方に分があるように思えてならなかった。

「なんで男子と話をしてたの。別に杉本さんの悪口とか言ってたわけじゃないだろ」

「前の日のテレビの話してただけだったと思います。梨南ちゃんのうち、テレビないからそういう話できないし」

完璧、変だよ。

前の日のテレビドラマとかアニメとか、そういう話で盛り上がるってみんなやってることだ。たぶん佐賀さんは他のことといわゆる「ふつう」の話をしてたんだろう。でも、杉本さんはそういう話題に入れないから無理やり佐賀さんを引き離して、自分のところにひっぱりいれようとしてたってわけだろう。

「可愛いノートって、女子が使っているピンクとか花とかの奴？」

男子で使ってたならばかにするかもしれないけど、なんで女子同士で頭が悪いとかいうのかな」

「梨南ちゃんはいつも、真っ白い柄のないノートを使っていたから」「杉本さんの趣味がそういうだけであって、佐賀さんの好みに文句いう権利ないよ。はつきり言ってる杉本さんがかしいよ」

僕の顔を驚きまなこでまっすぐ見つめる佐賀さん。髪型も、ひとみもみんなまんまるい。

「読む本だっけそうだよ。漫画読むことってそんなに悪いことかなあ。うちの親も、もつと真面目な本読めとか言うけど、それって好みだよなあ。佐賀さん、杉本さんの言う通り漫画読まなかったの」「いいえ、他の友だちとか、先生とかが貸してくれたんです」

先生って、ほんとかよ。

佐賀さんの周りの人って変わっている。杉本さんのように、「漫画の代わりに辞書を読め」と意味不明なことを口走る女子がいると思ったら、「漫画を貸してくれる」先生がいたりする。僕も、辞書と漫画が並んでいたら、まず漫画を手取るだろう。辞書を愛読書

にする人もいたっていいけどすべての人の趣味だと決め付けられるのはよくない。

「読んでいるんだったら、あとはふうんって無視しちゃえばいいのにな。杉本さんには勝手に辞書を愛読してもらって、佐賀さんは自分の読みたいものを読めばいいんだ」

首をかしげずに、僕の隣で佐賀さんが何かを言おうとした。

唇がかすかに動いた。こういう時、女子はよくわけのわからないことをいっぱい並べ立てる。すうつと聞き流して、必要なところだけ繰り返せばいいと僕は思っている。真正面からすべてを聞き取ってすべてに答えるなんて、男としては大変だ。さっさと結論だけ言っちゃった方が佐賀さんにとっても、僕にとってもいいかな、と思った。

「佐賀さん、嫌だったって誰も責めないよ。なんで杉本さんをまだかばいたくなるのかわかんないけど、今の話みんな聞いてみて、杉本さんのように押し付けがましいことをする奴は、あっさり縁を切って正解だっと思うよ。もちろん生で見ているわけじゃないし、俺も一回しか会った事のない人の悪口言いたくないけどね。もし佐賀さんが杉本さんを嫌いだったとしても、軽蔑する気なんてないよ」

もちろん、他の中学の連中についてだらだら悪口を言うつもりなんてないし、佐賀さんの言い分がすべて正しいと決め付けることもできない。なによりも今日、佐賀さんがなんで僕を訪ねてきたのかその理由がまだ判然としない。自分と健吾くんとのことで、杉本さんがとばっちりを受けていることとか、おとひつちゃんや杉本さんのことを好きなのかどうかとか。いろいろあるだろう。けど、僕がらしたら佐賀さんは言い訳をしているような気がするならない。本音は杉本さんのことを大嫌いなのに、どうしても認めたくないあまりかばおうとしているというんだらうか。

そう、びんびんと感じてしまう。

小学校の頃から、嫌がらせされてきて、それでもがまんしなくちゃいけなかったことなんかを。

佐賀さんのために、とわざとらしい言い訳をして、杉本さんは自分の好みばかりごり押ししつづけてきたってわけだ。僕からしたらばかばかしい以外のなにものでもない。健吾くんが爆発して佐賀さんを守るうとしたのは、当然のことだと思う。佐賀さんだっていっしょに、爆発しちゃえばいい。言いたいことはつきり言って友だち関係を切るのが一番いいはずだ。

なんで女子って、腐れ縁をまだまだ守ろうとするんだろうなあ。

「私、梨南ちゃんのことを嫌いだなんて」

「嫌いなんだよ。俺にはわかる」

なぜか、強く言い切りたかった。

「佐賀さんは女子の好きそうなノートを使いたくて、漫画とかも読みたかったんだろ。いろんな好みってあるとは思うけど、杉本さんが佐賀さんに命令する権利なんてあるのかな。佐賀さん、どうして文句言わなかったんだろって思ったんだけど、きっと杉本さんが佐賀さんのためについて言ったからそう思い込もうとしたんだろなあ。けど、そんなの佐賀さんには関係ないじゃないか。俺もよくおとひっちゃんにああしろこうしろって言われることあるけど、ふふんって無視すること多いよ。だって、俺とおとひっちゃん、違う人間なんだもん」

思わず飛び出した。

意識なくてぽんと出てしまった言葉こそ本物かもしれない。

そうだよ、おとひっちゃんと俺は、違うんだ。

「私、今日、聞きたかったんです。梨南ちゃんのことです」

言葉が震えていた。寒いんだろうか。目の前の温度計をちらっと見た。

「関崎副会長さんは、梨南ちゃんのことをどう思っているのか、知りたかったんです」

じゃあ、俺じゃなくておとひっちゃんのとこに行けばいいじ

やないか。

「私、関崎副会長さんがもし本気で梨南ちゃんのこと、いいと思っているのだったら、協力したいと思ってました。これがきっかけで、また梨南ちゃんと友だちになれるかもしれないと思ったからなんです。でも」

それだけでは終わらないよな。

様子を伺った。目立たない程度にうなづいてみた。

「そうでなかったら、梨南ちゃんのために、別のことをしようと思っただけです」

「別のことってなに？」

言いよどんでいた佐賀さんはひざをじいつと見下ろし、コートの上から手袋を強く絞りがげんにした。力をいれているみたいだった。「本当に梨南ちゃんが好きな人と、仲良くなっただけから、そのために」

「ふうん、いるんだ、おとひつちゃん以外に、健吾くんのことじゃなくってか」

「はい、梨南ちゃん、自分でもわかってないんです。本当に好きな人がそばにいるのに認めたくないんです」

どう出ようかな。

迷った。佐賀さんが派手な前置きをした後、どう考えても杉本さんのことを嫌いなゆえの行動を取ろうとしていることに、戸惑っていた。女子ってわからない。はつきりと「杉本さんと関崎さんをくっつけたくないので協力してもらえませんか」と言ってくれたら話は別だ。ちゃんと健吾くんあたりも交えて相談したいなと思う。

でも、佐賀さんはまだ、杉本さんと「友だちに戻りたい」などと信じがたいことを言い張っている。

結論にさっさと進みたかった。

「ごめん、俺なりの結論言っていいかなあ」

さえぎり、また大きな目で見つめる佐賀さんに答えた。

「悪いけどおとひっちゃんは杉本さんのこと、あまりよく思っていないと思うんだ。苦手なタイプじゃないかなあ。おとひっちゃんの好みて、おとなしくてやさしくて、いつもにこにこしている感じなんだ。人前で他の男子たちの悪口を平気で言う人とか、あといじめを学校でするような人は、絶対に許せないタイプなんだ。だからたぶん」

仮に相手が佐賀さんだったら、話は別だったかもしれないが。その辺は想像なのでノーコメント。

「そうですか。そうなんですか」

唇の端が小さく上を向いたように見えた。

「けど、帰りに佐賀さん言ってただろ。杉本さんは逆恨みするタイプの人だって」

両手で葉牡丹の入った手提げを差し出してくれた佐賀さんの顔を思い出した。

「だから、おとひっちゃん、断る方法がわからなくて迷ってると思うんだ。もし杉本さんがおとひっちゃんのことをうらんで、青大附中評議委員会との交流関係をぶち壊す可能性だってないわけじゃないし。おとひっちゃんにとって、交流会はなんとしても成功させたいことだから、自分が我慢すればそれでいいって思っている。けど、そのために杉本さんみたいな人と付き会うなんて耐えられないなあどうしよって、たぶん悩んでいると思うんだ」

僕はぼそとつぶやいた。あまり強い調子で言いたくはなかったけれど、事実そうなのだからしかたない。

「もし杉本さんに別の好きな男子がいて、心変わりしてくれるんだったら、一番丸く収まると思うんだけどなあ。そうすればおとひっちゃんは安心して青大附中の交流行事に参加できるしね。杉本さんも逆恨みしないで幸せになれる。これが俺の思う最高の終わり方」
声を立てずに佐賀さんが慌てて目頭を押さえた。

女子がいきなり泣いてしまうなんて、困った。ポケットを探った

けれども、ハンカチとかティッシュとかそんなものない。

「あ、俺、変なこと言ったかなあ。ごめん」

「いいえ、いいんです。私」

静かに涙だけがころころ転がるのを、僕はただ覗き込むだけだった。

女子が泣くところって、あまり近寄りたくない。何を言っても通用しそうにないんだから。

「佐川さん、教えてください」

涙が大粒で零れ落ちる中、声だけがさらさらとしていた。つまっていなかった。

「私、そんなに梨南ちゃんを嫌っているように見えますか」

「うん。とことん嫌っているなあって思ってたよ」

「復讐したがつているように、見えましたが」

「うん、もしおとひっちゃんと杉本さんが付き合いたいって感じだったら、ぶつつぶしたいてって思ってるんじゃないかって」

「私、いったいなんで」

「簡単だよ。佐賀さんはずっと前から怒って当然のことを怒らなかつたんだ。杉本さんに文句を言いたかつたのに言えなかつたんだ。今、怒って当然だよ」

もう一度佐賀さんの目が大きく潤み、ぽつんと片目から涙を落とした。

「私、そんな悪い人になんてなりたくなんて」

「佐賀さんは杉本さんをいじめ返したりなんてしてないんだろ？」

まだ友だちでいたいって思ってた俺のどこに来たんだろ？」

僕はとどめを刺した。

「そんな無理しなくていいよ。佐賀さんのような人だったら他にいくらでもいい友だちできるよ。杉本さんなんかを見捨てたって誰も責めやしないよ。第一、杉本さんなんかに時間をかけているひまあつたら、もつといい友だちと出会ったほうがずっといいよ。俺でよかつたら相談に乗るからさ」

最後の言葉は、余計だったかもしれない。

ずっと黙っている佐賀さんの顔を覗き込むと、涙が大分乾いてきた風に見えた。

「ほんとに、私のこと、軽蔑したりしないですか」

「あたりまえだよ」

ベそかいて、ちょっとだけ鼻のあたりがぐちゃぐちゃしている。

犬の狎に似ていた。なでてやりたかった。

「じゃあ、言います。佐川さん」

狎くしゃ、とした顔が一瞬にしてぴんと引き締まった。

「私、梨南ちゃんのことを、嫌いでした。小学校の頃からちよっかい出してくる梨南ちゃんが、大嫌いでした。今までずうつと感じない振りしてたけど、本当はずうと前から、離れたくてならなかったんだって。佐川さんが言ってくれるまで、私、そんなこと思っちゃいけないんだってずうと思ってきました。たった今まで。だから友だちなんだって顔して、うまく取り持てあげようなんて。でも、私、関崎さんが本気で思っていないって聞いた時、なんだかうれしかったんです。私、最低な人間だっと思っちゃったけど、本当にそうだったんです」

「いいよ、当然だよ」

だんだん佐賀さんの口調が、ぴんと張り詰めてきた。ただおとなしいだけのしゃべり方じゃなかった。本気だった。ガラスの中に展示されている流木や化石などがぐいと僕たちを見つめているようだった。

「ほんとのこと言うと、梨南ちゃんが私のことを憎んでいた理由はずっと前から気づいていました。新井林くんのことを、梨南ちゃんはずっと好きだったんです。でも新井林くんは梨南ちゃんのことが高ともと大嫌いでした。だから梨南ちゃんは一生懸命ちよっかい出してたんです。私とくっついて、新井林くんに関心持ってもらおうってしてたんです。でも、結局それは失敗に終わったんです。私が

本当にしたいこと、したから」

それが、健吾くんと付き合っつてことか。

一歩引きたくなる片足。僕は足を組みなおし、展示されている地図を眺めた。

「そのことは後悔してません。梨南ちゃんから縁を切られて、ほんの少し、ほっとしてたりもするんです」

「遅すぎるくらいだったんじゃないかなあ」

「そう思う自分が悪い人間に思えてならなくて、自分でもどうしたらいいかわかんなくて」

もう涙を流していなかった。もう一度僕は佐賀さんと目を合わせた。そらさずにいた。

「嫌いな奴を嫌いと思つてどこがいけないんだつて思っけどなあ。口で言つたりいじめたりするのは悪いと思っけど」

「うっん、私絶対そんなことしません。したくないです。けど、どうしても私、梨南ちゃんにされてきたことが、友情からだなんてもう思えないんです」

かちんと、頭の中でプラグが刺さった。

佐賀さんつて、もしかしたら。

それ以上の言葉は形にならなかった。ごほんとひとつ咳をして、気持ちを整えた。

白い壁にたくさん張り巡らされた青潟市の歴史跡は、青潟市民だったら常識として頭に入れているものばかりだった。

事実関係ばかりで、どういう風なやり取りがあつたのかは想像つかない。知りたいとも思わない。

結果だけわかればそれでいいと、僕は思っている。詳しく知りたいなかったら、そういう人が自分で調べればいい。

僕がほしい結果っていうのは、杉本さんがおとひっちゃんじゃない人を好きになってくれることであり、おとひっちゃんが余計なこと考えないでくれること。ついでにいうなら、おとひっちゃんが青

大附中の評議委員会交流会に専念してくれることだ。総田をはじめ水鳥中学生徒会もそうすれば平和になる。佐賀さんも、杉本さんからこれ以上僻みのエネルギーを向けられて傷つかなくてすむ。全員、幸せになる結末だ。

そのためにどうすればいいのか。

僕は佐賀さんにめいっぱい、復讐してほしかった。

さんざん自分の幸せを邪魔した杉本さんに、とどめを刺してやってほしかった。

杉本さんを嫌いでもかまわないのだと、わかってほしかった。

「佐賀さん、ひとつ俺からの提案があるんだけど、いいかなあ」

裏を見せないように、小学生に似た口調で僕は切り出した。

「え？」

「杉本さん、別に好きな人がいるって言っていたよね。おとひつちやんじゃなくて、別の奴がいるって。その人とくつつけることってできるかなあ」

もう展示室は人がいなかった。館員さんが顔をのぞかせて様子を見うかがう程度だ。

「というか、佐賀さんは杉本さんをその人とくつつけたいと思うかなあ」

「どういうことでしょうか、佐川さん」

不安そうに、それでも落ち着いていた声だった。たった一時間足らずで、凜としてしまった佐賀さんが、かつこよかった。「さっき言っただろう。誰もが安心する結末に持っていく方法を考えてたところなんだ。もし水鳥中学の人だったらいくらでも俺、手を回す自信あるけど、青大附中は無理だよ。だから、佐賀さんと協力して、青大附中評議委員会も、水鳥中学生徒会もまあく納まる方法をこれから考えてみたいんだ。協力してくればの、話だけ」

驚いたのは一瞬だけだったらしい。手袋をひざの上に置き、佐賀さんは両手をそろえた。こっくりうなづいた。

「梨南ちゃんが本当に好きなのは、立村評議委員長だけです。立村先輩も本当は梨南ちゃんのこと誰よりも大切なはずです。今お付き合いされている女子の先輩よりも」

確信に満ちた言い方だった。

あの蠟人形評議委員長かあ。

ものすごくびくくりしたわけではなかった。予想はしていた。

「そうかあ、立村かあ……わかるような気、するな」

「立村先輩は同じ評議委員の先輩と半年以上お付き合いされています。見た感じ仲良しです。けど、本当は梨南ちゃんのことを可愛くてならないはず。それに今お付き合いされている女子の先輩には、別にぴったり合う男子の先輩がいるんです。立村先輩とはどうみても、不釣り合いなんです」

「杉本さんを評議委員から降ろすことにしたというのは、立村の指示なんだろう？ 健吾くんがそんなこと言ってたよね」

覚えていないようで意外と記憶に残っているものだ。

「はい。新井林くんが万が一評議委員長となった場合に、梨南ちゃんを傷つけないようにするためにです。新井林くんは気づいてませんけれど、立村先輩は影でいろいろと、梨南ちゃんを守ろうとしています。おおっぴらにできないのは、ただ今のお付き合いしている先輩に気遣いしているからです」

青大附中の評議委員会恋愛事情は派手だと聞いていたが、ややこやしい。

「とにかく、立村は杉本さんを気に入ってるんだ。けど、彼女持ちだったらよっぽどのがないとかつつけられないよ」「いいえ、いいんです。くつつかなくてもいいんです。梨南ちゃんが関崎さんでなくて、立村先輩のことが本当は好きなんだって自覚できれば」

そうか、なるほどな。やはり佐賀さんってすごいよ。

「そうすれば、今度は梨南ちゃん、立村先輩にしつこく付きまとうようになるはず。他の男子先輩だったらわかりませんけれど、

立村先輩は梨南ちゃんに対してだけやさしいです。お付き合いまでいなくても、関崎さんのことを忘れてくれれば、あとは知らないことにしてもいいんじゃないでしょうか」

完璧だ、佐賀さん、おみせしました！

この辺はすべて、佐賀さんの口からしゃべらせたかった。

僕と佐賀さんが郷土資料館を出たのは閉館ぎりぎりだった。

雪が降り始め、せっかく融けかけていた道も音するくらいぬかるみ始めた。

「ありがとうございます。あの、佐川さん」

「佐川さん」と呼ばれ気持ちのなかも、しゃかつと鳴った。

僕はポケットの中に押し込んでいた、うちの店のレシートを見つけた。

店のお客さんが捨てていったレシートかすだった。

上に紫のスタンプが押されている。下に濃く、店の住所と電話番号が印字されていた。直接店の電話につながってしまう。

「俺に連絡したい時は、ここの電話番号、下一桁にプラス一、してかけてほしいんだ。プラス一だよ」

「いいんですか」

「誰にも知られたくない計画だろ。俺も同じだし」

佐川書店の前で僕は手を振った。

たぶん、これから誰にもわからないような場所で会わなくちゃいけないと覚悟していたからかもしれない。

おおっぴらに偶然、出会って語ったなんて言い訳、もうできないだろうから。

耳元で大きく編み上げた女の子髪が消えるまで、見送っていた。

おとひっちゃんは見事、期末試験をトップで乗り切った。

葉牡丹事件という衝撃的な出来事を乗り越えて見事、というのは、いかにおとひっちゃんの精神力がすごいものか、ってことをあらわしている。頭いいんだ。そういうとこだけ。

結局万年二番手の総田とため息を吐く。どうせ僕なんて、上位に食い込むことなんてない。こんな奴が「天才参謀」と呼ばれているんだから学校の定期試験であてにならないものだと思う。青大附中の期末試験ってどんな感じなのだろう。うちの電話が鳴るたびにどきっとしている。

時期的に重なっているからだろうけれど、佐賀さんからの連絡はまだなかった。

「じゃあそろそろ、準備に取り掛からないとだなあ」

独り言を言うおとひっちゃんに、僕は知らん顔で尋ねた。

「なんの？」

「決まってるだろ。青大附中との交流会だ」

おとひっちゃん、やる気あったんだ。

やはり「葉牡丹事件」を別のものとして割り切り進める決意をしているらしい。あとで総田にそこところ、確認しておかなくてはくちばしをはさむと、おとひっちゃん、すぐすねてしまう。黙って話を促すことにした。

「期末が終わってからにしようと話してたんだ。青大附中の期末試験は来週いっぱいまで終わりだということだしな。雅弘、お前も手伝ってくれるよな」

いかにも当然、と言った顔している。まったくおとひっちゃんには迷いが無い。

「けど交流会の主催って、生徒会でやるんだろ？俺、関係ないの

にかまわないのかなあ」

「そうだなあ」

気づいてないのかよ。

僕はため息をつきたいのをこらえた。こういうところが抜けている。世話がない。

第一僕は水鳥中学二年三組の学習委員。「長」もなにもついていない。ただおとひっちゃんの友だちっただけだ。それだけの理由で参加できるわけがない。

「じゃあしょうがないな。総田たちと組むしかないか」

おとひっちゃんは肩を落としてうなだれた。

「それがいいよ。俺、あまりその辺わかんないし。けど、青大附中についていくとかだったらいくらでも付き合うよ」

下心ありすぎるほどある。

「やつぱりお前、いい奴だよ。俺の親友だ」

素直に喜びを表すところが、おとひっちゃんだよな。

話をそらすために試験結果を持ってかえるのが苦痛だったことを、ひたすらぐちった。本音でもある。この調子だと公立高校入試に必要な内申点かなり低くなってしまう。おとひっちゃんは思ってもみないだろうけれど僕はずっと下のランクの学校を狙う定めなんだから、大変なのだ。

「雅弘、お前どこ受験するつもりなんだよ」

「一応、青潟工業か商業」

最初から職業科を考えているってのは本当だ。おとひっちゃんが公立で本命にしている青潟東よりは内申ランク低い。専門がはつきりしている学校に行きたかった。手先もどちらかというと器用なほうだと思う。自分なりに適正チェックは怠ってないつもりだ。おとひっちゃんはよくわけのわかんない顔をして僕を見た。

「普通科にしないのかよ」

「将来就職する時、すぐに手に職がついたほうがいいだろ。俺、おとひっちゃんみたいに頭はよくないけど、できるだけ早く独立して

仕事したいんだ。だから」

「あ、お前、大学行かないのか？」

ほらきた。高校進学したらみんながみんな大学に通おうなんて決めているところ。おとひっちゃんの単細胞。

「高校卒業してすぐに就職しないかもしれないけど、その時は専門学校行くつもりなんだ。できるだけ就職に役立つ能力身に付けたいからさ」

言葉を発せずとまどっているおとひっちゃん。

たぶんおとひっちゃんにとって、「青潟大学附属高校」大学進学「一流企業就職」というのは万人向けの道だと思っているのだろう。特別に目的がなかったら、僕だって普通科を目標にしていたかもしれない。僕としてはできるだけ早く就職して、お金を稼ぎ、独り立ちしたいと思っていた。家から早く出て一人暮らししたいそんな気持ちでいっぱいだった。もっというなら、自分の頭と腕で働くことのできる仕事をしたいと思っていた。

「雅弘、工業だったら、青潟工専もあるんだからな」

そんなレベルの高い学校行けるわけないだろ。

工業専門高等学校、通称、工専。自分の学力はとづくにつかんでいるつもりだ。

「今からそんなレベルの低いところ狙うなんてもったいないねえよ」

そう簡単に決め付けるおとひっちゃんの方がもったいないと思うけどな。

それ以上文句を言うと、向きになったおとひっちゃんに噛み付かれるのが目に見えている。僕はすぐに、別の話を用意した。

「おとひっちゃん、交流会やるのはいいんだけど、青大附中から誰が来るんか」

まさか、あの葉牡丹の彼女がやってくるなんてことはないだろうか。

体育器具室で健吾くんは四月以降、杉本さんが評議員から降ろ

されると断言していた。信じるならば、四月以降に開いたほうがいいんじゃないだろうか。

「たぶん二年が中心だと、立村……ほら、委員長、あいつが言った」

へえ、あいつと連絡取ってるんだ。

もちろん副会長なんだから、代表として連絡を取るの普通だろうけれど、かなり意外だった。

「俺たちは三年の前半までだけど、青大附中は三年まるまる活動できるからだって言ってたぞ」

となると、立村評議委員長が指揮をとることになるのだろうか。

「主だったメンバーは現二年と、一部の一年とになりそうだということだ」

一部の一年に杉本さんが入っていたらどうするんだよ。

「だから俺たちも、内川を中心として、一年連中を集めておけばいいと思うんだ、雅弘。俺と総田は手伝いのつもりでいればいいだろう。その辺も立村と話してある」

なるほどな。青大附中は二年中心、水鳥中学は一年中心。

これだったら見事にずれるな。

おとひっちゃんもそれなりに、考えることはあるんだ。僕は素直にえらいと思った。

「じゃあおとひっちゃん、交流会には出るの？」

返事は意外だった。

「いや、俺はたぶん裏に回る。総田が関心持ち出して、やたらと参加したがってるんだ。あいつもやはり、外部との交流に命かけたい気、してきたんだろうなあ。いい意味で内川が刺激になったみたいだ。内川の奴も言ってたんだ。『関崎先輩みたいに僕もぜひ、交流関係やってみたいなって思っていたんです。総田先輩もどうですか』ってな」

なあんだ、そういうことか。

要は総田教授の計画がはまったというそれだけのことだ。おとひ

っちゃんひとりでそんなこと思いつくわけがない。

総田には後でこっそり電話連絡することにした。急いで帰り、またま家の中にいた母さんに、

「今日、電話がかかってこなかった？」

と確認した。もちろん店にはなく、僕あてにだ。

「そんな昼間にかかってくるわけないじゃない。雅弘、あんた何電話に最近ご執心なの？」

母さんはまだ、佐賀さんという女子が僕に会いにきたということを知らない。

父さんもその辺、わかってくれているらしい。後で恩を売りつけないでほしい。

「なんでもない。勉強する」

「雅弘、期末試験の成績、あとでちゃんと見せなさいよ」

決しているとはいえない結果だったから、できるだけ引き伸ばしたかったのだが。厳しい現実だ。さて今夜は思いつきり説教されるぞ。

部屋に駆け上がり、天井の木目をにらんで、僕はカモフラージュ用の教科書を広げた。苦手な英語の教科書。思いつきりカタカナで発音を書き込んである奴だった。

電話番号、忘れたのかなあ。

下に聞こえるように、英語の教科書を音読したが、頭には入らない。

電話の音も聞こえない。ここんところ、やたらと家の電話が気に掛かる。

レシートの電話番号、下一桁、プラス一ってあれだけ教えたのになあ。

やはり、紙に直接書いた方がよかったのかもしれない。手帳を佐賀さんから貸してもらって、空いているところに僕が書いておいた

方が。あの時は頭が回らなかった。後悔したってしようがない。そういうことだったんだ。

耳の上に黒い手まりのような編み上げ髪を、たまに部屋で思い出す。

毎日、あの髪型を作るのは大変だろう。

くせなんだろうか、耳もとに手を当てて小首をかしげるしぐさとかも。

見ているだけで話をするつとできた女の子だった。

まさか、俺と会ったことがばれたのかなあ。

いろいろ考えていたけれども、やはり原因は一つ。「レシート紛失」しか考えられない。

また相談しに来たいって言うてくれたけど、電話来なくちゃ、どうしようもないよなあ。でも、佐賀さん、番号分からなくなっちゃったんだったらしょうがないか。駅前の佐川書店つて、電話帳で調べれば一発なんだけど。小さいけどうち、広告だしてるからすぐわかるよ。

カタカナ読みで、文字面には一切目もくれずに、僕は「タイタニック号の最後」を読み終えた。少しは頭に単語、こびりついただろうか。おとひっちゃんみたいな頭になれるだろうか。

なんで僕が佐賀さんのことばかり考えているかっていうと、いい案を思いついたから以外のなにものでもなかった。おとひっちゃんや総田のように女子のことで頭が一杯、顔を見るとゆでダコ状態だからでは決してない。うつかり誰かに言うと、「お前色気づきやがって!」と言い振らされるのが関の山なので内緒にしているだけのことだ。面倒なことには巻き込まれたくない。

佐賀さんに話した「杉本さんと立村評議委員長をくつつけてみんなハッピーエンドにする」という案なのだけど、僕ひとりではどうしようもない。むしろ佐賀さんが青大附属の人たちに協力してもらうしかない。けど、佐賀さんの立場は難しいような気が、僕はする。

杉本さんを頭に、他の女子たちが佐賀さんを無視している状況なんだからなおさらだろう。

女子ってなんで、自分よりもいいと思った子に意地悪するんだろうか。変な集団だ。もし男子だったらすぐ友だちになりたいって思うだろう。

僕が今できることは、水鳥中学生徒会の中を少し、風通しよくすることだろう。総田だって、おとひっちゃんを厄介払いするために、何気なく協力してくれているんだろう。おとひっちゃんも杉本さんさえいなければ、大喜びで調子に乗るだろう。ふたりで協力してもらい、学校側を口説き落としてほしい。

まずは、バスケットボール部の顧問を先にだろう。僕もその辺は応援してやりたかった。健吾くんって、わかりやすくて、おなかのなかはなんもなくて、いい奴だ。僕だったら立村よりも健吾くんの方を友だちにするとと思う。

おとひっちゃんももつと、健吾くんと友だちになればいいのに。案。あるのだ。とにかく成功させたい、案が。

けど、青大附属側の状況がわからないと進められない。

佐賀さん、レシートきつとなくしちゃったんだな。じゃあしようにないか。

しようにないか、では済ませないのが僕の流儀だ。

当たり前、電話がないならば、直接会いに行く。口で言う。これが一番簡単だ。

店に下りて行った。よっぽど用でもないか、父さん母さんに呼び出されて店の手伝いをさせられるか、そのどちらかでなければ顔を出さないんだけどしようにない。夕方のピーク時間帯にかかっていて、かなりお客さんが入っていた。買って行く人はひとりかふたりだった。あとはみな、書棚と雑誌棚の前でかばんを本の上にのけて、立ち読みする連中ばかりだった。外は雪で、かばんが濡れているのに平気で置いてしまってお客さんに、うちの母さんはいつも怒っ

ていた。紺の縦襟型コートを着ている女子高校生と、雑誌棚の間に無理やり割り込んでいき、「ちょっとごめんくださいよ」と言いながら下の引き出しを引っ張り出した。立ち読み客に対する嫌がらせだ。根性あるのはその女子高校生、一切無視して分厚い女性漫画雑誌を読みふけていた。母さんがわざわざかばんを、本の上からどけて床に置いたっていうのに、何も感じていないようだ。この勝負、悪いけど母さんの負けだ。本屋は読んでもらわないと商売にならない。

父さんがレジで本の間に挟むスリッパ……しおりのような形をしている細長い紙のことだ。真ん中で折り返してあり、本の間に挟みこまれているものだ。これを半分に千切って、片方を店に保存し、もう片方を出版社へ送り返すことによってお金がもらえるんだと言っている……を二枚にちぎって分けている。僕はこっそりもぐりこんだ。

「雅弘、手伝うか？」

「うん」

すでに父さんには、佐賀さんとの繋がりを知られている。まだ二回しか会ったことがないのに、

「雅弘、お前もやるなあ」

と頭を小突くのは勘違いもいいとこだ。面倒だったので言い訳はしてない。ありがたいことに父さんは、母さんに告げ口してないようだ。かえって好都合かもしれない。なんとなくそう思った。

僕は父さんが色ごとに分け終わったスリッパを、輪ゴムで止めて、五十枚ずつさらに束ね直した。

「明日、うちの配達するものってないのかなあ」

目を合わせずに、お仕事に専念している顔をしたまま尋ねた。

「配達か？ ああ、あるぞ」

レジ後ろの棚にあるバインダーノートを取り出して、父さんはチェックを開始した。毎月、毎週到着する雑誌の定期購読予約というのがうちの店では結構ある。テレビやラジオの語学講座テキストと

か、喫茶店や美容院に届けるファッション雑誌とか、飲食店などで使うらしい料理関連の雑誌などが中心だ。購読予約しない限り絶対に入荷してこない雑誌などもたくさんあるらしい。父さん母さんはノートに全部メモしておき、入荷するとすぐお客さんに電話して知らせている。学校が休みで僕が家にいる平日には、よくその手伝いもさせられる。お客さんの都合で来れない時は、配達することもある。自転車で小回りの利く僕がよくこき使われる。当然、お駄賃を弾んでもらう。これは別か。

きつと父さんは、小遣いほしさに言い出したんだと思ってるんじゃないだろうか。

「あのさあ、俺、よかったら、明日配達手伝おうか？ どうせ明日、五時間目で終わるからさ」

「どうしたんだ雅弘、手伝い自分から言い出すなんてなあ。さてはお前」

「ここだけなぜ小声で言うんだろう。」

「デート代稼ぎたいのか」

結局これかよ。

誤解されてもしかたない。目的があるんだからしかたない。僕は黙って五十枚ずつスリップを数え続けた。コミックのスリップ枚数が半端じゃない。思いつき誤解したままの父さんはやにやしなからバインダーを閉じた。

「汗を流して賄おうっていうのはいい根性だ。よし、じゃあ明日、雅弘やれ。かなりあるからなあ、覚悟しろよ」

「大丈夫、自転車で行くから」

さっきの雪でまた明日はぬかるみそうだけど、大丈夫だろう。大丈夫、絶対大丈夫。

レジが込んできたので、「カバーいりますか？」とお客さんに尋ねながらカバーかけの手伝いに専念した。今日はお小遣いまだもらえない。別に小遣い稼ぎをしたかったわけじゃないのでその辺はどうでもよかった。部屋に戻ったとたん母さんに捕まえられて、期末

試験の結果で思いつきり怒られたのも、これまたどうだっていいことだ。

次の日、学校の終わるのが待ち遠しかった。

こんな手伝いしたくてなんなんなんて日は、そうない。

「佐川くん、今日はお掃除当番よ」

さっきたんに言われるまで忘れてしまったくらいだった。

「ごめん、さぼるつもりはなかったんだ。今日は俺水拭きだよ」
机の前にぶら下げたぞうきんを引っ張り出した。なんだかまだしめっていて気持ち悪い。三月に入っただけで、春なんてまだまだ先だ。寒い日に限って水拭き掃除の日だなんてついていない。さっきたんも今日は週番じゃなかったのだろう。僕の顔を黙って眺めていた。

「急いで帰らないといけないの？」

「ほんとにそうなんだけど、でもさぼるつもりじゃあなくて」

さっきたんに気付いてもらえてよかった。掃除さぼりは違反カード一枚に加算されるんだから。またはつかねずみのようなきよとした顔で、さっきたんは首を振った。

「でも、急いでいるんだったら、佐川くん、窓枠だけ拭いて、それで終りにすればいいわ。そこだったらすぐに終わるし、ぞうきんをバケツで洗うだけでいいし」

もちろん誰にも聞こえないような声でだった。僕にひたつとくつつく格好になる。後ろで誰かがひゅうひゅう言っている。僕は平気だけどさっきたんはいやじゃないんだろうか。

「さっきたん、いいよ、俺ちゃんとやっていくよ」

「困った時はおたがいさまだと思うの」

少しうつむいた感じで、さっきたんはこくりと頷いた。

「あの、実は、これからうちの配達、手伝わなくちゃいけないんだ。だからなんだ」

制服にさっきたんのお下げの先っぽがくつつくくらいでささやか

れたら、言うしかない。僕はぞうきをひねりながら、教壇上のバケツに向かった。机と椅子をすべて下げているので、前はすかすかだった。さっきたんも一緒に雑巾をつまんでいる。

「お家の手伝いしているのね、大変だわ」

「自転車で青大附属の方まで回らなくちゃいけないんだ。」

ここまでは本当のことを言っているんだからやましいことではない。急いでバケツのところにしゃがみこみ、水にぞうきを浸した。一緒にさっきたんも同じことをした。ふたりでバケツを間にして向かい合った。

「そうなの、だったら急がなくちゃいけないのね」

「うん、でも当番は当番だから、きっちりやるよ」

掃除の手を抜くのなんて簡単だ。僕は悔しいけど背が低い。だから高いところの拭き掃除なんて、台を使わないとできない。いつも机をさあつとなでるようにこすって、それで終りだ。雑巾もさっきたんの言った通り、一度ぐにゅぐにゅと絞れば終りだ。さっきたんが心配しなくても大丈夫だってわかっている。

「それなら佐川くん」

また僕の隣りに回りこむようにしてしゃがみこむ。

「今日は私が机を全部拭くわ。そうすれば佐川くんは窓枠だけですむでしょ」

指先がちくつと痛い。きつと昨日、本のスリッパを数えているうちに指をすったからだ。冷たくて指がおかしくなりそうだ。

「あ、ありがとう。さっきたん、助かるよ」

僕は素直にお礼を言った。さっきたんって、こういう時ものすごく気が利く人だと思った。早く帰りたくてなんない顔、していたんだらうな。

「ううん、いいの。あのね、佐川くん」

かっちりと絞り、立ち上がる寸前にさっきたんはささやいた。

「佐川くんからもらった葉牡丹、ちゃんと肥料あげてるのよ。可愛いお花でよかったねって、お父さんもお母さんも喜んでるの。あ

りがとう」

葉牡丹、そんな大切にしくなつたつていいのに。とりあえずさつきたんの心遣いはありがたく頂戴した。僕は絞りきつていない雑巾でべたべたに窓枠をぬらしておいた。葉牡丹もさつきたんには普通の花に見えるらしい。

「行つてきまーす！」

店に声かけて出発するなんて、小学校以来だ。父さんは事情を知っているからいいけれど……厳密には知らないに等しいのだけど……母さんは返本用の雑誌をまとめながらびつくりした顔で見送ってくれた。あとでつっこまれるだろう。きっと。

通りすがりの家はほとんど顔見知りだったから問題なかった。一冊単価もそれほどものすごい額じゃないので、強盗に襲われるんじゃないかとひやひやしないですんだ。使い込みなんてするわけない。ばれたら張り飛ばされる。

売上金専用の財布に全部入れて、つり銭用のきんちゃく袋をしつかりジャンパーの下に首からぶら下げた。こうするとお金が見えないし落としてもすぐにわかる。

最後の一軒は、青潟大学の近くだった。月刊の小説雑誌を三冊届けるだけだ。おばあちゃんでもう外に出られないので、めったにうちの店には来ない。電話で注文して届けてもらう、ことに決まっている。そのうちには冬休みに何度か配達に行っているの、道はあらかたわかつている。

時計を見ると、あと十分くらいで四時だ。間に合うだろうか。雪が降りそうで降らない空に感謝しながら、僕は最後の軒に向かった。

だいたい十分くらいこげばたどり着く。青大附属中学の校門から、ほぼ近い家だった。

配達そのものはいつも通り終わった。売上金を大切に首からけなおし、気合を入れて僕は自転車の方向をかえた。自転車ですれ違う人の多くが、青大附属らしいブレザー・制服を着ていた。中学生かもしれないし、高校生かもしれない。大学生だったらわからない。制服着ていないと聞いている。ところどころに「下宿・青潟大学生男子募集」とか「家庭教師します・当方青大三年・青大附中・附高入試ならおまかせください」といった張り紙がやたら目立つ。マスクをしている人も多かった。くねくねした道を抜け出し、ようやく青大附属中学の校門にたどり着いた。青潟大学に直接向かうならすぐなのだけど、附中の玄関はかなり構内の中にある。中学生はペえぺえだつて証明みたいなものだった。

うちの中学と違って、庭あたりの雪かきも完璧だ。

まだまだ生徒がいっぱいうろついている。中には奥の方で雪球をこしらえている奴もいる。おとひっちゃんと同じ感性の持ち主だろうか。やたらと雪合戦をやリたがるというような。また後ろの方では、明らかに青大附属の制服ではないとわかるような格好の男子中学生が、派手な自転車にまたがって空をにらみつけている。目を合わせないようにしていた。金と銀のまだらな自転車つて、恥ずかしいんじゃないだろうか。一緒には歩きたくないセンスだ。

僕はしばらく校門でうろついていることにした。

金と銀のまだら自転車中学生は、これまた栄養まんてん、といった感じの女子と片手を打ち合わせて、仲良く帰っていった。僕の方をちらりと見たけれど、ちっともいやな感じがしなかった。目が合っってお互いにつこりしてしまった。

用事がないのに青大附中前でうろついていたらあやしまれるだろう。

でも今日は、「うちの店手伝い」「配達でたまたまこっちにきた」「せっかく来たなら寄っていこうかな」「ということ待ってたん

だ」と言い訳ができる。

「小説雑誌三冊」のおばあちゃんの家が青大の近くだったことは前から知っていた。

小説雑誌は毎月発売日が決まっている。

ちゃんと理由がたくさんあるわけだから、僕が堂々と佐賀さんを待ち伏せしていたっておかしくはない。ただ、一年だと早く帰ってしまうなんてことないだろうか。健吾さんの付き合い相手だから、バスケ部の練習が終わるまで待っているなんてことないだろうか。いや、もしそうなら健吾くんを捕まえて、何か言いつくろって伝えてもらうこともできるだろう。健吾くんにはばれないように、と言っていたけれど、僕ならいくらでもごまかす自信がある。

でも、帰ってたらしょうがないなあ。まあいいや。四時十五分くらいまで待つてようつと。

無駄に時間を費やしはしない。僕はその点、シビアなのだ。

意外と生徒たちが切れ目なく、少しずつ、校門から出てきている。自転車通学がかなり多いらしい。もしバス通学しているってことだったら反対方向のバス乗り場で待っていた方がよかったかもしれない。でも、この前帰りのバスの番号を聞いたら、青大附属近くへ行く路線のもだった。方向は間違っていないと思う。思いつく限り、佐賀さんと健吾くんが話していた内容を繋ぎ合わせてみた。

もし健吾くんと一緒に出てきたら、僕は知らん顔して健吾くんにだけ話かけることにしよう。おとひっちゃんには内緒で、バスケ部交流会の協力を申し出に來たとしてもすればいい。佐賀さんとは会うのが二回目という顔をするのも簡単だ。そのくらいのこと、佐賀さんは得意だろう。僕ときつと、おんなじだ。

自転車が二台連なって校門から流れ出た。と同時に小さい方の自転車がすぐに停まった。うすい桃色の自転車がくきつとハンドルを曲げた。

佐賀さんだ。

僕はほつぺたのあたりで片手を振って合図した。

「佐川さん！」

くるりんと巻き上げた髪の束。全く変わっていなかった。

続いて先に進んだ自転車がゆっくりUターンして正面を向けた。

「なんだよ佐賀、どうしたんだ……？」

立ち漕ぎして戻ってきたのは、スポーツ刈りがだいぶ伸びてきた健吾くんだった。佐賀さんに話し掛ける口調とはまるっきり違っていた。

「あ、あの、ええと、水鳥の」

「おひさしぶりです」

相手は一年生だけど、やはり僕としてはきちんと挨拶しておいた方がいいかなと思ったただけだ。下級生だし、すぐにため口を叩くことにした。

「今日、たまたま用事があって来たんで、ちょうど通りかかったとこなんだ」

「あ、すげえ偶然ですね。関崎さんおげんきですか」

健吾くんもおとひっちゃんのことを好きらしい。いいことだ。

「元気だよ。どうなの。交流会の方は盛り上がっているのかなあ」隣りで物言いたげな顔で僕を見つめている佐賀さん。でも健吾くんの前だとだんまりだった。ほんとは佐賀さんと話をしたいのだけど、お付きあいの二人にいきなり話すなんてことはできない。

ポケットの中には店で配るプレミアムのバッチが入っている。あまり物だ。ずっと前に父さんがくれたものだった。描かれているのは有名なアメリカのバスケット選手らしいけど僕は知らない。持っていけば話のネタになるかな、と思って持ってきた。きりのいいところで取り出して健吾くんにあげるつもりだった。

佐賀さんがちょっと唇をつばめ、僕を上目遣いで見やった。

「あの、佐川さん、この前はどうもありがとうございました」

「なんだよ佐賀、邪魔すんな。男同士の話なんだ」

まだ当り障りのない話だったので、割り込まれても困らない。

僕はちよつととぼけてみることにした。

「え、いつの？」

忘れていたふりをしておけば怪しまれないだろう。目ではわかるように合図したつもりだけど、伝わっただろうか。佐賀さんはひいたりしなかった。またかすかに口元をほころばせた。片手を耳に当てた。

「この前、佐川さんのおうちだなんて気付かなくて、お店に入ったの」

「店ってなんだよ店って」

かなり機嫌悪そうな健吾くん。妬いているんじゃないだろうか。ふたりっきりの時がばれたら大変だ。佐賀さんのことだから考えがあるはずだ。僕は合わせることに決めた。

「俺のうち、駅前の本屋なんだ。電話帳にも載っているよ。『佐川書店』って」

「ああ、俺小学校の時、あそこで青大附中用の問題集買わされたところあるなあ」

確かにうちの店は参考書・問題集関連が多い。

「でね、健吾」

「健吾」と呼び捨てにするのはなぜだろう。ぼんやり考えていた。「私、この前のエレクトーンのお稽古の時に、健吾が探していた外国のバスケットボールの人の本、探してみようと思って本屋さんに寄ったの。そうしたら、佐川さんがたまたまレジにいたの。びつくりしちゃったの。あの時は本当にありがとうございました」

僕と健吾くんの顔を両方覗きこみながら、佐賀さんはお礼を言うてくれた。嘘ついていない。やましくない気持ちで僕は笑った。

「え、お前、そんなこと一度も言わなかったじゃないか！」

険悪になりそうな空気だが、佐賀さんは全く沈着冷静だ。僕は様子をうかがいつつ、佐賀さんの本心を大急ぎで探った。エレクトーンのお稽古の帰りかどうかわからないけど、佐賀さんが僕とレジで

顔を合わせたのは本当のことだ。健吾くんにはれても問題ないってことだろう。そう解釈しよう。

「うん、佐川さんにも内緒にしてもらったの。だって、健吾がほしがっているものを買ったんだって気付かれたら、いやだったの」

なんでそこでそのろけるんだよ！

急におへそのあたりが痒くなった。

一切本を買わずに店を出たなんて、ばらさない方がいいのだろう。「だから、本を買えなくって、挨拶だけして出ちゃったの。でも他の本屋さんに行った時にはもう雑誌なくて、あの時買っておけばよかったって、今後悔していたの。佐川さんの顔見ていて、つい思い出してしまったんです。ごめんなさい。ごめんなさい、健吾」

最初の「ごめんなさい」は僕あてだった。

「まったく、隠し事するなよな。佐川さん、すみません。こいつが邪魔したようで」

最後の「ごめんなさい」で機嫌を少し直したのかもしれない。健吾くんは生真面目に頭を下げた。

健吾くん、なんで、「こいつ」って呼び捨てするんだろう。

急に一発、勝負したくなってきた。

ポケットを探り、外国のバスケットボール選手写真がくつついているバッチを取り出した。備えあれば憂いなし、ことわざは真面目に覚えておこう。

「これ、うちの店で配っていたものなんだ。佐賀さんが、一生懸命アメリカのバスケットボール関係の雑誌を探していたから、好きなのかなあって思ってたんだ。そうか、健吾くんにあげたかったんだね。ならこれ、あげるよ」

佐賀さんに向かってはつきりと、わかりやすく伝えた。　　しつ

かと見返してきた目は郷土資料館の時と同じだった。

「私は梨南ちゃんのことか、大嫌いだったんです」とはつきりと断言した時と同じりりしい表情だった。女子でそんなきりつとした

目を見たのは初めてだった。今も、ときどきしている。

「え、佐川さん、いいんですか」

「いいよ。ごめん。俺が声かけたから佐賀さん買うことできなかったんだから」

白々しい言い訳だけど、健吾くん信じこませることはできそうだった。

証拠に健吾くんは、僕が佐賀さんに渡したおまけのバッチを、ぐつと覗き込んでいる。早く渡せ、と言いたげだ。

「ありがとうございます。それなら健吾」

照れもしない。少なくとも僕にはそう見えた。佐賀さんは両手で貝殻のように丸く受け取り、じいつと見つめながら健吾くんにはバッチを差し出した。胸元から花が開くような柔らかい手つきだった。健吾くんも目をそのままずうつと合わせたままで、

「佐賀、お前」

これだけつぶやき、指先でバッチを受け取った。お礼を言わなかった。

僕の方に向かい、「どうも、すげえうれしいです」 興奮を

押し殺したような声で一礼した。本当は佐賀さんに言うのが筋だと思う。

「だから、健吾、もし青大附属と水鳥関係のことで、いろいろ問題あるようだったら、私、替わりにこっそり佐川さんにお手紙届けてあげるわ。私、毎週金曜がお稽古なの。駅前のバスに乗るの」

僕はすっかり取り残されたまま、ふたりが自転車を押しながら前で語り合うのを聞いていた。佐賀さんの目的は想像つかないわけじゃないけれど。もちろんこれで堂々と会う口実ができたわけだけど。しかも健吾くんには言い訳できないようだけれど。

でも。

別に、お付きあいしてもいいけど。

目の前で髪型をくるくる巻きになっている佐賀さんと、健吾くんの

間に思いつきり自転車を突っ込んでやりたかった。

「ああ、そうだな。佐川さん。さっきの話なんだけど、あつたかい
とこでもう少し話、進めたいんですけど、『リーズン』の休憩所で
少し、いいっすか」

佐賀さんが振り向き、小首をかしげたところで、僕も頷いた。

大型スーパー「リーズン」の中は僕たちと同じ年くらいの中学生がたくさんたむろっていた。学生服にセーラー服といった、水鳥中学とほとんどデザインが変わらない格好の連中が多い。もちろん青大附中の人たちもたくさんいた。みな昇りのエスカレーターに乗っていつてしまう。大抵は男子だけ、女子だけの塊だった。男女二人組みの中学生というと、青大附中のブレザー制服姿の人ばかりだった。

僕がいなければ、今日も佐賀さんは健吾くんとふたりだったといふわけだ。

「今日は、部活の練習とか、ないの」

「はい、練習したくても、部員が少なえから」

健吾くんは日焼けの消えない指先で、拳骨を作った。こぶしというのではなく、五人、と数えてそれっきり、という意味らしい。

「五人しかないんだ。部員」

「パスとかシュートとか、あとは基本運動くらいしかできないっすよ。やっぱし、新入部員と、二年の追加入部者を集めねえと、きついです」

そうだろう。二年生の先輩たちは何やってるんだろう。

「二年はみな、今の時期卒業式関連の手伝いとか、委員会活動に引っ張り出されてます。うちの学校の連中は卒業式そのものよりも、『卒業生を送る会』の方にばかり力を入れるから、全く練習する時間がねえんです」

水鳥は反対なだけだなあ。

おとひつちゃんが頭を抱えて文句を言っていたっけ。卒業式の合奏や予行練習でしょっちゅう、運動部関連の連中が公式の休みを取って出て行くって。

「だから、今日は俺の判断で休みにしました。あんまり少なくて愚

痴りあいになるのも、部の空気をにこらせるだけだし、第一、裏で悪口ばっか言っているのって最低野郎のすることだと俺は思います。正々堂々とののしつちまえばいいのに」

それができる環境ならね。

言い切ってしまったえる健吾くんには僕は、気持ちいいものを感じていた。

階段踊り場の椅子がまるまる空いていた。健吾くんは一度端に立ち、僕に真ん中の席を勧めてくれた。すごい。まだ一年なのに、大人みたいだ。

「ありがとう。健吾くんさすが、礼儀作法厳しいね」

僕をちゃんと先輩扱いしてくれるなんて、すごい、本当にすごい。うちの学校そういう礼儀だけはすっげえうるせえから」

「私は？」

あどけなく佐賀さんが僕の後ろで声をかけてきた。きつくにらみ返した健吾くんは、

「お前は、俺の側でしゃがんでろ」

「私もおすわりしたいわ」

「しょうがねえなあ」

さっさと僕の隣りに腰を下ろした。頬に手を当て、

「寒かったわ」

とつぶやいた。

いすの後ろ側に男性用トイレが位置している。いかにも従業員、といった風の人たちが入れ代わり立ち代り現れる以外は静かだった。「ここだったらよその連中にはねえで話ができるんです。先輩に教えてもらいました」

「先輩って、立村に？」

「じゃなくて、その上の委員長です」

あっさり答えたところに、健吾くんと立村くんの溝を感じた。

一応、「立村さん」と呼んでいるし、なんだかんだいつて勝負はついたらしいとは聞いている。でも、心底尊敬しているわけではないだろう。「先輩」と「さん」の間にはかなり大きな違いがありそうだ。

「卒業する三年の先輩なんですけど、とにかくすごい人なんです。成績もいいし、運動も拔群だし、男気があつて完璧な委員長、つて人でした。俺はああいう委員長になりたいと思いますよ。たぶん、本条先輩……その人の名前なんですけど……こういう時一刀両断で片をつけてくれたんじゃないかねえかなあ」

僕を通り過ぎるような視線で、佐賀さんに相槌を求める健吾くん。

このふたり、いつものことらしい。佐賀さんも落ち着いて、うんと頷いていた。

「確かに、今は大変そうだね、健吾くんもバスケット部とかけもつてたら大変だよな」

「あと、学内のスポーツ壁新聞もやってるから」
初耳だ。佐賀さんが補足説明してくれた。

「毎週、運動部の試合関係の情報を、新井林くんと私とで集めて、写真を取って壁に貼るようになっているんです。去年の十一月から、新井林くんがひとりでやり始めて、いつのまにか学校の先生たちも応援してくれるようになったんです」

「四月からは、他の委員会や文化部の連中にも手伝ってもらう予定なんだ」

少し反り返った。自慢したいんだろう、わかる、わかる。こういう時の相槌は決まっている。

「すごいなあ、健吾くん。うちの学校でそこまで情熱かけてやる奴、なかなかいないよ。ううんと、おとひっちゃんも頑張るほうだけど、大抵颯爽かってやめちゃってる」

しまった、口を滑らした。佐賀さんがまた小首をかしげたけれど、健吾くんは意に介さないように話を続けた。

「今の二年の裏事情はいろいろありますが、ちょっとなあって、一年の立場からしてむかむかしてくるってのが、あります」

「それまたどうして」

合いの手がうまく入った。健吾くんはさらに背筋をピンと伸ばした。もともと背が僕の頭幅くらい高いんだから、少し猫背になっただけでもいいんだけど。

「直接関崎さんに連絡するべきかどうか判断がつかなかったんですけど」

派手にくしゃみをして、唾を撒き散らした後、健吾くんは鼻をすすった。

佐賀さんは僕の方に身を寄せる格好で、健吾くんを見つめていた。「この前、俺たちと一緒に佐川さんたちが来てくれた時、俺、言ったと思うんですね。杉本が四月以降、評議委員から降ろされるから、これからは問題がないという話。覚えてますか」

もちろん忘れるものか。行きの自転車漕いでいる間、全部さらっておいだ。

「俺もてつきりそれで決まりだと思ってました。ところが、三日前だったか、こいつが」

だから、こいつって呼ぶのはやめろって。

佐賀さんがまた頷いた。

「上の先輩を通して、交流関係についての怖い情報を仕入れてきたんですよ。まさか、裏でこういう手を使うなんて思ってもみねかったから」

「あの、誰が？」

「うちの委員長です」

健吾くんは拳固を片手でくるむようにして、一回「あ」と天井につぶやいた。その後顔の筋肉を引き締めて、

「立村さんは評議委員会に害虫がいるのはまずいつてことで外した。それは確かです。けど、交流関係に関しての別グループを四月以降こしらえようということで、生徒会や先生たちに話を持ちかけて、

三月末をめどに発足させようとしてます」

「ほっそく？」

「ごめん。僕は本屋の息子でありながら、漢字があんまり読めるほうでない。」

「評議以外の連中を集めて、水鳥中学さんと交流会を始めようって腹です。委員会中心主義を壊す代わりに、委員会とは関係のないグループを結成して、活動しようってことです」

つまりなにか。杉本さんはまさか。

評議から降ろされた場合の逃げ場所ってことだろうか。僕は用心深く尋ねた。

「杉本さんが、その中に入りそうな気配なのかなあ」

「ご名答です。佐川さん」

健吾くんは一度手を打って僕を人差し指で指し、また大きなため息を付いた。

「杉本を降ろすと決めたと、立村さんが話した時に、それっぽいこととは言われていた可能性があります。でも俺、そんなこまいこと覚えてりやしねえし。評議から追い出したからといって、立村さんが杉本のことを目かけないことはねえだろうし、ひとつの手としてはその通りかもしれない、っていう気はしました。無理やり押し込むことにはなるでしょうが、評議としては安泰です。けど、ただ」

毒々しい葉牡丹の葉に顔をもみくちゃにされる。

僕の想像が間違っただけなら、恐ろしい結論になりそうだな。

「たぶん、立村さんは杉本を四月以降も、水鳥中学関係の交流メンバーに置く可能性、大です。評議委員会としての活動ももちろんやるだろうし、他の委員会や部活も相当力入れてくると思うけど、でも、要に杉本を置こうということは、計算済みなんじゃないやねえでしょうか。今、佐賀と話してて、俺、そう思いました」

僕が口にしたのは、思いつきり本音だった。

「それって、まずいよ」

「そうっすね、絶対これは、まずいです」

健吾さんと佐賀さんがまた目と目を合わせて、お互い頷き合っていた。

佐賀さんが聞きつけてきたらしい。だったらもつと佐賀さんに話を振ればいいのに。なんか健吾くんは、自分ひとりで話すことにこだわっている。佐賀さんにいいとこ見せたいんだろう。気持ちはよくわかるけど、ものたりない。

「今、あんまり詳しいことは話せませんが、二年の男子女子の間で、わけのわかんねえことが起こっているみたいなんです。三年間持ち上がりだった評議委員をひとり入れ替えるとか入れ替えないとかで、騒いでいるっていうか」

「杉本さんの時みたく？」

「あれは立村さんとうちの担任が決めたことなんで別です。けど、今回は人間関係のごたごたがからんで、二年女子のひとりが評議を降りたがっているみたいなんで、な、佐賀、そうだろ？」

「やっと佐賀さんが話してくれる、と思いきや健吾くんはすぐに言いなおした。」

「いや、俺がしゃべる、お前は黙ってる。で、たまたま新しく入る予定の女子評議の先輩からその辺の事情を聞きだしたってことです」「新しく入るって、まだ三月だよ。まだ選ばれてないのにさ」

「前もって誰を選ぶか決めておかないとまずいらしいです。うちのクラスはとにかく杉本でなければ誰でもいいと思ってますが」

ちらつと佐賀さんを僕は覗き込んでみた。

その辺、反応をしりたかった。何も身動きせず、おだやかに首をかしげて聞いていた。

「じゃあ、新しい評議委員が入ってくるから、みんな怒っているんだね」

うちの委員会だったらそんなこともないだろうけれど、青大附中の場合は簡単にいかないらしい。評議委員会是一种の部活なんだろう。三年になって新しい部員が、人間関係のごたごたをひっくるめ

て入ってくるとなったら、そりゃあ動揺するだろう。また立村も、「評議委員長」というより、評議委員会部の部長といった方が近い。大変だ。

「それで今、立村さんが案を出していて、降りた評議委員女子を例の、交流会専門の部活動かサークルか、何かに入ってもらうことを進めているらしいです。水面下って言うてましたけどばれればつすよ。な、佐賀」

こつくり頷くだけなのもつたいない。佐賀さん、もつとしゃべろつよ。

「ははあ、そうか。交流会専用のグループなんだ。その中に、評議委員経験者が入ったら、動きいいもんね。それに三年だからサークル長か部長か、そういうところにも置いておけるもんね」

おとひつちゃんの前ではそこまでしゃべらないだろう。つい健吾君の前では気が緩んでしまった。驚いている。うつかり健吾くんから水鳥中学生徒会にばれたらまずい。口にチャックをかけなおそう。「すげえっすね。どうしてそこまでわかるんですか。佐川さん」

「うつん、なんとなくさ」

ごまかして、しばらく健吾くんに演説させるつもりだった。おとひつちゃんにだったらそれで通じる。けど健吾くんにはだめだった。もつと聞いたそうな顔をしていた。肩越しに佐賀さんも僕の目をじつと見詰め、にこつと笑っている。しゃべるしかないじゃないか。

「俺、ガキのころからそうなんだけど、何となくこの人はこう思ってるんじゃないかとか、あいつは何かたくらんでるんじゃないかとか、そういうことがわかるんだ。たぶん気のせいだよなって大抵は流すんだけど、あとで確認するとほとんど当たってるんだ。具体的にどういふのって言えないけど、予知能力がすごくあるっていうのかなあ。今も、健吾くんから杉本さんについての話を聞かせてもらったけど、やっぱりいつものように、こうなるんじゃないか、あなるんじゃないかってことが浮かぶんだ。今までの例からして、たぶん当たるんじゃないかなあと思うんだ。でも、そういうのって

怪しいから俺は言わないけどね」

「なんとなく、わかるって」

隣りで佐賀さんが小さくつぶやいた。健吾くんは聞きとがめずに真剣なまなざしで見入っていた。

「うん、空気が読めちゃうっていうのかな。この調子でいくと、たぶん杉本さんはずかずかうちの中学に乗り込んでくるだろうし、大騒ぎになるんじゃないかって気がする。俺の勘だけどね。おとひっちゃんのことを気に入っているのはわかるし、この前佐賀さんが言ってたように、逆恨みされてる可能性もあるよね。でも、どれもこれもおとひっちゃんには関係ないよ。水鳥中学にも関係ないし。迷惑かける人には来てほしくないってのが、おとひっちゃんの本音だと思っただ」

「やはりですか」

すっかり健吾くんは、僕の言葉を鵜呑みにしている。想像しただけだってのに。意外と単純だ。おとひっちゃんレベルなわけがないよな、と改めて思った。

「関崎さんは、あの女を寄せ付けたくないってわけですね」

「当たり前だよ。その証拠にさ、あの葉牡丹、すぐに別の女子にあげちゃったよ！」

厳密に言えば、僕が、だが。

「絶対内緒にしてほしいんだけど、おとひっちゃん、あの毒々しい花見るのも触るのもいやそうだったんだ。真面目な奴だから、たぶん俺がいなければ持って帰ったと思うよ。でも、次の日、期末試験前だったのに熱出してあいつ寝込みやがったんだ。ほんと、無理してたんだよ、きっと、杉本さんのことを思い出して具合悪くなっただんだなって俺は思ったよ」

「そりゃそうだ。よくわかる」

健吾くんは頷いた。さすがに佐賀さんは身動きしない。そりゃそうだ。

「たぶん、青大附中と交流会をするつもりはあるだろうし、健吾く

んの率いるバスケ部との練習試合関係は進めてくれると思うんだ。ただ、その後、立村委員長が理想とするようなこと、できるかどうかは難しいな。せっかく準備を整えても、きつと、あの人がつぶしそつな気、するから」

あの人、とは立村委員長のことではない。

「そうつすね。だからなんとかしたいんですよ。俺としても」
続けて、咳払いひとつ。

「で、もし佐川さんがうちの立村さんと同じ立場だったとしたら、どう処理しますか」

委員長だったらってことかな。

難しい要求だ。でも、答えたい。答えなくちゃ、チャンスがなくなる。

なんのチャンスだかわかんないけど、背をつつかれる気持ちで僕は答えた。

「ほんとこれは仮だよ。仮に、俺が評議委員長だったとしたら」
細かい突っ込みはなしに願いたい。直感に任せて僕は声を潜めた。
「まず、学校内で杉本さんに何か恥をかかせる事件を起こす。いや、いじめとかいやがらせとか、そういうことをしてはいけないよね。
健吾くんや佐賀さんの話だと、ネタは一杯あるみたいだから、そのことを、杉本さんが一番好きな人の前で話すんだ。この前健吾くんがしてくれたような感じのことをさ。けど、あれだとまだ陰口にしかならないよ」

気まずそうに口をゆがめ、ちつと舌打ちする健吾くん。こういうとこ見ると、僕は先輩だっていばりたくなる。調子に乗るってこのことだ。

「だから、誰かと組んで、おとひっちゃんの前で、今まで杉本さんがどういうことをしてきたのか、佐賀さんをいじめて苦しめてきたのかってことを、全部話してしまえばいいんだよ。佐賀さん、ほんとはひどい目にあっただんだよなあ。この前健吾くんが話してくれたことが全て事実だとすれば」

「事実です、あつたりまえだつての」

最後の一言は投げやりだけど、まあいいか。

「それだつたらなおさらだよ。おとひつちゃんも単純だから、否定できない証拠とか、出来事とか、あと本人が図星さされてときまきしたところなんか見たら、信じるよ。おとひつちゃんはいじめをする奴最低だつて思っているからなおさらね。そんな子、誰が好きになるかと思つうよ。どんなに葉牡丹押し付けられたつてね」

「けどそれは、汚ねえ気が」

言いかけたのを、僕は遮った。

「嘘を並べるんじゃないよ。杉本さんを吊るし上げるつてわけじゃないよ。うーん、うまく言えないんだけどさ。例えばよく学校のいじめ問題を討論したりする時に、どこかの学校で起こった例をあげたりするだろ？　ついつつかり先輩に礼するのを忘れたら、体育館の裏に引つ張り込まれて蹴りいれられて、学校行くのよすようになつて、登校拒否になつてつて話」

この前道德の授業でやつていたことを、適当に言った。よく覚えていたもんだ。

「いかにも偶然、つて顔で話すんだ。『どつかの学校であつたらしいけど、友だちを家来にしてずうつとひっぱりまわしてきた女子が、惚れてた男子を取られたことを逆恨みして、クラス一丸無視させたつて。でも、やっぱり正義は勝つんだね。その女子反対に無視されちゃつて、学校追い出されるんだつてさ』とか。さりげなくやるのがコツだよ。たぶんおとひつちゃん相槌打つよ。『それは当然だな、やられて当然だ』つて。杉本さんだつていたたまれないよな。本当のことを自分の好きな男子の前でえんえん並べられているんだからそんなところ、普通だつたらいたくないよな。すぐに逃げるよ、逃げてそれつきりになるよ。だつて本当のことなんだから逆恨みするしかできないし、したつてみんな無視するだろ？」

「そんなことで動揺するような女が、あれが」

また吐き出すように言う健吾くん。

「わかんないよ。そこまで根性座っている女子だったら俺は別のことを考えるけど、うちの学校の女子を見る限り、これでめげなかった人いないな。あ、この方法ね、小学校五年の時にクラスのいじめが起こった時、打った手なんだ。おとひっちゃん、正義でもって女子たちを怒鳴って、『卑怯なことするなんて、最低だ！』ってわめいたんだけど、全然効果なくて、かえっていやみ言われただけだったんだ。おとひっちゃんかわいそうだったから、俺、こっそり、やったんよ。女子たちが集まっているところで、なーんも知らない振りして、今言ったようなことを。夏休みの学校合宿の時にね」

僕からしたら、誰が誰のことを好きだとか、そんなのは丸見えだった。

いじめのボスらしい女子が、別の男子のことを好きだという噂を聞いて、僕は手を打った。その子の目の前でその男子とトランプやりながら、奴が軽蔑するタイプの人間について語ってもらった。どんなことだったかは覚えていない。相手のことなんて無視してとことんしゃべっただけだ。その女子みたいなことをする奴は大嫌い、という言葉を引き張り出したとたん、くだんの女子は泣きべそかいて部屋を出ていってしまった。

もちろんその後、いじめられていた子への八つ当たりもあったらしいけれど、その点はすでに男子たちがおとひっちゃんを守り立てるべく一丸となっていたので、あっさりつぶれた。男子だっていざとなったら結束固いのだ。女子が男子に守ってほしいんだったら、さっきたんみたく思いやりある態度をしないと駄目だと思う。杉本さんがもし同じクラスにいたら、男子一同、冷たく無視していただろうし、佐賀さんを全力で守ってあげただろう。

健吾くんが佐賀さんを守りたいのだって同じだ。

「佐川さん、それってできることなんですか。俺にはちょっとすぎでできねえな」

「でも、いざとなったらひとつの方法として覚えておくというかもしれないよ」

僕は、佐賀さんを除き見た。僕の顔をじつと見つめているけれど、目をそらさない。あまり見つめていると健吾くん「変」と思われるんじゃないかな。うっかり、疑われたりなんかしたら大変だ。うちの本屋に来てもらえなくなる。

「ひとつの方法ですか。うちの立村さんにも、そのくらいの頭があればなあ」

頭というよりも、好みが変なんだよ。

たぶん、葉牡丹を愛する性格なんだろう。

しばらく僕は健吾くんを相手に、水鳥中学の事情について説明していた。

相変わらず、

「関崎さん、すごいっすよ」

の連呼。体育館三十周持久走でおとひっちゃんに負けたことが、相当効いたらしい。

「本当にあいついい奴だよ。」

僕も繰り返した。たぶん健吾くんは、運動能力の長けている奴には無条件で尊敬の念を抱いてしまう性格らしい。けど、僕はどうみたって運動神経いい方じゃない。さらにいうなら、

「佐川さん、青大附高受ける気ないんですか」

と真剣な目で尋ねられた時も、どう答えてよいかわからなかった。

だって、僕の第一志望は、青潟工業か商業なんだから。

職業科を選ぶと決めたのは早い。おとひっちゃんにも言ったけど、僕はその点、自分の成績をよく理解しているつもりだ。ちゃんと就職できる学校に行きたい。早く一人暮らし、したい。

でも、健吾くんや佐賀さんは、エリート中学青大附属の生徒だ。

当然、エスカレーター式に高校へ進学するだろうし、たぶん大学にも行っちゃうだろう。

頭のレベル低いなんて、言われなйдろな。

そんな気持ちで掠めて、つい、青潟工専を目指していると、大嘘

言いたくなってしまったことを告白しちゃう。

「ないよ。俺、成績は悪いんだ。ちゃんと就職できる商業高校が工業高校に進んで、早く一人暮らしするんだ。親から離れて、自分で稼きたいんだ」

軽蔑するならしろっていうんだ。と開き直った気持ちがないともいえない。次の瞬間、佐賀さんがはあ、とあきらめのため息を吐くんじゃないか、それだけが心配だった。

「自分で、働きたいんですか」

身をかがめるようにして、かすかに聞こえた。健吾くんも同じくらい身をかがめた。ふたりにはさまれて、真剣に聞き入られている。「うん、いつまでも親の金で学校に行くのはいやなんだ。だからだよ」

ほおつとため息が洩れた。緊張してたのかもしれない。次にまた、はあつと息が。健吾くんだった。

「独立、かあ」

目の前の階段を昇り目線で追いながら、健吾くんは脱力した。

「俺も、早く家を出てえよなあ。わかります、その気持ち」

健吾くんはともかく、佐賀さんだ、問題は。

ずつつと佐賀さんの気配をうかがっていたけど、特に何か、あったわけではなかった。

今日、もう少し話ができると思ったのに、結局は健吾くんだけだった。

もつとも、実にはなった。配達しまくったかいがあった。

いくら立村委員長が杉本さんのことをめんこがっているからといって、まさか四月以降も交流関係に参加させるなんて想像もしていなかった。

もしそうになったらおとひっちゃん、立ち直れなくなるに決まっている。やっと逃れられる、そう思っているだろうに。まさかのまさかだ。

健吾さんと佐賀さんが、雪のぐちゃぐちゃした道を自転車押しながら帰っていくのを見送り、僕はあらためてお金の袋をジャンパー中に納めた。落としてない。大丈夫だ。これからもう一走りしなくちゃいけない。大至急。母さんがうるさいこと聞いてこないうちに、総田に電話しないとだめだ。

おとひつちゃんじゃあ、だめだ。

ズボンの裾に雪で溶かした泥の跳ね返りがいっぱいだった。あとで母さんに、洗濯に手間がかかるって怒られるだろう。さっさと着替えてあったかくした。まだ夕ごはんの準備はできていないようだった。僕は素早く電話前に陣取り、暗誦している電話番号を打ち込んだ。

いったん総田のお母さんが出て、すぐに本人に代わってもらった。「おう、なんだ。また耳より情報か」

「耳よりどころじゃないって。もう、大事件大事件」

手短に僕は、「杉本さん四月以降も交流会に出没か？」の顛末を説明した。

電話の向こうは僕の話の黙って聞いていた。相槌ひとつ打たない。つてことは、寝ているか真面目に聞いているか、それとも何か食っているかのどっちだろう。

「な、総田、耳よりだろ？」

「お前、それどこで聞いた」

「たまたまね」

言葉を濁した。健吾さんの立場が青大附中の評議委員会で悪くなるのは避けたかった。

「まったくどこで情報仕入れてくるんだか、すげえ奴だ。で、耳より情報を関崎は知っているのか？ 知ってるわけねえよなあ。でなければあんなに情熱的に、交流会関係に打ち込むわけねえよなあ」

この辺は答えに困った。断言できない。青大附中の立村評議委員

長とは、かなりいい付き合いをしているようだし、多少は裏組織の話をしていないとも限らない。でも、四月以降また、「葉牡丹の彼女」に追いかけられるとは思っていないんじゃないだろうか。おとひっちゃんがそれを望んでいない限り。

「あのさ、総田。おとひっちゃん、そんなに交流会に関してあいつ、燃えてるの」

「ああ、すげえぞ。ちくしょう、どうせ俺は万年二番さ。おいばりであいつ、春休み中の交流会準備に燃えてるぜ」

知らなかった。おとひっちゃんは僕に一言も話してくれなかった。お互い様だ。総田に聞く。

「なんだよ、春休みの交流会準備って」

「お前あいつから聞いてねえのかよ、めっずらしいなあ」

むかつとくるけど本当のことだ。しかたなく頷く。健吾くんとおんなじで、話相手がもの知らないとなると、ふんぞり返ってしゃべりだすのが総田のくせだ。

「しかたねえなあ。つまりだ。四月になっちまったらとにかく忙しいだろ。入学関連の行事もてんこもりだし。俺もそろそろ手抜きたい時期だし。だったらまず三月末に、うちの学校で『この前お招きいただきありがとうございます』風の会を開こうってことになったんだ。すでに萩野先生の許可ももらってる。俺が交渉した。萩野先生が立ち会ってことで、問題なくOKだ。ただ、附中と違うのは、あまり軽いのりではできないってことだな。関崎が仕切るんだから当然か」

「軽いのり、でもなかったけどなあ」

おとひっちゃんが立村の手玉に取られたあの場面、軽くはない。「俺が今、萩野先生と案の交渉に入っているとこなんだけだな。関崎の奴、また難しいテーマでもって討論したがつてるんだ。座談会の二の舞さ。『校則について』とか『いじめについて』とか、『制服の自由化』とか、そのあたりだろうなあ。青大附中にそのあたり、テーマになるものの資料を送りつけて、あらためて意見をまとめて

もらって議論しようと、そんなところだ」

おとひっちゃん、こりてないのかよ。

テストでは同じ間違いを決してしないおとひっちゃんなのに、こういうことについては、学習能力ない。

「なんでおとひっちゃんって、学校関係のネタが好きなのかなあ。

道徳の教科書からきつと抜き出してきたんだね」

ふとこぼれた言葉に真実があるって本当だ。総田にせよ、佐賀さんにせよ、どうしてこんなに僕の本音を引っ張り出すことができるんだろう。

さっき、佐賀さんにも健吾くんにも話した案。まだあの時は具体的になにすればよいかが思いつかなかった。生煮えのことしか話せなかった。

杉本さんに、おとひっちゃんの前で思いつきり事実でもって恥をかかせて、もう二度と水鳥中学の交流会関連には参加させられないようにすること。

否定できない事実はあるんだ。

佐賀さんを無視していじめているってこと。男子たちも、担任の先生も認めている。

そのことをおとひっちゃんは知っていると思うけど、たぶんここまですごい奴だとは思っていないはずだよ。

おとひっちゃんは健吾くんの言葉を鵜呑みにしてはいないだろう。葉牡丹を押し付けられたとはいえ、女子に好きになってもらえたなんて、めったにないことだ。そのことは素直に嬉しいだろう。できればさっきたんだったらなあ、と夢見ているだろうけれども。

でも、同情と、本音とは違う。

早く縁を切りたいと思っても、あの杉本さんという子、ピラニアみたいに離れないだろう。佐賀さんのことをいじめつづけていることからしてもそうだ。七年間、健吾くんをはじめ男子連中に迷惑をかけてきたことだってそうだ。とにかく、しつこすぎる。逆恨みす

るかもしれない。おとひっちゃんがどうしてもお付きあいできない、
と言おうものなら、水鳥中学生徒会に対して思いっきり復讐するか
もしれない。

佐賀さんはその被害者だ。誰もが話を聞いたらそう思うだろう。

でも、男子の悲しさで、女子を振るということになったら、どう
しても悪役にならざるをえない。ちつともおとひっちゃんは悪くな
くて、杉本さんの強引なやりかたに問題があつたにも関わらず、悪
口言われるのはおとひっちゃんになってしまう。「あの堅物関崎副
会長が、せっかく告白してくれた女子を振るなんて、思い上がりも
いいとこだわ」とささやかれるだろう。言い訳をしないおとひっち
ゃんにとって、そういう悪口がどれだけ打撃か、想像はつく。

ならば、杉本さんがどういう人であるかを、全部おとひっちゃん
および周りの人たちに知ってもらって、納得させた方がいいんじゃない
だろうか。

あらためて判断してもらった方がいいんじゃないだろうか。

本当はいじめばかりして、人を傷つけて、迷惑ばかりかけてきた
最低の女子であることを、たっぷり見せてもらったほうがいいんじ
ゃないだろうか。

おとひっちゃんが振るにふさわしい理由を、水鳥中学生徒会の連
中にも証明してやれば、みな賛成するだろうし、杉本さんを一切近
づけないですむ。

さっきたんと語り合いたくてならなかったおとひっちゃんに、僕
は自分の意志で、できることをしたつもりだった。ほんと、おとひ
っちゃんのために、だった。けど、さっきたんは相変わらず僕
と仲良しでいたいみたいだった。

おとひっちゃんとはちょこつとだけ丁寧に話をするようになった
けれども、僕ほどに接近はしない。そうきんを同じバケツに入れて
も、きつと指は触れさせないだろう。

それが現実なんだと思う。どんなにおとひっちゃんが好きでも、さっきさんの気持ちは変わらないんだ。

もし、おとひっちゃんが杉本さんのことを本気で好きになったんだったら、あきらめて僕も応援するだろう。いやいやながら、葉牡丹の生育記録を連絡してあげてもいい。おとひっちゃんをなだめずかせて交流会に参加させた方がいい。いくらだってできる。

でも、おとひっちゃんはすでに、はつきりと「杉本さんは嫌い」と意思表示している。

それが現実なんだ。

僕はおとひっちゃんを、「振られたかわいそうな男子」にはしたくない。

また、「嫌われて当然の女子に付きまとわれる哀れな奴」にもしたくない。

そんな「情けない奴の親友」でもありたくない。

おとひっちゃんが姑息な女子を徹底して嫌っていると、本人および他の連中の前ではつきり口にすれば完璧だ。

杉本さんは相当根性腐っているように思うけれども、やっぱり女子だ。それなりに傷ついて、もう評議委員はおろか、交流会関連にも参加する気をなくすだろう。

いじめを平気でやらかし、一般人に危害を加える女子を、水鳥中学生徒会一同は拒絶する。今後、一切、来てほしくない。

暗にひそませたメッセージを、総田を通じて伝えることができればよい。総田も杉本さんに対してだけは、当然だと感じるだろう。

交流を進めたがつている青大附中評議委員長たる立村も考えるだろう。お気に入りの女子が、それとも評議委員会か。ちゃんとした男子だったら、ためらうことなく委員会最優先を選ぶだろうし、水鳥中学生徒会が嫌がっていることを無理やりすすめようとは思わないだろう。おとひっちゃんが苦しんでいることがわかれば、泣く泣

く杉本さんをひっこめるだろう。

おとひっちゃんにも嫌われたかわいそうな杉本さんを、もしかしたら慰めるかもしれない。佐賀さんの話によると、杉本さんは相変わらず立村に対しても性格の悪い行動を見せ付けているらしい。それでも可愛がつているっていうんだから、きつとお気に入り度は本物だ。そっちで面倒を見るなりすればいい。知ったことじゃない。水鳥中学に関係ないところでなら、何したってかまわない。

佐賀さんを見無視するなんて、最低だ。

もうひとつ、店から外国のバスケット関係付録をくすねておこうと決めた。

今度佐賀さんが来た時に渡そう。

佐賀さんの電話番号って何番だっけ！

肝心要なことを忘れていた。

ほんと、一番最初に確認したかったことなのに。
待ちぼうけはまだ続くってことだ。

こんな奴、どこが「天才参謀」だって！

僕がもつと頭よくて、青大附属に通えるような奴だったら。

今回に限っては僕の成績が悪いことを、いやって程思い知らされた。

健吾くんや佐賀さんが僕を軽蔑したようなまなざしを投げつけたわけじゃない。かえって尊敬してくれたようなこと、言ってくれた。でも、佐賀さんはどう思ったんだろう。なんとなく、嫌いになられたわけではなさそうだけれど。

青大附属高校にあのふたりはストレートで進むんだろうし、もしかしたらおとひっちゃんも一緒に行くかもしれない。でも、僕はやっぱり、無理だ。ものすごく勉強して、青潟工専に受かったとしても、どうしようもない。

どうしようもないのかなあ。

水鳥中学生徒会で行われる予定の交流会……厳密には「交流準備会」……は、非公式ながらも先生たちの許可を得て、来週の土曜日午後に開催決定した。おとひっちゃんと総田ががんばって先生たちをまるめこんだ、もとい説得した努力と根性の結果だ。

「今回はあくまでも、『準備』なんだってことを強調しといたぜ」

総田はにんまり笑いつつ、僕に予定の書かれたプリントを渡してくれた。

「正式に交流会が動き出すのは四月以降ってこと。関崎の奴、一刻も早く開きたがっていたけどな、そうそう簡単に、忙しい時にできるかって。卒業式とかいろいろあるんだぜ。まあ、来週の土曜だったら、教室もきれいだし、そんなに大騒ぎしなくても青大附中のみみなさまをお招きできるんじゃないかと、思ったわけだ」

「ずいぶんあっさり決まったよね」

早い展開にびっくりした。いろいろ裏に手を回さないと交流会な

んて出来ないと思っていたからだ。行事なれしている青大附中
だったらともかく、公立の水鳥中学でそんなこと、時間かかってい
つのか卒業なんてことにならないだろうか。心配していたのだ。
「だからだ、俺が『交流準備』ってことにこだわったのはな、教師
連中にあまり重たいこと考えさせたくないかったってわけさ。だろ？
最初は軽い気持ちで教室を貸してもらって、先生にくつついても
らって学級会みたいなことをやろう、ってことを強調したわけだ」
「ああ、そっか。小学校の時やった『おたのしみ会』みたいになん
だ」

夏休み、冬休み、春休み、それぞれ直前に、教室を使って「お楽
しみ会」を各クラスで行うのが常だった。転校することに決まった
奴がいたら、土曜の放課後を利用してよく、「お別れ会」とかを行
ったりした。延長上と考えれば、納得だろう。

「けど、先生たちはなんも言わなかったのか？」

「だから、一応、議論するテーマは決めているぜ。学校祭以来、『
校則』『いじめ』あたりの問題を熱く語ってもらえればいいだろ？
関崎が向こうの委員長に連絡して、簡単に意見を集めてもらうよ
うにしているらしいけど、そんなのどうだっていいだろ」

おとひつちゃんのことだ、本気で議論戦わせようと思ってい
るよな。

何度やっても無駄だってわかっているのに、やめることできない
おとひつちゃんの性格。

こっそりあきれるほかない。

「で、水鳥の生徒会連中はみんな参加するんだろう？」

「そりゃあなあ。関崎言うには、二年の代表が六人くらい来るって
言ってたぞ」

二年だけかあ。

何期待していたんだか。話を聞き流しながら、僕はこの前佐賀さ
んと会ってから、何日たったかを数えていた。もう、一週間近く経
った。うちの店を他人の振りして覗き込んだり、郷土資料館のあた

りを遠回りしてみたり、この近辺のエレクトーン教室ってどこだろうと電話帳で調べてみたりとか、僕の思い当たることはすべてしたのに、全く収穫なし。一番いいのは総田かおとひっちゃんに頼んで、健吾くんの電話番号を聞きだしてもらおうことだろう。

健吾くんには内緒で来てくれたんだから、僕はできれば佐賀さんとふたりつきりで話をすべきだと思っていた。

「その六人って、面子どうなってるのかなあ」

「知らねえ。その辺はみな関崎が把握してるぜ。俺は内川会長と一緒に、当日どんなテーマを振るかを考えてるところ。ほら、青大附中の評議委員会ってかなり芸人が多いとこでな、毎年冬になると、ビデオでドラマ仕立ての演劇を撮って自己満足するんだと。ほら、『奇岩城』だったか。怪盗ルパンの話なんかも、無声映画っていうのかな、ああいう感じでこしらえてたぜ」

「無声映画？」

古すぎる。イメージ沸かない。総田は何気なく博学だ。

「もちろん台詞はちゃんとしゃべっているんだけどな、途中経過とか、あらすじとかを、話の途中に文字で流すんだ。紙に書いてあったものを、カメラで少しずらずらしていくってやりかたでさあ。いわゆる紙芝居感覚。器用なことするよな」

やっぱりよくわからない。青大附中の評議委員って、遊び人が多いんだろう。

「彦一とんち話」を押し付けるうちの学校とは違うよなあ。

中一の時、学校祭三日目に無理やり見せられたつまらない演劇を思い出した。臨時演劇部といった形で先生たちがキャストを集め、上演したという代物だった。

「おもしろかったの、それ」

「おもしろいというか、出来は悪くない。が、しかし、爆笑した」

どこで爆笑したのかは、謎のまま総田は話を逸らした。

「でな、顧問の萩野先生に話したんだ。青大附中って変人が多いんですねってな。そうしたら、水鳥中学でも同じことをやったらどう

かとか言われてなあ。冗談じゃねえよ、どうせうちの学校だったら演劇やるったって、教師連中が喜びそうで生徒がふて寝ってやつばかりだろ。萩野先生も同じ。『学校のいじめ問題をテーマにした演劇脚本』とかを見繕ってやるよって。全く勘違いもいいとこだぜ」

学校のいじめ問題、演劇、か。

網にかかった。言葉の魚はちゃんと捕獲して、水槽に泳がせとこ
う。

交流準備会について、僕はおとひっちゃんから詳しいことをほとんど聞いていなかった。

あまりにもだんまりだったので何気なく、

「この前総田がしゃべってたんだけどさ」

と持ち出してみた。白状した。

「雅弘、ごめん。俺も隠す気はなかったんだけどな。とにかく先生と話をつけるのが大変だったんだ。悪かった」

平謝りされても困るんだけど、まあいいや。僕は知らない振りして、とつくの昔に総田から得た情報をふんふんと聞いていた。

「そうなんだ。もし、俺、おとひっちゃんの役に立つようだったら手伝うよ」

終りまで聞いた後、切り出した。もちろん満面の笑顔を忘れないでだ。

「雅弘、けど、お前最近、店の仕事忙しいんだろ？ 水野さんが言
ってたけど」

あれ、おとひっちゃんさっきさんと話なんかしてるんだ。

これまた意外だ。隠していたくせに、何気なくぼろがでる。かわいそうだからその辺も知らん振りをしておいた。店の配達をこまめに手伝っていて忙しいのもほんとのことだし、大抵は青大附中近辺までぐるっと一回りしてくるから時間がかかるのも否定できないことなんだから。父さんは「デート代稼ぎ」と信じ込んでいるけれど、「うん、でも、この一週間ずっとだったから、一日くらいは大丈夫

だよ」

「ほんとか？　じゃあ、俺が萩野先生に頼んで、お前も参加できるように話してみる」

みるみるうちにおとひっちゃんのはりきりだした。声が花開くように華やいでいる。なんだ、おとひっちゃん僕にいてほしかったんじゃないか。

「けどさ、おとひっちゃん。誰が青大附中から来るか、もう名簿、出来てるんか」

「ああ、立村に連絡して名簿をもらったんだ。一応な」

やはり、おとひっちゃんは立村とウマが合うらしい。総田の言う「うすらばけ評議委員長」。やはり同類、感じるものがあるのだろう。

「二年が中心なんだろ」

おとひっちゃんは黙った。

「一年も来るの」

今度は僕の声が花開いた。まずい。笑いながらごまかした。

「ああ、来る」

わかりやすい。しぼんでいる。肩がいつきにぐんと落ちたのがおかしい。一呼吸置いた後、僕は尋ねた。もしかして思ってたけど、やっぱりもしかしてだ。

「何人？」

「ふたり」

「まさか、来るのか、あの人」

返事はないけど、言葉を飲み込んでいる様子ですべてが読み取れた。

そういうことか、おとひっちゃん相当まいつてるな。

杉本さんとうとう、水鳥中学へ上陸するってことだ。

葉牡丹の生育状況および、おとひっちゃんの本心を確認しにだらうか。

「おとひっちゃん、具合悪くなってないか」

「悪くなつてねえよ。そんな失礼なことするか」

無理してるな。

つつこんでもしょうがないので僕は黙っていた。どんなに努力してもおとひつちゃんは杉本さんを好きになんてなれないだろう。それはすでにわかりきってることなのだから。おとひつちゃんはいい奴だから、懸命にまだ考えているのだから。どうやったら杉本さんを傷つけないように断れるだろうって。

もし、相手がさっきたんだったら、とも思っているだろう。

「おとひつちゃん、大変だね」

アドバイスなんてしたらむくれられるのが目に見えているので、僕は同情だけにとどめておいた。

葉牡丹を筆り取ってもう二度と水鳥中学の敷居をまたげないようにするにはどうすればいいか？

佐賀さんと健吾くんと話をした時もあったことなんだけど、どうして僕は杉本さんにだけこうも露骨に、「嫌い」って感じるんだろうか。

もちろん好き嫌いというのは誰にでもあることだろう。いじめられたり、悪口言われたりとか、ちゃんと理由があつて嫌うんだつたら僕もこんなに悩まない。理由がないから変な気持ちになつてしまふ。

初めて目と目が合った時、佐賀さんにはいやな気持ちを感じなかった。

なのに、杉本さんに対しては、背筋がぞつとした。

もちろんおとひつちゃんに葉牡丹を渡していたのを見た時は、胃の中の珈琲を吐き出すんじゃないかと思うくらいだった。多少、僕に失礼なことを言っていたけれど……ふつう「葉牡丹」なんて名前、知らないと思うよ……、そのくらいのは、他の女子だったら許していたらう。女子をこんなに嫌うなんて、初めてだった。

でも、杉本さんは少なくとも僕になにも、悪いことをしていない。

葉牡丹を奪い取ったことへの逆恨みがいつ来るかと心配していたけれど今のところは大丈夫そうだ。

僕の方が、杉本さんの見かけと雰囲気だけで思いつきり嫌っちゃっている、それだけだ。

しかも、それだけの理由で「杉本さんに徹底的恥をおとひっちゃんの前でかかせて交流会関連に一切タッチさせないようにする」なんて計画を立てているのだ。やめようとも思わずに。

どうしてだろう。

僕もわからない。佐賀さんが僕と同じことを考えるのだったらまだわかる。健吾くんが復讐したくなるのだったら全く納得だ。けど、なんで一度しか会ったことのない女子に対してこんなことを思うのだろう。

自分を弁護するわけじゃない。でも言わせてもらう。他の男子たちも、なんで杉本さんに対しては、ぞつとした顔を見せるのだろう。総田も、おとひっちゃんも。まあおとひっちゃんは葉牡丹を押し付けられた不幸な奴だからしかたないにしても、総田がなんで一目見るなり「とんでもない女」と言い切ってしまうのだろうか。健吾くんや佐賀さんの話によれば、青大附中の他男子たちも同じらしい。

共通する「むかつく」感情。どうしてだかわかんない。

いらいらしてきて僕は、部屋にくすねてきた鈴蘭優のポスターを机から引っ張り出した。

別に僕は鈴蘭優のファンなわけではない。

ただ、髪型が佐賀さんに似ていた。それだけだ。本当に、それだけだ。

顔は全く違うのに、髪型が同じなだけで、可愛いと思う自分がいる。

杉本さんと同じ髪型にしていたら、そう感じるのかなあ。

想像しかけておえつときた。やっぱりこの髪型は、佐賀さんでな

いと似合わない。鈴蘭優よりもはるかに上手だと僕は思う。

階段を昇る足音が聞こえた。みしみしするのは母さんの体重か。すぐに机へ鈴蘭優をしまいこんだ。

「雅弘、電話だよ、女の子から」

返事せずに、僕は階段を駆け下りた。母さんが部屋にまだいるのが気になるが、気にしている暇なんてない。

「もしもし、佐賀さん？」

受話器を握り締め、第一声。当たっていてよかった。外れてたら恥さらしだった。

「はい、あの、私です」

かすかにささやく声に、僕は耳の形がつぶれるくらい受話器を押し付けた。

「私、今日、お店に寄ったんですけど、傘を忘れてきてしまったみたいなんです。今、駅前なんですけれど、傘、届いてませんか」

傘忘れたって？

粉雪交じりの雨が降っていた。雪だけだったら、青湯の人たちは傘なんて使わない。僕もフードがぶつて凌いだのに。

「店に寄ったっていつくらい？」

「はい、今日、学校休んで、エレクトーンのグレード試験受けに行っただけです。午前中に寄って、今、試験が終わって、今帰ろうとしたら傘忘れてきてたことに気が付いたんです」

「ちょっと待って」

受話器をおっぱり出したまま、僕は店の中をぐるっと一回りしてレジの父さんにも一声かけて確認した。忘れ物の傘なんて届いてない、とのことだった。

「ごめん、ないよ。うちにはないみたいだ」

「そうですか……」

沈んだ。雨に打たれて泣いちゃいそうな声だった。

「もしかして、佐賀さん、傘がないから困ってる？」

「はい、今、ものすごい雨で、雷も鳴ってて、どうしようと思って」「この電話、どこからかけてるの？ ああ、駅か」

佐賀さんは一拍置いて、
「駅の職業別電話帳をめぐって、佐川書店を探して、見つけたんです」

やっぱり、僕の電話番号、覚えてなかったんだ。

力が抜けそうだった。同時に空をぶっこわすような雷鳴が聞こえた。木造の僕のうちは雷なんて落ちたら完全に燃え尽きてしまいうだった。電話の向こうで、きゃっと小さな悲鳴が聞こえた。佐賀さんが体を小さくしておびえている姿が目に見えかぶようだった。

「わかった、駅なんだよね、今から俺、傘持っていくから、待って」

僕はコートのフードを被り、父さんのこうもり傘を一本持つて玄関を飛び出した。三月なんて春じゃない。まだ冬だ。雨と雷と闇がセットで、もう夜だ。ほんとはまだ四時半くらいなのに。傘がなく困っている友だちから連絡が入ったら、すぐに駆けつけるのが当然だ。変なこと、全然考えていやしない。

思いっきり走ってきたのに、やっぱり濡れてしまった。分厚いコートなのに脳天へ染み込む冷たさ。髪の毛だけはおかしくなっていないだろう。フードを外し、改札口と公衆電話コーナーを交互に見た。なかなか見つからずなんどもぐるぐる見渡しているうちに、お辞儀をする人を発見。平安朝の人みたいな、長い髪をのばしたまんまの佐賀さんだった。

薄桃色の横に長い手提げを胸に抱きかかえ、走ってきた。

「ごめんなさい、私、そんなことお願いしたくて言ったんじゃない」

「いいよ、俺のうち近くだし、いいよ」

長い髪以外はすべてピンク、ピンク、ピンク。リボンを襟とポケットにつけたコート。

ちらっと覗いたスカートも、もう少し濃いピンクだった。

傘なしで走りたくない格好だった。やっぱり雨の中、走ってきてよかった。

佐賀さんをぬらしたくない、本気でそう思った。

ピアノのおけいこというのはよく聞く。エレクトーンというのは意外だった。

「エレクトーンってどのくらい習ってるの」

「小学校に入ってからすぐなんです。本当は、ピアノを習うつもりでしたけど」

一週間仕事をしたおかげで「デート代」の小遣いはたんまり稼いでいる。懐は暖かった。思い切って近くの珈琲喫茶店に入ることにした。あまり中学生が来るところじゃないという先入観があるせいか、学校の友だちと顔を合わせることがない。しかも出てくる飲み物が思ったより安い。150円で珈琲紅茶どれでも大丈夫。駅前に住んでいる利点だ。

「じゃあ、毎週駅前に来てるんだ」

「はい。いつもは学校終わってからなので」

寄る暇がなかったってことだろう。わかる。わかる。

淡いランプがところどころにぶら下がっている店内で、僕は一番奥へ席を取った。セーター姿でめがねかけた大人がひとりで煙草をふかしている。窓とカーテンは閉まっていた。どかんとどこかで、大きな雷の落ちた音が響いた。佐賀さんが肩をすくめて僕をきゅつと見つめた。

「大丈夫、あとで俺がバス停まで送ってく」

ほっとした顔で佐賀さんはうなづこうとし、慌てて頬を押えた。また首をかしげた。

見れば見るほど、なんでもしてあげたくなってしまう。変だ。僕の方がおかしくなっている。ふつうに見えるように、僕は佐賀さんを壁際に押し付けるようにして座った。真向かいに腰を下ろして、あらためて佐賀さんの瞳を見つめた。

意識してくれてるのかな。

いつも、健吾くんとはこういう感じにいるのかな。

ぴりりと電流が走る。ふつうに見られないと変な奴だと思われるしまう。急いでメニューを広げた。どうせ珈琲しか頼まない。

「なんでもいいよ。俺、うちの手伝いしてるから大丈夫なんだ」

「いいえ私が払います」

「今日は俺が、佐賀さんにおごりたいんだ。そうさせてくれないかな」

僕はかたくなに首をふる佐賀さんを無視して、珈琲と紅茶を注文した。ウェートレスさんが愛想良くすぐに運んでくれた。

「佐川さん、おうちのお手伝いしながら学校に行ってるんですか」
「いつもじゃない、いやいやだけど本当のことなので、僕は嘘なく頷いた。」

「うん、うちそんな大きな店じゃないから、俺も手伝わないとだめなんだ」

「すごいですね。だからなんですか」

ためらいながら、僕に尋ねてくるのは言いづらいことなんだろうが。

「だからってなにが」

「はやく自立したいってこと、この前、佐川さん言っていましたよね。私、そんなこと一度も考えたことなかったし、学校でそういうこと話す人もいなかったし、びっくりしました」

ああ、やっぱりしっかり聞いてたんだ。それなら僕が職業科の高校を選ぶってことも覚えてるんだろう。

「俺、この前も言った通り、成績よくないんだ。だからいい学校に行けないと思う。だけど俺のやりたいことはものすごくレベルの高い学校に行かなくてもできることだから、そうするつもりなだけなんだ」

決して嫌味を言ったつもりはない。なのに佐賀さんはすっかりうなだれてしまった。あわてた。

「佐賀さん、違うよ、俺、佐賀さんのように青大附中に合格できる頭あれば、行つてたかもしれないし、同じ職業科でも青潟工專を受けられたかもしれないよ。俺は佐賀さんも健吾くんも、レベルの高い学校で一生懸命やっているのみて、すごいなあっていつも思うよ。ただ俺は、早く家を出たいというのが目的だから、成績それなりでも別のやりかたができるんじゃないかなって思つたんだ」

また首を振る佐賀さん。目がうるんできた。ちよっぴり泣き虫なのかもしれない。

「いいえ、佐川さん」

目尻を指先でこすり、じつと見つめてきた。

「私、佐川さんみたいになりたい。佐川さんみたいに強くなりたい」
佐賀さんは僕を相手にとつとつと話し始めた。

時間はかかりそうだけど、かかればかかるほど一緒にいられる。

「私、ほんとはピアノを習いたかつたんです。でも、先に習いに行つていた梨南ちゃんがピアノの先生と喧嘩してやめてしまつたつて聞いて、悪いなって思つてエレクトーンにしたんです。今でも梨南ちゃんは誰かにピアノの話をされると怒ります。エレクトーンはピアノにくらべてレベルが低いと思ひ込んでいるみたいで、何にも言わなかつたんだけど」

とんでもない人だなあ。

もう何度も思つたことなので、慣れちゃっている。

「けど、エレクトーンつて難しいし、面白いんです。だから、梨南ちゃんには言わないでグレード試験受けたりしてました。エレクトーン弾く人なんて馬鹿みたい、と梨南ちゃんは言つていたけど、そんなことないつて、最近やつと思えるようになったんです」

「そうだよ、それつて当然だよ」 佐賀さんは指先を、鍵盤弾くような格好に丸めて、とんとんと叩いた。

「でも、ずっと怖かつたんです。今でも、まだ怖いんです。今日の試験でも順番待っている間に、梨南ちゃんの声が聞こえてくるみたいで、自分が変になつちやいそうだったんです」

よくわかんないけど、今日のグレード試験がうまく行かなかったってことなんだろう。試験に失敗した直後だったら、そりゃあ、泣きたいだろう。

「大変だったね」

それしか言えなかった。

「私、ずっと自分に言い聞かせて、エレクトーンはピアノと同じくらい素敵な楽器なんだって思うようにしてきたんです。弾いている時、楽しくて、誰に認めてもらえなくてもかまわないって。けど、梨南ちゃんがいつも『エレクトーンなんてピアノの延長上にある低レベルな楽器よ』とか言っていたのが耳にこびりついて、怖くなっちゃったんです」

最低な女子だな。もう確定。

僕は珈琲をぐくんと飲んだ。熱すぎてやけどしそうだった。

「どうせ今、杉本さんはピアノが弾けないんだろ？ 今の話からすると、それつきりピアノなんて習ってないんだろ？ エレクトーンもオルガンもシンセサイザーも」

「はい、たぶん」

僕には分かる。最低な女子だと再認識した。

「それはさ、佐賀さんが自分のできないことを軽々やっているから、やっかんでいるだけだよ。詳しいことはわかんないけど、ピアノの先生とけんかしてやめたってことは、がまんするだけの根性がなかったってことだよ。俺、そっちの方が情けないなあって思うよ。もし佐賀さんがピアノを習っていたら、杉本さん自分のことを追い抜かれるんじゃないかって思って、焦ってたんだよね。当たり前だよ。それだけの力を佐賀さん持っているんだし。エレクトーンをばかにしてるってことは、杉本さんが鍵盤ものを一切いじれないことをごまかすための言い訳だよ。情けないよな。自分で努力するか、いやな先生に頭を下げてもう一回習い直せばいくらでも追いつけるのに。努力しないで、できる人をやっかむなんて、俺からしたら最低だよ」

「けど、私」

うざりたい、いらいらして僕は言い切った。

「僕は佐賀さんの方が何倍も、何十倍も実力があると思うよ。習い事って大変だろうなあって、思う。がまんしなくちゃいけないことだって多いだろうし。でも、それを投げ出さないでがんばってやりぬいたことって、俺はほんとすごいことだと思うよ。今日の試験、きつと辛かったんだろうなって思うけど、でも、佐賀さんはそんなことでめげる人じゃないって、俺、一発でわかるんだ。ほんとだよ」

女子と話すと時々、短気の虫が騒ぎ出してしまふ。目の前にちゃんと、こうすればいいってことが並んでいるのに、気付かない振りをしているんだから世話がない。佐賀さんだって本当は、したいこと、わかっているはずだ。成績はもしかしたら杉本さんの方がいいのかもしれないけれど、何倍も、いや何億倍も、佐賀さんの方が頭いいことがわかってる。男子をいやな気持ちにさせないとか、嫌いな女子でも思いやりを持つように心がけているところとか。馬鹿だったら、絶対に、できない。

許さない。

テーブルをこぶしで押し付けるように叩いた。

「来週の土曜日のこと、健吾くんから聞いている？」

「え、あの」

どもったけど、ちゃんと頷いてくれた。知っているんだ。

「一年では健吾くんと、あの人が、来るって聞いたんだけど、ほんと」

たぶん立村の次に評議委員長となるのは健吾くんのはずだ。人数聞いた段階で、健吾くんは外れないだろうと思っていた。そして杉本さん。ふたり。

「梨南ちゃんですか。はい、たぶん今から楽しみにしているはずですよ」

はにかみながら、佐賀さんは紅茶カップを丁寧を持ち上げ、一口飲んだ。

「だって、毎日関崎さんがメモで置いていった紙を見つめて、ほうけてます」

おとひつちゃんそんなもの置いていったっけ。

覚えがない。首をひねった。佐賀さんはかすかに笑った。

「ノートをやぶいて何か書いて、立村先輩に渡していたみたいです。暇があればそればかり眺めてます。周りでさんざん馬鹿にされても全然気が付かない風です。口癖に『青大附中の馬鹿男子なんか、あの方の価値なんてわからない』のだそうです。お友だちと話してました」

あの方の価値、ね、確かになあ。

おとひつちゃんはいいい奴だけど、価値、とまで言ってしまうんだろうか。僕は笑いをこらえきれなくて、つい大声で笑いこけてしまった。佐賀さんも僕に付き合っつて、顔をほころばせてくれた。やつぱり、こういう時の顔が一番いい。

「ごめん、笑いが止まらなくなつてさ。じゃあ今からもう、おとひつちゃんのことばかり考えて夢うつつなんだね」

「はい、梨南ちゃんは好きな人のことしか考えられない人です。好きになればなるほど、いじめるのがくせでした。でも、きっと、関崎さんは梨南ちゃんに一度も悪口を言わなかったから、いじめなくても好きになつてくれると思つたんじゃないでしょうか」

勘違いもいいとこだ。葉牡丹をさつさと手放したおとひつちゃんの本心、知るがいい。

「いじめなかったんじゃないよ。おとひつちゃん、いやでいやでならなかったから、離れるために機嫌とつただけだよ。そんなことも気付かないで、学年トップなわけなんだ」

悪いけど、一瞬のうちに「職業科進学コンプレックス」が消えた。成績のよしあしと、ほんとの意味での「頭のよさ」は違うんだ。

僕は苦い珈琲を半分飲んだ。缶コーヒーと違って、砂糖が入っていない。

胃がちよつとちくちくしてきた。夕飯前っていうのが効いたらしい。

顔をしかめると、佐賀さんが静かに見上げてくるので作り笑いを浮かべた。

今日は佐賀さんの電話番号を聞かないと帰れない。

雷はまだ時折鳴っているけれども、さっきほどうるさくはなかった。

「佐賀さん、これから言うことは、悪いんだけど健吾くんには内緒にしてほしいんだ」

僕は切り出した。やっと、練りに練っていた案を話せるのが嬉しかった。両手を膝の上に置いて、お上品な格好で佐賀さんがこっくり頷いた。

「いや、健吾くんを無視するんじゃないんだ。この前会った時もあったんだけど、健吾くんって正々堂々としたやりかたでないと、納得できない性格なんだなあ。あんなに杉本さんが嫌がらせしているのに、クラスでいじめをしないようみんなに言い聞かせるなんて、普通の人じゃできないよ。俺だったら、かわり持たないよ」

「健吾……新井林くんは、裏表のあるやりかたが本当は嫌いなんです」

でも、相手は裏表のある奴なんだからしょうがないじゃないか。

ちくつと来た。ひとりで突っ込み僕は続けた。

「僕としては、悪いけど杉本さんに金輪際、水鳥中学生徒会に関わりあってほしくないんだ。青大附中の評議委員会がどういうことしているか知らないけれど、人に迷惑をかけてくる人には、寄ってきてもほしくない。これ、おとひっちゃん以外の生徒会役員にも聞いてみたんだけど、みな杉本さんのことを嫌っているのは確かなんだ。おとひっちゃんだけは悪口言わないけれど、本当のことというと、別に好きな子いるし、杉本さんと付き合うなんて具合悪くなる以外の

何者でもない、と思うんだ」

おとひっちゃんにはばらせない計画だ。強調した。

「でも、健吾くんと同じく、おとひっちゃんも正々堂々としたことが好きなんだ。きつと、杉本さんに押し捲られたら、礼儀としてお付きあいしなくちゃいけないんだって勘違いするかもしれないんだ。自分が本当はどうしたいか、あきらめて。けど、おとひっちゃんはこんなこと、絶対にしたくないはずなんだ」

「わかります。私も、この前、そう思いました」

おとひっちゃんの様子を一応はチェックしてくれたのだろう、納得だった。

「だから、俺としてはこの前話した案を、実行したい。杉本さんに来週の土曜日、水鳥中学で自分の本性を暴露しようと思っている。すつごく汚いことだと自分でも思うよ。ふつうの人になつたら、俺もこんなひどいことしたくないよ。でも、佐賀さん、今でも杉本さんに言われたことが気になつてしまふんだろ？ エレクトーンなんてピアノよりレベル低いとか、さんざん嫌味言われたことが気になつちゃうんだろ？ 俺だつたら『どうせ鍵盤も弾けないくせに馬鹿女』って言い返すけどさ。それができないくらい、辛かつたんだよね」

うつむいた。前髪に光が当たって、白い横筋がしゅうつと走った。天使の輪、って奴だろう。

「馬鹿なのはどつちさ、ってことを思い知らせてやりたいよ。俺はおとひっちゃんの親友だから、嫌いな女子なんかと一緒にいてほしくないんだ。言い方変だけど、あの人、いわゆる『みそつかす』だと思ふんだ」

「『みそつかす』？」

小学校一年の四月に、僕があてがわれていた居場所だった。

「そうだよ、ほら、ドッチボールとか鬼ごつことかする時、誰かの弟とか妹とかが混じつたら、手加減しようってことで『こいつはみそつかすにしようぜ』って言うだろ？ 俺小学校一年の時、そうだ

つたんだ。体もちっちゃかったし、頭もよくないし。弱虫だったし。いつも他の奴から『雅弘はみそつかすな』って決め付けられてて、悔しかったんだ」

真剣な目で僕を刺す。机の中の「鈴蘭優」のポスターよりも、ずっと真摯だった。どんどん突き刺せとささやいてくる。

「俺、ほんつと悔しくってさ。毎日必死にかけっこの練習したりしてた。誰にも言えないよなあ。年上の奴らと遊ぶならともかく、同じ学年で『みそつかす』だよ。恥ずかしいよ。けどね」

しゃべりだしたら止まらなくなる。店の中が幻映画館になったみたいだった。佐賀さんの背中に幻影が映っているようだった。

「おとひつちゃんだけは、俺のことを『みそつかす』扱いしなかったんだ。あいつ、俺を幼稚園の頃からかばってくれてて、『雅弘泣かしたら他の奴も泣かしてやっからな！』って体張ってくれたんだ。けど、おとひつちゃん、あの時は他の奴らが俺を『みそつかす』扱いしているのに、平気でボールを俺に当ててくるし、鬼ごっここの時も容赦なく、タッチしてくるんだ。みんなから文句ぶうぶう出たよけど、おとひつちゃんはつきり言ってくれたんだ。『雅弘はみそつかすなんかじゃねえよ。差別すんな』って」

「『みそつかす』ですか」

そうだろうそうだろう。納得している顔。やっぱり僕がガキっぽいんだ。

「俺も努力したつもりだよ。早く『みそつかす』から脱出しようと思ってたからさあ。一年の六月くらいにやつと抜け出すことできたんだ。すっごく嬉しかったよ。女子にはわかんないかもしれないけど」

あの時、

「おとひつちゃん、俺、みそつかすじゃなくなつたよ！」

とおとひつちゃんに報告したんだつたつけ。

「あつたりまえだろ、お前のろまじゃねえもん」

って言ってくれたことが今でも忘れられない。思い出なんてとっく

の昔に消えていることが多いけど、おとひっちゃんがんばってもない顔して、実はすっごく嬉しそうに言ってくれた時の顔が、後ろの壁に浮かび上がってきたようだった。

「あの時、俺は『みそつかす』から脱出するために、ものすごい努力したつもりなんだ。繰り返しけど、毎日学校から家まで二回往復して走ったりとか、ほんと苦しかったよ。でも努力すれば報われるんだって、その時初めてわかった。おとひっちゃんが一緒にみそつかす扱いしなかったのも、俺ががんばって走りつづけたのを応援してくれてたからなんだなって、後になってわかったんだ。みそつかすから抜け出すには、他の奴らの迷惑にならないくらい動けなくちゃいけないし、とろとろしてちゃいけないんだってことも、あの時よくわかったんだ。ちゃんと、ルール、あるんだよ」

ここから本題だ。珈琲を飲み干した。と思ったらウエートレスさんが黙って珈琲と紅茶を注ぎ直してくれた。どうしよう。おかわり代を請求されたら。

「佐賀さん、俺思っただけど、杉本さんは『みそつかす』から抜け出すための努力、しているのかなあ。もし、佐賀さんや健吾くんを傷つけないように努力するとか、紙鍵盤用意してピアノの練習するとか、そういうことをしたら、僕たちも『みそつかす』から外してやと思う。けど、そんなとこ全然見せないらしいよね。結局佐賀さんがエレクトーン上手になればなるほど、やっかむわけだし、健吾くんのことを嫌がらせして迷惑かけるし、おとひっちゃんが嫌がっているのみえみえなのに、さらに追いかけてきたりするんだ。どうしても仲良くしてほしいんだったら、ルールを守ってくれってことを、俺は言うよ。あの人普通じゃないから、普通に話してもたぶんわからないよね。だったら、堂々と今まで杉本さんが佐賀さんに何をしてきたか、どんな迷惑をかけてきたか、そういうことを水や青大附中の人たちの前で証明して、みんなに判断してもらった方がいいよ」

遊んでいる時にうろちよろして迷惑かける『みそつかす』。

『みそつかす』扱いされたくないのだったら、早く走るよう努力することが必要なんだ。

「水鳥中学交流準備会に佐賀さん、健吾さんの付き添いってことで一緒に来ることできないかなあ」

計画の芯。僕はやつと切り出すことができた。

「え、私ですか」

「そう。すでにおとひっちゃんと立村との間で話し合いが進んでいるらしいよね。テーマは『いじめ』なんだ。うちの学校、青大附中みたいに学校で演劇をやるうかって話が出ているんだ。『奇岩城』みたいにドラマチックじゃないけど、『学校内のいじめ問題』をテーマにした話をやるうって考えているみたいなんだ。どういう内容なのかはもう少しおとひっちゃんをつついてみるけれども、杉本さんがいままで佐賀さんにしてきたことを、そのまんま演劇の内容にしてみましたらどうだろうか、って思ったんだ。佐賀さんは辛いかもしれないけれど」

「え、でも、私」

戸惑う佐賀さんにまた僕は短気になった。

「でも私、なんか言うことないよ。会の担当になる水鳥の生徒会役員に俺、いろいろ頼んで佐賀さんのされてきたことを演劇のネタにできないかどうか聞いてみる。実際に起こったことの方が説得力あると思うし、僕も交流準備会に参加する予定だからちゃんと手を挙げて発言するよ。もちろん、佐賀さんや健吾くんから聞いたなんてことは、内緒にしてさ。目の前に杉本さんがいる前で、被害者の佐賀さんがいる前で。杉本さん、自分のことをネタにされているって気が付いたらどんな顔、するだろうなあ。本人はどう思っているかわらないけど、みんな、佐賀さんがかわいそうな思いしているってことみんな知っていることだろ？ おとひっちゃんの前で、杉本さんは自分のしてきたことが、真正正銘の『いじめ』であって、最低な人間のすることなんだって証明されちゃうんだよ。ふつうの神経

持っている人だったら、泣いちゃうよな」

「私なら、泣きます」

佐賀さんは、当然だよな。

今は笑っている佐賀さんに、ほっとした。

「結論として、『いじめをする人はどんな理由があるにせよ許せない。加害者。青大附中と水鳥中学はいじめ人間を一切受け入れない』って結論に持っていくことができたなら、最高だよな」

「でも、梨南ちゃんにそんなことしたら、きつと傷ついてしまうと思います」

言いかけた佐賀さんを押しとどめた。

「俺、杉本さんがどう思おうが関係ないよ。要は、おとひつちゃんの前で、杉本さんがいじめをする最低の人間だってことを証明するだけのことなんだからさ」

どうしようもなく許せなかった。

うちにいた時、ちょこつとだけ

「俺になんも悪いことしてないのになんであんな嫌いになるんだろう」

って罪悪感を持っていた。でも、これですつきりした。理由判明。

佐賀さんがまだ、苦しんでいるのに、平気でいるあの性格がいやなんだ。

もちろん僕が一方的に佐賀さんびいきなだけなのかもしれない。

佐賀さんと健吾くんとの話し合いを鵜呑みにしているだけなのかもしれない。でも、杉本さんのしてきたことはどんな人も許せないことだろう。

いじめられる方に罪がある、とは絶対に言うてはいけないことなんだという。

でも、佐賀さんが受けた傷のことを考えれば、杉本さんに罪がないとはどんなことであっても言えないと思う。

それに、杉本さんにはいざとなったら逃げ場所がある。

「立村は相変わらず、杉本さんのことをひいきしているよね」

「梨南ちゃんには無視されてますけどしょっちゅう、声かけたり、呼び寄せたりしてます」

蠟人形のような顔。すぐに火で解けてしまいそうな頼りない態度。「じゃあ大丈夫だよ。おとひっちゃんに振られたって、本当に好きな人が待っているんだから」

佐賀さんはもう一度、大きく頷いた。

「梨南ちゃんが本当に好きなのは、立村先輩です。立村先輩と一緒にいてくれば、きっと」

「社会の迷惑がひとつ減るよ」

今日こそ忘れてはならない。おかわりでもらった珈琲を舌、やけどしそうになりながら頭と胃をちくちくさせた。

「でも、水鳥生徒会も今、ごたごたしているから何か変わった事があつたら、連絡したいんだ。いままでいじめ問題の演劇をやるうとしていたくせに、次の瞬間『彦一とんちばなし』になっちゃう可能性もあるし。佐賀さん、電話番号、もらっていいかな」

ピンクのかばんから、やはりピンクの女子らしいノートを取り出した。五線譜ノートだった。綴じ目からはがして、電話番号だけ書いて渡してくれた。

絶対落とさないようにしなくちゃいけない。財布の中に押し込んだ。あとで別の紙にメモしておこう。鈴蘭優のポスターに原本ははさみこんでおこう。

雨はまだ激しく降っている。すっかり夜。もう六時近い。バス停まで、こうもり傘でふたりで入っていこうと決めた。

佐賀さんがお手洗いに行っている間に、会計をしてもらおうとした時、ぽこんと僕の肩を叩く人がいた。

まずい、誰かいるのかな。

恐る恐る振り向いた。

「今日は、サービスだぞ」

父さんだった。いつも来る取次の営業さんとふたりで打ち合わせしていたらしい。ふたりでにやにやししながら、手を振って出て行った。

もちろん、ふたりぶんの支払いは終わっていた。

総田には、「中学演劇脚本集」を一通り読んでおくと連絡した。

青大附中評議委員会ご一同様がいらした時に、テーマを「いじめ問題を扱った演劇の上演について」にしておくのだから、詳しく調べておくのは義務だろう。うちの店にそんなマイナーな本があるわけもなく、仕方なく図書館で調べた。

文字を読むのは慣れている。どれもこれも、くさすぎる。

先生と生徒が喧嘩したり、いじめたり、体罰あったり。いろんな出来事が学校内で起こるのだけど、どの話もハッピーエンドの大団円。こんな話、僕だったらすぐに寝ちゃうだろうにな。学校内の九割はおとひつちゃんと違う感性の持ち主である以上、他の奴もそうに違いない。

僕は途中、飛ばし飛ばしし読み終えた。

さっきたんが図書館の入り口でこっくりと僕に頷いている。

なんか用かなあ。

文字読み過ぎて、うんざりしていた僕は、さっきたん hands を振って呼び寄せた。きつと来てくれるんだ。いつも僕の呼びかけを無視することないんだから。

「佐川くん、どうしたの、その本」

「ほら、来週青大附中の評議委員会の人たちがうちの学校に来るから、そのテーマに使う資料を読んどかなくちゃって。こんなかび生えた話、やだよなあ」

一行、学園ものの台詞を読み上げてみた。さっきたんはお下げ髪の手先をなでて聞いていた。

「『いいか、お前ら、弱いものいじめしたくなるっていうのはな、自分の中に同じ弱さを見てしまうから、ついいらいして腹が立ってしまうんだ』」

「なあにそれ」

咽がいがらつぽくてうまく声が出ない。おすもうさんみたいに、つぶした声で続けてみた。

「『お前らがいじめているのはな、お前ら自身だ。一番弱虫で惨めな自分をこれ以上傷つけてどうするんだ。いいか、お前自身を守りたいんだったら、今からいじめるのをやめるんだ。自分の醜いところをしっかと思つめるんだ』」

もちろん、一本調子の棒読みだ。さっきたん、しばらく唇をかみ締めていた。ご機嫌悪くなったのかな、と様子を見ると、全然違った。笑うのをこらえていただけだった。

「いいよ、さっきたん、笑ったって」

「ごめんね、佐川くん、俳優さんみたい」

咽の奥でくつくと音をさせて、さっきたんは僕の隣りに座った。

「どういう台本なの」

「どっかの中学演劇部で使った台本なんだって。うちの学校、演劇部ないだろ。いつも学校祭の間際に先生たちがめばしい奴に声をかけて、集めるって感じだろ。俺、今これ読んで思ったよ。去年の学校祭でやった『彦一とんち話』の方がずっとましだった」

「でも、佐川くんが出るんだったら面白いのかもしれないわ」

あいかわらずさっきたんはおとなしめのすうつとした笑顔を浮かべていた。

何度見ても、いやな気持ちにならない顔だ。

「さっきたん、時代が古すぎる学園演劇なんて、出る気になれるかなあ。俺はやだなあ」

「でも、先生たちは演劇をまたするつもりなんですよ？」

さっきたんには詳しい事情が伝わっていないようだった。四月以降に先生たちがどんどん話をまとめて、現在の一年生たちを中心にしてやるつもりなんだろう。現三年は今のところ受験一色になるだろうから、ただ眺めているだけでいい。

「うん、青大附中の評議委員会って、冬休みに毎年、怪盗ルパンや

名探偵ホームズのような話を劇にして、ビデオに撮っておくんだって。それを学校内で流したりするんだって。それも見る分には面白そうだけど、同じことをうちの学校でするなんて、できないよ」

「ホームズとかルパンとか？」

さっきさんは戸口付近の本棚を指差した。江戸川乱歩全集がずらっと並んでいる。

「そうだよ。次は『怪人二十面相』あたりやるんじゃないかな」

周りに気遣いながら、さっきさんはまたまた、咽を鳴らしてうつむいた。

昼休みも終わった。公立高校入試が終わってすっかり気抜けした顔の三年生たちとすれ違った。一応、すれ違ったら礼をするのが決まりだ。忘れないようにしておけば大丈夫、リンチなんてされないですむ。

僕はエンピツの先を無意識につぶしながら、情報の整理を行うことにした。

ある程度おとひっちゃんや総田から話を聞かせてもらったなら、ふうんと頷いた後で、自分の中から湧き上がってくる答えを待つ。なんも考えない。ただ、勝手に噴出す油田みたいなものを待つだけなんだ。地理で習った、中国の油田みたいな感じにだった。ちなみに苦手の英語だ。さっき、総田からノート貸してもらったから、当てられても訳を読み上げればそれでいい。

あんな恥ずかしい劇をやらされるなんて俺はいやだけど、でもこれで通した方がいいなあ。

絶対に僕の出番がないこと分かっているからなあおさらだ。目的が決まっているから大丈夫だ。自分に関係なければ問題はなし。

先生たちとおとひっちゃんに受ければ、あとはみんな勝手に寝てもらったっていいんだし。思いつきり勾うような青春ドラマをやるうってことにしたらどうかなあ。

総田はまず

「冗談じゃねえよ、こんなくせえ話に誰が乗るかって」と言うだろう。当然だ。

おとひっちゃんは

「真面目な話の方がいい。いじめは決してよくないことなんだってことを真つ正面から突きつけるっていいことだと思うんだ。けど、一年時の『彦一とんち話』みたいなものにはしたくないから、みんなでもっと話し合ったほうがいいと思うんだ」

って言うだろう。これもまたひとつの考え。

僕としてはどうでもいい。

これから先、生徒会が青大附中の評議委員会から参考意見をもらって、どんな風に演劇を盛りたてていけばいいかを話し合って、その合間に杉本さんをぐっさり刺せばいい。できれば足もとを。もう二度と、水鳥中学なんて来たくない、やめてやる、と思うくらいに突き刺せばいい。

佐賀さん、ちゃんと健吾くんに話したのかな。

本人が目の前にいて、もう逃げも隠れもできない状況下の中、僕は「あくまでも俺が考えた案なんだけど」

と前置きして、杉本さんのしたことを全部しゃべってやるだろう。もちろん青大附中の連中には……健吾くんには話さないとまずいこともあるけど……内緒にしておこう。僕が佐賀さんから聞き出したことなんだ、ってばれたら、杉本さんの逆恨みに火がついて犠牲になっちゃうかもしれない。

偶然、僕が思いついたことであって、佐賀さんとは一切関係ない。思い当たる節があるんだったらそれは偶然だ。

僕に責任なんて全然ないし、もちろん佐賀さんらしきいじめられっ子の話が出てきても、それは偶然でしかない。そう言い張ればいい。

悪いけど杉本さんって、おとひっちゃんが嫌っていることに気付かないほど鈍感な女子なのだから……なにせ、顔見れば一発で感情がもろ見えのおとひっちゃんなのだ……こっちが強気でつぶねれ

ばあきらめるだろう。それどころか、「私が悪い」と思ってくれるかもしれない。反省して、もう二度と佐賀さんをいじめないようにしてくれば最高だ。蟬人形委員長がきつと慰めてくれるだろう。

立村か。あいつも頭悪そうだなあ。

成績はどうだかわからない。でも、佐賀さんと珈琲紅茶のお付きあいをしてから、僕の「成績」に関する考えはまるつきり変わった。順位がどうのこうのじゃない。杉本さんが学年トップを保つていようが、おとひっちゃんが今回もトップであろうが、所詮それと本当の頭のよさとは違うんだってこと、証明されてしまった。

どんなにいじめられて、エレクトーンの試験で失敗してしまうくらい傷ついても、杉本さんのことを思い遣ろうとする佐賀さん。

周りのことをみな見極めて、なんとか必死に対等になろうと努力する佐賀さん。

ほんとに頭のいい人、ってこういう人なんだ。

俺、そういう風に、してるよな。

職業科志望、それがどうした！

もし、杉本さんがいい性格だったら、きつとおとひっちゃんのお間抜けぶりをさらけ出して、幻滅してもらって方法も取れたのにな。

杉本さん以外の女子にだったらそうしてただろう。他中学の女子で、しかも好意を持ってくれている子相手だ。好き好んで傷つけたとは思わない。おとひっちゃんはきつと、そう思っている。大っ嫌いなタイプだとしても、決してつっぱねたりできないに違いない。おとひっちゃんは紳士だ。

けど、相手は「ふつう」の子じゃないのだから仕方ない。

逆恨みする執念深い、人を平気でいじめる最低女。

僕が佐賀さんの情報を丸呑みして言っているといわれればそれま

でだろう。

お前がしていることもいじめじゃないか、と突っ込まれば言い訳できない。

たぶん他の奴が同じこととしていたら、僕も止めるだろう。

でも、杉本さんに対してだけはどうしてもふわふわりんとした気持ちになれなかった。

総田と例の郷土資料館で待ち合わせすることにした。天気は良かった。大雨の後はだいぶ春めいてきているようすだった。雪と泥が完全に一体化していて、靴がどろどろ。あとで洗濯する母さんに怒鳴られそうだ。制服のままで行くことにした。

「おっす」

総田がもう来ていた。交流会準備でくそ忙しいであろう生徒会室、どうやって抜け出てきたんだろう。

いつもの真ん中席に座った。また人がいない。経営成り立ってるのかな、いつもこんなながらだと、とうちの父さん母さんも話していたっけ。僕もそう思う。総田とふたり並んで座り、膝を開いて両手を置いた。ふっと一息ついた。

「おとひっちゃんはどうしてるの」

「あいつひとりでなんか書類作ってるぞ。例の『いじめ問題』用に使うコピーの下書きをさ。けどなあ、どうせやるなら俺たちが適当に、演劇の台本出して、『これどおっすか?』と声かけりゃ、それでいいような気がするけどなあ、んで」

「別にいいよ。おとひっちゃんにはやりたいようにやらせておけばいいよ」

僕は、借りてきた「中学演劇脚本集3」なる、教科書の親戚みたいな本を一冊取り出した。

緑色の表紙で、なんかつまんない。

「俺も演劇やれってか。やーだね」

「出る奴はみな一年か二年に押し付ければいいよ。内川会長だっている、それより、なにより、これどうかな」

一通り目を通してみて、使えそうな脚本を用意しておいた。さっきたんに読んできかせた奴ではないけれど、内容は五十歩百歩だ。

「先生連中に受けがよさそうな、関崎好みのやつかよ」

「とにかく、あらすじだけ読んでみてくれないかな。総田教授」

読む気配なしなので、僕は自分の口で言うしかなかった。ひじでつつついた。

「この話、ふたりの女子が出てくるんだけど、ひとりがどこかのお金持ちのお嬢さまで、同級生の女の子を取り巻き使っていていじめてるんだ。こんな話、今時ドラマでもやらないけど、結構いじめたりする場面がすごいんだ。リンチっぽい場面もあるんだよ」

「うわあ、さむいば出そうだぜ」

「でさでさ、いじめている女子はいばっているけど、実は大の弱点があって人前で歌うことができないんだ。自分が音痴だから。そこで、いじめている女子にわざと人前で歌う役を押し付けようとするんだ」

「それってなにか。ギャグでやってんのか」

「ギャグじゃないから怖いんだよ。あらすじだけ言っちゃうよ。そのいじめられっ子はご都合主義なんだけど歌がうまくて、周りから拍手喝采を浴びちゃうんだ。それを見ていたいじめっ子はなんとしても自分が勝たなくちゃと焦り始める。うーんと、途中いろいろあるけど、いじめっ子は悩みに悩んで、自分も人前で歌う練習をしていじめっ子を負かそうとする。けど簡単にはいかないよね。結局音痴をさらけ出してみんなから大笑いされるんだけど」

「聞きたかねえよ。そんな劇やるんだったら俺、すぐに帰るぜ」

「とにかく聞けよ。いじめっ子の女子がすつくと立ち上がって『私も一緒に歌うわ、みんなで歌いましょう』と、生徒全員に壇上で呼びかけて、手を取り合って歌うんだ。そして最後に抱き合うんだ。」

幕って感じ」

「おえーっ、絶対やだやだやだ。俺は反対」

総田、首と腰をくねくねさせてのた打ち回っている。僕も本音はその通り。こんな劇、本気で上演している学校あるんだろうか。末尾の発行日を見たら、僕の父さんが生まれる前後の脚本だ。「冗談じゃない。時代を考えろっていうんだ」。

「でもさ、こういうことが、本当にあったとしたら、どうする？」

「本当ってなにをだ」

「つまり、杉本さんって女子がいじめっ子のようなことを、本当にやっていたとしたら」

総田の眼と口が、一緒につりあがった。ぴんときたな。

「あの女子、か」

「そう、裏付けはもう取ってるよ。おとひっちゃんに言わないなら、教えてやるよ」

僕は簡単に、佐賀さんと健吾くんから聞いた杉本さんの行為について説明した。

「外側だけじゃなくて中身も腐ってるのかよ。俺だったらぼこぼこにリンチしてやりてえな」

「だろ、僕も同じだよ。そういう子に好かれたらおとひっちゃん、耐えられないよ。しかも水鳥に乗り込んでこられたら、たぶん死んじゃうよ」

大げさだけど、大の本音だ。杉本さんの性格はあまりにもひどすぎる。おとひっちゃんが青大高校受験にもし失敗したら、たぶん杉本さんのせいだ。

「別に俺としては、魔性の女に食われてもらった方が相手も関崎も本望ではないかと思うんだが」

「だめだよ。おとひっちゃん食われるだけならいいけど、水鳥中学にも足をつつこんでくるんだよ。内川だって巻き込まれて大変なことになるよ。とにかく集めた情報からするとすごいんだ。先生たちですら、追い出そうとしてるんだって」

僕が強く説明すればするほど、総田の顔は引きつっていく。

「だから追い出すしかないんだよ！俺、水鳥中学生徒会のためにもそうだし、おとひっちゃんのためにも、それからもちろん、総田、お前がやりたいことを成功させるためにもそう言ってるんだよ。ね、協力してほしいんだ」

佐賀さんと一緒に眺めた青潟市の古い地図。あの地図はかなり古い時代に作られたものらしいけれども、ほとんど縮尺とか当たっていると習った。本当のことって、結構長持ちするもんなんだ。直感って、だから大切だ。総田も僕の方をちらっと見て、腕を組み、十秒沈黙した。

「わかった。佐川の案に乗ってみるか」

僕はさっそく、案を一気にしゃべりまくった。メモには残さない。総田の頭だから、すぐにすうっと叩き込めるに違いない。証拠が残っていたら、おとひっちゃんに半殺しにされるだろう。

「つまりさ、この台本を少し水鳥中学生徒会でいじってみたってことにするんだ。僕が聞いた杉本さんのすごい過去の話、ほとんど引用できると思うよ。ほら、いじめっ子が音痴だって話あっただろ。そこを、ピアノにしちゃうんだ。杉本さん、ピアノの先生とけんかしてやめちゃって、上手になった友だちをずっといじめてたっていう話を信頼できる情報筋から手に入れたんだ」

佐賀さんだとは気付かないだろうな。たぶん大丈夫だろう。

「ピアノが弾けないくせに、ピアノの演奏ができると自慢しちゃって、自爆するんだ。けど、あわやってとこをいじめられっ子の彼女に助けられるんだ。そして、両手をついてごめんなさいって謝るんだ。ところが周りの男子たちは彼女のことを絶対に許さないってぼこぼこにしようとする。ところがいじめられっ子の彼女は立ち上がって、『いじめを繰り返すのはここでやめましょう。私はあなたも、そして私をいじめた全ての人を許したいの』とか、白々しい台詞を言う。あとさ」

調子に乗ると僕は怖いぞ。総田もふむふむとうなづいている。ちゃんと、聞いていてほしい。

「この台本にもあるんだけど、いじめっ子が横恋慕している男子がいるってところ。そのまんま使っちゃうんだ。それ本当のことだからさ」

「へえ、そうなのか」

あまりしゃべってしまうのは何かとは思ったのでばかす。イメージはもちろん、バスケット部の主将様である。

「それで、その男子はいじめられっ子のことが好きなんだ。何かがあるとすぐ、いじめられっ子を守ろうとするんだ。いじめっ子は男子によってしょっちゅういじめられっ子にされる。でもめげずに男子を追ういじめっ子。この辺、ギャグっぽくすると受けるなあ」

「佐川、お前バラエティーのシナリオ書きになれよ。才能あるぜ」「ないよそんなの。で、もう一つ、仕上げただけだよ」

大切なのはここだ。僕にははっきり言って、脚本書きの才能なんてないけれど。

「唐突に、ここで『芦毛の王子さま』を出すんだ。ひょっとして、知らない男子がやってきて、いじめっ子をお救いするんだ。みんなにぼこぼこにされているいじめっ子を、いじめられっ子を守ろうとするんだけど、女子だからそれができない。そこで、馬に乗った別の男子がやってきて、そのいじめっ子を諭す、てか、叱る、てか、抱きしめる。彼女は救われる。で、最後は大合唱。どうかなこれ。ほとんどギャグだけだよ」

僕はラスト部分はかなり、意味ありげに説明したつもりだった。

「『芦毛の王子さま』か。お前、競馬好きだよ」

「父さんから教えてもらってるんだ。結構僕が予想すると、当たるんだよ」

「なまっちよろい、うすらばけの、王子さまか」

「本気で演じるんだったら、内川にやってもらってもいいけどさ」

「いや、青大附中からヘルプでもらおう！」

さすが総田。その辺呼吸を飲み込んでくれている。おとひつちゃんに説明するとしたら、一日あっても大変だろうけど、一発で納得OKだ。

『芦毛の王子様』立村評議委員長の顔が思い浮かんだはずだ。

早い話、青大附属中学発の情報をそのまま、既成の中学演劇脚本に盛り込んでいけばいい。僕も面倒なことはしたくないし、交流準備会用こっきりの話で終わらせたい。どうせ、公立は受験の関係であまり面倒なこととはできないと、顧問の先生も言うだろうし。ただ、青大附属がもとと演劇ネタ好きのところだと聞いているから、
「こんなのはどうですか？ 脚本としては使えますか」
と聞いてみるだけのことだ。

「準備会」だからこそ使える手だ。本式の交流会になったら、僕がいきなり持ってきた脚本なんかを利用することなんてできやしない。おとひつちゃんが知らないうちに計画するなんて無理だろう。おとひつちゃんが気付かないうちに、杉本さんを落ち込ませてこれっきり水鳥中学の敷居をまたがせないようにすることが、第一の目的。おとひつちゃんが杉本さんタイプの女子を嫌っているというのが証明するのがその二。

仕上げは、これだ。

僕は総田に、あとでもう一度電話することを伝えた。学年万年二番の頭脳で、さらさらっと計画書こしらえてくれるだろう。

「それと、もうひとつお願いあるんだけど、聞いてくれるかな」

実はこっちの方が僕にとっては重要だった。

「いつも、総田が使っている図書準備室の鍵を、当日だけ、貸してほしいんだ」

「へえっ？」

そりゃ驚くだろう。僕は前から総田が、こっそり鍵を作って川上女史と密会していることを知っている。去年の秋、総田が生徒会室に二本の鍵をキーホルダーにぶら下げていたのを見て、冗談半分で、

「これ、生徒会関係の鍵か？」

と聞いてみた。そしたら曖昧な言い方をしていたので、すきを見て学校内、すべての南京錠に鍵をあわせてみた。見事発見、ただそれだけのことだ。

「おい、何言ってるんだ、佐川」

「いつも持っている、車のついたキーホルダー。あの中の一本がそうだろ？ もう一本は生徒会室用でさ。確か学校の鍵はスペア禁止だって聞いてたけど、総田は賢いからすぐに作っただね」

校則違反もいいとこだ。見つかったらまず違反カード五枚くらい切られてついでに停学だ。

「佐川、何を言いたい」

「だから、一日だけでいいんだ。あの部屋の鍵がほしいんだ。あそこで俺が待機していたほうよかったらそこにいるしさ」

何度か僕も下見で覗き込んでおいた部屋だ。かなり埃が舞っているけど、奥のごみ箱にはジュースの空き缶とかポテトチップスの空き袋とか、たくさん入っていた。つまり、あそこで食事も可ってことだ。駄目でも食べる。持ち込んで

「要するに、お前専用の待合室がほしいってことか」

「そういうこと。一日だけでいいんだ。あそこをまるまる、貸してほしいんだ」

これ以上脅迫する必要なんてない。生徒会副会長が露骨な校則違反をしていることを、ばらすかどうかなんて低レベルなことを言わなくたっていい。総田にはその辺の呼吸も飲み込んでくれている。僕も、困った顔で頭を下げる。

「ごめん、ほんつとに今回だけ。ちゃんと部屋掃除しとくから！川上さんも居心地いいようにさ！」

さあ、刺さったか！

思ったとおり、総田教授の顔は黒く染まった。

「佐川！」

「頼む、ほしいな」

片手を出して、今度はにつこりと笑いかけた。

「ちくしょう、お前、能力を間違ったとこに使いすぎてるぜ」

サーキット用の車がキーホルダーになっている鍵。手の中に落としてくれた。

「どうせ、しばらくは使う気もねえよ。先公どもの見てない隙を狙って、好きなようにしろ！ どうせあの部屋、あかずの間なんだからな。単なるごみ捨て場ともいう」

ラッキー！ これで準備十分間に合うよ。

総田の思わぬサービスに、思わず顔がほころんだ。

どうせあの二人のことだ、別の密会場所を開拓したんだろう。

もし、健吾さんと佐賀さんが僕とこっそり相談する必要があるならば、そこに連れてくればいいし、もし佐賀さんを「委員会外の人だから入ってきてほしくない」という扱いにするんだったら、それでもいい。僕は裏の手を使って佐賀さんだけをここにひっぱってこれるってわけだ。

完璧だ。青大附中の体育準備室と同じような場所。

問題は土曜日ということで、先生や用務員のおじさんが覗き込まないかってことくらいだけど、総田もうまくやっているんだ、たぶんなんとかなるだろう。その辺も総田に釘をさしておこう。

明日、昼休みを使ってもう一度チェックしておこう。もちろんおとひっちゃんには内緒だ。

あ、忘れてた。まだやることがたくさんある。

家で父さんの

「デート帰りなのか？ のぼせてるんだろ？」

とつつく声を無視して電話をかけた。

もちろん電話番号は、毎日眺めているので暗記している。

女子のうちに電話をかけることには慣れている。けど、佐賀さんは青大附中の人だから、ものすごいお嬢さまかもしれない。電話をかけるとまず家政婦さんが出て、それから両親が出て、最後にやっと繋がるなんてことないだろうか。アホな想像を繰り返した後、気合を入れてダイヤルを回した。最初はさすがに家政婦さんじゃなく、たぶんお母さんらしい人。思わず

「あの、水鳥中学生徒会の佐川と申します」

と大嘘ついて名乗ってしまった。全くのでたらめってわけじゃない。生徒会には関わっているけど役職があるわけではないんだから。

「お待たせしました」

そんなに経ってないのに、声が電話だとくるくると丸まって聞こえる。佐賀さんの髪の毛みたいだ。ほわほわっとさわりたい。

「あの、俺、佐川です。土曜のことについて、健吾さんに伝言頼みたいなって思ってたんだ」

佐賀さんは僕のもりどもり説明した言葉を一通り聞いてくれた。

「新井林くんは、土曜日、来ない予定なんです」
きっぱり答えた。

「え？ 健吾くん、だって評議員だろ？」

「ええ、でも新井林くんは、バスケット部員でもあるんです」

知ってる。でも、まだバスケット部同士の交流会は始まっていないはずだ。

疑問をぶつけると、佐賀さんはためらいがちに答えてくれた。

「私、新井林くんに言っただんです」

小さなくしゃみが合いの手に入った。

「二年になったら、うちのクラスの評議員になりたいから、今のうちに参加させてほしいって。そうしたら新井林くんも賛成してくれただんです。もう梨南ちゃんが評議員になれないのだったら、新井林くんと話の合う人がなった方、いいかなと思って。それで、新井林くんも、私が参加するんだったら安心だからって、自分の優先したいほうを取ってくれたんです」

次期評議委員？

佐賀さんのクラスは確か、健吾さんと杉本さんが評議委員のはずだ。前の話で、杉本さんが担任の権限で落とされるといふのは決まっているらしい。空いたポストに、佐賀さんがもぐりこむというところか。

さすがだ。やるなあ。

その通りの言葉を伝えた。佐賀さんはまた、かすかに笑い声を立てた。咽のところでぐもる、小さな声だ。

「新井林くんのおまけでは、参加したくないし、それに、佐川さんにも失礼だと思ったんです」

「俺に？」

佐賀さんの声が凜と響いた。

「私のために、そこまでしてくださる佐川さんの姿見て、私、思いっきり反省しました」

俺の姿？

身体が震えてくるのが分かる。変なところが興奮している。やばい、初めてだ。

「私も、私のやりかたで、自分の考えていたことを梨南ちゃんにはつきり言わなくちゃって、思ったんです。けど、梨南ちゃんは私をまるつきり無視してます。話し掛けても、逃げます」

逃げるかよ。

本人は無視しているつもりなんだろうが、佐賀さんには「逃げる」としか見えないのだろう。おとひっちゃんがさっきたんの家を前にして「用事がある」とか言って逃げたのと同じように。僕の目と佐賀さんの瞳、ぴったり重なっている。

「だから、逃げ場所のないところで、一度話し合うつもりなんです。お願いがあるんですけど、聞いていただけますか」

まだ身体と頭が熱くなった状態で、僕は頷いた。

「いいよ、できることだったら」

「今のことを、当日まで誰にも言わないでいただけますか。このこ

と、梨南ちゃんにも、立村評議委員長にも内緒にしておきたいんです。私がもし来ると知ったら、梨南ちゃん何をするかわかりません。また、言い訳くっつけて逃げます。梨南ちゃんは自分しか通用しない言い訳が天才的にうまいんです」

すごいことを言ってるよ。

「だから、私、梨南ちゃんと一対一できちんと話をしたいんです。私がちゃんとひっぱって、きちんと決着をつけたいんです。そして、きっちりと、評議委員になりたいんです」

申しわけないけど、僕は完全に全身、ゆでダコ状態だったと思う。風呂上りなのか、と突っ込まれても言い訳できないくらい。

「いいよ。わかった。俺もそれは内緒にしとくよ。けど、どこで話し合いするのかなあ」

「大丈夫です。途中で私、梨南ちゃんが言い訳できない理由を言って、連れ出します」

言い訳できない理由？

佐賀さんはそれを詳しく教えてくれなかった。たぶん佐賀さんのことだ。杉本さんの弱みを知っているんだろう。僕がおとひつちゃんの弁慶の泣き所を知っているように。

「わかったよ、でも無理しない方がいい。俺もちゃんと、佐賀さんが過ごしやすくするようにするからさ」

すっかり汗が流れてしまった僕だが、電話の声は自分でもえらく冷静だった。

だって、「佐川さんの姿を見て」とか言われたら、変に興奮しているところなんて見せられないじゃないか。

興奮の残りは後で、鈴蘭優のポスターを貼って考えよう。ずっと部屋に貼るかそれとも机の中だけにしておくか、迷っていたけど、もう限界だ。毎日眺めよう。寝る時、見上げてても大丈夫な場所に。もう父さん母さんに何言われたってかまわない。声の記憶だけじゃ、もう眠れない。

図書準備室は総田の言うとおり、ほとんど廃墟だった。なんでこういう部屋が残っているのか不思議だ。一応、掃除当番は割り振られているらしいけれども、見えるところだけ適当にほうきではく程度らしい。テーブルの上に本棚が積み重なっている。身体をかがめれば十分姿を隠すことができる。もちろん食べ物も持ち込んで平気だ。唯一心配なのは、間違つて南京錠を下ろされてしまうことくらいだけど、万が一のために総田にも帰りに一声かけてもらうよう頼みである。まあ、そんな心配はないと思う。佐賀さんと話をした後、はすぐに学校から出て、また郷土資料館あたりに行けばいい。

汚いよなあ。こんなところ。まあ僕も、こんなことやっていること、ばれたら違反カード切られるだろう。

今まで一枚しか出されてないんだから、ちょっとくらい多くなつたって平気だ。

佐賀さんが来るんだからリスクは覚悟の上だ。

掃除をして、パイプ椅子を二脚用意し、本を全部重ね合わせた。

もう誰も読まないような本ばかりだった。さつさと片付けた後はすぐに玄関で、青大附中評議委員ご一同様をお迎えしなくてはならない。顧問の萩野先生には、僕が自主的に参加したいと申し出たということ、おとひっちゃんが話を通してくれた。去年の国語担当だったこともあつて、すぐに萩野先生はOKを出してくれたらしい。その代わり、プリントを全部手書きでこしらえるという面倒な仕事を押し付けられた。なんでも、先生たちの都合でコピー機が使えないらしい。しかたないからガリ版を使うことになった。こういうところこそ、会計の川上さんとかを使えばいいのに、おとひっちゃんは僕にすっかり原稿を押し付けた。

「悪いな、雅弘。俺も一応は目を通しておいたんだけどな、総田の原稿だ」

総田の奴、全部俺の内容を丸写したんだな。

「すっげえ真面目な台本見つけたみたいでなあ、あいつも珍しいよなあ。俺、驚いたよ。古い時代の学園ドラマみたいなんだけど、総田と川上がふたりでいろいろ考えたらしく、現代っぽくアレンジしたんだとな。萩野先生にはまだ見せていないんだが、たぶんあれだったら大丈夫だ。青大附中の連中もきつと驚くぜ」

おとひっちゃんが何も考えていないのは明白だ。あらずしもキャストも、ラストに「いじめっ子を救いにくる王子さま」が出てくるところも、みんな僕の指定通り。もう少し、総田も考えたっていいのになって僕は思った。でもまあ、本気で演じるつもりのない台本だから、これでいいだろう。

総田にはあと、内川たちへ、若干の情報提供をしておくよう頼んでおいた。

この中のネタが、青潟市内の中学で実際起きた……青大附中とは言わないが……出来事であること。こういう人間をどう思うかを、道德の授業みたいに真剣に考えるふりをするとかを。

要は、杉本さんの前で、杉本さんらしいキャラクターのことを、おとひっちゃんおよび水鳥中学生徒会の人間は大嫌いなんだってことを、断言しちゃえばいいのだ。おとひっちゃんの正義感はたぶん、台本中のいじめっ子に当てられるだろう。かわいそうなのはいじめられっ子だと言っだろう。何も考えていない可能性はあるけれども、杉本さんだってそのくらいあてつけられたことは気付くはずだ。

問題は、逆恨みの恐ろしさってところだ。けど、大人じゃあるまいし、殺し屋を頼んだりするようなことはないだろう。

杉本さんがこれっきり、水鳥中学に顔を出さない、かわりをもたないようになってくれれば、あとは八つ当たりだろうが逆恨みだろうが勝手にしてもらってかまわない。僕たちは全く手を汚していない。ただ単に、「演じるための台本をこしらえてみた」だけのことだ。

あとは総田と内川会長が頭を並べて、くさすぎる台本を一切切やらないことに決めるかだ。総田のことだ、

「冗談じゃねーよ、さむいば立つぜ」

とばかりに、あっさり却下してくれるだろう。まあ悪いけど、一年の時に演じた「彦一とんち話」をそのまんまやつてもらったってかまわない。どうせ僕たち、次期三年には関わりないことだ。

佐賀さんが来る。佐賀さんが来る。生の佐賀さんに会えるんだ。

毎朝拝む真上のポスター。寝ぼけ眼だと、鈴蘭優の顔がぼんやり映って、佐賀さんのふわふわした感じに見える。

見つめていると、また変な気持ちになる。

貼ってからずっと、変な気持ちになるのを夜までがまんしてばかりいる。クラスの野郎連中がみんな、していることをしたくなるってこう言う時なんだろう。こっそり、雑誌を引つ張り出てきて社会勉強を試してみたり、試してみたりする。おとひっちゃんにはあまり話したことのない感覚だった。

おとひっちゃんも、さっきたんのことを考えてこういうことしてるのかな。

なんか想像つかないけど、ありえないことじゃないような気もする。総田も川上さんのことを考えて、きつとこういう気持ちになったりしているんだろうし。口に出すことじゃないけれども、みんなが女子のことでひそひそ話している理由がわかるようになってきた。

だって気持ちいいんだ。しょうがないよ。

もう一度拝み直した後大急ぎで服を着換えた。今日は授業が二時間あって、あとは二時間学校内のワックスかけだけだ。

学生服もだいぶてかてかになってしまった。くさかったらいやだ。何度か外で両肩の縫い目のところを持って振った。

めったにいじらない頭も、少しだけ前髪をあげてみた。顔がべとべとしているのが気になる。

別におしゃれしているわけじゃない。やはり、今日は礼儀かな。健吾さんと話をするなら何にも気遣いしなくたっていいけど、やっぱり佐賀さんが来るんだから、しかたない。

けど、ほんとに今日佐賀さんが来ること、内緒にしておいていいのかなあ。

もちろん杉本さんを逃がさずに話し合いをすることが必要なら、それがベストだろう。でも、佐賀さんと杉本さんは同じクラスだ。健吾くんだってそうだ。うまく隠し切ることができるとはだろうか。青大附中の事情はよくわからない。

僕はしばらくあれこれ想像してみた。天井の鈴蘭優ポスターを見上げて、うんと頷いた。

佐賀さんだから、たぶん大丈夫だろうな。

おとひつちゃんとは声だけかけて教室に入った。二時間だけにせよ、授業があるのはかったるかった。三時間目からいよいよワックスかけに入った。いわゆる「うんち」と呼ばれる黄土色の練りワックスを、先生たちがぼつん、ぼつんと落としていった。それこそ、馬とか牛のふんみたいにだった。雑巾を片手に、少しずつなじませて拭いていく。のどにつんとくる匂い。おなかの中に何にも入っていないせいか、むかむかした。口を覆っても、わつくすの匂いでまた吐きそうになった。どうしたんだろう。いつもだったら平気なんだけどな。

「佐川くん、どうしたの。具合悪いの？」

さっきたんが近づいてきてくれた。

「ちよつとおえつときただけだよ」

「無理しないで保健室に行った方がいいんじゃないかしら。保健委員がいらないなら、私がついていってもいいのに」

そんな大げさじゃないよ。

いつもだったら、さっきたんってやさしいなって思えるんだけど、今の僕は意地でも倒れるわけじゃない。邪魔だった。

「いいよ、なんでもないよ」

ワックスが膝について、たぶん匂ってしまっただろう。それもむかつきた原因のひとつだ。

よりによってなんでこんな、ワックス大掃除の日に、交流準備会なんてやるんだろう。だんだん考えてきていやになった。

要するに、さっきたんとおとひつちゃんがかくつついてしまえば一番いいんだよな。そうすれば、俺がこんなよけいなこと、考えなくたっていいのにな。全く、なんで俺にばかりくつついてくるんだろ。さっきたんはおとひつちゃんですら十分じゃないかよ。

なんでかわからない。ずっといい人だっと思っていたさっきたんのことがうざったくなった。

あつちに行つてほしくなった。

「悪いけど、俺、ほんと具合悪いから放っておいてもらえないかなあ。ほんとに吐いちゃうかもしれないからさ」

「佐川くん、ごめんなさい、けど私」

まだしつこく寄つて来るつもりなんだろうか。いいかげん僕も頭に来た。

「俺以外にもおとひつちゃんがいるだろ。おとひつちゃんだったらさっきたんにいろいろ相談したいことあるみたいだよ」

まずい、言い過ぎた。

自分でも何を言い出したかわからなかった。僕はただ、さっきたんにあつち行つてほしかっただけだった嫌いになつたわけじゃなくて、ただ今は話をしたくなかつたただけだった。なんでおとひつちゃんのことなんか口走ってしまったんだろう。むしうにいらしていい。

「今日もほら、おとひつちゃん困つててさ、しつこい青大附中の女子が来るからさ、逃げたくつてなんないみたいなんだよ。もしさっきたんが一緒にいてくれたらさ、きつとおとひつちゃん助かると思うんだけどさ。俺、悪いんだけどそのことで今、頭一杯なんだ。具合悪いとかなんとか言ってる暇ないんだ。じゃあ」

俺、やなこと言ってるよな。

おなかの中に寄生虫の大きいのが一匹いるみたいだ。言っても言っても言い足りない。

「佐川くん、ごめんなさい」

さっきさんは、とろりとしたワックスを雑巾の隅ですくった。背中を向けた。

だから、おとひっちゃんとさっきさんはくっついてしまえばいいんだよ！

まだ吐き気はおさまらなくって、僕はずっとしゃがんだまま廊下の板目をこすっていた。だんだんつるつるでかてか光ってくる。今日具合悪くなるなんて絶対にいやだ。

机をもとの形にもどして、四時間目授業が終わってから僕はすぐに教室を出た。総田とおとひっちゃんに頼まれていた脚本を持って行った。生徒会室には総田を始めほとんど生徒会役員全員が揃っていた。おとひっちゃんだけいなかった。

「あれ、おとひっちゃんは？」

いつもだったら時間厳守でやってくるはずなのに。珍しい。

「ま、少しくらい大目に見てやれよってことだぜ」

直前までむすつとした表情だったのに、いきなり総田が川上さんと顔を見合わせてにやついた。内川会長も相変わらぬほほんとした顔でもって、

「やっぱり関崎先輩は、人気あるんですねえ」

おとひっちゃん、何があつたんだ？

これからおとひっちゃんの晴れ舞台「水鳥中学生徒会主催・青潟大学評議委員会との交流準備会」が行われるっていうのに。学校祭の時だって、おとひっちゃんはやらなくてもいいことを自分からばりばりやっていた。ライバル総田の仕事まで、鼻歌歌いながら片付けていたって話だ。おとひっちゃんは、燃える奴なのだ。

「いったい、何か変わったことがあつたのかなあ」

「佐川、お前、知らねえのかよ」

意外そうに言うのはやめてほしい。なんでもかでも、裏工作するのが僕だなんて決め付けないでほしい。

総田は満足げににんまり、鼻毛を抜いた。

「お前でも知らないことがあるとはな。いやなあ、さつき、三組の生活委員さんが来てな」

さっきたんが？ 男子にも生活委員がいるのに、瞬時にさっきたんを連想してしまう僕も僕だ。

「関崎を呼び出して、連れていつちゃったんだぜ。いやあ、舞い上がっちゃったなあ。あいつも、いったい何を考えているんだかなあ、おい、ほんとにお前、知らないのかよ」

しつこく、僕の入れ知恵だと思っているみたいだ。そう思わせておいたほうがいい、と判断し、僕は脚本の原稿を一式、置いた。

「じゃああとは、俺がガリ版印刷してくればいいのな」

さっきたんがなんでおとひっちゃんを呼び出した？

佐賀さんのことばかり考えていて、頭の中がぼおつとしていた。さっきたんにひどいこと言ったなって気持ちになってきた。

おとひっちゃんのことを言うのはまずかったよなあ。

あれを気にしたのかなあ。

さっきたんも鋭い人だ。はつかねずみみたいな表情がやさしくて、今までだったらほおつと落ち着く感じだった。でもある日から他の女子と全然変わらんなくみえた。優しいし、親切だし、いい人だ。そこんところは変わってないけれど、いてもいなくてもいいって感じに最近はなってきた。さっきたん見るくらいなら、鈴蘭優のポスターを見ている方がいい。

けど、おとひっちゃんとのつながりになにか関係があるとしたら黙って見過ごすわけにはいかない。

「じゃあ総田、悪いけど、俺、別のところで印刷を片付けておくね」
「ああ、わかった。例のとな」

総田にしか通じない言葉でもって、僕は合図をした。

掃除と隠し場所を用意した、あの部屋へ向かう。

図書準備室に入った。通りがかりの先生に

「今日、交流準備会の準備でこの部屋借りてます。すみません」と謝っておいた。

僕は一応、成績悪くても先生うけがいいのであつさりを通った。真面目にしておいて正解だった。

インクで手がべっとりしてしまった。まだつめの中にワックスが入り込んでいたみたいで、紙の上に少し油が浮いてしまった。

ひとまずは青大附中評議委員連中プラス、水鳥中学生生徒会、あと僕の分をステイプラーで留めた。

僕の案通りにまとめられている「友情は音色とともに」という、読むだけでこっぴどかしい題名がどんと目立つ。

元の題は「友情は歌とともに」だった。歌ではなく、ピアノにしたので、題名もそれに合わせて書き換えたのだろう。

思いついて、僕は「ピアノ」のところを思い切って「エレクトーン」に直した。

もう一度印刷し直してこようと決めた。

青大附中の人たちが来るのは昼ご飯が済んでかららしい。僕たちも生徒会室で最後の詰めを行いながら、やきそばパンを食べることになっている。顧問の萩野先生が飲み物だけ、差し入れしてくれるらしい。

僕は「エレクトーン」を書き直した後、もう一度椅子を並べなおした。窓辺にはジュースを並べられる程度の場所が空いている。あとで佐賀さんをここに連れてこよう。ちゃんと総田にもその辺言い訳しておこう。おとひつちゃんにばれないようにしておこう。

おとひつちゃん、あれ、どうしたんだ？

二十分くらい必死に作業した後、もう一度生徒会室に戻った。まだおとひつちゃんが来ていない。

「なんでまだおとひっちゃんが来てないんだ？」

「ほらほら、玄関で青大附中連中をお迎えするんだと。ひとりいいんだと」

「ひとりでって」

またまた総田が唇をぎゅつとゆがませて笑った。

「厳密に言つと、ふたりだな。なあ、内川」

「ふたり、です」

さっきたんか？

お迎えは僕が担当してもいいなあと思っていた。いや、僕が行くつもりだった。

「え？ 生徒会役員は全員席に付いていた方がいいんじゃないかなあ。俺みたいな部外者の方が、案内係ってことになれば一番いいと思うけど。そういうの、決めてなかったのかなあ」

さりげなくいやみつたらしく言ってみた。総田にはお見通しだったらしい。まだまだ腹に一物ある感じで、

「計画変更だつてあつていいじゃねえかよ。ま、佐川、お前も陰でこっそり観察しろよな」

計画変更つたつて。

みんな僕の計画どおりだと思っているからこそ、詳しいことを教えてくれない。悔しい。しかたないので僕の目で確認することにした。

「職員玄関からだよね。会場は生徒会室だよね」

僕はあらためて確認しなおし、職員玄関まで走った。そろそろ、青大附中ご一同様到着時刻だ。一時三十分を予定している。

一階の廊下窓から見えるのは、赤茶色のつぶつぶがくつついた木の枝ばかりだった。

職員玄関の入り口は職員室の近くということで、かなり広々している。先生たちの何人かは今日早く帰るらしく、

「お、今日はお客様をお迎えか。佐川、がんばれよ」

と声をかけてくれる人もいる。早いうちに内申点稼ぎするのも、

いいことだ。

週番の生活委員もいなくなった。土曜日の校舎は、運動部の連中が廊下をランニングしていたり、菓子パンを食ったりする程度で、先生たちもみな職員室でテレビを観たりしている程度。職員室の中って煙草臭いからあまり入りたくない。

総田から聞いたところによると、場所は生徒会室内。面子は予定よりも大幅に減って、立村評議委員長以下三人だという。男子、女子合わせて二人ずつ。その中に佐賀さんが入っているかどうかは不明だけど、健吾くんがいないことだけははっきりしている。

おとひっちゃんを探すと、職員玄関にたつて、妙に硬直したまま突っ立っている。外はだいぶ明るくなっていた。雪が車の飛ばす泥はねで真っ黒に染まっている。土が出ているところは乾いていた。話相手は、さっきたんだろう。スカートが揺れているのが見える。

さっきたんと話してるんだ。

ワックスかけの時の言葉を思い出した。僕としてはどうしようもなくいらいらして八つ当たりしちゃったけれども、きつとさっきたんは気にしていないだろうと思う。どうせあさつてになったら忘れているだろう。

声が聞こえないのが残念だが、まあいい。ふたりを邪魔しないでやろう。

腕時計の文字が「13:30」と緑に光った。

そんな決意は、次の瞬間あっさり翻った。

「だからなんであんたがくるわけなのよ、はるみは評議委員と関係ないじゃない」

棒読みの女子声が聞こえてきた。仮にも職員玄関ですごむなんて自殺行為とは思えない。僕はあわてて玄関のサンダルをつっかけ、外に出た。

「申しわけありません。新井林くんの代わりで参りました」

敬語で全く意に介さず返事をしている、ふたつに結わえた長い髪。

いつもの髪型よりも幼く見えた。よくよく見ると、薄桃色のリボンを長めに蝶結びにしている。丸めて編み上げたいつものスタイルもいけれど、今日は一段と、守りたくなる。行動したくなる。

「どうしたんだ」

すでにおとひっちゃんがさっきたんを玄関の脇におっぱいたまま、割って入っている。

さすが、水鳥中学生徒会副会長。生徒同士のいざこざにも介入する。側でさっきたんは呆然としたまま、四人のブレザー制服連中を見つめていた。そつと隣りに近づき、僕はささやいた。

「何があつたんだろう」

「青大附中の人たちよね」

僕の顔をそつと覗き込むようにして、遠慮がちにさっきたんが答えた。掃除時の八つ当たりがまだ、ひっかかっているらしい。ここであやまつておいた方がいいかな。でもタイミングがつかめなくて僕も黙っていた。

おとひっちゃんにひっぱられてブレザー制服集団は玄関の松の根元にかたまつた。ため口叩いている相手は立村だった。相変わらず蠟人形顔している。申しわけなさそうにしながら、何度も頭を下げている。なにそうへこへこしているんだろう。挟むようにしてふたりの女子が寄り添っている。ひとりはおかっぱ髪、もうひとりは長くストリート。市松人形の不気味さが漂っている。立村に向かって、佐賀さんが視線をまっすぐ投げて、挑戦している風に見えた。

おとひっちゃんが立村に何度も話し掛けている。立村もおとひっちゃんと佐賀さんに小さな声で何かを言い返している。時折杉本さんをたしなめるよう、真面目な顔を見せている。もうひとりのおかっぱ髪女子が、杉本さんの側で肩を抱いて話し掛けている。

明らかに、揉め事だ。

他中学の揉め事に巻き込まれて行事中止、なんてしゃれにならないこととしてほしくない。僕はさっきたんから離れてすぐに佐賀さんに近づいた。

「おとひっちゃん、どうしたんだよ」

おとひっちゃんじゃない。聞きたいのは立村相手にだ。

「悪い、内輪もめを見せてしまったな」

舌打ちし、立村はおとひっちゃんに答えた。決して、僕にはない。

「新井林からは聞いていなかったけれど、佐賀さんもいきなりで、とまどったりしないか？ いや、来てくれたんだったら、別に参加するのは問題ないと思うよ。ただ」

言いかけたところ、即座に弾き返すような、棒読みの声に割って入られた。

「評議委員の集まりでありながら、なぜ関係のない人間が入るのですか。おかしいです」

「杉本、いいじゃないか。佐賀さんは新井林の代理なんだよ。四月からは他の委員会とか、有志とかも参加する可能性あるんだからさ」

「そうよ、ね、杉本さん、ちょっとびっくりしちゃったよね」

おとひっちゃんは杉本さんの方を見て、すぐに逸らした。話し掛けることをできるだけ減らしたい、そういうのが見え見えだった。

目つきが怖くて、佐賀さんの方へ近づいてきている。つまり僕の隣りに寄ってきている。気持ちはわかる。

「でも、今日は評議委員会を招いていただいたということですよ。それっておかしいです。あの馬鹿男子が何を考えていたのかわかりませんが、なぜ、委員会にも関わっていない人が参加するのでしょうか」

全く動揺していない佐賀さんの表情、心地よい。

かすかに薄笑いすら浮かべていた。よくよく見ると、唇も桃色だった。耳もとに手を軽くやった時、爪がぴかぴかに光っていた。大人の人がするマニキュアみたいだった。

「新井林さんの代行だったら別にかまわないから、中に入れよ」

同じく、立村を促すおとひっちゃん。早くなんとかしてくれってというのが見え見えだ。

「すまない、ほら、杉本いくぞ」

杉本さんに、心持ち優しい視線を向け、立村は二人並んで職員玄関へ向かった。おとひっちゃんは僕の方をちらつと見て、付け加えるように、

「今日は佐川も参加するし、別に生徒会だけの集まりじゃないんだから、かまわない。顧問も最初だけ挨拶してくれるけれども、あとは任せてくれるってことだ。生徒会室に行こう」

あえて杉本さんには目を向けないようにしようとしている。話し掛けられるのが怖いんだろう。おとひっちゃんは何を思ったのか、おさげ髪のおさきたんのところへ近づいた。

「あの、もしよかったら、水野さんも、今日手伝ってくれると助かるんだけどいいか」

「え、私が？　だって私生活委員だし」

「今日は準備会だから、できれば他の委員会関係の人にも参加してほしいんだ」

おとひっちゃん、言葉面だけはまっすぐだけど、思いつきりどもっていた。靴を脱いで来客用の靴箱に入れている青大附中連中にもはつきり聞こえただろう。

「雅弘も学習委員だけどいるしさ、いや、生徒会だけじゃだめなんだ。やはり他の委員会とも協力しあわないとだめだっと思ってさ」

すっかり困り顔のおさきたんだった。おとひっちゃんと玄関でどういう話をしていたのかわからないけれど、いきなり親密な言い方をされても困るだろう。いったいなんでおとひっちゃん、こうも積極的なんだろう？　いつもとは違う。浮ついている。僕は助け舟を出した。仲直りのチャンスだ。

「さっきたん、他の委員が俺ひとりじゃ落ち着かないし、よかったら来いよ」

ワックス時のいざこざが少しでも消えてくれればいいんだけど。さっきたんはそつと僕の方に近づき、なぜか佐賀さんの方を見た。両方見比べて、唇をきゅつと結んだ。

「分かりました。参加するわ。お願いします、関崎くん」

　　なんて見るんだろ。やっぱり女子から見ても、佐賀さんは目立つんだなあ。

　生徒会室までの道のり、おとひっちゃんは独り占めしたいだろう。気を遣って僕は、青大附中グループでひとり取り残されている佐賀さんに近づいた。おもてなしの心だ。気遣いだ。

「佐川さん、逢えてよかった」

　他の連中に聞き取れない声で、僕の耳もとにささやいた。拍子にふたつに結わえた髪の毛がほおにふれて、ちくちく痛かった。鈴蘭優のポスターでこの髪型の奴、見たことある。ほしいな、となんとも思った。

「帰ったらどうしようと思っていたんだ」

「大丈夫です。立村委員長がまずOKするって思っていましたし」

「それにしてもさ、ずいぶん青大附中の人、少ないね」

　もう少したくさん来ると思っていた。

「あとでお話します。それもいろいろ問題があるんです。新井林くんが言うには」

　前で三人語らっている立村その他ふたりを唇で指し示し、

「梨南ちゃんを連れて行くために、立村先輩が土下座して頼み込んだらしいんです。周りの人たちが嫌がるのを覚悟の上で、『今回だけでいい、一度だけ杉本を参加させてやってくれ』って。ものすごい覚悟だって新井林くん、話してました」

「覚悟いるのかなあ。ただ自分の好みだけだろ」

「だって、ここでごり押しなんてしたら、大変なんです。立村先輩きつと、自分が評議委員長から来期下ろされること覚悟の上でしているはずですよ。もちろん、新井林くんは指名されても受ける気ないと話してましたけれど」

　聞こえないようにささやいていたつもりだが、いきなり立村が振り返り、僕の方を静かに見つめ、階段のところで尋ねた。

「これからどうやって行けばいいのかな」

気付いてないな。

僕と佐賀さんは顔を合わせて目配せした。

「ああ、この階段を昇っていけばいいよ。青大附中みたいにきれいなところじゃないけど、生徒会室って書いてあるからさ」

石炭ストーブを派手に焚いているせいか、生徒会室の温度は暑いくらいだった。わかっていたから僕は学生服のままだったけれども、コートを着込んでいた立村以下青大附中のみなさまは戸惑ったらしい。すぐにコートを脱いで、書類をまとめておいてあるダンボールの上に載せた。そこに置くよう総田が勧めたからだ。女子ふたりは戸惑っているようだった。佐賀さんは問題ない、テーブルの下に押し込んでいいと教えておいたから。青大附中みたいに、コートかけがあるわけではないんだから。

「これから水鳥中学生徒会主催の、青大附中評議委員会との交流準備会を行います。本日はわざわざ、ご苦労さまです。青大附中のみなさんとはこれから、いい意味での交流を深めていきたいと思っておりますので、どうかよろしくお願いいたします」

初対面の連中も多いと聞く。内川会長が緊張気味に、総田のこしらえた挨拶を読み上げた。すっかり、背中には後光が差している。おしゃかさまって感じだった。僕と佐賀さんは一番端の出入り口付近に座っていた。さらに隣りにはさっききた人も大人しく腰を下ろしていた。僕に話したそうな顔をしていたけれど、なんとなくよくいなおしゃべりしちやいけないような気がした。

もっと言うなら、佐賀さんの隣りには杉本さんが大人しく座り込んでいる。奥側におかっぱ髪の女子、次に立村と続いている。水鳥中学生徒会連中はみな、部屋の奥を陣取っている。おとひつちゃんに向かって右側に、総田が反対側に、内川会長を守るような形で席に付いている。斜めから僕と佐賀さん……かどうかわからないが……とさっききたんを眺めて、にらんでいる。別にさっききたんを取る気

なんてないのに。

顧問の萩野先生が立ち上がり、簡単に挨拶をしてくれた。後、ジュースとクッキーが先生のポケットマネーで……ちゃんと説明あり……振舞われた。おながすいていたので、まずはぱくぱくと食べさせてもらった。菓子パンだけでは辛い。さっきたんも僕の方をちらろ見ながら、おそろおそろクッキーに手を伸ばした。「おなか、すいてたの?」

真っ赤にならなくてもいいのに。さっきたんははにかみながら頷いた。

「佐賀さん、食べるか?」

「ううん、大丈夫です。私、学校でお昼をいただきました」
見ると、青大附中の連中はとりたててぱくぱく食いついているつてわけでもないらしい。立村はおかつぱ髪の女子と二人、ひそひそと話をしている。杉本さんだけがうつむいたまま、佐賀さんを見無視しているのが目立っていた。

顧問のいない中の交流準備会というのも珍しい。青大附中もそうだったのだけど、萩野先生も途中から席を立った。なんでも、三年で公立高校入試二次募集の準備があるのだそうだ。用事があれば呼び出すように、とおとひっちゃんに伝えて、生徒会室を出て行った。好都合だった。

先生がいる間はそれなりに、お互いの学校事情について説明したり……立村が全部その辺は説明していた。内容としては前回青大附中で話をしたことと変わらないので飛ばすけど……、春休みにはぜひ、バスケット部の合同練習試合観戦を行おうとか、六月以降にはぜひ正式な交流会を行おうとか、わりと硬い内容が中心だった。僕にとってはまだまだ関係のないことばかりだった。

例の中学演劇台本をそろそろ用意しよう。

図書準備室に全員分まとめてあるものを持ってきて、配ればいい。おとひっちゃんにも、総田にもOKをもらっている。

けど、何を考えているんだろうな、俺も。

隣りで黙ってメモを取っている佐賀さん。

健吾くんにどういう言い訳をしてきたんだろう。

あの「正々堂々大好き」少年の健吾くんが、もし僕の計画を知ったらきつと戸惑うか怒るかのどちらかに違いない。杉本さんのことを蛇蝎のごとく嫌っているのは共感するけれども、汚いことをするのはいやだって顔を、いつもしている。僕もそのくらいはわかっている。でも、そうしないと、水鳥中学の方に飛び火してしまう。佐賀さんも傷ついてしまう。

けど、これってどうかんがえてもリンチだよな。

突然、気弱な気持ちになってしまう。反対隣のさっきたんが、思ったよりもクツキーを食べているのが意外だった。そんなにおいしいのかな。僕の分もあげようかな、と思って皿を差し出したら、佐賀さんも気付いたらしくその中に、自分の分をちょこんと載せた。

「ほら、おなか空いているんだったら、あげるよ」

また真っ赤になってうつむいてしまった。なんか僕も悪いことしただろうか。さっきたん、よっぽどワックスがけの時のことが腹立ったんだろうけれど、こっちだって仲直りしようとしているのに。またいらいらつと来た。

「いいよ、いらないんなら置いとくよ」

勝手にすればいいんだ。

僕は言い捨てて、佐賀さんに話し掛けようとした。けど、佐賀さんもなぜか、隣の杉本さんの方をじいつと見つめ、首をかしげていた。ちっちゃい子を見守る、お母さんみたいな顔だった。

「梨南ちゃん、大丈夫？」

なぜか一方向だけじつと見据えている杉本さんに声をかけた。だいぶ生徒会連中との語り合いも収まってきた頃だった。はつきりと佐賀さんの言っていることが聞き取れた。近くの僕だけじゃない、たぶん、内川も、総田も、立村も、おそらくおとひっちゃんも。

ちらつとにらみえるようにして、杉本さんはまた無視した。

無視するんだから、やめればいいのに。僕とだって話すると、あるのにな。

脚本のことについて、ちょこつと報告したかったのだ。

佐賀さんはさらにはつきりと尋ねた。

「梨南ちゃん、お手洗い、したいんでしょ？ 私が付き合っただけから、行きましよう」

ぐいっと杉本さんの眼が血走った風になった。唇を結んだまま、憎しみいっぱいにならみ返した。

いつもの棒読み口調で言い返した。

「何馬鹿なこと言ってるのよ。静かにしたら」

「だって、梨南ちゃん、学校にいる時から、お手洗い行っただけでしょ。さつきから時計の針じつと見ていたし。きつとお手洗いのことを考えているんだなって思ってたの。今のうちに行かせてもらった方が、あとで泣かないで済むわよ」

佐賀さんは妙にくつきりした発音で、生徒会室内に響くように言い張った。

「私が付き合っただけです。すみません、杉本さんがお手洗いに行きたいそうなので付き合っただけですよ」

おとひつちゃんも総田も、別になんとも思っていない様子だった。そりゃそうだ。誰だってトイレに行きたくなることはある。抜けたって困らない。僕も後ろが通りやすくなるように、椅子の背を引いた。川上さんが、

「トイレはね、二年四組の前にあるから、すぐわかると思うわよ」

総田の隣りに席を取っているのは、言うまでもない。男子連中は全く無視して話を始めている。僕もいつもだったならそれっきりのはずだった。でも。

どうしても言い訳かない理由で、杉本さんとふたりつきりになって、話をつけるって電話で話していたよな。佐賀さん。

杉本さんがどうしても、逃げられない理由でつてことか。

仕方なくしぶしぶ立ち上がり、うつむいた杉本さんを引き連れ、

佐賀さんが出口へ出て行った。振り返り、佐賀さんは僕へ意味ありげな笑みを向けた。さっきたんも一緒に佐賀さんたちを見つめていた。

もう二年の教室に人はほとんどいないはずだった。ふたりっきりで話をするにはもってこいの場所だ。

佐賀さんの勝利が確定してから、始めようか。

僕はさっきたんが手をつけなかったクッキーをもう一枚、口の中で噛み砕いた。

十五分くらい経ったけれどもふたりは戻ってこなかった。最初のうちは気にしていなかった。女子のトイレがいくら長いからといって、ちよつと引つ張り過ぎるんじゃないかと感じてはいたけれどももっともおとひつちゃんと総田は全く意識していないらしい。男子ってそんなもんだ。川上さんとか、さっきたんの方が心配そうに戸口の方をちらちら眺めていた。僕の顔を見ては何か言いたそうにするのだけど、佐賀さんと杉本さんのいない席で話すのもいやみたいだった。

「今回、青大附中のみなさまがたに見ていただきたいんだけどな」

すでに総田もため口叩いてやがる。最初から立村委員長を馬鹿にした態度を取っていた。抗議しない立村も立村だ。穏やかに相槌を打っている。

「うちの学校でも六月くらいに一度、おたくの学校みたいに劇をやりたいなあって話が出てるんだ。青大附中と違って、金もかけられないし、所詮臭い内容の学園ドラマになっちまうけれどもな。一応、適当に台本を選んでおいたんだ。その辺でちよつと、ご意見をいただきたいなあと思ったとこでさあ」

隣りのおかつば髪女子が、目立たぬように立村をつついていて。僕には見える。

「ああ、大体の話を聞かせてもらえれば、参考になるかどうかはわからないけれど、意見は言えると思う。どついう内容なんだ？」

総田には話しづらいのか、おとひつちゃんに声かけている。おとひつちゃんもまだ、僕の手直したすさまじい台本の内容を知らないはずだ。

「いじめ問題を通じて、友情の素晴らしさを描いた話なんだよな、雅弘」

急に僕に振ってくるなつて。無視を決め込もうとした。

「佐川くん、関崎くんが呼んでいるわよ」

さっきたんが小さな声で割り込んできた。やけにうるさい。

「台本、今別の部屋にまとめて置いてあるんで、今から持ってくるけど、いい？ おとひつちゃん」

やはりこういう場では、おとひつちゃんを立てておかねばならない。

僕が立ち上がると同時に、いきなり立村が右腹を押えるようにしてテーブルの上にかがみ込むような姿勢を取った。額をつけるくらいに一度、うつむいた。

「ちよつとだけいいか」

顔をわずかにしかめている。腹が痛いらしい。盲腸でもがき苦しむ、という痛みではなさそうだ。その辺の見分けは男子なら大抵つく。たぶん、あれだ。

「腹、壊してるんだろ」

にやつきながら総田がつつつく。さすが男子連中はよくわかっている。立村も少しはにかむようにして笑みを作っている。相当きわどいところじゃないだろうか。男子の場合、大きい方と小さい方を判断して、どちらのトイレに入るかを決めなくてはならないというさだめがある。学校で大きい方をするってことは、男子にとってかなり勇気のいることだ。個室を選ぶってことなんだからいきなり戸を開かれても文句が言えない。屈辱的なまたぎのポーズを笑われるはめになるばかりか、「あいつ学校でくそしてたんだぞー！」という、これまた恥ずかしい事実を語り継がれるはめになる。それゆえ男子としては、できるだけトイレでは小さい方のみ使用するようにしている。もっとも腹の調子の問題だから、必ずしもうまくはいかない。僕もその辺は経験者なのでよくわかる。男子で気持ちいからぬ奴いたら、それこそ「人の心がわからない奴」だ。

昼、なんか悪いものでも食ったんだろうか。立村評議委員長。

「昼に牡蠣フライ定食なんて食べたのがまずかったのかな」

「あれ、立村くん牡蠣フライなんて」

何か言いかけたおかつぱの女子に、何かをささやきかけた。その子はすぐに黙って、椅子をぐいと机に近づけ、人が通れるよう通路を作った。言う暇ない、一刻を許さない、早くトイレに行かせろってことだろう。情けないけれども男子としてはよくわかる。

「と、いうことで申しわけない」

かなりせっぱつまつた状態で立村委員長は戸口から出て行った。今度は男子連中……おとひっちゃん、総田、内川……あたりから、含み笑いが漂った。

わかるよなあ。よりによって腹下しときたもんだ。

かわいそうだったのは、立村の隣りに座っていたおかつぱ髪の女子だった。ひとりでふうつとため息をつき、口を尖らせていた。初めての学校で、ひとり取り残されているんだからそりゃあ淋しいだろう。少し長めで、どうかんがえても校則違反でチケツト切られそうな髪形だった。青大附中の女子はあまり、細かい髪型を規制されていないみたいだ。

「じゃあ、おたくの委員長が帰ってくるまで待つことにして、佐川、悪いが例のもの、持ってきてもらえねえかな」

総田がせつかく和んだ場を壊さないように、いなかっぱい口調で僕に声をかけた。

ちようどいいとこだった。僕もそろそろ準備しなくちゃと思っていたところだ。

「いいよ、じゃあ急いで行ってくるよ」

三階の図書館隣り図書準備室へ向かった。会、終了後のお楽しみが待っている場所だった。

ジューズ、用意しておけばよかったな。あと、お菓子もくすねておけばな。

僕が生徒会室を出てぐるっと見渡したのは、別に何も考えていたわけじゃない。何となく、右の耳たぶがひっぱられる感覚を覚えた

からだった。一気に廊下で冷えた空気が耳の中に詰まった。

誰かがかくれんぼしているみたいだった。

男子と女子のトイレが向かい合った中間点で、茶と灰色が混じったブレザー姿の三人を認めた。

僕が廊下に出たのを気付いたのか、また頭を寄せ合いしやべっている。何かを言い合っているのだろうけど、具体的な言葉が聞き取れなかった。

あれ、さっき腹下してた奴もいるよ。

立村評議委員長が、ふたりの女子に挟まれて佐賀さん相手に何かを説明していた。さっきまで苦しそうに右腹押えていたのが嘘のように、冷静だった。大至急すませて割り込んだってことだろうか。

僕は少し様子をうかがいながら、三階の図書準備室に戻った。誰も入ってきていないことと、南京錠がかけられていないことを確かめた後、脚本を参加者全員分重ね合わせた。

一度一階まで駆け下りた。呼吸を整えて、降りてきた階段とは反対側の方から昇っていった。まだ立村たちがいるのだったら、後ろから近づいていく形になるだろう。別に襲うわけではない。

男子トイレと女子トイレが向かい合わせにこしらえられている。挟まれるようにして三人はまだ話し合いの最中だった。僕が階段を上がったところから見通した時、佐賀さんがうつむいているのだけがはっきりと見えた。何か、様子が変だった。

足音を忍ばせても、階段を昇る気配は感じるらしく、僕がせっかく盗み聞き覚悟で忍び寄ったにも関わらず三人は黙りこくってしまった。黙られたら困る。まずはさりげなく自然な一言を投げかけてみた。

「あれ、どうしたの」

立村が無理して笑顔を作っているのがありありと分かった。ポーカーフェイスを保とうとして、うまく行かない、おとひつちゃんに似た顔だった。早く生徒会室に戻って言いたいんだろう。

杉本さんが立村の背後に立って、ぶっ壊れそうなまなざしで佐賀

さんをにらみつけていた。どうでもいい。僕の関心は佐賀さんの顔しかない。うつむいて指先で眼をこすっているのは、泣いていたからかもしれない。

佐賀さんをふたりで泣かしたってことだろうか。

何考えてるんだろ。

盗み聞きの誘惑には勝てなかった。

目の前には男子トイレと女子トイレが向かい合っている。木製の扉だ。校内には部活動関連の連中以外いないようだし、よっぽどことがない限り昇ってくることはないだろう。せいぜい顧問の萩野先生が戻ってくる程度だろう。先生だったらいくらでも言い訳が利く。

「あのさ、悪いんだけど、俺もちよつとトイレ行きたいんだ。これ、持っていてくれるかな。ちよつと時間かかるかも、なんで生徒会室へ持っていくと助かるな」

暗に言葉へ、「大」の意味をこめた。

立村は十部弱の台本を両手で受け取ってくれた。

「ああ、わかった」

また二人の女子を交互に見つめている。僕は左腹を押えるようにして、トイレに飛び込みわざと個室に飛び込み、思いつき派手に音を立てて扉を閉めた。今日は誰も使った形跡がない。ことの匂いもない。ってことは、やっぱりあいつ仮病を使って教室抜け出したってことだ。

今度は音を立てないようにそつと戸を開いた。木造校舎のよさは、露骨にばたばた音が立たないところだろう。足音も立てないようにトイレ入り口の扉に近づいた。壁にもたれ、耳を押し付けた。

杉本さんの金切り声が一拳に響いた。

この調子だと生徒会室にも聞こえてるぞ。

「立村先輩、私が悪いというのですか」

「悪いもなにも、今ここでけんかしたってしょうがないだろ。佐賀

さん、さつきも言った通り、申しわけないんだけど今日は先に帰ってもらえないかな」

佐賀さんを帰すだと？

立村の声だけが落ち着いていた。杉本さんはさらに食って掛かっている。声に抑揚はないんだけど、興奮しているってのが見え見えだ。相当、やらかしたんだろう。

「先輩、話を逸らさないでください。私は佐賀さんに頭がおかしいとか、病院に行きなさいとか、先輩とおんなじ頭なんだからしかないんだとか、ひどいことを言われたんです。なんでそこまでのしられなくちゃいけないんですか、言い返すことが悪なのですか。正しいと言ったことを言い返したらどうしていけないんですか」

「杉本、あとで落ち着いて考えような。佐賀さん、いろいろ大変だろうけれど、新井林にはちゃんと話しておくし、連絡もしておく。本当に申しわけないんだけど、今日は杉本をひとりにしてやってほしいんだ」

佐賀さん悪いことしてないのに、なんでだよ。

なだめるように言い聞かせているらしい。佐賀さんの言い分が聞き取れない。しゃべっていないで、ひとりでがまんしているのだろう。

「私、別にひとりじゃなくてもいいです。私、何も悪いことしていません」

「わがまま言うな。今日はお前ひとりじゃないんだから。せつかく来たんだから、することだってまだあるだろ」

することってなんだよ。

佐賀さんの返事はやはりなかった。やましいことを言っていないでも、言い返せないんだろう。本当のことを言われると返って逆恨みされるって、この前も話していたっけ。こういうことが何度も、本当に小学校時代から何度も繰り返されてきたんだろう。本当のことを伝えても通じない相手なんだって聞いた。自分が間違っていることを認めようとしないうる最低な女子なんだって僕は思っている。そ

んな女子をかばいたてて、正しい佐賀さんを追い返そうとするなんて、立村の奴、男子の風上にも置けない奴だ。ドアを蹴り飛ばして立村の顔をあさがお便器にうずめてやりたくなった。

「私、頭おかしくないんです。なんでそんなこと言われなくちゃいけないんですか。私、先輩と同じような病気なんかじゃないって、あれだけ言ってるのに」

「ほら、佐賀さんはそんなつもりじゃなかったんだろ、な」

相槌を求めている。でも返事はない。突然立村の声が慌てた。

「杉本、おい、どうした」

ドアの向こうではじめて佐賀さんの動きあり。僕はさらに壁へ耳をつけた。

「梨南ちゃん、もしかして吐きそうなの？」

さすがに立ち聞きだけではまずいだろ。僕は仕方なくトイレから出た。

杉本さんが背を丸めて、手を口に当ててしゃがみこんでいた。佐賀さんもしかみこもつとしたのを、立村が片手で制している。片方の腕に僕の持つてもらった脚本を、もう片方の手で背中をさするようにして、

「大丈夫か、苦しいのか」

「……大丈夫です。ひとりで大丈夫」

しほりだすようにつぶやき、杉本さんは真向かいの女子トイレへ駆け込んでいった。その場ではがまんできたみたいだった。すぐに水道の蛇口を思いっきりひねった水音が廊下まで響いた。うちのトイレは男女問わずくみとり式なので、だいたい誰が何をしているかはわかってしまう難点がある。たぶん、杉本さんは僕の想像した通り、吐き気に苦しんでいたのだろう。かすかにうめく声が聞きたくないのに聞こえてしまう。

佐賀さんがあとを追おうとしたのを、立村はまた呼び止めた。

「佐賀さん、悪いんだけど、清坂さんと呼んでもらえないかな」

「あの、私が梨南ちゃんの面倒みます。私、梨南ちゃんのうちまで連れて帰りましょうか、すぐ近くですから」

「いや、いいよ。佐賀さん、本当に悪いけどごめん。あとでちゃんと新井林にもあやまるから、今日のところは申しわけないけどさ、先に帰ってやってほしいんだ」

いやに立村は、杉本さんから佐賀さんを引き離そうとしている。だんだん口調が命令形になっているのが気に食わなかった。

追いつ返すのは具合悪くなった杉本さんの方じゃないか。迎える水鳥側だって大変なんだぞ。

僕がいることなんて忘れてるんだろう。この腹下し委員長が。背中越しに立村の横顔を覗いてみた。佐賀さんがうつむき加減で小さく首を一度振り、生徒会室に向かおうとしていた。立村の表情は全くもって冷静沈着。動かなかった。

冗談じゃない。佐賀さんを追いつ返そうだなんてさ。

もちろん僕も、短い間だけと考えなかったわけじゃない。

佐賀さんと杉本さんがトイレ近辺で言い合いをしていたのは疑いもない事実だろう。

本当に腹を下したのかどうかは別として、立村もトイレ前廊下で激しく言い合っているふたりを見つけて、仲裁に入ったんだろう。佐賀さんの言う通り、立村は杉本さんのことをえこひいきしているってことが、よくわかった。いじめたのが佐賀さんだと勘違いして、杉本さんを追いつ返そうとしたのだろう。

公平に見ろっていうんだ。

でも、ここでうつかり僕が口出ししようもんなら大変なことになるだろう。立村は僕と佐賀さんが隠れて会っていることを知るよしもない。今日会ったのが初めてだと思っっているだろう。 おおっぴらに佐賀さんをかばうことははばかられた。

「あの、杉本さん大丈夫かな」

僕はおずおずと、声をかけた。やっと気が付いたのか、立村が同

じ無表情のまま振り向いた。黙って脚本の束を差し出した。受け取って僕は続けた。

「具合悪いようだったら、保健室に連れて行こうか？」

あくまでも、親切心でつてところを崩さない。はっとした表情で立村は眼を見開いた。返事はなかった。

「吐いちゃうくらいだからそうとう苦しいと思うよ。ジュースくらいだったら持つていってやるしさ。おとひっちゃんだってそのくらいのは大目に見てくれるよ」

まじまじと見つめ返す立村の表情は猫のようだった。

「保健室、空いているのか」

「うん、具合悪くて本当にだめだったらすぐに帰ってもらったほうがいいけどさ」

どう出るか。僕はわざと幼く見えるように、おずおずと申し出た。佐賀さんも振り返り、僕の言うことを聞いていた。生徒会室にはまだ入っていない。

「悪い、そうさせてもらっていいか」

もう、喜んで。杉本さんの顔をもう見ないで済むんだったら。空気がきれいになる。

佐賀さんの後をついて生徒会室に戻ると、おとひっちゃんがすっかりご機嫌斜めで口を尖らせていた。おとひっちゃんは人に待たされることを極端に嫌う。短気な奴なんだ。損気な奴だけど。廊下の修羅場に気付いていたのかどうかはわからなかった。総田たちが様子をうかがうように僕と佐賀さんに口をあけた。

僕はテーブルの上に脚本を置いて、おとひっちゃんにだけごめんのポーズ、両手を合わせた。佐賀さんは、おかつぱ髪の子に近づき、何かをささやきかけていた。びっくりしたのだろうか、声がかんがっていた。

「え、杉本さんが」

「本当は私が残りたかったんですけど」

泣きそうな顔をした。どうして立村の奴は、佐賀さんの善意を素直に受け取らなかったのだろう。腹が立ってくる。もつともあれ以上杉本さんに引つ張りまわされるのはたまったもんじゃないし、佐賀さんが戻ってきたこと自体は正しいと思った。

「わかった、行ってくるね」

軽く一礼して、おかっぱ髪の子は小走りに出て行った。

「どうしたんだよ」

「杉本さんがトイレの手洗い場で吐いちゃったらしくてさ」

その通りのことを言った。

思いつきり川上さんが顔をしかめた。

「デリカシー持ちなよ、かわいそうじゃん」

意外だなあ。あの川上さんから「デリカシー」なんて言葉、出てくるなんてさ。

そこところは無視しておいた。総田も特別コメントを入れずに、両手を組み合わせて伸びをした。

さっきたんが隣りで僕をじいっと見つめてきた。重たいまなざしで、居心地悪かった。

「佐川くん、さっきの人、大丈夫そうなの？」

僕より先に佐賀さんが答えた。すうつと自然に割り込んでくれた。「本当は私も心配なんですけど、立村先輩が清坂先輩に代わるようにって言われてて。きつと、今朝から体調が悪かったんだと思います。でも無理していたんだと思います」

無理してくることないのに。

もともとの原因が佐賀さんだけではないということがわかって、僕も罪悪感がだいぶ薄くなった。

「じゃあ青大附中の彼はまだか」

「保健室に行ってみたんだよ。一石二鳥つてとこみんだよ。腹下りの薬ももらってきたんじゃないかな」

噂の主、立村評議委員長が戻ってきた。うつむいて、すっかり疲れた顔をしている。青大附中限定の悪い病気で流行っているんじ

やないか。伝染病なんじゃないだろうか。いきなり拍手で迎えたのは総田だった。ふくみ笑いで場が和んだ。

「間に合ったか？」 からかうように総田が声をかけた。薄笑いを浮かべ、立村は周りから空きの席に腰掛けた。

「おかげさまで、助かりました。恥かくかと思った」

嘘つけ！

僕はゆっくりと立村の伏せた眼を覗き込んだ。隣りで佐賀さんも気がついたらしく、一緒に同じことをした。ふたりの視線でぴんときたんだろう。立村はゆっくりと僕たちを見返した。何も言わなかった。

女子がいなくなっても話は通じる。おとひっちゃんと総田は簡単に、水鳥中学の生徒演劇上演計画を説明し始めた。「友情は音色とともに」あらずじをひとくさり。

「佐川さん、私、どうしたらよかったですでしょうか」

僕にしか聞こえない声で、眼を伏せたまま佐賀さんがささやいた。テーブルに張り付くようにして聞き返した。

「あの人と話、してきたんだよね」

「梨南ちゃん、わかってくれなかった」

話の通じる奴だったらとつくの昔に片付いていたよな。

わかりきっていることはつつこまずに、相槌を打った。

「どうということ話した？」

「私が梨南ちゃんを救いたいんだってこと、このままだったらみんなに嫌われてしまうから、私が梨南ちゃんを守ってあげたいんだってこと、話したつもりだったんです。だって、あのままだと先生にも嫌われて男子にも無視されて、それからクラスの女子にも」

うるんだ瞳から涙がこぼれそうでこぼれない。もつと言いたいことと言って痛めつけたのかと思ったけど、違ったみたいだ。

「きつと、みんなから無視されるというのが、私わかってるから。だからなんだって」

だからなにをさ。

僕が尋ねる前に、佐賀さんは教えてくれた。

「私が、評議委員になるのよって。そうすれば、先生や男子たちを私が押えてあげられるし、梨南ちゃんもこれ以上嫌われないですむのよって。だから私、代わりに評議委員になって、梨南ちゃんを救ってあげたいのって、そう言ったんです。本当は小学校の頃からそうすべきだったんだけど、梨南ちゃんが怒るからできなかったんです。でも無理しても、私が梨南ちゃんをかばってあげて、言いたいことを言って守ってあげなくちゃいけなかったんだって」

女子ってやつぱり、わかんないな。

冷たい奴なのかもしれないけど僕は全然杉本さんに同情することができなかった。

ふたつおいた席で、立村だけが何度も僕と佐賀さんをちらちらと眺めていた。たまたま隣りだからしゃべってるだけなんだって顔を続けた。別にやましいことしてないんだから。でもちょこつとやましくならないといけないことも、話さなくちゃいけない。

「佐賀さん、さつさと帰れって言われてるんだから、終わったらさつさと帰るふりしなよ」

「さつさと帰るって、でも私」

「帰ったっていいんだよ、俺も一緒に生徒会室出るからさ」

立村評議委員長は必死に追い返そうとしていた。奴が杉本さんびいきなのは、さつきの廊下の一件でよくわかった。目障りな佐賀さんにはさつさとは退散してもらいたいんだろ。それから。

「詳しいこと、その時に聞かせてほしいんだ」

僕と眼が合い、佐賀さんはこくと頷いた。

側でさつきたんがきよろきよろそわそわしていた。僕に何か話し掛けたさそうな顔をしていた。佐賀さんに軽くあやまってから僕はさつきたんの顔を見た。

「佐川くん、青大附中の人たち、保健室に行ったの？」

「たぶんそうじゃないかな。そうした方がいいよって言ったんだ」
ちよつと誇らしげに答えてみた。佐賀さんも隣りで頷いてくれた。
「そうなの」

さっきさんは少し首をかしげていた。僕と佐賀さんの顔を交互に見つめながら立ち上がった。

「私、様子見に行ってみるわ」

いつものようにさらさらした声で、はつかねずみのすました表情でだった。

「私も行きましょうか」

「ひとりで大丈夫。ごめんなさいね」

佐賀さんにも同じくきょとした顔で返事して、さっきさんは音を立てないよう教室を出て行った。おとひつちゃんだけがちらつと戸口を見た程度で、別にさっきさんがいてもいなくてもかまわない雰囲気だった。生活委員ひとりと、生徒会室だとやっぱり居心地悪かったのだろうと、ちよつとかわいそうな気がした。

僕の隣りには佐賀さんだけになった。ほんの少し声を立てても大丈夫そうだ。

すでに総田とおとひつちゃんは、僕のこしらえた脚本を広げて、簡単にあらすじの説明を行っている。真面目に読みつづけているおとひつちゃんもさることながら、みな水鳥中学生徒会連中は真面目ぶりつこに専念している。あの総田すらも「さむいぼでるぜ」と言っていた脚本を真剣に語っているじゃないか。笑い出しそうになる。「青大附中のみなさんと違ってうちの学校は所詮公立。公立だとお涙頂戴かもしくは民話とか、そういう一同寝ろ！ってタイプの話しかできないすよ。どうせ枠にはめられているんだったら、とことん枠の中でやつちまおうということ、今回は社会問題となっている『学校でのいじめ問題』を取り上げたってわけです。先生たちがないから言えることですが、まあ、原作は死ぬほど臭い。こんなことでみんな目覚めたら世の中ラッキーだぜって言いたいくらいです。

けど、あまりにも白々しすぎるゆえにギャグになるということもあるし、ギャグの中にも真実があったりする。今回俺たち水鳥中学生徒会としては、そういう意味でこの薰り高すぎる作品を選んで、俺たちなりにアレンジしたってわけです。まあ今回台本をいじってくれたご担当の、佐川がそこにおりますんで、作品アレンジに当たっての思うところなんぞをいくつか、おい、言えよ」

おいおいなんだよ、俺にいきなり振るなよな。

総田の奴、にんまり笑いながら僕に話し掛けるのはやめてほしかった。鋭い奴のことだ。僕と佐賀さんが語り合っているのをうすうす勘付いていたんだろ。おとひっちゃんがずうっと脚本に没頭しているのとは違う。隣りで川上さんも鼻膨らませて笑っている。ど真ん中の内川会長も鷹揚に頷いてやがる。

「すごいアレンジですね。佐川先輩、お忙しいところ申しわけないんですがお願いします」

忙しいってどういうことだよ！

肝心のおとひっちゃんの方を見ると、ようやく顔を上げて一言、失礼なことを言いやがった。

「あとで俺が誤字脱字訂正しておくからな。安心しろ」

しかたない。僕は立ち上がりぐるっと生徒会室の面々を見下ろした。立村評議委員長だけがまだ脚本に目を通して最中だった。別にこいつに何思われようがかまわない。

「では一応、ストーリーなんですけど、総田副会長の言う通り、今の時代に合わない話だったら、みんな寝ちゃうのは当然のことだと思っただのと、たまたま友だちから似たようないじめの話聞いて、これは使えるぞって思ったからなんだけど。つい最近、青潟市内の中学で起こったことらしいんだけど。やっぱり本当のことを書いた方がうけがいいかなって思ったんだ。ピアノよりもエレクトーンの方がいかにも今時って感じだし。俺が聞いた話もやっぱり、エレクトーンが弾ける子をいじめたってネタだったんだ。けど、最後にはいじめられていた女子の方がみんなに認められて、いじめっ子より

も上の立場になったんだって。ざまあみろって思えるよなあ。先生たちにも受けて、俺たちもカタルシス、っていうのかな、そういうのを味わえれば最高だなって思ったんだ」

佐賀さんをちらつと見た。僕が「エレクトーン」という語句をゆっくり繰り返した時、わかつてくれたみたいだった。何度見ても飽きない佐賀さんの髪型、正反对だった。僕の隣りでまた、耳に手をあてて髪の毛を直している。ふたつに束ねたちっちゃな犬の髪型みたいだった。するんとして手が滑りそうだった。思わず触れてみたくなった。

「俺、この台本書いててほんっと思っただけど、自分ができないからって言っで、できる人にやつかんじゃう性格の女子って、ほんっと最低だなあって思ったよ。ほんとにこの脚本でやるかどうかわかんないけど、僕だったら終りの方でいじめっ子が救われるなんてこと、必要ないと思うんだ。それだけ悪いことしているんだから、当然叩かれて当たり前だよ。思いつきり不幸にして、それで終りにすれば本当は俺たちすつきりするんだけど。けど先生たちがうんと言わないよなあ。このいじめっ子にも事情があるんだ、かわいそうなんだって言い張るだろうから僕も入れたけど。でも、こういう奴やられて当然だよな。とことんやり返されて不幸になって、みんなに笑われて終り、ほんととほこういうラストが本当なんだって思うんだ。どう思う？ おとひっちゃん？」

あえて振らせていただいた。おとひっちゃんに。杉本さんがいないのがたまらなく残念だ。

予想通りおとひっちゃんはくそまじめな顔でしっかと頷いた。がしっとした瞳で持つて答えた。

「そうだな雅弘。俺も今読み終わって思った。人間として、いじめなんてする奴は心の弱い、最低野郎だ。これは男子女子関係ねえよ。こういう奴がいたら」

「いたら？」

エキサイトするおとひっちゃんに投げつけた、いつもの読みが当

たつた。

「俺なら、舞台の上でぶんなぐってやるな。最後の助ける奴もろとも怒鳴りつけてやるな。雅弘、お前、才能あるよなあ。すげえよ。見直した」

総田と川上さん、内川会長が訳知り顔でにつこり笑っている。ちやんと僕の指示が隅々まで浸透している証拠だ。惜しむらくは、ここにぶんなぐられるべき対象の女子がいないことだった。

「佐川さん」

席について、ジュースを飲み干した。佐賀さんの前で思いつきりクッキーにかぶりついた。

「あの話、私のために」

「今は内緒だよ」

もごもことごまかしながら、僕はそおつと佐賀さんの瞳の奥を探った。

ちゃんとわかってくれている。やっぱり、本当に頭のいい人の顔していた。泣きそうだけど、泣かない。そんな瞳だった。

今日の杉本さんの顔と唇が異様さでいっぱいだったことを思い出した。うちの母さんが参観日の時にしてくる顔とおんなじだ。きつと、校則違反の化粧してきたんだろう。おとひっちゃんに逢うためにだろう。他の連中、もしくはおとひっちゃんが気付いたかどうかはわからない。ただ、男子代表として言わせてもらえれば「気持ち悪い顔」だった。自覚全然ないんだろう。

僕は杉本さんのことを悪く思いすぎているのかもしれない。佐賀さんの言い分を鵜呑みにしているだけなのかもしれない。もしかしたらもつと純粹で性格のいい女子なのかもしれない。けど、どうしても思わずにはいられない。避けずにはいられない。いるだけで目障りだと、思わずにはいられない。

おとひっちゃんだって、出迎えた時逃げようとしたじゃないか。

大好きなさつきたんの側に張り付こうとしたじゃないか。
そうだよ、みんなあの顔が気持ち悪いんだよ。

「いいかな、発言して」

もうすっかり腹の調子も元に戻ったらしい……腹下し野郎と呼んでやるう……立村評議委員長が右手を挙げた。おずおずと、遠慮がちに。

「おう、意見聞かせてくれ」

おとひっちゃんも、すっかり機嫌よさげだった。どうもおとひっちゃん、この立村って奴とは仲良くなっているらしい。言葉が軽かった。熱く語った後だけに、少し汗が噴き出しているのはご愛嬌だ。「一通り聞かせてもらったんだけど、たぶんうちの学校のやり方は正反对だから、あまり参考にはならないかもしれないってことがひとつ。それともうひとつが」

膝の上ではちばちと金具の外れるような音がした。うつむくようにして膝のあたりを覗き込み、

「もし、よかったら、二年前のビデオ演劇用カセットテープ、持ってきたんだ。ビデオの方は学校から持ち出し禁止だからだめだったんだけどさ。カセットテープだったらかまわないってことでダビングしてきたんだ。台詞ばかりの劇だったから、たぶん雰囲気はつかめると思うんだけどさ。よかったら聞いてもらえるかな」

立村の表情は揺れてなかった。たぶん脚本の話を、思いつきり眠い気持ちで聞いていたんだろう。120分のカセットテープを机に載せ、すいっとおとひっちゃんの方へ滑らせた。ナイスキャッチ。片手で止めたおとひっちゃんは、立村に向かってからからとテープを振ってみせた。

「演劇なのか」

「そう、『忠臣蔵』やったんだ」

『忠臣蔵』ったら、時代劇だよ。

しやれでも冗談でもないらしく、立村は大真面目おとひっちゃん

と総田に頷いてみせた。僕には一切振り向かないのがしゃくだった。川上さんと内川がまたにこやかに棚のあたりを探り出してうるさい音を立てていた。

「関崎先輩、ラジカセありますよ。モノラルだけど、音量をめいっぱい大きくすれば十分ですよ」

英語の授業でたまに先生が持つてくる、大きくてやたらとスピーカーが場所取つていているという、古臭い奴だ。生徒会室には意外なもの転がっている。知らなかった。

「そうか、あつたか。悪い、内川、コンセント入れてくれ。すぐにこれから聴こう。立村、実際何分くらいなんだ」

「裏表二時間入っているけど、全部聴かなくなつていいだろ。だいたい雰囲気分かればさ」

「いや、あとついでに聞きたいんだけどなあ」

にやつく総田がテーブルに腹ばいとなり、頭だけを立村に向け尋ねた。

「あんた、『忠臣蔵』の何役やったわけ？」

「……浅野内匠頭」

総田、ぶぶつと顔を伏せたまま受けるのは、一応交流会なんだしやめた方がいいと思う。

僕の隣りで佐賀さんも、につこりした。

上品に笑ってくれるのはひとりだけ。芦毛の王子様立村評議委員長は、おとひつちゃんだけをにらみつけるようにして、しばらく唇を噛んでいた。笑われるような事実を言うから、受けただけのことだ。おとひつちゃんも遠慮なく爆笑していた。

「ってことは、『江戸城松の廊下の刃傷沙汰』も当然、入っているんだな」

「いいだろ、そんなの」

さっきまで沈着冷静で佐賀さんを追い返そうとしたり、委員長の顔したりしていたくせに、結局は蠟人形のうすらばけに戻ってしまう。やはりこの男は、変だ。おとひつちゃんがカセットテープを

セットし、テーブルの真ん中に置いた。わざわざ立村にスピーカーを向けた。またむくれたようにうつむく立村。比較対照して、笑いをこらえる総田たち。

此間の遺恨覚たるか！

まだがりがり削られていない男子の声が、ラジカセのスピーカーから流れた。

『江戸城松の廊下の刃傷沙汰』らしい。

テーブルを叩いてもだえる総田・川上・内川たちと、同情を禁じえない顔で見つめているおとひっちゃん。そっぽ向いている立村評議員長。さっきたんが一度戻ってきて、青大附中ふたりの荷物をかかえて出て行った。行き際に立村へ何かをささやいていたけれど、僕にはそんなのどうでもよかった。生徒会連中がテーブル鑑賞に熱中している間、僕は佐賀さんとふたり、おとなしくお菓子をつまんでいた。

クッキーがおいしすぎて、困った。だって、食べれば食べるほど、甘くなるんだから。

僕の言った通りに佐賀さんは、会が終了後、すぐ立村評議委員長に「それでは梨南ちゃんをよろしくお願いします」

と挨拶して教室を出た。僕もおとひっちゃんに、

「じゃあ、俺もちょっと借りた部屋、片付けてくるね」

と一声かけておいた。総田には目配せしたけど、全くおとひっちゃんはおかしいと思っていなみたいだった。内川を始め、生徒会連中はみな図書準備室のことを理解してくれているみたいだ。ちゃんと、おとひっちゃんには内緒にしてくれているみたいだ。ありがたい。参謀たる僕への、ささやかなお礼ってとこなんだろうか。

結局、杉本さんともうひとりの青大附中女子評議委員は帰ってこなかった。さっきさんが、あの妖しい「忠臣蔵」テープを聞いている間に荷物を持って行ったところみると、あの人たちも先に帰ったに違いない。気分悪そうだったし、やっぱり顔を出すのも恥ずかしかったんだろう。立村評議委員長がおとひっちゃんに近づき、なにやら話している。生徒会室を出て行きがけに耳にしたのは、

「迷惑かけてすまなかった。あのさ、そっちの顧問の先生に挨拶してっていいか？」

だった。

佐賀さんは階段を一段降りたところで待っていてくれた。

「ごめん、じゃあ上に行こうか」

「本当にいいんですか。私、他の中学なのに」

「いいっていいって」

佐賀さんのためなんだからさ。

生徒会連中が帰る前に一度、様子を見にきてほしいと頼んである。閉じ込められる心配はない。

「けど、大変だったね」

「はい、でも平気です」

小さい声でしゃべっているつもりなのに、廊下にはびんびん響いた。外からは女子のジャージとおんなじ色の、茶色っぽい赤のつばみが見え隠れしていた。何となく咲きそうだった。生徒会室ががんがんと熱すぎたから、廊下の冷え具合がちょうどいい。図書準備室には小さい電気ストーブを用意してある。佐賀さんも僕も風邪ひかないで済みそうだ。

南京錠をポケットにつっこみ、まずは引き戸を開けた。誰もいない。あたりまえか。

「これでも片付けたんだ」

「ええと、私」

すぐに窓辺の席へ連れていきたかった。窓を使わない本棚でかばうようにしてあるので、戸口からは見えない。ちよつとだけ部屋が狭かった。でも大丈夫。どうせ総田が迎えにくるまでは誰も来ないんだから。

「ほら、こっち」

ジャンバーを着たまま僕は、テーブルの隙間を横になって通った。一緒に佐賀さんが、コートを羽織りながらついてきた。急いで椅子の足下にセットしておいた電気ストーブに電源を入れた。

「まだ寒いけど、がまんしてくれるよね」

「私、大丈夫です」

窓辺には、夕暮れ色が漂っていた。三月に入ってからだいぶ日の降りるのも遅くなった。まだまだ夜になるには早かった。佐賀さんがどこに住んでいるのかはわからないけれど、青大附中の近くだったら十分だろう。今日、何で来たんだろうか。

「自転車です。梨南ちゃんは清坂先輩の自転車に乗せてもらってたはずですよ」

「わあい、二人乗り、やつちやいけないんだ。俺もやってるけど」
「からかい調子で答えてみると、」

「だって、梨南ちゃん、お母さんから自転車に乗ってはいけないいっ

て言われてるんです。学校も歩いて通っているんです」

なんて家庭なんだ。

もう過去の人、扱いにしたい。いいかげん軽蔑も面倒になった。

「もう二度と会うこともないだろうから、きつと杉本さんの話は今日で最後になるよ」

僕は言い切り、佐賀さんから詳しい事情を聞き出すことに専念した。

話の合間に何度か、耳に手を当てて、束ねた髪のはつれを直すしぐさに、何度か僕は目をそらした。変なこと考えたらまずい。今ここにいるのは、鈴蘭優のポスターじゃない、佐賀さんなんだ。

「私、最初に言ったんです。梨南ちゃんに」

唇を一本に結び、窓辺の橙色を見つめるようにして佐賀さんは話し始めた。

「小学校の頃、本当は梨南ちゃん、みんなから馬鹿にされてたのよってことから。今まで私が気付いていたけど、話したら傷つくかもしれないと思って言わなかったことを全部言いました」

「たとえばどんな？」

「男子には、いえないことばかりです」

言葉を濁した。男子と違って女子がエッチな話をするとも思えない。いろいろあるんだろう。

「あ、でもこの前お話ししたことがほとんどです。ほんととは、梨南ちゃんピアノ習いたかったんでしょとか、ほんととは新井林くんのことが好きだったんでしょとか、最近男子に無視されているのがつまらなくて、一生懸命ちよっかい出しているんでしょとか、あと」

僕の方を見た。

「佐川さん、私のこと軽蔑しないでくれますか」

「約束するよ」

「本当は、私みたいになりたかったんでしょって」

のどのところでうつと何度もこみ上げるのをこらえていた。相当、言うのが辛かったんだなって僕は思った。

ずっと言いたくてもいえなかったことが多すぎたんだ。きつと佐賀さんは。

「私、梨南ちゃんみたいに成績よくないし、泣き虫だし、可愛くないけど、でも友だちはたくさんいたんです。男子も女子もたくさんいたんです。先生も私のことみんな好きだって言ってくれました。けど、梨南ちゃんはそうじゃなかったんです。一番物知りで、可愛くて、お姫様みたいだったけど、男子からも女子からも、先生たちからも笑われてたんです。うちの母が良く言っていました。梨南ちゃんはふつうの子じゃないから、親切にしてあげるのよって」

親切にしてあげる、か。

言葉の奥に苦いものを感じてしまった。風邪をひいた時に飲ませられた、オブラートに来るんだ漢方薬みたいなものだった。

「だから、女子たちは梨南ちゃんに『親切』にしてあげただけなんだったこと、教えてあげたんです。私の思い込みじゃないと思います。だって、この前の同窓会の時も、クラスだった女子がみんな言ってたし。先生も言ってたし」

大きく深呼吸して、今度はガラスを真つ正面から見据えて、

「私、いろいろ考えました。梨南ちゃんは私を無視しているけど、本当は私みたいに男子たちと仲良くしたかったこと、わかってました。六年間、梨南ちゃんの周りには『親切』にしてあげたいという人ばかりで、本当のことを言ってくれる人が、今でもないんです。梨南ちゃんのことを大切にしてくれるのは立村先輩しかないのに無視しちゃって、関崎さんとか新井林くんとか、手の届かない人ばかり追いかけてるんです。小学校三年の時、クラスで特殊学級の教室と一緒に掃除する決まりになっていたんですけど、梨南ちゃん、その子にはものすごく人気があつたんです。ずっと壁に頭突きしていた子には、黙ってくっついてあげたり、同じことばかり話してうつとおしい子にも付き合っただけたり。いつも梨南ちゃん、そういう子たちには好かれてたんです」

いるんだ、ああいう人が好きな奴が。物好きだよなあ。

「だからみんな言っただけです。梨南ちゃん、本当はそのクラスにずっといたほうが楽しいんじゃないかって。うちのお母さんも言っていました」

なんだか意外だった。実は杉本さん、人によつてはいい人だと思われるのかもしれない。佐賀さんや健吾くんには迷惑なことでも、特殊な好みの奴には親切に感じられることもあるらしい。

「でも、梨南ちゃんそれ聞いてものすごく怒ってました。せっかくそういう子たちが懐いてくれてるのに、逃げたりするんですから。逃げてても逃げても、その子たち、梨南ちゃんのこと大好きだから離れなくて、結局、あきらめて一緒に遊んであげてみたいです」
「まるで、立村みたいにか」

大きく頷いた。

「梨南ちゃんにはあの子たちと同じような立村先輩の方が向いてるんです。どんなに逃げても嫌ってても、立村先輩だけは必死に守ってくれます。ほんとに梨南ちゃん、そういう人たちと一緒にいる方が幸せになれるんだと思います。新井林くんや関崎さんのような人は、向いていないんだと思うんです」

おとひつちゃんかあ。

学校祭三日目の座談会挨拶の、おとひつちゃん爆弾発言を思い出した。

自分の立場を犠牲にしても、すべてをかけて勝負するところ。僕ならもつと要領よくやるけどあえて玉砕勝負するおとひつちゃんが、僕は好きだった。

そんなおとひつちゃんと、バスケット部の花形・健吾くと重ねてくれているのが、僕はたまらなく嬉しい。杉本さんにはもったいない相手だつて、言ってくれている。

「おとひちゃん、ほんと、いい奴なんだ。ちよつとばかだけど、でも本当にいい奴だよ」

僕は繰り返した。言葉の裏には隠しておいた。

杉本さんなんかには、やれないよ。あいつを。

「立村先輩がなんで梨南ちゃんのことをあそこまで好きなんだろうって不思議に思っていたんです。去年の十二月くらいにその理由がわかりました」

さらに佐賀さんは話してくれた。

「立村先輩はふつうの人よりも、数学の能力が劣っているんだそうです。健吾が言っていましたし、先生たちもみな知っているみたいです。うちのお母さんに聞いたら、生まれつきの障害つてのがあって、一生直らないそうなんです」

そういえば、指使って計算していたって言ってたよな。

総田が確か、話していた。

「たぶんですけど、梨南ちゃんのことを本当に理解できるのは、そういう風に梨南ちゃんと同じ思いをした人でないとわからないのかもしれないって思いました。立村先輩、学校では女子に物笑いにされてる人だし、梨南ちゃんと同じようにいじめられていたらしくて聞いてます。だからなおさらじゃないかって、思うんです。だから梨南ちゃんを守ってあげたいって思うんじゃないでしょうか。さつきも私と梨南ちゃんが話をしていた時、立村先輩が割り込んできて私に帰るように言ったんです。その時、梨南ちゃんは立村先輩に『同じ病気じゃない』って言うてました。私、それが梨南ちゃんの気付いていないとこなんだって思ったから言ったんです。立村先輩しか、梨南ちゃんを本当にわかってくれる人はいないし、好きになっってくれる人なんていないって。梨南ちゃんとおんなじ経験して、同じこと考えている人はあの人しかないのよって。関崎さんみたいな人は梨南ちゃんの手には届かないのよって。健吾……新井林くんと同じことになるわよって」

また、名前を呼び捨てにした。気を遣っているんだろうけれど、何かの拍子でぽろつとこぼれる。僕が顔をしかめたのを読み取られたのは情けない。

「ごめんなさい。けど私、関崎さんのように成績が良くて、運動神

経抜群でつて人、梨南ちゃんには向いていないと思うんです。梨南ちゃんが憧れている人はきっと健吾……新井林くんみたいな人かもしれません。でも、そういう人にはどんなに努力しても、嫌われることしかできないんです。私、それ、七年間見ていていやってほどわかったから、だからはつきり」

「いいよ、もう、そんなこと忘れたほうがいいよ。佐賀さん」

女子トイレか、廊下か、その辺はわからない。佐賀さんの持つている力をすべて尽くして、杉本さんに懸命に訴えたんだろう。

「評議委員を来年私がやるってことも話しました。担任の先生にはみんな話してあるし、了解ももらってるって。そうしたら梨南ちゃん言いました。『私の後ろずっとくっついてきたくせに、なにができるっていうの』って」

「それはひどいよな！」

「いいえ、私、言われてもしかたないんです。でも、梨南ちゃんがもし評議委員になっても、男子にまたいやなことされて、女子たちからは物笑いにされるのが私にはわかるんです。そんな思いさせたくなかったんです。もし私が評議委員になったら、きっと男子たちはわかってくれて、梨南ちゃんをそっとしてくれると思うんです。

新井林くんも協力してくれると思うんです。先生もこれ以上、梨南ちゃんに厳しいこと言わないでくれると思うんです。そして私が梨南ちゃんに、みんなが本当にどう思っているかをわかりやすく、わかるように説明してあげるようにすれば、もっと変われると思うんです。私、自信ないけど、でも」

「そんなに杉本さんにこだわるのってどうしてさ。俺、これ以上佐賀さんが傷つくのは損だと思うよ。無視すればいいんだよ」

きつと言い返す表情に、僕は見とれてしまった。頬に橙色がふわあと差した。

「気に入らないからって無視することって、梨南ちゃんと同じことだと思うんです。私、おんなじこと、したくない」

目の前にゆつくりと下りてきた、丸い太陽のかたまり。

ガラスに跳ね返っている。佐賀さんは再びそれに目を映した。僕も追って見つめた。まぶしくなるのをこらえて見据えた。

「佐賀さん、俺のやったことって、それじゃ許せないかな」

「え？ 佐川さんの？」

おなかの中からどす黒い煙が立ち昇りそうで、ごろごろしてきた。「あの、台本のこと。俺はもしかしたら、杉本さんと同じことしてたのかなってさ」

「でもそんな」

うまく言えない。佐賀さんがどうして杉本さんをあそこまでかばおうとするのかわからなかった。せっかく習いたかったピアノを、嫉妬に巻き込まれたくないからという理由でエレクトーンにした惨めさ。自分が気に入っているピンクのノートを、いやみ言われてしまったから使えなかった寂しさ。いろんなことがいっぱいあったんだと思う。そんなことされても、きっと佐賀さんはがまんしてたんだろう。杉本さんはいい子なんだと言いつ聞かせてきたんだろう。でも、本当は大嫌いだったって言うていたじゃないか。だから復讐させたかった。言いたいこと言うて傷つけて、ざまあみると笑ってほしかった。でも佐賀さんは結局、杉本さんを「かわいそう」という理由でかるうじてとどめを差さずに帰ってきた。

気に入らないからって無視することって、梨南ちゃんと同じことだと思っんです。

私、おんなじこと、したくない。

僕のしたことって、杉本さんと同じことだったんだらうか。

佐賀さんがしたくなかったことを、無理やりやってしまったんだらうか。

言わずにはいらなかった。

「あれは、杉本さんに読ませるつもりだったんだ。あそこまで自分のしたことをつぶさに書いてあれば、きっとあの人も反省して、佐賀さんに泣きながらあやまるんじゃないかって思っただ。けどさ、

俺、そんなことする必要なかったんだね。佐賀さん、いつか俺みたいに強くなりたいって言ってくれたよね。そんなことないよ。佐賀さんの方が俺なんかより、ずっとずっと強いよ。あんな時代錯誤のお涙頂戴劇なんて読ませなかったって、佐賀さんは杉本さんをこてんぱんにやつつけちゃったんだ。思いやり持って、吐いてしまいうくらい具合悪くさせてしまったさ」

「いえ、たぶん梨南ちゃんもともと具合悪かったんじゃないかなあつて」

「かもしれない。けど、佐賀さんがまっすぐ立っていて、正しいことをきちんと話していたから、あんなふうには杉本さん取り乱して泣きそうになったんだと思うんだ。どんなにヒステリーを起こしても、佐賀さんは全然動じなかったよね。俺、それがすごいと思うよ。あんな台本のいじめられっ子がわざとらしい感動的台詞連ねているけど、そんなのとは全く関係ない。今ここにいて、佐賀さんの方が誰よりも強いんだ。だから俺」

咽から出てくる言葉は止められなかった。太陽に向けていた目がお互いぶつかり合い、痛くなった。

「佐賀さんにこれから、交流会に関わってほしいんだ。杉本さんのことなんか抜きで、おとひっちゃんのことなんかどうでもいい。それだけの力、持ってるんだ。自信もって、評議委員になって、また水鳥中学に来いよ」

ぼろぼろに崩れた目のふちと口元で、また泣いてしまっただけなにかって気付いた。こんなこともあるのかと、ちゃんとティッシュを渡した。手に取らないで顔を覆った。目だけ出していた。

「佐川さん、私もわかんない」

小さくささやいた。

「どうして私、佐川さんの前だとこんなになっちゃうんですか。私わかんない。どうしてそんなに私のこと、わかるんですか」

「どうしてって言われても」

「どうして佐川さん、青大附中に来てくれなかったんですか」

成績追いつかないって言えないよ。

太陽の沈むのを眺めていた。鳥の影が目の前の教室に映っていた。泣き止むまで物思いにふけろうと思った、その時だった。

「頼む、会わせてくれ」

「立村、落ち着け、とにかく俺の話聞いてくれ」

「直接話をしないといけないことだってあるはずだ。悪い、入らせてくれ」

問答しているのが聞こえる。ひとりはおとひつちゃんだってすぐわかる。あせっているから。言い方はきついのに冷静なしゃべりなのが立村だろう。

部屋を借りたこと自体はおとひつちゃんも知っている。でも佐賀さんと一緒にいるところを見られたらしゃれにならない。

「立村先輩がいるんですか」

ふうつと顔を上げ、両目をこする佐賀さん。あどけなかった。

「うん、おとひつちゃんと一緒にみたいだ。俺に用があるみたいだ」

さつさと僕が出て、立村の用事を聞いてやるのがいいのかもしれない。おとひつちゃんの慌てぶりが気に掛かる。そんなにやばいことを僕はしていないはずだ。それとも、杉本さんともうひとりの女子がいなくなつたから探しているのだろうか。僕が悪いこと、何かしたっていうんだろうか。

「とにかく出てみる。大丈夫だよ。俺、佐賀さんがここにいること、言わないからさ」

背筋がびくびくするのを隠して、僕はテーブルの横をまた、すり抜けた。

「どうしたの、おとひつちゃん。あ、さつきはどうも」

中に入れるわけにはいかない。佐賀さんが物静かとはいえ、気付かれないとも限らない。立村の表情はそれほど荒れていなかったの。で僕も少し気を楽しにした。おとひつちゃんだけがひとりで焦っている。

「雅弘、お前何かたくらんだのか！」

立村よりもエキサイトしているおとひっちゃん。

思いつきりとぼけることにした。

「何をつて、何をさ」

「な、そうだろ、お前何もしてないよな。何も後ろめたいこととしてないよな。そういう奴じゃないよな！」

力をこめておとひっちゃんは僕に吸い付く。隣りの立村はやはり、蠟人形の静かな佇まいのままだった。

「当たり前だよ。あの、で、俺に何か用？ 今、片付けていて忙しいんだよ。おとひっちゃん、あとで連絡するよ。総田たちも片付け大変なんだろ。早く戻りなよ」

そらぞらしく続けた。背中ドアはしっかりと閉まっていた。

「ああ、な、わかっただろ、立村。お前の気のせいだと思う。だから」

どもりつつおとひっちゃんは立村を階段の方へひっぱり出そうとしている。背丈からするとおとひっちゃんの方がずっと高いし、体格だってがっちりしている。腕をひっぱったら蠟人形、一発で折れるだろうに。折れなかった。動かなかった。ただ黙って僕を見つめていた。コートは着ていない。抱えている。

「中で話したいんだ。少しでもいい。入っていいか」

「困るよ。ここは水鳥中学なんだよ。青大附中じゃないんだよ」

よけいなことを言い出したおとひっちゃん。本当にたまったもんじゃない。

「雅弘、話だけ聞いてやれ。立村も一度聞けばわかるだろ」

しかたない。手っ取り早く済ませるか。佐賀さんは窓辺だから、戸口付近だったら気付かれないだろう。

「いいよ、けど椅子ないから、入るだけだよ。水鳥中生しか見せちゃいけない本だってあるんだよ」

立村は頷くと、黙って戸をひいた。よかった。薄暗いから佐賀さんの気配は感じられない。

僕が背を向けたまま、立村に向き直った。おとひっちゃんが残るでむっすりとにらみつけている。僕と、立村の背中と両方をだ。

まず見抜かれているとは思わなければいけません。用心に越したことはない。ふんと鼻で笑うようにして見上げた。

「早くしてほしいんだ。暗くなっちゃうから」

立村は黙って、かばんから何かを取り出した。一度おとひっちゃんの方を見て、戸が閉まっているかどうかを確かめるように手を伸ばした。ページを扇状にばらりと広げ閉じた。

「この台本に手を入れたのは、佐川くん、君だって聞いたんだけどさ、本当なのか」

やはり腰砕けの蠟人形。言い方は静かだった。かんたんに言いくるめることができる。

「うん、今日も話に出てただろ？ 青大附中のビデオ演劇みたいなことを、うちの学校でもできないかなっておとひっちゃんと総田が話し合ってた、俺も手伝えたらなってことで用意したんだ。けど、青大附中みたいに『奇岩城』とか『忠臣蔵』とかやったら大騒ぎになって、結局先生たちからやめろって言われるだろ。だから、ちょっと臭いかなあと思ったんだけど、先生受けしやすくて、話もギャグにできるような内容にしたんだ。だよ、おとひっちゃん」

おとひっちゃんの言うことは信じそう。この男。

「それはさっき聞いた」

立村の表情は変わらない。静かにページをめくった。

「聞きたいのは、誰から元ネタを手に入れたのかってことなんだ」

「いや、噂だよ、噂。青潟でこういうことがあったんだってこと、先生たちが話していたからね」

徹底的にしらを切る。冗談じゃない。僕を信じてくれるおとひっちゃんには悪いけど、今はうそつきになるしかない。

僕の背中にいる、あの子のために。

「似た話を別の奴から聞かせてもらったことがあるんだが、それは

青大附中からの情報なんてことはないか」

なるほど、別の奴なあ。

全く動じるようすもなく、淡々と尋ねつづけるのはどうしてだろう。焦るようすもなく、ただページをめくったまま立ち尽くし、僕を見つめるだけだ。見据えるのではなく、自然に、なんも考えてないって顔をした。

「さあ、そうかもしれないけど、俺も学校名まで聞いた記憶ないしさ」

あらためて立村の顔を見上げた。僕よりは背が高いんだと初めて気付いた。きちんとネクタイ締めているし、崩した着こなしをしていない。きわめて優等生って顔をしている。手も顔も、おとひつちやんと比較して露骨に白さが冴える。

「いや、間違いだったら申しわけない。この前うちの学校に来てくれた時、会えなかったから代わりに誰かへ伝言してくれたのかなと思っただんだ。俺の知っている話を、きつと青大附中の別の誰かから聞いたんだろうなと思っていたから」

「え？ 俺行つてないよ」

僕が立村と顔を合わせたのは、「交流準備会」一度だけだ。おとひつちやんとセットになつて並んでいた時だけだ。

今日を含めて、二回目だ。そんなため口で質問されるような付き合いじゃないはずだ。

「ほら、校門で待つていてくれたことあつただろ？ うちの学校の友だちが気付いて教えてくれたからさ、すぐに行つただけだ、一足早く、うちの新井林たちと出て行つたからさ。ちょうど後ろ姿だけ拝ませてもらったんだ」

立村の唇がほころんだ。薄く、かすかに。おとひつちゃんには気付かれない程度に。続けた。

「あとで新井林呼び出しているいろいろ聞いたんだけどさ、あいつも口が堅くて、なかなか教えてくれないんだ。プライベートのことはあまり聞く気もなかったからまあいいかとは思っただけだ、今日少

しあいつに頼まれていたことがあったしついでにさ」

健吾くんは頼まれた？

猛烈に速く頭の中が回転を始めた。ねじが巻かれていく。何か、見落としていたものがあつたのだろうか。わかんない。僕は慌てておとひっちゃんに合図を送った。早く、こいつを連れ出してほしいけどおとひっちゃんはどうも顔で突っ立っているだけだ。立村だつてきつと、わからないはずだ。まさか、あの日のことか。三人で『リーズン』の階段椅子でひたすら語った時のことだろうか。思い当たる節がある。隠したい。言えない。だけど、目の前の蠟人形は手を緩めない。

「俺もあまり恋愛沙汰とかわかんないけどさ。新井林、かなり心配していたらしいんだ。いきなり同級生の女子を代行にするなんて勇気いることだしな。一応さつき、報告するために電話かけてみたんだけど、やはり案の定なんだ。俺も誤解を招くようなことをあいつに伝えたくないから、きちんと確認だけ取っておこうかなと思ってきてみたんだけどさ」

言葉が乱れず、さやさやと。静かに続いた。

「もしかしたら、もしかするかもな、とは思っていたんだが、やっぱりそういうことなんだな」

ここには佐賀さんの荷物なんて見えないはずだ。影も形もないはずだ。あの棚の影に黙って座っているはずなんだから。

振り向いちゃいけない。

僕は気を張って首を振った。きわめて自然に振舞おうとした。蠟人形の目にどういう風に映ったかはわからないけれど、僕がおとひっちゃんや総田にしていることと一緒だった。

「なんだよ、もしかしたらもしかするかもって」

「エレクトーンの話、よくここまで本当のこと聞き出せたなって思つてさ」

立村の目がゆっくりと僕の肩を透かしていった。棚から洩れる夕

陽がかすかに洩れている。影なんて映っていないだろう。でも佐賀さんはちゃんと帰った振りをしていたはずだった。

「エレクトーンのこことってなんだよ。ピアノよりも今時っぽくしたかっただけなのに、なんでだよ」

入れちゃいけない。どんなに攻められても僕が倒れるわけにはいかない。堤防にならなくちゃいけない。

「立村、どういことだ？ エレクトーンって」

相変わらず緊張感のない発言のおとひっちゃんがいる。この時だけは助けてほしかった。

「あのさ、もうこのくらいでいいかな、俺ほんとに急いで帰らないと家の配達があるからね」

僕が一步おとひっちゃんの方へ踏み出した瞬間。奴も僕に一步近づいた。

思わずえびぞった。左の頬がばしんと響いた。鼻がひんまがりそうになり、一度わおん、と鳴った。

目の前には、すっかり雨漏りのにじみ出た天井。かろうじて背中テーブルに腰を打ちつけて倒れずにすんだ。しっかと後ろのテーブル端を握り締め痛みをこらえた。腰と頬と耳と目。腰がぬけたみたいだった。立っていられない。とうとう一発ストレートをかました蠅人形の前にへたり込んでしまった。二発目は来なかった。

「立村、やめろ、やめてくれ！」

おとひっちゃんが渾身の力を振り絞り、立村の両手首を押えていた。

何度か利き腕の方を動かし、振り放そうとしたけれど、おとひっちゃんに腕力はかなわなかったらしい。あきらめ、なるがままに振り上げた手を下ろした。後ろのおとひっちゃんときたら血相変えるじゃないか。ぺたんと座ったまま、僕は半ば冷静にふたりのもつれ合つのを眺めていた。耳鳴りと鼻血がうっとおしい思いながら。

佐賀さんのことはなぜか考えなかった。ただ、痛みに酔っていた。

あれ、おとひっちゃん、どうしたんだよ。なんで俺の前に立ってるんだよ。なにするんだよ。

もう反抗するのをやめた立村がうつむき加減で僕の顔を射た。

さっき僕の頬を拳骨で殴り飛ばした時とおんなじこぶしが、ゆつくりと緩んでいった。殴ったばかりでまだ、あいつも余韻を覚えているんじゃないかって感じた。手を離しておとひっちゃんはするつと僕の前に立った。学生服が擦れててかてかだった。立村の姿が隠れて見えない。こんな風にしておとひっちゃんは、小さい頃僕をかばってくれたつけ。だんだん緩やかにひいていく耳鳴り。耳の穴をかつぽじった。ゆつくりおとひっちゃんが腰を曲げ、僕の前に座り込んだ。正座した。

おとひっちゃん、何するんだよ。

言葉になって出てこない。立村と正面向かい合い、お白州でご沙汰を待つ悪役たちみたいに両手をついた。

なんでだよ、おとひっちゃん、なんで土下座してるんだよ。

左肩越しに僕は立村の視線先を追った。さっきまで静かだったのに、いきなり丸い目できよときよとしている。

「立村、勘弁してくれ。俺の一生の頼みだ。どうかこいつを許してやってくれ」

「別に関崎、お前を責めているわけじゃないよ。俺はただ」 □

籠もり、それでも突っ立ったままの立村は、僕の方にまた冷たい視線を浴びせた。奥の窓辺をまたちらつと眺め、

「そんなにあの子が目障りか」

凍りつきそうだった。今まで僕の前にいる立村は、蠟人形で火にあぶったらすぐに解けてしまいそうな男だった。ぽきんと折れてごみ箱に捨ててはいさようなら、そんなタイプだった。健吾くんのように強烈な力もなく、なんとなくぼんやりしている昼行灯にしか見えなかった。なのに、どうしてか今はあいつの視線で動けなかった。言葉も出ない。耳鳴りが消えていったのに、「あ」という言葉す

ら発することができなかった。

「雅弘は、決して悪い奴じゃない。なんか理由があったはずだ。俺はそう信じてる。けど、お前の後輩を傷つけてしまったことは否定しねえよ。本当に、悪かった。俺が悪かった」

「だから関崎、お前は悪くないと言っているだろう」

「なんでもする。こいつをこれ以上責めないでやってくれ。雅弘には後で俺がきちんと話をつける。俺も、できることはする。お前の言う通りにする。条件は飲む。だから、頼むこいつをこれ以上、たのむ」

おとひっちゃんが土下座していた。両手を突いて、尻を高く突き出すようにして、立村の足下に這いつくばり、何度も同じ言葉を繰り返した。

「頼む、こいつを許してやってくれ。条件は飲む」

と、そればかり。呪文のように。

「おとひっちゃん、いいよ、俺が悪いんだ」

「黙ってる！」

振り向いたおとひっちゃんの目を見た瞬間、僕は悟った。

おとひっちゃん、本気だ。

学校祭三日目座談会の演説でいきなり見せた、ぶつちぎりの表情。僕が、ことの及ぶまでの間、読み取ることのできなかった感情。

おとひっちゃんの怒りは、本物だった。

やばいよ、まずいよ、どうしよう。

目の前で冷たく跳ね返す立村よりも、僕にはおとひっちゃんの瞳の方が怖かった。

夕暮れ色が床に四角く刺さっていた。窓辺の影は本棚と散らばった本くらいか。歯に麻酔かけられたみたいに頬を抑え、横目で床を見下ろした時だった。

窓ガラスの薄い斜線と一緒に、かすかに映る人影らしきもの。覗き込んでいる。

まさか！

立村のちらちら眺めている本棚の陰には、束ねた髪の毛の一番高く立ったところがちらついていた。

とぼけたい、とぼけられない。僕の負けだ。

本棚の陰から覗いていたのだろう。光の加減でそのまま姿が影になって浮かんでしまうなんて、気付いてないのだろう。

立村と、おとひっちゃんがそれを見つけてしまったってことだろうか。少なくとも立村の視線は、ふにゆふにゆつとしたふたつに束ねた髪の毛を捉えていた。

ちくしょう！　なんでだよ。どうしてだよ！

「わかった、関崎。それなら条件をひとつ飲んでもくれるか」

立村はおとひっちゃんを見下ろし、それからしゃがんだ。僕の方を見はしなかった。

「今から、用務員室に連れて行ってほしいんだ。一緒に来てほしい」

用務員室？

「他にはないのか？」

うつむいたまま、おとひっちゃんはくぐもった声で尋ねた。

「ないよ。何度も言っているだろ。関崎は悪くない。手を先に出した俺が悪いだけだ」

そして僕の方に向き直り、立ち上がった。見下ろした。おとひっちゃんに話し掛けていた時とは声音も変わっていた。

「後ろにいる人に伝えてくれ。今度こそ、きちんと帰ってくれとな」唇をかみ締め、数秒置いて、言葉を選んでいた。

「手を先に出した俺が悪かった。申しわけない。あんたたちのことは、誰にも言うつもりはない。あの子のことで、水鳥中学には迷惑をかけないようにするからその点は安心してくれ。ただ、これだけは覚えていてくれ」

おとひっちゃんに立村は手を伸ばした。手を取って立ち上がった。

僕の方を振り向いたおとひっちゃんの顔はなんだか泣きそうだった。先に引き戸を開けて立村は、吐き捨てるようにつぶやいた。僕にもう一度、ストレートの言葉を投げつけた。

「目障りだってわかっていさ。けど消えるわけにいかないんだ」

立村が先に出た後、おとひっちゃんも続こうとした。僕に振り返った。

「雅弘、俺が戻ってくるまで、ここにいろ。いいな」

僕にはわかる。おとひっちゃんが口先で脅しているだけなのか、それともただ今頭の中が完全にはちぎれているのか。親友として十年以上付き合ってきた仲なのだ。わからないほど、僕はばかじやない。ここにもうひとり、誰かがいるから、あえて何も言わないだけなんだってことも。

ここで殴らないのがおとひっちゃんの情けなんだってことも。

戸が閉まり、僕は立ち上がった。まだ左の頬がはれ上がったようにひりひりした。立村の奴、本気を出しやがった。手加減なしだった。それでもまだ動けるってことは、もともと腕力ない奴だったんだろ。おとひっちゃんだったら、今ごろ腰抜かしてへろへろな状態だろう。

右側にふたつ結んだ髪型の影が映った。

「佐川さん、ごめんなさい、私」

「俺の方こそ、ごめん。俺、守り切れなかった」

涙目で僕の前に立つ佐賀さん。唇を震わせている。きっと僕以上に怖かったんだろ。まさか、立村に存在を勘付かれているなんて思わなかったんだろ。ほんとだったら佐賀さんがもっと奥に隠れて物音ひとつたてさえしなければ、と思わなくもなかったけど、言ってはいけない。

それよりなにより、しなくちゃいけないことを、やらなくちゃ

いけない。

おとひっちゃんに戻ってくるまえに。へたしたら、立村もついてくるかもしれない。

それまでに、佐賀さんを学校から出さなくちゃいけない。まだ僕は逃げ道を探さなくてはならなかった。佐賀さん本人を見られたわけじゃない。あれは目の錯覚なんだと言い逃れることだつてできるはずだ。立村はともかく、おとひっちゃんにはごまかしがきくはずだ。

僕は佐賀さんの手を取った。かばんごと廊下に引きずり出した。「いいか、佐賀さん、今から俺の言う通りにするんだ。たぶん今、あいつらは用務員室に向かっている。なんでそんなところに行くのかわかんないけど、とにかく行ってるんだ」

震えている。おびえている。おなかからむくむくと気合が立ち上ってきそうだった。

「俺が今から、職員玄関まで連れて行く。用務員室とは反対側だから、今ならまだ顔合わせないですむよ。そこでダッシュで靴を履き替えて、さっさと帰っちゃえ」

「でも、気付かれちゃったのに」

またまた弱気になる佐賀さん。僕は声を張り上げた。打ち消した。い。

「姿をそのまんま見られたわけじゃないだろ。立村が勝手に思い込んでいるだけかもしれないだろ。おとひっちゃんの方は俺がうまくやっておく。ここに佐賀さんはいなくて、もうとつくの昔に帰ったことにしちゃうんだ。いいか、青大附中に戻ってから、それを貫き通せよ。ほら、エレクtoonのお稽古があるからさっさと帰っちゃったってことにでもしとくんだ」

「でも見られたのに」

僕の方がそれは重々承知している。でも、ひっくり返すことくらいお茶の子さいさいだ。水鳥中学生徒会・影の天才参謀と呼ばれる僕が、せめてもの意地でやり遂げたい、たったひとつのことだ。

「とにかく、俺の言う通りにしろよ。時間がないんだ」

腕をコートの上からつかんだ。服の厚みよりも腕の細さが指先からびりりと響く。

廊下には誰もいないことを確認して、僕は階段を駆け下りた。佐賀さんを引つ張りすぎて、転びそうになってしまった。何度も顔をゆがめていやいやをする佐賀さんに、僕はめつとにらみ付け、職員玄関まで走った。

用務員室は一階の生徒玄関脇だ。反対側だ。何の用があるのかは僕の知ったことじゃない。杉本さんとおかっぱの女子はとくに帰ったはずだ。立村の目の錯覚だと信じ込ませてなんとか乗り切りたかった。でないと、佐賀さんが追い詰められる。

いない。一階職員室前には、もう人気がない。

「何も言っな、とにかく行け！」

すのこの上で靴を履き替え、またなにかを訴えたそうに見つめる佐賀さんに僕は小さく怒鳴った。よけいなことしている暇あったら走ってほしい。わかっていたのかいないのか、佐賀さんはしっかり腰を折って礼をし、駆け出していった。自転車を引つ張り出しているところまでは見届けた。

さて、どう言い訳するか。

同じくらいのスピードで三階へ駆け上がった。図書準備室にまだおとひっちゃんは戻ってきていなかった。電気ストーブの電源を切り、椅子を一脚片付けた。僕ひとりがかくつろいでいるだけ、といった風に演出した。もう窓辺には夕陽のかけらだけが差しているだけだった。カモフラージュ用の台本を置いて、空を眺めた。いつもここで、総田と川上さんはいちゃついていたんだろう。さっきまでいた佐賀さんと僕のように。いや、僕はいちゃついていたという認識ないけど、おとひっちゃんたちからしたらそう思われてもしょうがないだろう。

ここに女子がいたってことがわかったただけだよな。けど佐賀

さんだって保証はない。

佐賀さんがここにいないんだってことを、なんとか証明しなくちゃ。

いくつか方法はある。佐賀さんにあとで連絡を入れ、口裏を合わせておく。エレクトーンのお稽古でとつくの昔に学校から出ていた。だからここにいた女子は佐賀さんではない。立村評議委員長の勘違い。それによつて一発張り倒されるなんて、なんかおかしい。被害者は僕だ。

ということをおとひっちゃんに信じ込ませるのはどうだろう？

相手は本当だったら、さっきたんあたりが一番いいんだけど、おとひっちゃんが動揺する可能性大だから、別の相手を考えてもいい。いや、おとひっちゃんの知らない女子、ってことにしたっていい。他のクラスの奴で、放課後、女子に呼び出されて告白されたってことを聞いたことがある。そのまんま、使わせてもらおう。ふたつに束ねた髪型が佐賀さんのとだぶるかもしれない。そこをつつこまれるかもしれないけれど、ちょっと髪の長い女子だったら誰でもできる髪型だつて言い逃れよう。見たのはおとひっちゃんと立村、そして佐賀さんだけだ。しかも立村は、水鳥中学に来たのが真正正銘、初めてだ。単に僕が、知り合いの女子とおしゃべりしていたところに因縁つけにきたという有様。加害者はあいつに入れ替わる。けど、別に僕は事件を大事にしたいわけじゃない。と言つてやるう。

別に水鳥中学生徒会との交流を邪魔する気はないとも。

その代わり、ストレートパンチ一発かませたことをネタに、ちょこちょこつついてやるっていうのはどうだろう？

勘違いして、一年の女子の名誉を傷つけるなんて最低だとも。そうすれば佐賀さんも、青大附中で立村に言い返せるだろう。実質佐賀さんを守るため戦うのは健吾くんだろうけれども。この辺も後で詳しく、佐賀さんと打ち合わせすればいい。

とにかく今は、おとひっちゃんに説明して、飲み込ませること

だ。いつものことだ。難はない。
背中で引き戸が静かに開いた。
覚悟した。

おとひっちゃんだということは、ばたばたした足音ですぐに聞き
分けられた。

「雅弘」

低い声で、一言、呼ばれた。

答えないで、おとひっちゃんの入る戸口まで出て行った。すつか
り暗くて、立ちくらみした。ふらつきながら見上げた。

「あのさ、俺、さっきのことなんだけど、あれ誤解なんだ。立村の
奴が間違えてるんだよ」

おとひっちゃんは答えなかった。

「おとひっちゃんに言わなかったのはまずかったと思うよ。けど、
名前は言えないけど、うちの中学の人で、ちよつと用事があつて、
ちよつとだけ、ほんとうにちよつとだけ話をしていただけなんだ」

返事が返ってこない。勤めてあどけなく、左のほっぺたをさす
りながら僕は、目の前の黒いシルエツトに話し掛けた。顔形が読み
取れない状態だ。

「というか、名前、覚えていないんだ。三日前に、いきなり電話が
来て、ふたりつきりで話をしたいから、場所用意してくれとか言わ
れて。今日土曜だから、交流準備会のあとだったらいいかなつて思
つて、ここに来てもらったんだ。やっぱり人前だとまずいつてのが
あったから。けど、あれは青大附中の評議委員長が言うような、人
なんかじゃないんだよ。全くの別人だよ」

どうして言い返さないんだろう。嘘つく何とか、黙れとか、いい
かげんにしろとか、怒鳴らないのだろうか。おとひっちゃんはまだ、
立村の言い分を信じきっているはずだ。どんな話を聞かされたのだ
ろつか。そこんところを確認しないと次の手が打てない。はらはら

してきた。

「なのに、なんで殴られちゃうんだろうな。あいつ、手加減しなかったんだよ。俺のほつぺたすごい勢いで殴りつけたんだよ。誤解もいいとこだよ。たまたま、隣りに座ってた青大附中の人と話していたのが多かっただけでさ。ひどいよなあ。俺、本当だったらあの立村って奴にやり返したいよ。ひどいよ、きっと葉牡丹の子のことを身びいきして、俺がなにか悪いことたくさんだっと思って思い込んでいるんだよなあ。俺、ちゃんと保健室に行くようにって勧めたしさ。ほんとまああいう子、俺大嫌いだけど、それでもちゃんと親切にしてやったつもりだよ。なのになんでだよ」

突然おとひっちゃんが戸を開け放った。廊下の温度差ある空気で顔が冷たくなった。肩を掴まれて強引に引っ張り出された。廊下の三年用水飲み場まで連れて行かれた。手が冷たい。おとひっちゃんは真ん中の水道蛇口をひねり、目一杯流した。水がもったいないってくらい流れた。

「来い」

短く、一言だけ。断れない雰囲気だった。しかたないので跳ね返る蛇口の前に立った。水流の音だけが廊下に響き渡っていた。隣りのおとひっちゃんはもういちど、蛇口をひねり直し、横に流れるように水の方向を変えた。ぞうが水を吹き上げているのを横からみるような形だった。

何するんだろう。

疑問が途切れた。いきなり詰襟のあたりと脳天を両手で押さえつけられるようにして、蛇口に額をぴたりとくっつけられた。水が顔の中で空いているところ全てに飛び込み、僕は何度も首を振ろうとした。おとひっちゃんの腕力にはかなわないと分かっている。痛い。冷たい。苦しい。

息を止めるぎりぎりのところで、おとひっちゃんは襟を引き上げてくれた。口と耳に入った水を吐き出し、しばらく咳き込んだ。前髪横髪、見事にずぶぬれた。制服の胸あたりも、おなからへんもす

べて。

「何するんだよ！　ぶっ殺す気かよ！」

めったに出ない罵り文句が飛び出した。おとひっちゃんに使ったこと、一度もない。

おとひっちゃんは黙って水道の蛇口を締めた。濡れた手を数回振って、乾かすそぶりをした。

「雅弘、正気に戻れ。頭を冷やせ」

それだけ言い残して、おとひっちゃんは背を向けた。

おとひっちゃん、俺の言うこと、全然信じなかった。

いつもだったら一発で騙されたくせにさ。

僕は前髪だけでもう一度雫を絞った。さっき立村に殴られた場所に冷たく染みた。

腕で顔をこすりながら鏡を見た。青いあざが頬の上に少しだけ残っていた。

おとひっちゃんの言う通り、頭が冷えると今まで見えなかったものが見えすぎるほど見えてくる。どうして気付かなかったのか不思議なくらいだった。いつもの自分だったらあっさり気付いたはずなのに。悔しかった。

次の日は日曜で誰にも会わないですんだのでほっとした。

部屋にこもって鈴蘭優のポスターを見上げていた。両親には風邪をひいたとごまかしておいたけれども。

佐賀さん、俺のことで立村に脅されてるんじゃないだろうか。電話をかけることはできなかった。

だって、健吾さんと一緒にいる可能性だってあるじゃないか。俺とのことを誤解するかもしれないじゃないか。

どうして気付かなかったのだろう。

最初から、立村評議委員長が僕のことを胡散臭そうに見ていたことを、あえて知らないふりしていた。いや、もっというなら、奴がさんざん意味不明の行動をしていたことを、どうして見逃していたんだろう。

生徒会室を腹下りで抜け出そうとしたところだって、いつもの僕だったらあっさりと、

「佐賀さんから杉本さんを引き離そうとしているからだ」と判断しすぐに別の手を打っただろう。

僕が例のくさい脚本を読み上げた時だってそうだ。

立村はいきなり、「忠臣蔵」なんていうあやしすぎるテープを提供し始めた。総田やおとひっちゃんは、単なる見せびらかし精神からだろうと思っっているだろうけれど、今ならわかる。

あいつ、話を逸らしたかったんだ。

脚本を読んで、僕の狙ったことを一発で見破ったんだ。

だから、自分のしょうもない「松の廊下刃傷沙汰」をおかずにして、僕の脚本の毒を抜こうとしたんだってことを。

いつもだったら、気付くよな。全く頭が悪すぎるよ俺って。いや、なによりも最初から計画がずさんすぎた。

なんで、図書準備室に佐賀さんを引きずり込もうと思ったんだらう。危険じゃないかと終わった後に思う。

いくら全てが終わった後とはいえ、他の連中にばれたらしゃれにならないことになるってわかっていたくせにだ。

佐賀さんと話をするんだったら、駅前の喫茶店だって、いつもの郷土資料館だって、まだまだたくさんあったはずだ。

なんで、そんな馬鹿なことやらかしちゃったんだらう。

僕は寝転んで天井の鈴蘭優を見上げた。

どうしてだよ。俺は。

「水鳥中学生徒会陰の天才参謀」の名前返上だ。

ふたつつにしばって側で揺れていた髪の毛、それに触れられなかった。

夕暮れの中、見詰め合ってしまった時。ひとつひとつが橙色に染まっていく。僕はしばらく頭をかかえ、布団の中にもぐりこんだ。額を枕に押し付けてしばらく身体をくねらせていた。でないと額の冷たい感触と左頬のひりひりする痛みが蘇ってしまうから。こんな女々しいことしている自分が信じられない。もう、どうすればいいかわからなかった。

もちろん、これから僕なりにどう対処していけばいいかは、土曜日の段階で考えていた。

佐賀さんに帰り際ちゃんと説明したように、

「あれは立村の思い込みに過ぎない。あそこに佐賀さんはいなかった」

と言い張り、むしろ立村の暴力事件の方を攻め立てることもできるだらう。かなり汚い手だとは分かっている。

どんな理由があつたにせよ、あいつが僕を力いっぱい殴りつけたことだけは否定できない事実。

まだ、うつすらと痛みすら残っている。病院で診断書取るという手だつてある。

それに青大附中は私立だ。公立の中学と違って、退学処分されちゃうかもしれない。僕が青大附中の奴に殴られたと訴えたら、うちの父さん母さんに説明したら、言い方にもよるけどきつと怒鳴りこみに行つてくれる。僕が被害者として言い張つて、あいつを窮地に落とすことだつて可能なはずだ。

そうだ。佐賀さんがあの部屋にいない、ということだつたらいくらでも。

立村の言つたことはすべてが本当のことだ。でもそんなことを認めるわけにはいかなかった。

僕が謝りたい相手はひとりだけ、おとひつちゃんだけだ。

信じてくれてたおとひつちゃんを、裏切つてしまったことだけだ。

もんもんと一日中ベットで転がり続けていた夕方、電話がうるさく響いた。日曜はいつも両親が店に出ているので、僕はしかたなく受話器を取つた。

「雅弘か」

名乗ると、いきなりどすの利いた声が響いた。ひとりしかない。おとひつちゃんだった。

「あ、ああ」

「明日、駅前まで来い。終業式が終わつたらメシ食わないでまっすぐ来い」

「なんで？」

単純な言葉しか口に出てこなかった。

「お前に理由を聞く権利なんてないんだからな。それと」

口籠もる気配がある。僕は耳を済ませた。ごほんとひとつ咳をし

ていた。咳払いという感じではなかった。

「水野さんと一緒に来い」

さっきたんと？

なんでさっきたんの名前が出てくるのかわからない。天井を見上げてても答えが出てこない。

「あとは俺がみんな手を回しておく。いいか、雅弘。何も言っな、聞くな。わかったか」

言っな聞くなって言ったって。

僕に理由を聞く権利はない。その通りだった。それだけのこと、している。

「うん、わかった。明日さっきたんと一緒にだね」

「水野さんには、もう話つけてあるからよけいなこと考えるな、あと」

また口籠もるようにして、咳をしている。

「このことは、誰にも言っな。ふたりでとにかく一緒に来い」

言いたいことだけぼつ、ぼつと並べて、おとひっちゃんの電話は切れた。強く叩きつけられた。

さっきたんと？

おさげ髪の、はつかねずみのような表情を思い出した。ふたつに束ねたあの髪型とは違う何かが思い浮かび、僕はまた、天井の木目をにらみつけた。こうすると知恵が出てくる。僕のいつもの習慣だった。

俺に理由聞く権利なんてない、ったって。

けど、理由があるから、明日駅前に行かなくちゃいけないってことだろう。納得がいかなかった。でもおとひっちゃんの声は本気だった。僕の額を蛇口に押し付けた腕力と一緒に同じだった。

とにかく、わかるとこまで聞き出そう。

さっきたんの電話番号をクラス連絡網で探した。何度もかけたことがあるから、抵抗ない。いつもおとひっちゃんの代わりに電話してやるんだから、平気のへいざだ。

「佐川くん？」

お母さんを通じて、さっきたんが電話先に出た。

「あの、この前はごめん。俺も、気が立ってて、なんか八つ当たりしちゃってて」

どうせ謝りたいと思っていた。佐賀さんにかまけてついついさっきたんを無視してしまっていたところがなきにしもあらずだった。土曜日の段階ではあたまがぼおつとしていたけど、頭が冷えた結果、明日さっきたんにあやまらなくちゃって気持ちになってしまっていた。早いうちに謝った方がいい。

「ううん、いいの。どうしたの」

よかった。さっきたんはやっぱり暖かった。その声が鈴蘭優以上の効果をプレゼントしてくれたなんて、言えやしない。

こつちがごめんって思っている時に、ちゃんと「いいよ、気にしてないよ」と言ってくれる女子って、少ない。

その一言だけで、僕はさっきたんにも何でもしてあげなくなる。きつとおとひっちゃんも僕の倍、そう思っているに違いない。

さっきたん、おとひっちゃんにも同じこととしてやってるんだよな。

ちよいまでよ、おとひっちゃん、昨日さっきたんにも連絡したのかなあ？

小学校五年の頃から、さっきたんへの伝言係は僕だった。おとひっちゃんはどうしても女子に電話をかけたくない……言い換えると「赤くなるから絶対に女子と話をしたくない」……ということ、いつつも僕が電話していた。特にさっきたんにはそうだった。でもなんでだろう？

昨日は日曜だ。前の日は土曜で、とつくの昔にさっきたんは家に帰っていたはずだ。

あの青大附中二人女子に荷物を持って行って、それっきり戻ってこなかった。

僕は一呼吸置いて、最初にするつもりだった質問を後回しにしようと思った。

おとひっちゃんから何頼まれたんだよ？

いきなり核心につつこんだらさっきさんも逃げ出してしまふ。「話をつけておいた」ってことは、おとひっちゃんなりに内密なことに違いない。理由を聞く権利がない僕は、絡め手を使ってたどり着くしかないってわけだ。

「さっきたん、この前の土曜なんだけど、あのあとどうしたのかなあって思ってたさ。ほら、青大附中の女子の荷物持って、あれで帰ったのかなあって思ってたさ」

そうだ。なんとなく、気になって、聞いてみたのだったってスタンスを崩さないでいこう。最初、やさしいんだけど堅い感じの話し方をしていたさっきたんが、ほわほわとした口調で教えてくれた。がちがちしたおやつのチョコケーキをレンジでチンして柔らかくした感じだった。

「うっん、帰らなかったの。挨拶しなくてごめんなさい」

甘い。柔らかい。やっぱりこういうところがさっきたんだ。

「いや、なんとなくさっきたん、あの場所いづらかったのかなあって思ったんだ。俺も青大附中の人たちのことではたばたしてたし、おとひっちゃんの手伝いもしたりしなくちゃいけなかったりしてさ」

僕は受話器から繋がるぐるぐる巻きのコードをひっぱりまくった。指が落ち着かない。うまくさっきたんがひっかかってくれるとうれしいんだけどな。手ごたえがありそうでなさそうだ。

「あのね、佐川くん」 さっきたんはゆっくりと、僕の思ってもみなかったことを、ふんわり口調で言っただけだ。

「青大附中の人たち、保健室に行かなかったの。だって、保健室、土曜日、閉まっているんだもの」

え！ 保健室、閉まってたって、どういうことだよ！

思いつき黒いぐるぐる巻きのコードを伸ばし、ぱつと離れた。左手から力が抜けていくのがわかる。いやな予感の時っていつもそう

だ。

「佐川くん、保健室にあの人たちが行ったって聞いた時に、もしかしたら迷っているんじゃないかなって思ったの。よけいなおせっかいだったらごめんなさい。でも、私もよく気分が悪くなって教室出て行くことが多いから、もしそういう時に、保健室が開いていなかったら困ると思ったの」

「保健室が閉まってるって、じゃあ、昨日もそうだったんだ？」

保健室って年がら年中、保健の先生が座ってて、ベットも用意されてるもんだとばかり思っていた。だから立村にそう言ったのだ。

「そう。先生、いつも一時半くらいに帰ってしまうの。それで青大附中の人、やっぱり迷ってて」

そうか、それは盲点だった。僕はあまり保健室にお世話になんてならないからあまり気にしなかったのに。

いや、そんなことはどうでもいい。じゃああの二人はジプシー状態で水鳥中学校内をさまよっていたってことか。

「ひとりの人、本当に顔色真っ青だったから、私、用務員さんのお部屋に連れていったの。そこでしばらく寝せてもらって、それから帰ったらどうかしらって、勧めたの」

無意識の意識ってすげえよ。

僕はいつのまにか、昨日見損ねた場面を覗くチャンスをつかんじやっただけらしい。

怖いくらいだ、驚いた。

さっきさんは気付いていない。やっぱり自分が何を話しているのかよくわかんないみたいだ。そういうおばかっぽいところも、僕がさっきさんと話をしてほっとするところだ。ふうん、それでそれで、と促した。

「バスケ部の友だちとかも、土曜の練習中に足をひねったり怪我したりした時、保健室が開いてなくて困ったってこと、話してたから覚えてたの。そういう時、いつも用務員のおじさんかおばさんがい

るから、簡単な手当てしてもらったって。これ、内緒にしてねって言われてたけど、あのおじさんおばさん、いい人だからこっそり休ませてくれるのよ」

知らないわけじゃない。うちの学校の用務員さんは夫婦者で、花を植えたり掃除をしたりと、いつもにこにこ笑顔が印象に残っている。よく石炭を運ぶために石炭置き場に行くと、僕の背が低いのを気にしてか、

「これ、持てるかな？ 少し減らそうか？」

とよけいなお世話をしてくれる。僕だって力はあるんだといったけれど、親切で言ってくれてるのと、楽しそうな顔しているので言い返さず、減らしてもらっていたわけ。ほんといい人だ。

いや、そんなのもどうでもいい。用務員室。

おとひつちゃん、あの後用務員室へ、立村を連れていったはずだよ！

だんだん繋がってくる。自分でも信じられない。自信なくしそうだった僕の頭が、だんだん「天才参謀」の誇りを取り戻しつつある。どうか、このまま自信よ復活しろ！

頼むよさつきたん、教えてくれ、そう叫んでいた。

「じゃあ青大附中のふたりはずっと、用務員室にいたんだ」

「そうなの。一年生の女子が本当に具合悪そうで、おばさんも心配して、すぐにおふとんしいてくれたの」

「ふとんなんてあるんだ」

「そうなの、泊りこみのために用意しているんですって。一時間くらい、ずっと横になっていたの。それで一緒にいた二年の子が、委員長さん戻ってくるまで待っているってことで、一緒に付き添ってあげてたの。おかっぱの、可愛い感じの人」

ああ、あのおかっぱの子か。

となると、話は通じる。さつきたんが荷物を取りに生徒会室へ行ったのは、用務員室で休んでいる二人に持って行ってやるためだったのだから。さつきたんにそう聞くと、当然の答えが返って来た。

「ふうん、さっきたん、頭いいなあ」

心臓の激しいとくとく音を聞かせないようにして、僕はのほほんと相槌を打った。

「ううん、私頭悪いわ。青潟商業第一志望だもの」

「それはそうと、さっきたん、その人たち、いつくらいまでいたんだっけ。一時間くらい、一年の女子がふとんで寝ていたんだよね」

とうとうさっきたんは致命的な言葉を発した。本人がどう思っているかどうかわかんないけど、僕にとっては、逃げ道を塞がれたのとおんなじだ。

「うん、二年の女の子のお父さんに、車で迎えにきてもらうことになったので、二時間くらい一緒にいたわ。後で関崎さんと、青大附中の評議委員長さんが戻ってきて、それから帰ったの。私、昨日関崎さんと一緒に帰ったから、覚えているわ」

おとひつちゃんと帰ったってか！

二時間くらいって、俺と佐賀さんが学校にいた時か！

あの時まだ、学校の中にいたのかよ！

「さっきたん、おとひつちゃんはその時、何か言ってたか？」

僕は震える声を聞かせないよう、一生懸命のぼしぼしして尋ねた。

「うん、いろいろ」

ごまかしたってことがありありと分かる。ここはまだ突っ込まないで置こう。

「青大附中の評議委員長と、その女子ふたりは一緒に帰ったのか？」

「うん、もうひとり、佐川さんと話していた人、あの人が自転車で帰っていったのを見てから帰ったわ」

俺と話していた人がって？

指先に絡みつくのは黒いリング状のコード。汗ばんできた。

「関崎さんと委員長さんが、用務員室の窓から自転車を見ていて、『やっぱり帰ったな』ってぼつっと言ってたわ」

心なしか、そこにとだけさっきたん、ゆつくり目にしゃべっているような気がした。顔が見えないのがいらだたしい。もつとたくさん、読み取れただろうに。僕の中で走るものすごく速いコンピューターが、答えをたたき出すのに時間はかからなかった。

八方塞りってやつかよ！　ちくしょう！

もうほとんどやけで、僕はさっきたんから根掘り葉掘り、用務員室での女子ふたりと男子ふたりの状況について聞き出すことにした。僕の直感ほめちゃうくらい鋭い。もう、自分でもいやになっちゃうくらいぱつと分かる。さっきたんのあいまいな説明でも、あつという間に答えが出てきてしまう。答えが、僕の願っていないものばかりだとしても、関係ないくらいに。

「他の学校に来て病気になって、心細いだろうなあって思って、私も一緒に用務員室にいたの。ちゃんと委員長さんには伝えておいたんだけど、関崎くんも一緒にきてくれるとは思わなかったの。関崎くん、一年の女の子に一生懸命、なにか話をして、元気付けていたみたいなよ。委員長さんが、『悪いけどふたりだけにやってくれないか』って言ったから、私とおかっぱの女の子と、あと委員長さんが用務員室を出たの」

ふたりだけにしてやってくれないかって、じゃあ用務員のおばさんどうしたんだよ！

「うん、用務員のおばさんも、理由聞いて一緒に待ってくれてたの」

ちよつと待った。理由を用務員のおばさんに話したのは誰だろう？

「おかっぱの女の子。青大附中って先輩の子が後輩の子を可愛がる習慣があるんだって教えてくれたわ。お母さんみたいに面倒みてあげてたのよ。私もああいう風に、後輩に好かれたいな」

さっきたんはその点大丈夫だ。いつもだったら太鼓判押してあげるんだけどそれどころじゃない。

「関崎くんと話した後、その子、一気に元気になったの。ずっと

それまでにこりもしなかったのに、いきなりおかっぱの女の子に、一生懸命何かを話していたのよ。嬉しかったのね。おかっぱの女の子も一生懸命、一年の子の髪の毛撫でてたの。きれいな髪の毛で、うらやましかったな。後ろで委員長さんが、関崎くんには何かお礼みたいなこと言ってたのは覚えてるけど、盗み聞きしちゃいけないと思ったから、私、聞かなかったの」

その辺、曖昧な言い方だった。たぶん、さっきたんはすべて耳にするなり目にするなりしていただろう。それをあえて言わないのはなにか訳があるらしい。

「そうなんだ、なるほどなあ。今回はさっきたん大手柄だなあ。すごいよ、さすがだよ」

別の意味をこめて僕は、たっぷりさっきたんを誉めた。何度も歯を食いしばっていたなんて、僕は決して言えなかった。

だいたい事情はつかめたところで、最後の本題に入った。聞き出しにくいことだけど避けられない質問だ。

「さっきたん、俺とおとひっちゃんのこと、知ってる？ 知ってるよね」

ほわりほわりと語ってくれたさっきたんが、ふと黙った。せつかく膨らんだおいしい匂いが、抜けてしまった。

「理由ももしかしたら知っているかもしれないけど、俺とおとひっちゃん、今、険悪なんだ。知ってる？」

「あまり、詳しいこと、わからないから」

途切れそうなかすかな声だった。

「けど、俺、おとひっちゃんと仲直りしたいって思ってるんだ。それはわかってくれるかなあ」

「うん」

少し元気が出てきたみたいだ。よかった。

「それでんだけど、さっきたん、今、おとひっちゃんから電話があつてさ、明日一緒に駅前に来てほしいって頼まれたんだ。さっき

たんと一緒にって言われたんだけど、それって何かあるのかな？

おとひっちゃん、さっきたんには話をつけてあるって言ってたけどさ」

「……ごめんなさい」

ほんとに受話器の向こうから流れる雑音にかきけされそうな声だった。知っているはずだ。何かおとひっちゃんたくらんでいるんだろう。目の前にさっきたんがいるんだったら、あの手この手を使つて聞き出すところだけど、自分の中のレーダーが、避けるようなサインを出している。

「理由、教えてもらえないかなあ」

まずはストレートに。

「……ごめんなさい」

「じゃあ、いつ？ おとひっちゃんと話、した？ 土曜日の帰り？」

「うっん、電話で、今さっきなの」

電話かよ！

僕がどれだけ驚いたかって、わかってもらえないんじゃないかと思う。

おとひっちゃんが、なんとさっきたんに電話をかけたんだ！

一緒に帰っただけでも信じがたいことなのに、それに加えて、電話まで。たぶん小学校時代の学級文集末尾の卒業生住所一覧を漁ったに違いない。あのおとひっちゃんが、自分の持つ勇気を全部振り絞って、さっきたんの電話番号をダイヤルしちゃったってわけだ。

おとひっちゃん、本気だ。

逆らえないよ。

さっきたんはどこまで知っているんだろう？

これ以上質問を続ける気力、持っていなかった。一刻も早く、部屋の鈴蘭優のポスターと顔つき合わせて相談したかった。おとひっちゃんの考えていること、さっきたんの知っていることをみな整理したかった。

「きつと、仲直りしたいからだと思うの。それで、佐川くん、ひと

っただけお願いしていいかしら」

ささやくような声で遮られた。僕は頭の中の「鈴蘭優」ポスターを打ち消した。

「明日、私、佐川くんをびっくりさせるようなこととしても、驚かないでほしいの」

「え？ 俺を驚かせるようなこつてなんだよ」

また、黒い予感がざわざわとする。口籠もるさっきたん。咽のところで、言葉を押えているような、くうっという音が聞こえる。でもさっきたんの口調ははつきりしていた。

「終わったら、ちゃんと佐川くんとふたりになった時、話します。だから、それまでは何も言わないでほしいの」

なんだよ、その秘密めかした言い方って。

おとひっちゃんも、さっきたんも、何かを仕組んでいる。おとひっちゃんが言うに、僕は理由を知る権利がないんだという。だいたい想像がつくけれども、肝心要のところが読み取れない。さっきたんが言うに、僕を仰天させるようなことをするらしい。

俺、おとひっちゃんに落とし前つけられるってことなのかよ。けど、あいつのためにやったことなんだよ。おとひっちゃんがあの杉本さんって子を嫌っているのがわかるから、水鳥中学生徒会に近づけないようにしようとしただけなんだよ。おとひっちゃん、わかってももらえないってのはわかってるつもりだけど、けどさ。俺はおとひっちゃんのことを大好きなんだよ。

「じゃあ、明日、よろしく」

本気でさっきたんを問い詰めたら、きつと白状しただろう。なんとなく黙っていた方がよさそうな気がした。こういう時の予感はある。とにかく流れに任せて様子を見ても間に合うだろう。受話器を置いてしばらくさっきたんの言葉を思い起こし、ベットに横たわった。天井の鈴蘭優が目の前ではやけるように視点をずらし、頭の中を片付けることにした。

立村とおとひっちゃんがどうして用務員室に行ったのか、ひとつめの理由は判明した。

杉本さんともうひとりの女子と一緒にいて、立村を待っていたからだろう。おとひっちゃんじきじきの案内でだ。

けど、僕を殴りつけた後立村は、

「ひとつだけ条件を飲んでもらえないか」と言わなかっただろうか。

おとひっちゃんも、

「お前の言う条件は飲む」

と、なんとかのひとつ覚えみたいな感じで繰り返していた。

立村の出した条件っていうのは、いったいどんな代物だったのだろうか？

思い当たるのは、杉本さんがらみのことだろうか。さっきたんが言うには、おとひっちゃんと杉本さんをふたりつきりにして、何か話をしていたらしいということだ。大人である用務員のおばさんまで追い出して、ふたりつきりにする理由ってのはいったいなんだろう？

しかもその後、杉本さんは病人状態から一気に回復し、おかっぱの女子に楽しげに報告していたという。

おとひっちゃん、何か杉本さんを喜ばせるようなことを言えと強制されたのか？

おとひっちゃん、あいつに脅されて、まさか杉本さんと付き合うなんてこと、考えているんじゃないだろうな！

背筋が寒くなるのを覚えた。風邪じゃない。

立村に殴られた頬をさすった。一緒に罵られた言葉をセットで思い出した。

そんなにあの子が目障りか。

目障りなのはわかっていているさ。けど、消えるわけにはいかなんだ。

おとひっちゃんに杉本さんがベタばれなのはよくわかった。非常識な化粧なんかして学校にくるくらいだ。相当なもんだろう。

けどおとひっちゃんの想い人は、誰が見ても明らかかなさっきんだ。

もっというなら、おとひっちゃんは杉本さんのことをめっちゃくちや嫌っているはずだ。僕ほどではないにしても、近寄りたくない女子のひとりとして認識しているはずだ。僕にはお見通しだ。おとひっちゃんにとっても、杉本さんは目障りな女子のはずだ。

つくづく思ったんだけど、立村の杉本さんに対する関心は、尋常じゃない。お気に入りの後輩って域をはるかに越えている。男子の恥になりそうな言い訳までして追いかけるなんて、僕には理解できない。佐賀さんが話していた通り、好みの差っていうのもあるだろう。僕からしたら

「そんなに杉本さんが好きだったら、迷惑かけないように保護してどっかに連れて行け」

と言いたい。佐賀さんだって、おとひっちゃんだってそうして欲しいに決まっている。

それをだ。

立村はおとひっちゃんに土下座させて、要求を飲ませようとしたんだろうか。

杉本さんの望みをかなえてやってくれとでも言っただろうか。それってやり方が汚すぎる。僕のしたことなんかよりもずっと、人間として許せないことだ。

大嫌いな相手を無理やり好きになっってくれ、なんて、残酷だ。

どう思う？ 佐賀さん。

鈴蘭優のポスターもとい、顔だけは佐賀さんのイメージ。語りかけてみた。

「やっぱし、変だよな！」

声を出してみた。天井に響いた。

もちろん、これは僕の直感に過ぎない。外れている可能性だって

ある。けど、立村の言動を考えると、可能性としてはゼロじゃないような気がする。おとひっちゃんも僕のは僕のでかしたポ力をかばってくれた。責任を感じておとひっちゃんは、自分のしたくないことをしようと決意したんだろうか。立村に頭を下げて、僕を守ろうとしてくれたんだろうか。

どうなんだよ、おとひっちゃん。

あいつが僕と絶交するつもりなのか、それともまだ親友でいさせてくれるのか。わからない。

けど、さっきの電話の内容だと、全く救いがないわけではなさそうだ。

俺が謝りたいのは、おとひっちゃんにだけなんだ。あんな奴らには意地でも頭なんて下げるもんか。

佐賀さんをいじめた奴らを、誰が。

僕は目を閉じた。眠ればいい案が浮かぶ。僕の経験法則だ。

次の日は終業式だった。ろくでもない通知表の結果に、少々やさぐれていた。

だって、青潟商業・工業ともにボーダーラインときたもんだ。三年になつてから取り返せばいい、って楽天思考で行きたいところだけど、今夜はずっと説教を食らうはめになるのがうっとおしい。帰りにたくない気分だった。

いつもだったらおとひっちゃんと一緒に、どっかバッテリーセンターあたりで気分爽快になつてくるんだけど、そんな脳天気なことを考えていられる状況じゃないことは僕が一番わかっている。はい、もちろん行きますよ。駅前に、十一時半。気が重い。

終業式、先生のお言葉、および四月の組替えに関する情報などが教室の空気に入り交じった。四月には組替えがあるのでいきなり名残惜しそくに固まっている女子もいた。今度はおとひっちゃんとおんなじクラスになれるんだろうか。いや、なつたらかえってしんど

いかもしれない。いろんなことを考えながら、僕は通知表をしまい込んだ。向こう側の席にいる、さっきたんへ目で合図した。できるだけ他の連中に気付かれないよう、さりげなく、かばんを上を持ち上げ、首を曲げた。さっきたんは鋭い。気付いてくれた。いつものおさげ髪のまま、廊下に向かった。終業式の日には週番のお仕事もないらしい。

別々に教室を出た。

当然、おとひっちゃんとはまだ話をしていない。二年四組の教室を覗いてみたけれども、すでにおとひっちゃんも姿を消していた。きつと生徒会室に寄っているに違いない。

さっきたんの家の前を、どうせ駅前に行く時には通る。それならめんどろじゃないしってことで待ち合わせ場所をさっきたん家前に決めてあった。

さっきたん家の前には、鉢植えの黄色い貧弱な花が首長く咲いていた。ぎざぎざした葉っぱが何重にも土にかぶさるくらい積み重なっていた、見覚えあるんだけどなんだか記憶が曖昧だ。玄関で待っているときっきたんがすぐに出てきた。すごい勢いで着換えたに違いない。水色のブレザーに紺色のスカート姿だった。服だけだったらやっぱり、水鳥中学の典型的校則美人のさっきたんのままだったけど、ひとつだけ違っている。

うさぎの耳が折れているかと思った。

「ごめんなさい」

少しくるくるっとくせがついた髪の毛だった。広がっていて、歩きたびにぶるんと揺れた。

「さっきたん、その髪の毛」

なんで、ふたつつに結んでる？

言葉がそれ以上でなかった。さっきたんは唇を結ぶと、また首を振った。

「今は聞かないでね。あとで、ちゃんと話します」

さっきさんの髪の毛は、お下げじゃなかった。小学生の子みたいに見えた。ふたつつにむすんで垂らした、犬みたいな髪型だった。

土曜の、佐賀さんだ。

はつかねずみみたいなおちょぼ口に、その髪型は子どもっぽく似合っていた。

何かを話さないとまた変なこと思われてしまうかもしれない。僕は目についた、門の黄色い花を指差した。

「さっきさん、あの花、何？」

立ち止まり、じつとさっきさんは僕の視線を追いかかみこんだ。花を二本指でつまむようにして、そっと口付けるようなしぐさをした。

「佐川くんが持ってきてくれた、葉牡丹の花よ」

「葉牡丹？」

二月に受け取った時にはずいぶん気持ち悪い花ですぐに手放したかったあの花だ。

さっきさんに押し付けた、あの葉牡丹だ。

いやあな気持ちになりそうだった。けど、僕が受け取った時とは違い、葉っぱもすっかり花じゃなくて、ちゃんとしたたの「葉」って感じになっていた。むしろ、茎が長くて別の意味で不気味だった。さっきさんは全く気にしていないようだった。首をかしげて、また髪をふると振るった。

「本で調べただけど、うまく冬を越したら、黄色い花が咲くんだった。もう少しで満開になるんだってうちのお父さんが言ってたわ」

「え、あれ、花ってあの毒花じゃないの？」

ぎざぎざしていて、赤ともいえない気味悪げな花。持ってきた彼女に重なるような、具合悪くなりそうな花。さっきさんには似合わない花。

「うつん、あれは葉っぱよ。『棟がたつ』って言うでしょう。葉っ

ばの中から一本、するすると茎が伸びてきて、菜の花みたいな花をたくさんつけるのよ。葉牡丹はその頃には、ふつうの葉っぱになるの」

良く見ると、葉っぱは茎の周りに一枚ずつ、間隔を開けて重なっている。花だった頃の面影なんてなかった。

天辺にくつついているのはなんだか小さくて、きれいなのかどうなのかわかんない、地味な花だった。黄色い、手のひらにちょこんと乗っかりそうな花びらだった。

「つまらない花だなあ」

思わず口からもれた。

「そう？ でも、もっと温かくなったらたくさん花が咲くから、きれいよきつと」

さっきたんは気にしない風に答え、また歩き出した。僕も追いかけた。完全に僕の心臓は別の音を立ててがなりたてていたに違いない。

どうして、さっきたんはあんな髪型してきたんだろう。小学校の頃から、さっきたんのお下げ髪はトレードマークだった。クラスの女子たちだって中学に入ってから、こんな派手な髪型なんてした奴、いなかった。どうして細かくパーマかけたように広がっているかわからないけれど、僕の知らないさっきたん歩いているようにしか思えなかった。

さっきたん、なんかあったのかよ。

思い出すものといえばひとつだけ。

佐賀さんのことだけだ。

僕と夕陽を見ながら、見つめ合ってしまった橙色の時。

女々しくて情けないけど、あの時そのまんま、止まってほしかった。

立村にぶちこわされなければ！

また腹が立ってきてしまう。よけいなことを思い出してしまう。

けどどうしてだろう。

うちの店の前を通った。もちろん、足早に通りぬけた。さっきさんと歩いているところ、父さんに見られたらきつと、僕のことを女たらしだと思い込むに違いない。

「佐川くん、あのね」

ずっと通知表の結果と、志望校の話をしていた時、不意にさっきたんが切り出した。

「昨日話したことなんだけど、もう一度、約束してほしいの」

何も、青潟駅前横断歩道前で言うこともないだろう。せつかく信号が青なのに。仕方なく僕は立ち止まった。

「とんでもないことしても、おどろくなってことかなあ」

さっきたんは黙った。少しいつむいた。ちよつと頬が赤くなっていた。耳みたいなふたつの髪束が、僕の方を目、見たいな感じにらんだようだった。

「俺と関係あることだよな」

頷いた。「どうしても、今、言ってもらうこと、できないのかなあ」

やっぱり無言だ。ただだんだんうつむく角度が深くなっていつて、耳のところがずんずん僕に近づいてくる。

「あとで、ちゃんと、話してくれるよね」

顔を上げてくれた。びっくりした。僕の見た中で一番、さっきたんの瞳がきらきらしていたからだ。はつかねずみの瞳というよりも、兎の赤い血走った瞳、と言った方が近いんじゃないだろうか。言い返せなかった。

「約束します。だから、佐川くんも約束してください」

僕は小指を出した。黙ってさっきたんは自分のをからげてきた。こつやつて手を触れ合うのは小学校以来だった。

あたたかくて、やわらかかった。ずっと触っていたかった。

無事横断歩道を渡り、青潟駅入り口に立った時、頭の中から答

えがぴょんと飛び出した。

コート姿で制服は見えないけれど、今はふたつの中華娘髪をして待っているあの人がいた。一緒に立っているのは、背の高いジャンパー姿の男子。隣りには、僕の顔を水道に押し当てた、あいつがいた。みなじつと、僕とさつきたんを六つの瞳で見据えていた。一歩ずつ歩いていくにしたがってじんわりと突き刺さった。

そういうことかよ。おとひっちゃん。

蠟人形が一体、混じっていないのが意外だった。

「なあんだ、やっぱりそうだったすかあ」

最初はずいぶん眉間に皺を寄せていた健吾くんだったけど、僕の顔と、さっきたんの方を順繰りに見た後、めいっぱいの笑顔を繰り出してくれた。隣りで一步下がったところに、佐賀さんがこくりとお辞儀をした。さっきたんを挟んで、おとひっちゃんが腕組みをして僕をにらむ。にらまれるようなことを一応しているので、言い訳できなかった。

「そっいうわけだ。新井林くん」

おとひっちゃんは顎で僕をしゃくった。合間にきつく牽制するまなざしが飛んできた。さっきたんをわざと見ないようにしている様子だった。どことなく、一步離れるよう意識しているようだった。

「やっぱなあ。佐川さん、本当に疑っちまってすみませんでした。俺もまっさかなあとは思っていたんだけど。やっぱ、馬鹿な先輩持ちまうと、誤解曲解雨あられてんですか」

何をこんなに軽いこと言い合っているんだろうか。僕が口を開こうとするたびに、おとひっちゃんはぎろりとにらむ。ああそつだ。

日曜に電話が来た時言ってたもんな。

「お前は何も言うな」

つて。さっきたんとも指きりして約束しちゃったんだから仕方ない。僕は曖昧にへらへら笑いながら、佐賀さんと視線を合わせようとした。

健吾くんの側に密着している、かみ終わったガムみたいだ。

「まあ、誤解されるのも無理ないよなあって思いますよ。おい、佐賀。お前なんで紛らわしい髪の毛で行きやがったんだ！ お前が悪いんだぞ！ 佐川さんに対して失礼だぞ」

僕にはずいぶん低姿勢な健吾くんだが、いつものことながら佐賀さんには失礼極まりない。おとひっちゃんとさっきたんさえいなく

れば、僕が割って入りたいところなんだけど、そうもいかない。とにかく状況を把握しようと努めた。

駅の前でたむろつと、補導員に捕まる可能性もあるので、とりあえずはバス待合室に入り、席を分捕った。たぶん今年中に路線が廃止になるんじゃないかと言われている市営バスの待合室には誰もいなかった。僕とさつきたん、あとおとひつちゃんと。健吾さんと佐賀さん。お互い向かい合い、ベンチに座った。ガラス張りだった。あつたかかった。なぜかおとひつちゃんは、間に挟まっているさつきたんから離れようとしているようだった。必然、僕とさつきたんがかっぱるっぽく見える。

「雅弘も、今は混乱しちまって、うまく説明できねえみたいだから、俺が話すな」

分かりづらいなあ。

僕に口を利くな、という牽制球、ふたたびだ。

「わかりました。けど、もう俺、いいっすよ」

「いいって、はじめをつけないでいいのか」

「ああ、かまわないっす。だって、要するにうちの立村さんが勘違いしやがっただけなんでしょうが。ばっかじゃねえのって思いますよ。あいつがなんで評議委員長なんだかって思います、人間だし間違いもあるってことで。悪いけどほんと、佐川さん、申しわけありませんでした。俺が青大附中評議委員会に成り代わって謝ります」

「あの、さあ」

口に出しかけたらまた、おとひつちゃんがにらみかけた。

「とにかくだ、雅弘が無実だってことは判明したわけだ。俺も、そういう関係のないことは別に、青大附中評議委員会とは付き合いたいと思っているんだ。だから、これでみな、水に流そう。立村にもそう言っておいてくれ」

立村にもそう言っておいてくれって、おとひつちゃん！

だんだん状況が飲み込めてきた。僕が本当だったら仕組みたかったアリバイ工作。佐賀さんのために、命がけでやろうと決めていた。お株を奪ったってわけだろうか。おとひっちゃん。

さっきさんの髪の毛先がまた僕のほおに刺さる。はにかむような表情でうつむいている。誰も見ていない隙に、僕は佐賀さんがどこ見ているのかを確認しようとした。ずっと、健吾くんの肩に寄り添うようにして、時たまさっきさんの方を窺っているのがわかった。

ちゃんと言い張ったんだな。あの場所にはいなかったって。

健吾くんは僕に笑顔で、前の日のバスケ部練習試合についてとくとく語りだした。ひっぱられるように僕も聞き入っていた。けど気になるのは佐賀さんの目だった。あどけなく甘えているようだけど、さっきさんばかり見つめているように見えるのは、気のせいだろうか。おとひっちゃんだけが腕を組んだまま、応援団の人みたいに天井を見上げていた。

おとひっちゃんは、立村と一緒に、佐賀さんが遅く帰ったことを確認したはずだと、さっきさんは言っていた。詳しいことを聞いてないのであとは憶測になる。

現場を押えてはいないって、言い訳をするつもりだったんだ。けどさ、どうしておとひっちゃん、手のひら返したように俺をかばうんだ？

もちろん、このまま流れに乗っていけば、僕と佐賀さんの無実は証明される。

けど、どうして健吾くんは僕の顔を見るなりいきなり納得してしまったんだろう。

一言も話さないうちにだ。駅前でだ。

さっきさんは急に僕の側に近づくように足を寄せた。ブレザーのカフスボタンと、僕の学生服の金ボタンが触れ合った。かちりとなった。そして佐賀さんの方を静かに見つめ返していた。柔らかな視線が絡み合っていた。

「どうしたの」

「ごめんなさい、佐川くん」

すうつと僕の眼を見つめてきた。また、血走ったような兎のまなざしだった。

「だからどうしたんだよ」

健吾くんの会話が途切れたところで、さっきさんは軽く小首を傾げ、健吾くんの方に合図を送った。珍しい。さっきさんから男子に合図を送るなんて、めったにないことだった。

「あのう」

中途半端につぶやきうつむいた。

「あ、なんつか」

大股開いて両手を組み、前かがみのまま健吾くんはさっきさんに答えた。

「本当にごめんなさい。私が紛らわしいことしちゃったから、お隣りの人に迷惑をかけてしまったんですよね」

「いや、あの、その、こっちも人のこと言えないし」

いきなりへどもどするのはどうしたことか。僕も、隣りのおとひつちゃんも、ぎゅうつと絞りこむように見下ろしている。けどさっきさんは全然気にしないようで、ただ健吾くんにだけ話し掛けていた。ちよつとむかつときた。

「あの、私、土曜日の午後に、佐川くんを呼び出そうと思って、図書準備室にいたんです」

ちよつと待てよ、さっきさん、何言ってるんだ？

声が出そうになったのをこらえた。慣れているそのくらい。ごまかすのは平気だ。けど、さっきさんは、確かに前置きどおり、びっくり仰天することを言い出した。指きりしたから顔には出さないけど、もう心臓の音が響き渡り発狂寸前だ。

「いや、そのことはもういいですよ」

「いいえ、私、やっぱりはつきりさせておかないとだめだと思うんです。でないと、お隣りの人にも失礼だから。ごめんなさい」

誰にごめんなさいなのかよくわからない。佐賀さんは同じく、こつくり頷いた。健吾くんとびったりくつついたままだった。

「だから佐賀、お前があんまり泣き叫ぶから俺だってこつしなくちゃいけなかったんだぜ。誤解されるお前にも責任あるんだぞ！」

また怒る。僕は隣りのさっきたんと向かいの佐賀さん、両方を交互に観察していた。

「ごめんなさい」

やっぱり謝る佐賀さんだった。けど、よけいなことは言わない。

僕との約束通り、誰が作ったかわからない流れに沿って様子を見ようとしているらしい。

さっきたんの言葉が、さやさやと続いた。揺れない芯のある言葉ばかりだった。

「私、途中で生徒会室を抜け出して、用務員室に杉本さんたちの荷物を持って行った後、佐川くんと待ち合わせていたんです」

「いやあ、それはよくあることじゃあねえかなあって」

健吾くん、戸惑っている様子だ。さっきたんに飲まれている。

「いえ、本当はあの日、佐川くんに話すつもりだったんです。委員長さんが来なければ」

また僕に視線を送った。目と目が合った。

「私、佐川くんと、お付きあいしたいんだって」

さっきたん、どうしたんだよ！ 俺と、俺と付き合いたいって。

もちろん知らないわけじゃない。前から僕のことを気に入ってくれていて、うれしいなとは思っていた。けど、まさかそんないきなり言われても、僕は困る。第一、僕はさっきたんと待ち合わせてないなかった。さっきたんはとつくの昔に帰ったもんだと思っていたから。まさか、用務員室でおとひっちゃんたちと顔を合わせて

いたなんて想像すらしていなかった。

指と指が絡まりあつた記憶が蘇り、鈴蘭優のポスターを眺めている時と同じ精神状態に引き戻されそうだ。

「けど、言おうと思つた時、委員長さんが入ってきて、けんかになつてしまったので、私、出られなかつたんです。私、生活委員のくせに、校則破つているところ見られなくなかつたし、それに、お隣りの人がしてきた髪型がとってもかわいくつて、つい真似してしまつたんです」

「こいつの、がか？」

健吾くんのなんともいえないねめつちいまなざしが、佐賀さんに注がれた。見たことないんだろつか。そんなことはないだろうと思つけど、確かにふたつに結い上げた髪型は似合つていた。

「だから、もしかしたら、佐川くん、わかつてくれるかなつて思つたんです。けど、人に迷惑かけることになるなんて、思つても見ませんでした。だから、出られなかつたんです。関崎くんもいたし、変なこと誤解されたら恥ずかしくつて、つい、窓辺に隠れてしまつたんです」

さつきたん、俺の計画を先取りしてるのか？

必死に表情を隠した。照れている振りしてうつむき、指の関節をばきばき折つた。

「だから、お隣りの人はいなかつたんです。あの場所にはいなかったんです。信じてあげてください。もちろんこんな髪型していたから、おとなりの人に間違われたのはしかたないかなつて思うので、委員長さんは悪くないと思います。けど、でも、佐川くんは私と会つていたんであつて、お隣りの人ではないんです」

急に頬を両手で覆い、うつむいたさつきたん。ガラス張りに春っぽい陽射しがさしてきて、だんだん熱くなつてきた。ビニールハウスの野菜みたいな感じだった。

「いいって。もういいっす。俺、こいつのことを疑つたこと自体、最低な奴だつて反省してるんだからさあ。もうほんと、謝らなくて

っていいんだって」

丁寧語とため口と混ぜ合わせた妙なバランスでもって、健吾くんがさっきたんをなだめている。でも動かないのはさっきたんがずっと、顔をさすっているから。背中を丸める格好でいたさっきたん。ちようど僕とおとひっちゃんと、真剣に目が合った。

「おとひっちゃん、俺」

「黙ってる。水野さんに失礼だろ！」

かなりきつい怒鳴り口調だった。

おとひっちゃんの前で、言っちゃったんだ、さっきたん。

もともと分かっていることだった。けど、おとひっちゃんの前では決して口にしないでほしかった。いや、おとひっちゃんがそう言うよう言いくるめたんだろうか。僕の中ではそういう答えがもう出ている。おとひっちゃんのたくらみだってことが、浮かび上がっている。どうすればいいんだろう。僕は健吾くんにくくつと頷いてみせた。ついでに佐賀さんを眺めた。同じようにうつむいている佐賀さん。女子がふたり動揺している様は、居心地悪かった。嘘がまんべんなく盛り込まれているからなおさらだった。

さっきたん、どうして、ありもしなかったこと、いきなり言うんだよ。

気まずい雰囲気になったのを救ったのは、やっぱり健吾くんだった。咳払いをしたのち、おとひっちゃんと僕に親指を立てててぐいぐいと押した。

「もう、俺のことは気にしないで大丈夫っすよ。あとは青大附中で片付けることですから。ただ、これだけ人を傷つけてしまった以上俺としては決着を立村さんにつけます。あ、大丈夫です、ちゃんと冷静な第三者の先輩に見てもらって、弾劾裁判してもらいますから」「さ、裁判？」

健吾くんは佐賀さんの腕をひっぱりあげるようにして、ポケットに手をつ込んだ。僕よりはるかに背が高いのが目立つ。

「ただ俺と佐川さんが一緒にしゃべっているとところ見かけたからっていつて、こそこそ泥棒猫みたいなことしゃがって、さらに佐賀が佐川さんとくつついているんでないかってありもしねえことを吹き込みやがって。しかも、あんな馬鹿女に現抜かして、自分より頭がいい佐川さんを殴りやがって。やっぱ、最低っすよ。まあ、四月からはあの人の元でしっかり働かねばなんないってわかってますんでこれできっちりけりをつけて、水に流します。どうもすみませんでした！」

最後に握手を求める手を出してくれた。先におとひっちゃん、次に僕に。こわごわ触ると、実に堅かった。皮が分厚かった。やっぱバスケットだから、手の皮が鍛えられているんだろうか。

「もう変な誤解がないんで、俺も安心して、困った時に佐賀を使つて佐川さんへ連絡できますよ。立村さん通してだとやっぱりいろいろ、問題あることも多いと思うんで、俺、何か変わったことがあつたらすぐ、佐川さんちの本屋に佐賀を向かわせます。またあんにやろうが誤解しやがったら、そんなときは俺が黙っちゃあいません。安心してください。ほんと、申しわけなかったっす」

これからバスケット部の自主練習があるから、ってことで、佐賀さんとふたり、健吾くんは待合室から出て行った。佐賀さんももう一度こっくり、僕たちに頭を下げた。最後にさっきさんとまた、視線を絡めていった。

とうとう僕とおとひっちゃん、そしてさっきさんと三人だけになった。何時くらいなんだろうか。腕時計を見た。同時におとひっちゃんも立ち上がった。

「雅弘、これでけりはついた。水に流したからな」

「え、おとひっちゃん、どういうことだよ。俺、理由聞いてないって」

「だから理由を追求する権利、お前にはない！」

最後にさっきさんへおとひっちゃんはじいっと視線を送った。す

ぐにきびすを返して、出て行っただ。追おうとした。立ち上がりかけた。

「佐川くん、いいの、私、関崎くんが今どこに行こうとしてるかわかってるの」

「さっきたん、あの、約束通り、聞かせてくれるよね」

言葉がかすかにどもってしまった。立ったまま見下ろすと、さっきたんは泣きそうな顔で僕を見上げた。

「いったいどうして、あんなこと、言っただよ。俺、約束したから何も言わなかったけど、さっきたん図書準備室なんかになかったじゃないか。どうしてだよ！」

助けられたってことは分かっている。さっきたんとおとひつちゃんが口裏合わせてくれなかったら、たぶん今ごろ健吾くんに決闘を申し込まれていたに違いない。今までの流れからして、ふたりが僕を助けようとして、話を合わせていたことくらい見当はついていた。さっきたんが、僕に告白しようとして、図書準備室へ向かい、たまたま立村に勘違いされたってことを。しかも勘違いされた理由が、髪型だったからということ。

無理のある説明だ。だってさっきたんはずっと、用務員室で待機していたのだ。

さっきたんの言い分を信じればの話だがおとひつちゃんだって、杉本さんとおかっぱの女子だって、立村だってそれは知っているはずだ。

けどおとひつちゃんはあるえて、嘘をついてくれた。

さっきたんと一緒に、嘘つきになってくれた。

正々堂々とした性格の、嘘が大っ嫌いな、おとひつちゃんだ。

「俺、嘘をついてまでかばわれたくないよ！ さっきたんもおとひつちゃんも何考えてんだよ。そうだよ、俺、ずっとあの佐賀さんって子と一緒にいたよ。俺が呼び出したんだ。そうだよ、健吾くんが騙されてるんだよ」

「知っているわ」

「知ってるならなんで、そんなわけのわかんないことするんだよ！俺はこういう風に騙されるのが一番嫌いなんだよ！」

「ごめんなさい。でも、私も言いたかったの」

さっきさんは僕のむちゃくちゃな怒鳴り声を黙って受け止めていた。善意でやってくれたことはわかってる。僕もこうしたかった。けど、ほんとは僕が全部けりをつけるつもりでいたことを、を勝手に演じられると腹が立ってしまう。理屈じゃない。わけがわからない。

「私、もし佐賀さんって人がいなかったら、同じことしていたと思うから」

今度はうつむかなかった。唇をかみ締めた。目をそらさなかった。まっすぐすぎて、目が痛かった。蛇口をつけられたあたり、鼻筋一番上あたりがきんと冷えた。

「ごめん。俺、やっぱり変だよな」

「今からみんな話します。話したら、一緒に関崎くんのところに行くから。私」

僕は全身脱力状態で思いつきり浅く座った。さっきさんの顔を見ないようにして、さっきの健吾くんと同じポーズを取った。少しは男っぽく見えるだろうか。

さっきさんはしばらくためらっていた。片方の髪に手を置いて、しゅるっとゴムを外した。もう片方の束にも同じことをした。見ると、杉本さんと同じくらいの長さがある髪の毛がばさっと肩に落ちていた。耳の上だけゴムのあとで膨らんでいた。

「関崎くんが委員長さんと一緒に来た時、びつくりしたの。関崎くんはずっとうつむいていて、委員長さんは今にも倒れそうな顔をしてたの。ずっと身体の震えが止まらなかったみたいで、用務員室に来た時、ふたりとも何も言わなかったの。そうしたら、窓からふたつ結びにした青大附中のあの人が、自転車漕いでいくのが見えて、みんな呆然って感じで眺めていたの」

わかってる。わかってるさ。俺が悪いんだ。

「関崎くんがそれ見て、最後にがつくり頭下げて、『すまなかった、俺が悪い』って言い出して、委員長さんもそんなことないって首振っていたわ。その時は何が起こったかわからなくて、ただ私も眺めているだけだったけど。おかつぱの女の子、委員長さんと仲良しで、何度か腕さすってたわ。何か一生懸命話しかけてて、それでも何も言わなくて」

ああそうか。あいつにも彼女いるって言ってたよな。

さっきさんの話によると、おとひっちゃんはもちろん、立村も相当、精神的打撃を受けたみたいだ。少しだけ、ざまみろと言いたくなった。人を殴ると大抵そうなるもんなんだ。

「しばらくそうしてたら、委員長さんがストープの方に関崎くんを呼んで、話をしていたの。聞かないほうがいいかな、と思っていたんだけど、聞こえてしまったの」

「何、それは」

「それは……」

さっきさんは口籠もった。大抵のことだけど、口籠もったことにはいていほんとのことが隠れてるんだ。話してくれるのを僕は待つしかない。ずっと黙っていたら、やつぱり痺れをきらしてさっきさんが動いた。かすかに、頷いた程度だった。

「一年のあの女の子に、ふつうの女子と同じ風にして、きちんと話をしてくれって」

「ふつうの女子？」

「あの子は今まで男子に人間らしく扱われたことがない子だから、他の女子たちを相手にする時と同じく、きちんとお断りしてあげてほしいって、一生懸命言ってたの」

まじかよ！

ガラス張りの光が一瞬真っ白く染まった風に見え、僕は窓越しに空を見上げた。

「早い話、杉本さんって子を振ってくれてことなのかなあ」

こつくり、さつきたんは頷いた。

「私、関崎くんたちがいない間、あの子たちと一緒にいたでしょう。ずっと一年の女の子、関崎くんのことばかり話してたの。どんなに私ともうひとりの子が別の話をしようとしてもだめだったの。関崎さん関崎さんって、うわごとのように同じことばかり繰り返してたの。眠るまでそうだったの」

相当、おとひっちゃんに思い入れていたのだろう。葉牡丹の彼女は。

「だからたぶん、関崎くんのこと好きなんだなって思ったわ。どうして好きになったのか聞いたら、『ちゃんと私の入れたお茶を、お礼言って全部飲んでくれたから』って。ありがとうって言ってくれたからって。そういう人、関崎くんのようなタイプの人にはいなかったから、きつと自分のことを好きになってくれたんだって、思い込んでいたみたいなの」

「ああ、お茶わんこそば事件だ」

総田から聞かされた、五杯のお茶わんこそば。だからあつさり断つちまえて思ったんだ。まったく、ああいうとおがおとひっちゃんの人のよいところで、罪作りなところなんだ。

「話を聞いていて、ああ、きつと関崎くん、ふつうの女子にするような態度で話をしたただけだったんだなあって、思ったわ。一年の子が寝てしまった後、一緒にいた子も言ったのよ。ずっと周りが盛り上げつづけてきたけれど、かわいそうなこととしてしまったのかもしれないって。だから、委員長さんもこれ以上傷つけないからって言って、今日関崎くんに会わせて、きちんと結果を出してもらおうと話していたらしいの。最後にお互い納得づくで終りにしようねって。もちろん、その子には話さなかったらしいけれども、二年生ふたりがついてきたのは、そのことがあったみたいなの」

もう、天才参謀だなんて言葉は返上しなければなんない。

さつきたんの門前で咲いていたあの葉牡丹の花。僕は貧弱だ、みっともないと思っていた。葉っぱの毒々しさに負けて、なんてわび

しい花なんだろうと思っていた。とんでもない。葉牡丹の花は僕だ。周りからさんざん「天才参謀」だと囃し立てられ、舞い上がって勝手に解釈して、結果、黙っていればうまくいくはずだったことを泥沼化してしまっただけのことだ。

「まじかよ」

「ほんとよ。けど、まさか佐賀さんという人がくるとは思わなかったらしくて、相当ショックを受けてしまったらしいの。それに加えて、辛いことがあったらしくて気分が悪くなってしまうて、本当の赤ちゃんみたいにならずと同じことばかり繰り返してたわ。きつと傷ついたんだと思うの」

そのことは反省しないよ。佐賀さんはその倍傷ついている。

僕はただ、自分の読みが甘かったことが許せなかった。黙っていたら佐賀さんの思うがままに進んだだろうに。健吾くんからもらった情報をきつちりと吟味しないで、立村側の情報を集めようとしたかったことこそ手抜きの証拠だ。どうしておとひつちゃんにもっと近づけなかったんだろう。佐賀さんのことしか考えていなかった僕のミスだ。

「それで、委員長さんはあの子を起こして、約束させたの」

「約束って、何をだよ」

「関崎くんに会わせる前に、ちゃんとこれだけ約束しろって。『関崎くんがどんな言葉を返そうとも、決して相手を恨んだらいけない。約束できるなら、これからふたりで会わせるけどどうする？』って。委員長さん、一年のあの子のことが可愛くてしかたないみたいだったの。一生懸命、何度も話し掛けて、最後は指きりしたの。私に、佐川くんがしてくれたいみたい」

小指の先が充血してるみたいだった。僕は小指の先を耳に突っ込んだ。

「その後は、私もわかんない。ただ、関崎くんは一生懸命話をしていただけ、あの女の子は妙にテンションが上がっていったって、結局違う風に受け取ったみたいなの。いくら言い返しても話が通じなくて、

とうとう関崎くんはあきらめてしまったの。戻ってきて、その子、二年の子に一生懸命話してたからわかったわ。関崎くん、自分は公立高校に進学するつもりだからきつと合わないし、よくお互いを知らないから、お付き合いするのは難しいと思う、みたいなことを言ってみたよ。でも、その子は『私は青大附属高校に進学させてもらえませんか。学校から追い出されることに決まっているから、かならず公立高校に追いかけていきます』って、力強く言い張ったようなの」

公立高校へ追い出される？ 青大附中ってエスカレーター式じゃなかったっけ。

第一、おとひつちゃん、第一志望、青大附属高校だろ？

あまり詳しいことを突っ込んでもしようがないとはわかっていても僕は聞かずにいられなかった。

「それってどういうことだよ。だっておとひつちゃん公立すべりどめだろ！」

「だから、きつと、関崎くん、お付きあいを断る口実に、使っただけなのだと思うの。けど、その子はどうしてもその意味が理解できなかったみたいなの。どうしても、どうしても関崎くんを好きでいたいみたいだったの。そうしないと壊れてしまいそうだったの。その……杉本さんって人は」

おとひつちゃんがなぜ、あきらめてしまったのか、だいたいおぼろげに見えてきた。

ふつうに話せばきつとわかってもらえると、最初はおとひつちゃん、立村ふたりとも思っていたんだろう。きちんと話をつけて、失恋してもらえれば丸く収まると。けど、杉本さんはやはり尋常でない人だったんだろう。懸命に、どんなことがあっても、おとひつちゃんへ必死にしがみつきたかったんだろう。佐賀さんから聞いた理由を考えればそれも納得する。学校で無視され、嫌がらせを男子からされつづけ、先生からも嫌われる。自業自得なので僕は同情する

気さらさらないけれど、そんな生活の中でたったひとり見つけた「自分にお礼を言ってくれる」男子。それがたまたま、おとひっちゃんだったんだろう。

さっきたんも気付いている通り、「してくれたことに対してお礼をいう」のはごく普通の礼儀だ。僕もお茶を入れてくれたくらいで相手へのめり込んだりはしない。単なる儀礼だと思うだろう。ふつうは。けど、杉本さんはそうじゃなかった。

今まで、お茶を入れてあげて、お礼を言ってくれる男子がほとんどいなかったんだ。きつと。総田も内川も、最初に青大附中へ出かけた時、お茶をすぐに断ったと話していた。おとひっちゃんだけはそんなに嫌われている杉本さんのことを同情したのか、それとも何も感じなかったのかわからないけれど、きちんと礼儀を守った。ただそれだけのことだ。そういう相手がもし、杉本さんの周りにいたとしたら、ここまでおとひっちゃんにのめりこんだりはしなかったんじゃないだろうか。そうだ、

唯一守ってくれている、あの立村評議委員長相手だったら、葉牡丹を差し出しても両手で受け取ってくれただろうに。

繰り返すけど、おとひっちゃんは決して、杉本さんみたいな子を好きにはなれないだろう。どんな理由があるにせよ、佐賀さんをはじめ、嫌がらせをしたことだけは否定できない事実なのだ。僕の脚本を始め、健吾くんの言葉、その他いろいろな噂などを複数合わせてみてもそう思う。

けど、おとひっちゃんは、いい奴だった。

運悪く、ものすごくいい奴だった。

だから、杉本さんの想いをあっさり切ってしまうことにより、すべての人から嫌われてしまわないように、逃げ道を残してやったんだ。そういう奴だ。僕だったらことん立ち直れないくらい叩きのめして、ぷいっと捨ててやる。そうされて当然の女子にすら、情けをかけてやれるのが、関崎乙彦という男なのだ。

僕の、一番の親友なんだ。

さっきたんはちょっと黙り、こくんとつばを飲んだ。僕の表情を伺った。

「ふたりの女の子が車で帰って、私、関崎さんと、委員長さんと三人で話をしたの。関崎くんも困っていたし、委員長さんも何にも言わなかったわ。ずっと自転車を置いてあるところで、一生懸命話をしていたの。関崎くん、ひたすら同じこと言ってた」

僕をまた、きつい視線で射た。受け止めた。

「『あのことは誰にも言わないでほしい』って」
「あのことで？」

「佐川くんがあの、佐賀さんと一緒にいたことを言わないでほしいって、何度も繰り返したの。委員長さんはずっと話を聞いて黙っていたけど、とうとう頷いたわ。さっき、話をしていた男子の人。あの人にずっと連絡をとって、佐川くんのことを報告していたらしいけれど、それをなかったことにするからって言ってくれたの」
「なかったことにするって？」

立村が僕と佐賀さんについて、健吾くんへ連絡を入れ、不安をあおっていたらしいとは聞いていた。健吾くんが佐賀さんを伴って駅前に現れた理由はそれだ。僕の顔を見て、もし間違いなどあったら僕を殴り飛ばす覚悟で。見ただけで気合の入りが違っていた。
「委員長さんの勘違いだったことにするって、言ってくれたの。関崎くんは、あの杉本さんって人に、一生懸命、礼儀正しくしてくれただから、それくらい自分がして当然だって。いい人だと思ったわ。関崎くんも、委員長さんも」

それか。

しばらく口籠もった後、僕は自分のたどり着いた答えをつぶやいた。

「だから、さっきたんは僕に付き合いをかけるため、嘘をついてくれたんだ」

「ごめんなさい。でも、関崎くんが電話で言ってたの。『きつと雅

弘の奴は、嘘をついて助けようなんてしたら逃げる。決してその場でしゃべらせないようにしてやるしかない』って。私もそう思ったの。だから、言わなかったの。ごめんなさい」

「もういいよ。親切なつもりでやってくれたんだよね」

本当は感謝の言葉を伝えたかったのに、出たのは冷たい言い草だった。

おとひっちゃんも、僕の性格を理解しているんだ。あらためてそう思った。

僕がひそかに佐賀さんを守るために計画していたことを、おとひっちゃんは無意識に奪い取って、さっきさんと協力してやってのけてしまった。いつだったか総田に、

「あいつ、人の言ったことをそのまんま鵜呑みにして、自分の手柄にしちまうんだぜ」

とこぼされたことがある。まさに今回は僕がパクリをやられてしまったってわけだ。

もちろん、おとひっちゃんとさっきさんが、僕のことを守りたくて、懸命にしてくれたことはわかっていっているつもりだ。さっきさんが必死に嘘をついてまで、僕のことを助けようとしてくれたと、頭の中で感謝しなくちゃ、とは思っている。けど、本能の方が頷いてくれなかった。

なんで、よけいなこと、したんだよ！

叫ぶ自分が残っていた。助けてもらいたいなんて、思わなかった。ただ、僕は佐賀さんを守りたかった。結果的におとひっちゃんのやり方で佐賀さんの立場もキープされたわけだけど、本当は、それを僕がやりたかった。僕ひとりのやり方で、佐賀さんを守りたかった。

「だから、佐川くん、私、もし必要なことがあつたら、お付きあい相手のふりするから」

「いいよ、さっきさん、いやなこと無理にしなくたって。おとひっちゃんに頼まれた義理はもう果たしたんだろ」

冷たい。いやな奴だ。けどそう返事するしかない。僕は目を向けず、態勢をそのままにしてつぶやいた。

「うっん、だからさっきも言ったわ。私、いつか、そう言いたいと思っただけから」

俺は、守られたくない、守りたいんだ！

僕はさっきさんの顔を、前かがみのまま振り仰いだ。

芯のしっかりした、やわらかい、まっすぐなまなざし。

はつかねずみのようなあどけない口元。

そんなさっきさんがいい人だなんて思っている。今でも変わらない。

けど、今の僕はさっきさんの言葉を受け取れなかった。

さっきさんは俺のことを守るつもりでいるんだろうけど、俺は、佐賀さんだけしか守りたくないんだ。

気が付いた。やっぱり僕の前には、佐賀さんしか映っていなかったんだ。

「俺はさっきさんの気持ちには答えられない。ごめん」

ゆっくり前かがみの姿勢をただし、背をしっかと伸ばし。きつ

ちりと答えた。杉本さん相手のおとひっちゃんの時みたいに、誤解されないように言った。

「俺は守ってくれる人よりも、守りたい人を好きになるタイプなんだ」

泣かれるかと思った。罵倒されるかと思った。けど違った。やっぱり僕の隣りにいたのは、さっきさんだった。

「うん、わかった。佐川くん。けどこれだけは覚えていてね」
すっかり真っ赤になった頬を、さっきさんは隠さなかった。

「私とつきあっているってことに、交流会の中だけでもしておけば、あの佐賀さんという人には会いやすくなると思うの。そういう時だけ、私を呼んでくれればそれでいいの」

さっきさん、それは、ひどいよ！ そんな俺がひどい奴だと

思っているのか！

声が出た。慌てた。

「俺、そんな汚いことしたくないよ！」

「うっん、いいの。そうすれば、あの人に堂々と会えるのでしょ」

そりゃそうだけど……。

僕の心に残酷な計算が一瞬働いたのを、さっきたんに読み取られちゃったんだろうか。

確かにさっきたんの言う通りだ。ここでさっきたんと付き合ったことにしておけば、これから先、佐賀さんと会うのに都合なのだから。健吾くんもすっかり信じ込んだだろうし、さっきたんに本当の事を隠しておけば、お互い傷つかないで済む。総田と同じようなことを、僕ならもつと要領よくやる自信がある。

「そうすれば、私も、ほんの少しだけ佐川くんの役に立っているんだと思えて、嬉しくなるの。だから、必要な時は言ってください」

傷ついたんだろう。きつと、さっきたんは僕が想像している以上に傷ついたんだ。僕が付き合いをOKするんじゃないかと、希望をもっていたんじゃないかって気はしていた。たぶん、佐賀さんに出会っていなかったら、おとひっちゃんの顔を伺いつつ、お付きあいまで持っていたかもしれない。嫌いじゃない、女子の中では二番目にいいなって思っている子なんだから。けど、それはもうできなかった。

俺は、佐賀さんを守らなくちゃいけない。

言葉に出さず、僕は立ち上がった。

「ごめん。あらためてきちんと話すけど、やっぱり僕は今、さっきたんとは友だちでしかいられない。悪いけど、おとひっちゃんのいるところに連れてっていつてくれるかな」

さっきたんの縋る目を、振り払いたかった。

さっきたんはあきらめ加減に頷いて、ガラス戸を開けた。春だった。外の空気はもう、完全に和らいでいた。室内のこもった空気よりも、まだ冷たさの残る、鼻毛が震えそうな外気の方が、僕には気

持ちよかった。

駅の裏は海だった。少し裏を回ったところに小さな公園があつて、しょっちゅう大道芸人や動物披露ショーなどが行われていた。僕も小さい頃はよく観にいった。おとひつちゃんも一緒だった。ロバとか七面鳥とかが臨時の柵の中でちんまり座っていたりした。けど今はそんなところ、めったに行きやしない。夜中には暴走族とか、ちよつと変わった感じの人たちが集まる集会とか、寄るとちよつと怖い場所に変わっている。当然のことだけど、子どもが遊ぶこともほとんどない。

さっきたんが連れてきてくれたのは、ほとんど人のいない公園の中だった。

「ありがとう、ここだったんだ」

口を利かないで、たださっきたんと五分くらい歩いていた。潮の匂いが気持ちよかった。だんだん歩いているうちに寒くなって、何度かさっきたんはくしゃみしていた。

「佐川くん、また、四月に学校でね」

「うん、さっきたん、同じクラスになれたらいいな」

言ってしまったから後悔した。僕はたった今、さっきたんを振ったばかりじゃないか。

精一杯の譲歩をしてくれたさっきたんに対して、

「俺は守られるんじゃないくて、守りたい人を好きになるタイプなんだ」

と、言い訳にならない理由でもって跳ねつけたばかりじゃないか。

最低野郎だよな。俺は。

「うん、お祈りしていい？」

少し、にじみ出るような笑みがこぼれていた。本当だったら僕は、めいっぱいの笑顔でもってさっきたんと帰れたかった。けど、もうできなかった。

「また、春休み中に会つかもしれないしさ、じゃあね」

僕は手を振った。公園の入り口でさっきたんは何度も僕を振り返りながら、もと来た道を戻っていった。

さて、どうするか。

おとひっちゃんがいるという公園。ろくに手入れされていない。雪がまだ隅っこの方に汚く残っている。足を踏み入れると靴がぐちよぐちよになった。せつかくいいスニーカー履いて来たのに。僕はベンチの方の人影を探した。

すっかりさび付いた遊具の数々。ブランコも壊れる寸前で、木の座るところが割れていた。シーソーも動かないまま。僕はずっとおとひっちゃんを探していた。

「おとひっちゃん」

小さい声で呼んでみた。

「おとひっちゃん、どこいるんだよ」

ちっちゃな頃と同じように、叫びたくなった。

「おとひっちゃん」

返事はなかった。僕は適当にベンチのあたりを回ってみることにした。

靴を泥だらけにしながら……時たま、結果の悲惨な通知表をどう親に見せるか考え込みながら……一番端にいるふたりの影に近づいていった。途中のベンチからは後ろ側を歩くことにした。そちらの方が気付かれにくいかも、と思ったからだった。

さっきたんが話してくれたことは、僕の想像に近かったとも言えるし、かなりずれていたとも言えるだろう。立村がおとひっちゃんに要求したものが、思ったよりも低いレベルのものだったことに、最初はほっとした。てっきり、「杉本さんと交際しろ」みたいなことを言われたのではないかとほらはらしていたからだった。「きちんと人間らしく振ってやってくれ」ということだったら、簡単だったはずだ。もっともそういう注文が必要な相手だったので、まだ問題は山積みのようなだけでも。立村もその条件と引き換えに、僕と佐

賀さんは全く繋がらないということを証明すると約束してくれたという。

僕からしたら水鳥中学丸儲けって気がする。

健吾くんも話していた。これから立村を弾劾裁判にかけるらしい。青大附中って不思議な空間だと思うんだけど、この時代においてまだ「弾劾裁判」なんてもんがあるらしい。さんざん嘘を言って健吾くんを不安にさせた罪を、上の先輩によって裁いてもらうらしい。どんなことするんだろうか。「裁判」という以上は有罪か無罪かを決めるんだろう。立村が宣言した通り沈黙する覚悟を決めたのだったら、当然有罪扱いされるだろう。

また、僕にも殴った後約束した通り、杉本さんをこれ以上水鳥中学に迷惑かけないようにする、という約束の件。正直なところそれさえしてもらえば後はどうでもいいってのが本音だ。もちろんおとひつちゃんを追って公立高校を受験するのは勝手だけど、それは別の話。交流準備会には一切参加させないようにしてくれるはずだ。立村が一方的に非を請け負ってくれるならば、水鳥中学は万々歳だ。完全犯罪ってことで、片付けられていたら、僕ももっと気楽でいられただろう。

いつもは僕も、上手に片をつけている。総田に頼み込んでうまく図書準備室を借りて、佐賀さんとふたりきりで相談し、杉本さんを再起不能なまでに叩き落とし、おとひつちゃんからも引き離す。完璧な計画のはずだった。少なくとも、立てた段階ではそう思っていた。けど、僕は根本的に間違っていた。おとひつちゃんが僕の想像していたような、単細胞のいい奴なんじゃないってことと、蠟人形の立村が実は相当な兵だったこと。そして、さっきさんの行動力と想い。すべて僕が目をつさいでいたことばかりが、今ごろになってやってきた。

見つめていたのは、佐賀さんのことばかりだった。寝ても冷めても、鈴蘭優のポスターを通じて佐賀さんばかり追っていた。今なら分かる。佐賀さんをどんな卑怯な真似しても守りたかったただけだっ

た。おとひっちゃんに嫌われることを覚悟で、佐賀さんに評価してもらいたかった、それだけだった。

けど、結局守ったのは、おとひっちゃんたちの手でなんだ。僕はただ、取り返しできない寸前まで問題をふくらませただけだった。

ベンチ五つ分離れたところに、人影を見つけた。

ふたりだった。おとひっちゃんだってことは、ひとりの背が異様に高いことからすぐにわかった。もうひとり是谁だろう？

野郎だつてことは見当がついた。しばらく様子を見ながら少しずつ近づいた。

「おとひっちゃん？」

一つ分のところで声をかけた。ふたりの影がこつちを向いた。

「雅弘か」

何か用か、とは言わなかった。隣りの奴だけが、冷たく僕を見据えている。何か言わないとまずいだろう。僕の方から先制攻撃を試みた。

「貸し借り、これでゼロだな」

蠟人形がかすかに微笑んだ。冷たそうだが、それでいて全く動じないって風に見えた。

隣りのおとひっちゃんは、そいつに向かい、もう潮時だろって顔で顎でしゃくった。

「悪かった。そろそろ行くよ」

「弾劾裁判か？」

僕もできるだけ冷たい響きを持たせるようにして尋ねた。同じトーンで話をしたかった。

「そうだ。覚悟はしている」

濃い目のチエックが入ったグレーのブレザー制服姿野郎は、かばんのとつてを持ち直すと、おとひっちゃんに軽く一礼した。後、僕に向かい、

「関崎に感謝するんだな」

また捨て台詞を残して歩いていった。初めて会った時とは違う、堂々とした態度だった。最初からああいうところを見せていたら、僕も「腹下しの蠅人形」だなんて見くびらなかつただろう。黙って見送り、後姿が角を曲がるまで待つていた。

僕とおとひつちゃん、ふたりきりになった。ベンチの黒い背に片手を置き、僕はおとひつちゃんの脳天に向かって語りかけた。

「おとひつちゃん、みんな聞いたよ」

返事はなかった。

「さつきたんにみんな話を聞いたんだ。俺が聞き出したんだからさつきたんは悪くないよ」

さららと木々の擦れる音がした。

「ほんとにごめん」

身動きしなかった。無視したいんだろうか。急に身体が冷えた。

「俺、いつになったらおとひつちゃんの弟分から脱皮できるのかな」何か言うべきことがもつとあつたような気がした。くどくど説明したかったけれども、なんだか照れくさかった。いつもだったらおとひつちゃんに言われていることを、繰り返すことはしたくなかつた。ただ、伝える言葉だけぽんと投げ出した。

おとひつちゃんは少しうつむき加減になり、がくんと頷いた。そのまま態勢を崩さなかった。僕が離れていっても追ってこなかった。

頭をこつと叩かれた。総田だった。

「いや、なんでもないよ」「じゃあちつと俺の話を聞け」

上の空で返事しているのがまずいだろう。自分でもわかる。総田は口を一回への字のした後、いつもの調子でしゃべくった。

「なんかなあ、青大附中の『忠臣蔵』テープ、あれを聴いてからつてももの、生徒会連中の目の色が変わつと変わつちまつたんだ。佐川、お前には悪いがあのださむいば症候群のくさい演劇台本、あれは却下だ。内川の奴、すっかり目を輝かせてさ、『ぜひ六月に、時代劇をやりましたよ！ 演劇だと大変ですから、放送委員会を巻き込んでラジオドラマっぽくやりませんか！ やっぱり、時代劇は男のロマンスですよ！』って騒ぎ出したんだ。もうあいつも、燃えるやるかあ。俺もお口あんぐりよ。勧善懲悪ラジオドラマ・生徒会製作で決定だぜ、おい」

いいかもしれない。公立の水鳥中学なんだから、あまりお金の掛かることはできないだろう。それにラジオドラマだったら、声だけ演技するだけでいいはずだ。即席声優でもOKだろう。例の「中学演劇脚本集」から選ばなくたっていい。放送委員会を巻き込んで、昼の放送で流してもいい。頭いいこと考えるもんだ。やっぱり総田と内川、この二人、よくやるよ。僕の出番はもうないんじゃないか？「ったく、天才参謀の名が泣くぜ。お前にはこれから、関崎を丸め込むっていう大きなお仕事が待ってるんだぜ。なんとかお茶わんこ娘は追っ払うことできたみたいだけだな。世の中まだまだ先が長いんだ。第二、第三の悲劇が続かないとも限らんぜ」

誰が天才参謀なんだよ。

また物思いにふけた。

ふたつつにしばったあの髪、あの人のことを。

健吾くんが誤解したまま笑顔で帰った日のことを、僕は思い出していた。

おとひっちゃんとさっきたんの演技が完璧だったおかげでその場は凌げたけれども、結局は騙したことになってしまったわけだ。真っ正直なおとひっちゃんが嘘八百をつきとおしたことにびっくりしたってのもある。

この展開、きっと立村評議委員長がすべて計算したものだろう。そう信じて疑わない。おとひっちゃんがひとりで思いつくわけないじゃないか。あいつみたいな一本気な奴が、こんな入り組んだ計画を立てられるわけがない。もっともおとひっちゃん本人はきっとひとりで立てた計画だと勘違いしているだろう。用務員室か帰り道か次の日の電話か、とにかく立村に「佐川の尻拭いは次のようにしたほうがいい」と吹き込まれて、それはいい、と素直に判断したというのが妥当だ。僕がもっと早く気づいていたら、ちゃんと進路修正してやったのに。

ほんとだ。どうして僕は気付かなかったんだろう。本当の敵は、別にいるってことを。隣の総田がひたすらしゃべりまくっているのを聞き流し、僕は改めて後悔した。

「おい、佐川、聞いてるのか？」

総田が、いきなりこめかみのあたりを握りこぶしでぐいぐいやりだした。つばマッサージ、気持ちいい。

「いいいい、もっとやって」

「お前変態じゃねえか」

「いいよ、もっと締めて」

「こええなあ」

手を離してくれた。僕は押えられていたこめかみを自分でもう一度もんだ。「あのなあ、お前さ、あの青大附中の女子、気にいつてたんだろ？」

「はあ？」

とぼけるべきか否か。たぶん気付いているさ。隠すのもおとひっ

ちゃんみたいでみつともない。

「どうやら図星らしいな」

「関係ないだろ」

もう会えないかもしれない。やりきれなくなってくる。

「あんな佐川、お前自分で自分がわかんねえだろ。ほら、俺が聞いてやる。今までの礼だ。思春期の男子が持つ性欲処理その他、ご相談にのりまっせ」

「総田の方がそっちの問題、まだてこずってるんだろ」

怒らせないぎりぎりのところで、からかい口調で返事した。

「せっかく俺が心配してやってるのになあ、いやな、この前例の集まりで、気になる噂を小耳に挟んだんだが、どうしたのかなあ」

どうした総田、いきなり意味ありげな口のゆがませ方は。僕はそっぽを向いた。

「ほらほら、すねねえでさ。つまりだな、四月以降の交流会については、しばらく佐川、お前を降ろしたいっていうだれだかさんの希望があるみたいでなあ」

総田の言葉の意味が、一瞬読み取れなかった。

「だれだかさんって誰だよ」

「お前の大親友」

ごくんと空気を飲み込んでしまった。むせそうになった。げぼげぼやってると総田が背中をばしばし叩いた。かなり痛いんだけどな。「俺も耳を疑ったけどな、あいつ本気だぜ。お前、思い当たる節あんの？」

総田はどのくらい気づいているのだろう。僕にはわからなかった。

はつきりしているのは、総田の言うことが全くガセネタではないということだろうか。そう言えば四月以降の交流会について予定は決まっているはずなのに、あいつは一言も教えてくれなかった。

青大附中の連中にも僕が、渉外役だって伝えてあるはずなのにだ。変だとは、思っていたんだ。「それについてはただ今、内川と俺と

の二人体制で反対運動をやっているけれど、なにせあのシーラカンス野郎、燃えたらとことんだろ？ 俺としても事実関係を掴まない限り動けねえからなあ。おいおい、動揺してるんじゃないの？」

とことん総田は攻めてくる。怖い、怖い。去年までの僕だったらもつとつらつとした顔でいられたのに、どうしてか今だけは駄目だった。唇がかさかさしていて、乾いた皮をはいだ。ひりひりした。「それ、おとひっちゃん俺を外したいって言ってるのか？」

「そうなんだよ。やたらと意地になっちまってさあ。『雅弘があの会に出ると、かえってひどいめに遭う可能性があるから、涙をのんで出さない。理由については言えない』ってな。いかにも理由を知りたいなあといわんばかりの、言い方だろ？ となったら聞かずにはいられない性分なもんでね」

俺がひどいめについて、誰にひどい目に遭わせられるんだよ。立村か？

大丈夫だよ、今度は俺だって殴り返せるよ。この前は油断していたから。

あいつの性格上、想像できないことではない。僕があのまま佐賀さんといちゃついていたってことになったら、たぶん健吾くんあたりから決闘の申し込みが届くだろうし、立村委員長だって黙ってはいないだろう。それをうまくとりなして、何事もなく終わらせるために僕を外しておくっていうのも、一つの手だろう。けどそれは裏を返すと、もう二度と佐賀さんに会えないってことにもなる。だって佐賀さんも、僕も委員会には関係ない奴だ。佐賀さんはもしかしたら二年で評議委員を狙えるかもしれないけど、万年学習委員でもう三年、後のない僕にはおとひっちゃん経由の通り道しかないのだから。

文句を言いたくても、言えない。

おとひっちゃんの判断は確かに、正しかったんだから。たとえ立村に吹き込まれた案だとしても、僕がこれ以上酷い目にあわないで済むにはこれが一番なんだ。佐賀さんに会えない、もう連絡できない

い、それさえ飲み込めばだった。

「ほらほら、言ったら楽になるぜ、あの子のことかなあ。うちの川上が鋭くチェックしていたぜ、『あの子、なんだか佐川の生き血をすすりにきたみたい』ってな。俺もそう思うぞ」

「そんなんじゃないやねえよ！」

かっとなったのを押えきれなかったのは失言だ。いつものパターンじゃない、完全に総田のペースに乗せられた。僕が言い訳をすればするほどつばにはまる。あきらめた。素直にうなだれるに限る。総田に対してはそれが利く。

僕は所々曖昧にぼかしながらごたごたの説明をすることにした。あんまりにも自分が情けなくなるようなところはもちろん飛ばしてだ。

「しくじったよ、ほんと」

総田は一通り聞き終えた後、ぽんと膝を打った。

「あの蠟人形がなあ。そうかそうか。まあ、そういうことだったら関崎も大事な弟分を魔女の手から守りたいだらうなあ」

だから、なんで魔女なんだよ！

ふたつに分けた髪型が良く似合う、かすみ草の雰囲気の子なのだ。きつと川上さんになにか吹き込まれたんだ。きつとそうだ。訂正とかなきゃ。

ゆつくりと、顎のところに親指と人差し指でブーメラン形をこしらえ、総田は髭剃り後の白っぽい所をさすった。

「けどなあ、佐川、お前もうとつくに、一番いい方法知ってるんだろ」

総田は僕をじんわりと見た。ちっとも焦っていない。当事者じゃないからな。

「なんだよそれ」

「とぼけるなって、お前がわからねえわけないだろ。さっき言ってたよなあ。なんか、バスケ部野郎が言ったんだってな。お前に彼女

がいるなら、安心して自分の彼女を手伝いに出せるってな」

確かに。健吾くんはおとひっちゃんとさっきたんに騙されたんだ。あいつつてもしかして、おとひっちゃん以上に単純野郎なのかもしれない。ふつつ、疑うだろう？ 僕だったら絶対に裏を取るうとすけるけれども。総田はさらに声を低めて言う。

「なら、そう思わせちまえばいいだろ。どうせ生徒会関係は熱血関崎と、蠟人形立村とが仲良く話し合いするんだ。表舞台は二人に押し付けて、佐川は例の子とよろしくやりつつ、ちゃんとカモフラージュをこしらえるってな。お前、そういうの得意だろ。ていうか」

また言葉を切った。僕を横目で見た。

「そのつもりだったろ、佐川」

いつもの僕だったら、何も考えずに選んでいた方法のはずだった。総田に言われる前から、答えは出ていたはずだ。それを選べないのは、まだ僕が総田の求める「天才参謀」へ復活していないからだ。「ま、これから俺も、佐川にもう少し活躍してもらわねえと困るかな、今日のことは貸しにしといてやるわ。ま、人間生きてたら、いろいろあらあな」

やはり総田は話がわかる。たくさん修羅場をくぐりぬけてきただけある。説教じみた言い方一言もしないのに、僕がしたいと思っいて忘れていたことをさらにと教えてくれる。しかもそれをおとひっちゃんと違って僕の負担にしないところがまたいい。

僕は立ち上がり、敬礼した。

青潟の四月はまだたんばが咲いた土のところに雪が残っている。スニーカーのつま先も真っ黒くなり、たまに滑りそうになる。僕の後ろには誰もいないから、学校でグラウンドを走っている時と違って、泥ひっかけて文句言う奴もいない。僕だってそれほど足が遅いわけじゃないんだけど、やっぱり元陸上部には負ける。

先頭のおとひっちゃんとは、一軒、家が挟まるだけの間が空いて

いる。

早く終わろうよ、おとひっちゃん。もう苦しいよ。

途中おとひっちゃんが飛ばしすぎて姿見えなくなったところで、少し歩いたりもしたけれど、結局、疲れの度合いは一緒だった。へるへるになりながら、ゴールの駅前にたどり着いた。すっかり太陽が昇っている。駅終点の市営バスから降りてくるのは、スーツ姿の大人ばかりだった。制服を着た高校生っぽい奴らも数人たむろしている。ゴールはうちの店だった。朝七時前でも駅前には人が結構いるんだから、もっと目立たないところにしてくれたらいいのに、おとひっちゃんはやっぱり抜けているんだ。

「雅弘、お前、宿題やったのか？」

まだ春休みの宿題に手をつけていない僕の状況を、長年の勘でおとひっちゃんは気付いているみたいだった。首を振る。

「じゃあ昼に届ける」

「え？」

いつものことだった。おとひっちゃんは始業式三日前くらいに、わざわざ宿題を完璧に仕上げたノートを貸してくれる。全部それを写しておけばいい。おとひっちゃんの答えは大抵当たっている。僕の成績レベルで宿題全問正解だと確実に怪しまれるので、少しだけわざと間違えたりしておけば完璧だ。

「おとひっちゃん、ごめんな」

「じゃあ、後で」

おとひっちゃんは背を向けた。僕が裏口から入ろうとした時、

「あ、雅弘」

声だけでぐいと呼び止められた。短い言葉。

「なんだよ」

しばらく口籠もり、おとひっちゃんは紺ジャージ上のチャックを上まで締めた。つめえりっぱく見えるように着こなしていた。

「学校始まってからはしばらく生徒会室に寄り付くな」

それだけ早口につぶやくと、おとひっちゃんは軽く跳ねるように

して、自分のうちの方へ走っていった。まだ走り足りないんだ。元陸上部は体力のけたが違う。帰宅部の僕と一緒にするなと思って思った。

やっぱりそうなんだ。総田の言ってた通りだ。

汗をかいて身体があつたかい。おなかがすいた。たっぷりご飯を食べたい。味噌汁の匂いに誘われて、僕はいったん考えるのをやめた。食欲こそ一番だ。おとひっちゃんがこんな風に僕を「朝のジョギング」へ誘い出したのは、三学期終業式の翌日からだった。いくら「水に流す」と言っただころで、奴は簡単に許してくれないだろう。親友扱いしなくなるだろう。覚悟していた。もうひとりで宿題やらなくちゃいけないし、おとひっちゃんとも口を利いたらいけないのではないかと思っていた。

けど、おとひっちゃんはほんとに、きれいさっぱり水に流してくれた。

いきなり電話をかけてきて、

「明日からお前、俺と朝走るんだからな。準備しとけ」

と言に残し、またがっちゃり切った。冗談かと思った。本気だった。おとひっちゃんは朝六時半ちょうどに裏口までやってきて強引に連れ出し、スニーカーの履き方ひとつにも文句をつけ……結び方が甘いとか、足を痛めるから別の靴を履けとか……二十分から三十分間、しっかり走りつづけた。

おとひっちゃんが元陸上部の長距離ランナーだったことを知らぬものはいない。けど、今までは早朝トレーニングなんてしてなかったんじゃないかなあ。本人曰く、

「現役だった頃はもつといけたんだけどなあ、身体なまっただな」

と悔しそうだったけれども、帰宅部の僕にとってはしんど過ぎた。もういいかげんにして欲しい、と思う一方で、大人しくくつついて走っていた方がいいんじゃないか、っていう気もしていた。

言葉を使うのが苦手だ、おとひっちゃんって奴は。枝をぽきんと

折って投げつけるような言い方をする。身体を使った言葉ならすぐにぴんとくる。顔を見たり、動作をチェックしているだけでおとひつちゃんの考えていることがよくわかる。へばる寸前で顎上げている僕を、曲がり角のところで緩めることなく待つていてくれているおとひつちゃん。ひたすら追っかけていた。終わった後で、どこでくすねてきたのかガムを一枚渡して走り去っていくおとひつちゃん。何も言わないけれども、まっすぐ見つめてくるおとひつちゃんがいる。

やっぱり俺は、おとひつちゃんの「弟分」なんだ。

逆らえない。

どんなに理不尽だってわかっていても、だ。

あいつにとって僕は、まだ面倒を見ることが必要な弟分であることを改めて実感した。いつもおとひつちゃんにあわせて「弟」の顔をこしらえてきたけれど、とつくの昔に卒業したと思っていた。けどやっぱり、おとひつちゃんに最後はかばわれてしまったというわけだ。

俺はやっぱり、守られるだけの奴なのかなあ。

走れば走るほど、重たくなっていく鉛みたいなものが心臓のあたりに落ちてくる。

中学三年用の参考書と、うちの母さんが買ってくれた真新しい下着一式を机の上に投げたまま、僕はベットに横たわった。天井にはだいぶ古ぼけてはがれかけた鈴蘭優が笑っていた。

やっぱり、俺はもう、佐賀さんに会えないのかな。

何度も鈴蘭優のポスターに話し掛けてみたりした。野郎友だちにばれたら何言われるだろう、不気味がられるだろうな。

もう一度鈴蘭優を見上げて、同じ髪型のあの子のことを思った。

そう、「想った」。

人手がないってこともあって鈴蘭優ポスターで夢見る時間はすぐに遮られた。父さんに言いつけられ、仕方なく店のドア拭きに専念

していた。自動ドアの硝子がまぶしくて目が痛くなりそうだった。ゴールデンウィーク時期は夏っぽい気温になるんじゃないかとうちの父さん母さん、真剣な顔で話していた。手の油がついた部分を、へっぴり腰でごしごし拭いていると、声をかけられた。

「佐川さん、今、大丈夫ですか」

僕の名前を「佐川さん」と呼ぶ人は、ひとりしかない。

ぞうきんをしっかりと握り締めたまま腰を伸ばし、振り向いた。喉からばくと爆弾が飛び出しそうだった。あの声、全身ピンク、ピンク、ピンクの女の子。あの子だ。身体が一気に春体温で上昇していくのがわかる。早く、早く、なんか言わなくちゃ。ほら、あの。

「佐賀さん！」

それしか言葉が出なかった。

「今日、エレクトーンのお稽古だったんです。久しぶりに寄ってみました。あの時のこともお礼が言いたくて」

僕が大嘘言った時のことだろうか。ちくつと痛む気持ちを押えつつ、僕は首を振った。

「たいしたことないよ。けどあれから大丈夫だった？ 佐賀さんは」

「はい、私、評議委員になりました！」 「あれ？ まだ新学期始まってないんだろう？」

「いいえ、うちの学校は公立よりも始業式が三日早いんです」

今日の髪型はいつものお団子ふたつ。やっぱり佐賀さんはこの髪型が一番似合っている。

「今度の交流会は、それじゃ堂々と参加できるね！」

「はい、佐川さんもいらっしゃられるんですか？」

「うん、なんとかさ」

口籠もった。僕もおとひっちゃんに言い渡されたのは今朝のことだ。おとひっちゃんはすでに裏で手を回しているらしい。総田に気付けられるくらいだから、参加できる可能性は七割方、ないだろう。

仕事中だと気、遣ってくれたんだろう。佐賀さんはピンクのかば

んを開いて、何かをさつと取り出した。別に、佐賀さんと一緒だったらガラス磨きなんてさぼったっていいのにな。

「それでなんですけど、これ、新井林さんから頼まれて預かってきました。後で読んでくださいね」

両手で一度胸に当てた後、僕を見つめてすうつと差し出した。漫画で見たことのあるラブレターを渡す場面みたいだった。そんなわけないけどさ。こっちもなんというか言葉が出ない。

ああそうなんだ。俺にはさっきたんがいるから、安心して連絡できるんだよな。

三月末のことを思い出した。痛いところをつついてしまった。あの時佐賀さんはずうつと、健吾くんに寄り添っていたっけ。僕の隣りにもさっきたんがいたのに、なんだかぐさくさくるような気がしてならなかったことを覚えていた。

「ありがとう。じゃあ後で読むよ」

ソフトクリームに見える複雑な折り方の手紙だった。僕は佐賀さんがいなくなるまで見送った後、大急ぎでガラス拭きを終わらせた。途中雑になってしまったところがあるけれども、まあいいか。

部屋に戻り、だいぶ色あせた鈴蘭優のポスターを眺め、ベッドの上へ横たわった。

文字を読む時だけはちゃんと目を開け、ポスターを眺めるときは目を寄り目にして少しぼやけるようにしてみた。ぼやあと佐賀さんの姿と声が蘇ってくる。自分に言い聞かせ、ソフトクリーム型の手紙を開いた。もう、元の形には折れないぞ。

佐川さんへ

ずっとお手紙を書こうと思ってました。お話したいことがたくさんありました。けど、私の周りではいろいろなことが起こって、話せば話すほど大変なことになりそうなので、お手紙にします。

まず、私のことなんですけど、ちゃんとお約束通り三年D組の評議員になりました。もちろん新井林くんも一緒です。クラス全員満場一致でした。担任の先生がもちろん力を入れてくれたのもあるんですけど、やはり女子がみな、杉本梨南ちゃんのことをあきらめてくれたのが大きかったんだと思います。もう梨南ちゃん存在は、クラスでも薄くなってきたと思います。先生は最初、梨南ちゃんを、「人の心がわかるように」という理由で保健委員にするつもりでいたみたいでした。けど、保健委員の人たちがそれ以来必死に仲良くなつて、どの委員の男女も一気に理解しあおうと動くようになり、結局梨南ちゃんほどの委員にもなれませんでした。

この前お会いしたときにお話したとおり、私は梨南ちゃんをかばってあげなくちゃいけないと思いました。だから、これからはクラスから嫌われてしまった梨南ちゃんを、さりげなく面倒見てあげるようにしなくてはと思っています。

決して、私は梨南ちゃんのことを好きなんじゃありません。佐川さんとお話してわかりました。嫌いです。大嫌いですが、でも、嫌いだからいじめるという発想自体が間違っているような気がしてなりません。嫌いだったら、哀れんであげること、そういう考えしかできない人のことを同情してあげること。自分とは違う世界の人なんだと思つて、接すること。これが大切なんじゃないかなあと、お母さんと話してて思いました。

嫌うんじゃないくて、許すこと。そういう人がいるんだと思つてあきらめること。

今、あらためてお母さんの言う言葉が本当だつて思いました。

だから、私はいじめたりしようとは思いません。ちゃんと、クラスをまとめて堂々と評議員を務めようと思つてます。

佐賀さんってほんと、文章がうまいなあ。あらためて思う。

僕なんてまだ小学生と間違えられるような書き方しかできないのに。公立高校入試に作文の試験が無くて本当によかったって思った。佐賀さんの手紙はまだまだ長かった。

新井林くんも、今は完全に梨南ちゃんのことを無視しています。

もうどうでもいいみたいです。さすがにクラスで悪口言う人がいるとたしなめることもありますけれど、もういてもいなくてもどうでもいい人になっちゃった梨南ちゃんにかまう人がいなくなっただけなのもあります。

梨南ちゃんは、暇さえあれば関崎さんの手紙を眺めています。折れ目が見つからないように下敷きの間に挟んでいます。立村評議委員長が毎朝様子を見に着ます。「関崎さんは今度いついらっしゃいますか」と繰り返してます。いつかは関崎さんと会えるのだと信じているみたいです。

でも、新井林くんが話していましたけれど、立村評議委員長は、もう二度と水鳥中学の方へ梨南ちゃんを送らないつもりだそうです。ここからは絶対に誰にも見せないでください。関崎さんにも話さないでください。

なんだろう、おとひつちゃんのことだろうか。

気になって続きを読みつづけた。

三月に、関崎さんと佐川さんと、もうひとりの女子の人と会った後、卒業した先輩に思いっきり怒られたそうです。新井林くんが言うには、叩かれたりしたらしいです。けれど、梨南ちゃんを交流関係のサークルに入れるということだけは、絶対に譲らなかったそうです。

もしそれをさせてもらえないのならば、自分は委員長を降りるつもりだ、とまで言ったそうです。最後は健吾が割って入り、なんとか納まったらしいです。

ですから、梨南ちゃんは表に出ないけど、一応、交流関係のグループにはいます。

今の三年の女子先輩で評議員から降ろされた人がいて、その人が仕切っています。一生懸命梨南ちゃんはくつついて、関崎さんのことを聞き出そうとしています。もちろん仕事もきちんとやるし、周りは女子ばかりなので、楽しそうです。

おいおい、なんだよ。ということは立村、約束が違っんじゃないか。

僕は何度もつぶやいた。

でも、その時に、梨南ちゃんをもう二度と関崎さんには会わせないと約束したそうです。関崎さんは梨南ちゃんから本当は逃げたいんだということ、きちんと説明したのにわかってもらえなかったから、なんとかしなくてはという理由らしいです。

立村評議員長は、毎日、梨南ちゃんの様子を見に来てはいろいろ相談に乗ってあげているみたいです。梨南ちゃんは立村先輩のことを「不細工で頭が悪いけど考え方はまとも」という言い方をしてました。評議員会から降ろされたということで逆恨みして、最近では失礼なことばかり言ってますけれど、立村先輩は全然怒りません。それどころか、梨南ちゃんを連れて図書館へ行って話し掛けたりしています。どうして梨南ちゃんは、立村先輩にしないんだろうと不思議に思います。そうすればみんなが幸せになれるはず。梨南ちゃんも幸せになるし、周りの人たちも迷惑をかけられないですむし、立村先輩も満足するはずなのに、どうしてみんなが楽しくなる

ようなことをしないんでしょうか。不思議でなりません。

佐賀さんは一番幸せになれるようなこと、しているのかなあ。
僕自身もしているとは思えない。

関崎さんを追いかければ追いかけるほど嫌われるのはわかってい
るはずなのに、どうしても梨南ちゃんはそうということがわからないの
でしょうか。みんなが梨南ちゃんのせいで不幸になっっているのに気
付かないなんて、本当にかわいそうだと思います。私は幸せにな
りたいです。だから今日、思い切ってお手紙を書きました。
やっぱり、私は、佐川さんに会いたいです。

身体が痺れた！ 目の前の手紙が顔に着陸した。ばらばらにな
って慌ててまとめた。

佐川さんとお話していると、私がだんだん見えてくるような気が
します。どうしてかわかりませんが、新井林くんや他の人たちと話
してくるより、本当の私を掘り出してしまったような気になり、怖
くなります。こんな気持ちになるのは初めてでした。

佐川さんが話してくれたことで覚えているのが「職業高校に行く」
という話です。

私はそれまで、職業高校なんて頭の悪い人が行く学校なんだと馬
鹿にしていました。ごめんなさい。本当に馬鹿なのは私でした。私は
何にも考えないで、ただ黙って青大附高、大学へ進むものだと思っ
て、ばおっとしてました。きっと健吾も梨南ちゃんも同じだと思い

ます。けど、佐川さんがなぜ職業科を選びたいか、その理由聞いて目が覚めました。

自立したい、大人になりたい。初めてわかりました。

その通りだ。いつも口やかましく成績のことで文句言われる生活から脱出したいし、何よりも自分の力で働いてみたい。自分の能力がどこまで伸びるか試してみたい。勉強なんかじゃなくて、僕の手持っている能力そのものを専門で伸ばしてみたいなって思っていたからだ。おとひつちゃんのように、中学入試の雪辱戦とは違う意味で言っただけだった。

低レベルな奴だって馬鹿にされたかもしれないって思っていた。でもちゃんと、覚えててくれたんだ。

私も、佐川さんのように、自分の意志と能力でもって歩いてみたいと思いました。ずっと梨南ちゃんの言うことばかり聞いていた頃は、私ってのろまで泣き虫で何にもできな子だと思ってました。けど、佐川さんに会ってからすべてが変わりました。私ももしかしたら、何かができるかもしれない。評議員になれば、もっといいことができるかもしれない。梨南ちゃんとか立村先輩なんかよりもずっと、上手にできるかもしれない。そんな自信がついてきました。女子とはなかなかうまくいかないことも多いけど、男子のみんなが助けてくれるので、だいぶスムーズに動くようになりました。

そうかそうか、よかったよかった。

ただ、どうしても気になるのが立村先輩のことです。梨南ちゃん

のことを気に入っているのはわかってますが、私のことを冷たい視線で見ることが多くてちょっと怖いです。私は梨南ちゃんのために、いいようにしてあげようって思っているのにです。もしかしたら交流サークルのことも、評議委員会関連とは関係ない形で梨南ちゃんと関崎さんを会わせようとしているからじゃないかって、噂もあります。そんなことしたらまた梨南ちゃんと同じように関崎さんに嫌われるだけでなく、水鳥中学の人たちにまた迷惑をかけるはずです。私はそれを止めたいのですが、立村先輩は私のことを嫌っているみたいで、丁寧だけど冷たい言い方をします。梨南ちゃんに本当のことを教えてあげたいのに、わざと私が梨南ちゃんに近づくのを避けるようなことします。

それだったらどうして立村先輩は、梨南ちゃんとお付き合いしてあげないのでしょうか。

責任取らないなんて、男らしくないと思います。梨南ちゃんもかわいそうです。

嫌な予感がぞわつとしたのは、気のせいだろうか。

僕のほつぺたが妙にひりひりしてきた。奴にぶん殴られた跡だ。

私は今、こういうことを相談できる人が、誰もいません。新井林くんは最近、立村先輩にいろいろ言い含められてるみたいです。私のことを疑うような目で見るので、いつも私はいらいらしてしまいます。だんだん本当のことが言えなくなってます。言いたいのには言えないのが辛いです。きっと私は、佐川さんでないとどういことができるかどうか見つけられないんだと思います。幸い、佐川さんにはちゃんとお付きあいしている人がいるそうですから、安心して会えます。すぐくうれしかったです。お付きあいしてくれてい

る人がいるってことを聞いて安心しました。新井林くんにも怒られずにお話ができるのが嬉しいです。お願いします。今度の金曜日、またお店に寄ります。

佐賀 はるみ

やられた。さされた。完全に壊れた。

もうほとんど全身がゆでダコ状態のままベットの上でごろごろした。もだえていた。

でんぐり返し、えびぞり、ありとあらゆる技を繰り出し、僕はひたすら笑いこらげていた。天井の鈴蘭優がにこやかに僕を見下ろしていた。同じ言葉だけ、頭の中で叫んでいた。やんや、やんやつて感じだった。

また、会えるんだ。佐賀さんと！

笑い納めにエビぞりを三階くらいした後、僕はベットの上にあお向けで倒れた。口の中で何度も空気をかみ締めた。

国語の成績は悪くないんだ。だから読み間違えることなんてない。佐賀さんが何を言いたいかがよくわかる。

俺に会いたいって、ことだろ、要するに。

鈴蘭優のポスターに並べた格好で読み返した。

立村が僕と佐賀さんを二の次に見ているのと同じく、僕も葉牡丹の君・杉本さんのことはどうでもよかった。これ以上かまう気はない。佐賀さんもこの手紙読む限りだと、「かわいそうな子」としか思っていないみたいだ。はつきり負けが決まっている可哀想な相手叩いたって、後味悪いだけだ。

あのまま杉本さんを放置しておいたらどうなるか。

おとひっちゃんはしょせん、他校の生徒だ。僕が無理に動かなくたって大丈夫だ。あいつだっていざとなったら強い言葉で撥ね付

けるだろう。

けど一緒のクラスで顔を合わせている佐賀さんはどうなる？

佐賀さんは評議委員に選ばれたという。相棒はあの健吾くんだし、同じクラスの連中も杉本さんのことなんか無視の一手で通しているという。これって一種のいじめに近い状態だ。もっとも当然過ぎるだけ当然な制裁される理由が杉本さんにはあるんだから、それは自業自得だと思う。周りだってそう考えているから、先生も大目に見ているんだろう。

だけど、いくら佐賀さんが頭のいい子だったとしても、あんなに涙もろい、傷つきやすい女の子であることには変わりないじゃないか。陰で杉本さんに八つ当たりされて傷ついてしまう可能性だって大いにある。杉本さんみたいな人は日本語が通じないんだ。そんな奴に傷つけられて泣き寝入りなんてさせたくない、絶対に。

さらに立村が杉本さんの背後霊として立っているのも危険だろう。そうだ、問題はあの蠅人形だ。

立村は自分自身を含めた「交流準備会騒動記」の脚本を書き、おとひつちゃんに読み聞かせ、いつのまにか舞台設定を整えてしまった。想像だけど、一番近い予想だろう。僕も立村と同じ立場だったら、きつと似たようなことをしたに違いない。

「友情は音楽とともに」の脚本あらずじを聞かされた段階で立村は全て気づいたに違いない。脚本に盛った杉本さんあての毒なんて一発ではばれていたのだろう。ピアノが弾けなくてやつかみの末に佐賀さんをいじめた杉本さん、このエピソードももしかしたら立村は知っていたのかもしれない。杉本さんを連れて佐賀さんがトイレにひっぱって行った段階で、あいつもぴんと来たに違いない。ピーピー腹を装いさりげなく生徒会室を抜け出したのもそのためだろう。男子の恥をさらけ出す振りをして、佐賀さんたちを追いかけていったんだ

佐賀さんを追い返そうとしたのも、僕と佐賀さんと会おうとした

のを見抜いたからに違いない。杉本さんが途中で吐いちゃったりしたのはアクシデントかもしれない。けど、すぐに逆手に取り僕と佐賀さんとの繋がりを確認するのに使うとは、さすがだ。僕も同じこときっと考えたに違いない。

おとひっちゃんに取引を持ちかけたのはそれからだろう。立村が何をまくしたてたかわからないけど、口八丁でおとひっちゃんを説き伏せ、図書準備室まで押しかけた。もしあの時、佐賀さんと一緒にのところを見られていたら、立村よりも先に、おとひっちゃんにぶん殴られていたに決まってる。

立村は冷静に全部計算して、僕が逃げられないところまで追い詰めた。佐賀さんがいることを確かめ、最後の逃げ場だけ作って去った、ってわけだ。後々佐賀さんを脅すかなにかするために。

杉本さんへ紳士的対応をしてもらうためには、自分のことを多少恥さらしだと思われても一向に構わない。奴にとっては葉牡丹もかすみ草と同じように見える花だったんだろう。

どうして気づかなかったんだよ、俺は！

敵は毒花・葉牡丹なんかじゃない、葉牡丹の花を守っている、あいつだった。

佐賀さんの手紙が百パーセント正しいとするならば、立村の奴、杉本さんをおとひっちゃんとかくつつけるのをまだあきらめていないんだ。正気かよって言いたい。あれだけ露骨に振られたにも関わらず、杉本さんはおとひっちゃんの手紙と写真を見つめているという表向き「評議委員会と生徒会」の関連する行事には参加させないにしても、個人的にだったら別だろう。抜け道は確かにある。個人のお付き合いに口出しするほど野暮でもないだろう。おとひっちゃん、そのところ、気がついてるんだろうか。絶対気がついてないに決まってる。

立村は杉本さんに関する事だったから見境なくなる奴だ。張り倒

された僕がほつぺたでよつく理解しているつもりだ。しかも佐賀さんに対していわゆる「慇懃無礼」な態度を取っているという。それだけでも僕には腹立たしいことだけど、何かの拍子で佐賀さんが自己防衛してしまった場合修羅場が繰り広げられるのは目に見えている。杉本さんの行為が非常識であるうがなかるうが立村には関係ない。評議委員長の肩書きを盾に、全身全霊で佐賀さんをつぶしかかるだろう。杉本さんのためなら、腹下しのふりするのも、先輩連中にぶん殴られるのも、全く意に介さない奴なんだ。

そんな奴に睨まれてしまった佐賀さんの立場を考えると、僕だってこのままじゃあいられない。もし何か間違いが起こったら大変なことになるぞこれは。

私は佐川さんに会いたいです。

おとひつちゃんは僕を「守る」ために、交流関連の行事から引き離そうとしている。「弟分」である以上しょうがないことなんだけど、半ばあきらめていた。

さっきたんもカモフラージュのためにつて申し出てくれた。そんなの汚いやり方だつてすぐに跳ね除けた。二股なんて、いくらなんでも佐賀さんとさっきたんに失礼すぎるじゃないか。

けど、事情が変わった以上、僕は守られる「弟分」のままではいけない。佐賀さんに会わなくちゃ。どんな汚い手を使っても、僕は佐賀さんの想いに精一杯答える義務があるんだから。佐賀さんを「守りたい」って気持ちだけ、本物なんだから。

さっきたん、俺とカモフラージュで付き合ってくれないかなあ？

しばらくさっきたんと顔を合わせることを避けていた。そりやそうだろう。あんな救いのない振り方をしてしまったんだから、できれば無制限に会わないですめばいいって思うのも当然だろう。僕だっ

ても、さっきたんってよくわからない子だ。

何度もうちの店に来て、母さんに、「チューリップのつぼみがそろそろ咲きそうなんです。うちの母がおすそ分けしましょうか、って言ってます」とかなんとか声をかけているんだそうだ。そのうち数回は僕も二階の部屋にいて呼び出されたけれども、風邪引いて寝込んでいるとか言ってごまかしてしまった。それでもめげずに通ってるところを見ると、そろそろ一度は顔を合わせないとまずいかもしれない。そんな覚悟はしていた。

佐賀さんの手紙をもらってから、僕はもう一度さっきたんが来てくれるのを今か今かと待ち構えていた。だって、これからの計画は、僕が直接さっきたんと話をして了解を得ないと、意味がないんだから。おとひっちゃんも誰も間に挟まないで、きちんと説得しなくちゃいけないんだ。

OKしてくれるだろうか？　してくれるわけないだろう？　いや、さっきたんの方から最初に提案してくれたんじゃないか、だって。

何度も天秤にかけて見比べてみたけれど、やっぱりさっきたんがOKしてくれる方に傾いているように思えてならなかった。僕の直感が正しければ。

朝、部屋から降りてみると、店はけっこうばたついていた。僕く

らいかそのちよつと上くらいの中学生高校生がうじゃうじゃしている。あと二日であちの学校を含め公立中学の新学期もあいまって、学習参考書がやたらと売れているときいた。万引きする奴もかなりいるらしい。入荷した本からビニールを引き剥がしながら目配りする母さんは、普段以上にぴりぴりしていた。手伝いたくないのだけど、人手が足りない以上無視するわけにもいかない。すっかり寝癖がついた頭のまま、レジに入った。

「ああ、ちようどよかった。雅弘、五月ちゃんよ」

母さんが僕の顔を見るなり、にこやかに手招きした。

いつもだったら愛想悪く逃げるけれども、今日は違う。一度目で合図しておいた。目が合うとさっきさんは僕に向かってにつこりと笑った。相変わらずはつかねずみのようなきよとした表情だけど、怒っていないってことだけはちゃんと伝わってきた。がくん、と心の中が重たくなった。レジでひとり前のお客さんに、文庫の力バーをかけている振りをして目をそらしていた。

「ほら、いいわよ、雅弘、行きなさいよ。五月ちゃんごめんね。今、ぼんくら息子を花の運び人に出しますからね、どんどん使っちゃってね」

母さんとは花のことで話が盛り上がってしまうらしく、結構お気に入りにしているみたいだ。女子同士だからか。僕の方を見てさっきさんは、いつものように優しい笑顔を見せた。目が合って僕もちやんと「おはよう」と呟いた。

「佐川くん、たくさんチューリップ、咲いたのよ。大きな花ばかりなの」

なんで女子ってみんな、花をくれたがるんだろう。

「チューリップって、そんなにあるんだ」

「うん、佐川くんが抱えるくらいよ」

どうせ俺は身体小さいよ。

そんなひがみっばいこと、思いたくないのに。

むっとしたまま、僕はさっきさんと一緒に店から出た。別にさっ

きたんに対してむかついたわけじゃない。あとであやまるところ。

母さんがさっきたんに手作りのお菓子を持たせていた。

「ありがとうございます。うちのみんなでいただきます」

「五月ちゃんほんと、礼儀正しくていい子ねえ。雅弘、あんたも見習いなさい！」

きちんとお礼を言った後、はつかねずみのような瞳で見つめるとこが、女の人には好感度大らしい。

外は制服姿の女の人たちがたくさんうろついていた。十一時くらいだと、ちよつと早い昼ごはんを食べる時間帯なのかもしれない。

「おなか空いたね」

「うん、佐川くんのお母さんからもらったお菓子、あとでいただくわ」

どうせあぶらっこいドーナツなんだろう。母さんの作るおやつはまずい。好きじゃない。けどさっきたんの口には合うようだった。やっぱりさっきたん、見た目より好みがきわものだなんて思った。

「あと一年なのね。受験まで」

さっきたんが空の白い月を眺めながら小さな声で呟いた。少しはにかんでいた。

「さっきたんはどこ受けるの」

「青潟商業なんだけど、私頭よくないから先生にランク落としなさいつて言われているの」

「僕も同じだよ。青潟工業。怒られっぱなしだよなあ」

さっきたんの志望校が青潟商業高校だと聞かされて妙に納得していたりした。同じ職業科志望同士、気持ちが少しまぎれた。互いに仕入れた志望校情報と内申点計算について、なごみながら話していた。

さっきたん家の塀の裾には、びっしりと背の高いたんぽぽが生え揃っていた。学校近くのたんぽぽにくらべてこの生きのよさはなん

だ、と驚くくらいだった。茎をちぎって、首チョンパしたら、きつと遠くに飛びそうな厚みのある、しっかりした黄色い花だった。

黄色の延長線上に、鉢植えのやはり茎が長い花。十字の親指大の大きさ。葉牡丹の花が満開だった。

僕は立ち止まって見下ろした。あの時見た、毒々しい紫っぽい葉とキヤベツに似た縮れた葉っぱは、すでに下のところでもあるく広がっていた。もう「葉牡丹」って花の雰囲気じゃない。ただの葉っぱだった。なあんだって感じだった。

さっきさんは柄の変わった縦楕円形のはさみを持ってきた。花を切る時はいつもそれを使うんだという。花壇いっぱい咲き誇ったチューリップの花、その周りを囲むようにやさしく花を広げているのはパンジー、その他紫色、白、もちろん桜の細い枝、僕の知らない種類の花が溢れていて、一面花のじゅうたんそのものだった。そのまんま座り込んで、お花見気分でござ広げてお弁当を食べたくなつた。

びっくりするくらい大胆に、ざくざくチューリップの茎を切っていくさっきさん。

「いいよ、そんなに包まなくて」

かかえきれないくらいの花束って、初めて見た。気障っぽく「君の瞳に乾杯！」とかいって、渡したら笑えるだろうなあ。ただでもらってくなんたか申しわけない。

「球根を大きくするためには、早めに花を切っておいたほうがいいのよ。そうするとね、花に行くはずの栄養が球根に集まって、来年もっと大きな花が咲くんだって、お父さんが言ってたの」

しかし、やつぱり、なんか悪い。

鉄バケツに水を張り、チューリップの茎をつけて、中でまたちよきちよきやっていた。緑色のちょん切られた茎が浮いていた。

「こうするとね、お花が長持ちするのよ」

丁寧新聞紙でくるみ、僕にそのまま渡した。

「さっきさん、お花の先生になれるよ」

意味のないことを口走ってしまったような気がする。いつもと変わんないさっきさんの優しい瞳と、はつかねずみに似た表情。今日はお下げにしている。やっぱり普段着にもお下げ髪が一番似合う。

口に出したらすべてがぶっ壊れる。わかっていた。僕がこれから何をしようかと思っているかを、さっきさんは知らない。知ってたら二十本も赤と黄色のきれいなチュリップを包んでくれるわけがない。さっきさんの素直な想いを僕はためらうことなく切り捨てた。さっきさんと、おとひっちゃんに対して、僕は最低だ。

そのくせに僕は真剣に考えているわけだ。佐賀さんを守るためにはどんな汚いやり方もするって。おとひっちゃんにはばれないようにこっそり佐賀さんと連絡を取り合い、健吾くんたちには「俺には彼女がいるから付き合う気ないよ」ってアピールして、立村の攻撃をなんとしても食い止めようって思っている。佐賀さんを傷つける奴を、僕なりの手で追い払ってやりたい、それだけのために。

さっきさんは構わないって言うてくれたけど、あの日からだいぶたったんだ。心変わりしている可能性だってあるのに、どうしても僕は言わずにいられないのだろうか。

僕のために、こんなに尽くしてくれているさっきさんを、どうして。

どうしてさっきさんを好きになってあげられなかったんだろう。しばらく僕は受け取ったチュリップの花束を覗き込んでいた。チュリップの香りはそれほどきつくはない。中の花粉が少し花びらの裏にくっついてるのが見えた。もう一度抱え直し、さっきさんの髪をもう一度見つめた。

やっぱりお下げでなくっちゃ、嘘だ。ふたつつに分けても似合わない。

さっきさん、この前提案してくれたことなんだけど、今から

でも、だめかな。

まず、花束に話し掛けた。むせてこほんと咳をした。

ちゃんと、俺なりに、大切にしているから。

ほんと、さっきたんのしてほしいこと、俺なりにしているから。

だから、さっきたん、僕とカモフラージュで付き合ってくれないかな。

「さっきたん、あのさ」

そのまま発しようとした。

まんまるな瞳で、さっきたんは僕を見つめた。

びっくりするとこんな顔をする。花壇の中でまた一輪、花を摘もうとしていたらしい。立ち上がるうとして中腰になった。ちゃんとすると出てくるはずだった。なのに、さっきたんの顔を見つめたとなん、喉がこわばってしまった。胸が詰まって、それしか出てこなかった。なんかちよつといがいがした声だって、僕にもわかった。首を小さく振ってごまかそうとしたけどやっぱりだめだった。

言えるわけ、ないよ、絶対。

さっきたんの顔見てたら、絶対にできるわけない。絶対僕を受け入れてくれるって顔してるから。どんなにやなことだって、きつと「いいわ」って言うってくれるってわかってるから。僕が佐賀さんのことを考えているように、さっきたんも僕のことを同じように思ってくれてるってこと、今いやってほどわかってるから。

佐賀さんにそうされたくないのは俺だってわかってるのにさ！

「俺は、さっきたんが思ってるような、いい奴なんかじゃないよ」

自爆するしかなかった。もう逃げ道、ふさぐしかない。

さっきたんがふたつに髪の毛分けたところを、僕は一瞬想像し、すぐにさつと頭の中から消した。

「俺、最低な奴だってこの前、わかっただろ。だからもう俺のこと

なんか、考えるなよ」

はさみを両手で抱え、小首をかしげた。

「佐川くん、私そんなこと、思わせるようなことしてたらごめんなさい、私頭悪いから」

「悪くないよ、ちつとも悪くないんだ。さっきたんはいい人なんだよ」

かぶりを振った。なんだかガキっぽいことしそうだった。片手でチューリップの花束をぶら下げた。折れそうな程、茎を握った。

「俺、違っんだよ、今なんでさっきたんとくっついて来たか、知りたいだろ？ 母さんに頼まれて花をもらいにきただけだと思ってるんだろ。違っんだよ、俺、さっきたんにまた変なこと言おうとしてたんだよ、最低なんだよ」

桜の木に雀が留まっている。驚いたら春っぽく聞こえるのに。さっきたんは僕の剣幕にびびったのか、すっかり固まっていた。

「さっきたん、終業式のあと、青大附中の連中と会った時のこと、覚えてる？」

僕はゆっくりと尋ねた。首を振ってさっきたんが何かを言おうとした。

「あの時の子から手紙を昨日、もらったんだ。俺と会いたいんだって」

ぴくんと咽元が動いた。また僕はさっきたんの気持ちをはさみでちよん切っている。

「けど、条件があるんだってさ。俺が、さっきたと付き合っていることなんだってさ」

「どうして？」

きょんととして、さっきたんが手元のはさみをぶら下げた。濃いブルーのジャンパースカートが風で揺れた。

「俺が、さっきたと付き合っていれば、あの子と付き合っている男子がやきもち妬かないから、安心して会えるんだ。この前会ったバスケ部のことばかり話していた、一年だよ。俺、あいつと話して

て楽しかったし友だちでいたかったからあきらめようとしてたんだ。笑っていいよ、さっきたん。さっきたんが花摘んでくれてた時、俺はずっとあの子のことばかり考えてたんだよ」

ゆっくり、かみ締めるように言い聞かせた。納得するしかないみたい。

「今日、さっきたんにもう一度、俺の方からつきあいかけて、あの子に会うための条件を整えようって思ったんだ。最低だよな。俺、本当に、よくしてもらった価値のない人間だってこと、よくわかったよ。だから、もう俺のことなんて、無視したっていいんだ。ごめん。さっきたん」

風が強く吹きはじめた。さっきたんが砂埃を目に入れたらしく痒そうに目をこすっていた。泣いているように見えた。

「ちゃんと好きになってあげられなくて、ごめん」

不意に僕の眼にも涙が溜まってきた。砂埃が入ったせいだった。目の玉がごろごろして、また目をこすった。こう言う時、上まぶたを引き上げて、無理やり涙を流すとごみが取れるはずだ。空を仰いで、まぶしい白い太陽を見ながら、まぶたをひっぱった。

「佐川くん、あのね」

呼び止めるさっきたんを振り切り、僕は家の門から出ようとした。「聞いてほしいの」

さっきたんも両目を激しくこすっていた。同じくらい、涙目だった。

「関崎くんが交流会の帰りに話していたの聞いたの。内緒にしないで、ちやいけないことだってわかってるけど、ちゃんと話すわ」

おとひっちゃん、まただ。あいつ、さっきたんに声かけただけでも顔が真っ赤になる奴だったのにやたらと行動的だ。信じられなくて、僕は思わずぱかと口をあけてしまった。

さっきたんはまぶたを片目だけ押えて、こくと頷いた。

「関崎くんは、佐川くんのことを心配していたの。青大附中の人た

ちと会わせると、またごたごたするから、これからは交流関係に出さないって決めたって言ったの。青大附中の委員長さんも、それがいいって言ってたわ」

なんでさっきさんに先に打ち明けるんだ？ 絶対、おとひっちゃんらしくない。

さっきさんは少し咳き込んだ。

「だから、クラスが別になっても、佐川くんのことを力づけてやってくれって頼まれたの」

そんな器用な真似、誰が教えたんだよ。信じられない。さっきさんの言葉もそうだけど、何よりもおとひっちゃんの行動が、おかしすぎる。行動が！

「それで、関崎くん、言ってたの。私なら、佐川くんのことを一番わかってやってくれるから、これからも友だちでいてやってほしいんだって。あの、この前の交流準備会の時も話してたのよ」

親みたいになうざりたいこと言くなって言いたい。さっきさんに八つ当たりできない代わり、僕は思いっきりチューリップを地面に叩きつけたくなった。さすがに思いとどまった。代わりに石を蹴飛ばした。側の葉牡丹の鉢にぶつかった。

「よけいなことするなよな！ おとひっちゃんも」

「私もそう思うわ、だって」

いつも通りの大人しい口調からこぼれた。息継ぎして、もういちど「だって」を繰り返した。

「佐川くんは、青大附中の人に、会いたいのでしょう」

はっとして、さっきさんの顔をまじまじと見つめた。

「私より、ずっと、青大附中の人に。だから」

お下げ髪を両肩に垂らし、両手を胸に当てた。

「私、もう一度言っわ」

春風だろうが、また埃っぽい空気を吸いすぎ僕は咳こんだ。聞いたら、おなかのところがどうにかなっちゃんそうだった。足を踏ん張り花束を持ったまま僕はさっきさんの口もとをじっと見つめた。

「関崎くんと、青大附中の人たちの前では、私とお付きあいしたことにすればいいの。そうすれば佐川くんあの人に堂々と逢えるし、無理に交流会に出なくていいの」

またぐぐつとむせびそうになる。予定通りなのに、これでいいはずなのに。頭の中が真っ赤になった。首を振りながら僕は違うつて言おうとした。さっきさんの真剣な眼差しに、阻まれた。

「私、それでかまわないの」

どんな気持ちで言ってくれたのか、どうして許せるのか、さっきさんの気持ちが僕には到底理解できそうにない。僕だったら絶対に許せない。もし佐賀さんにそんなことされたら、と想像するだけでもむかつきそうだ。目の前で僕はじっとさっきさんを見つめなおした。

花壇の中で花の茎を切り刻んでいるさっきさんはきれいだった。目をこするしぐさも、花をそろえて包んでくれるしぐさも。僕がもし、さっきさんに告白されていたら。もし、佐賀さんと一度も会わないですんだとしたら。もし、僕がおとひっちゃんの親友でなかったとしたら。

好きになってあげたい人を、好きになってあげられなかった。さっきさんの横顔を見ながら、僕は佐賀さんの顔を思い浮かべていた。佐賀さんが僕に、ソフトクリーム型の手紙を渡してくれた時のほにかみを、重ねていた。さっきさんに心の中でごめんって言うことしか、今は思い浮かばなかった。やっぱり僕は最低な奴だった。敗者復活戦で手に入れたものを、もう手放すことはできなかった。

学校でさっきさんとふたりで話をしている時だけは、絶対さっきさんのことだけ考えようと決めた。佐賀さんにふたりきりで会っている時以外は、さっきさんを大切にすると決めた。

今、なによりも欲しいものを、さっきさんは花束と一緒にプレゼントしてくれたんだから。

僕は顔を上げた。唇を思いっきり堅く結んだ。じつとさっきたんを見据えた。そうしないとうまく言葉が出てこなかった。声が震えた。

「俺、絶対、水鳥中学の中ではさっきたんをないがしろになんかない」

言葉が詰まった。

「もちろん外でだってさっきたんがそうしてほしいってこと、きちんとするよ」

僕はしばらく涙目でうつむいていた。風を避けるためだった。

「恥ずかしいって顔もしないで、さっきたんのこと、大切に」「さっきたんがポケットからティッシュを取り出し、そっと差し出してくれた。」

受取って目を拭い、僕は無理矢理笑った。

まだ花がしおれないうちに母さんへチューリップの巨大な花束を渡した。大喜びして玄関に飾る母さんを放っておいて、部屋に戻った僕はもう一度佐賀さんからの手紙を読み直した。僕は部屋に戻り机に向かった。手にはまだ花の茎から出たつゆが緑っぱくついていた。

もう後戻りはできない。二段目の引き出しを開いたまま、手紙を載せた。すぐ覗き込めるようにだった。写すためのノートを開いた。手紙から、水鳥中学生徒会および交流準備関係で必要な情報を抜き出した。

僕はすぐにそらんじている電話番号をダイヤルした。

男の声。思った通り総田本人が出た。

「よお、佐川、どうした、少しは明るい未来が開けたか！」

「あのさ、総田」

僕は口元をふつとゆがませてみた。

「青大附中の内部に関する最新情報が手に入ったんだけど、聞いたいか。もちろん、おとひっちゃんには内緒だよ」

総田と話をしていると、さっきまでチューリップ抱えてめそめそしていた僕が姿を隠して、「水鳥中学の天才参謀」だった僕が悪役笑いをしながら現れる。今のどうしようもない自分を立て直すには、総田と話をすることが絶対必要だった。弟分じゃない僕を引っ張り出したかった。

「まず、杉本さんがこれから先、うちら水鳥中学との交流を中心とするグループに参加する、これが大問題だよ、総田」

かいつまみつつ僕は佐賀さんの手紙内容を説明した。

「立村はもう二度と杉本さんを、水鳥中学へ送り込まないっておとひっちゃんに約束したらいいんだ。噂によると、先輩たちからリン

チされたかなんかしたみたいだよ」

「へえ、まじかよ」

あの蠟人形だったら一発張り倒した段階でこなごなだろう。きつと総田、甘く見ているだろう。あいつのストリートパンチを食らう瞬間までは、僕もそう思っていた。頬の辺りが思い出したようにひりひりしてきた。

「けどさ、交流グループかなんかに入っているってことは、へたしたら顔合わせる可能性がないとも限らない、ってことだよな」

「まあな。行きはしないが待ちはずる、って奴だな」

「しかもおとひっちゃんへお熱の状態は全く変わってないんだって。おとひっちゃん、確か青大附中に手紙で挨拶みたいなの書いただろ？ どうもさ、それを立村経由で手に入れて毎日眺めているらしいんだよ。気持ち悪いよな」

「さむいぼだあ」

「きつとおとひっちゃん、杉本さんのこと可哀想だなんて思ったんだと、僕思っただ。一度はきつちり振ろうとしたけど、相手が常識的日本語理解できなかったのは計算違いでさ。さすがのおとひっちゃんもそれ以上説得するのをあきらめたらしいんだ。見事にそれ、裏目に出ているよ」

「やっぱりおとひっちゃんはそういうところが抜けている。僕だったらやっぱり、救いようのないくらいきつぱり振るのに。」

「甘い」

僕もそう思う。

「おとひっちゃんの本音はきつと、『もう二度と勘弁』だろうなあ。立村に頭下げられて、仕方なく望みは残してやったけど、相手は自分に都合のいいことしか耳に入れないこまったちゃんだろ」

「けどなあ佐川、ひとつ疑問があるんだがいかん？」

「なんなりとどうぞ」

「佐川を生徒会関連から外したがつてだ、お前を水野さんとくつつけたがつてだ、いろいろとあいつなりに頭を使っているけどなあ、

関崎シーラカンスがあんなこと、普通思いつくと思うか？」

やはり、総田も同じこと考えていたんだろう。思わずにやつと笑いが洩れた。

「そうだよ、総田の言う通り。あれは、おとひっちゃんがはめられたんだ」

「誰にだよ、まさか」

「あの、蠟人形だよ」

あの日、おとひっちゃんと公園で並んで座っていた、蠟人形立村のかすかな微笑みと繋がった。どうしようもなく惨めだったあの日のこと。どうしようもない苦い気持ちを。

「立村が僕を目の仇にしているのは、杉本さんを侮辱したからだよきつと」

「まさか、あんなお茶わんこ娘のために、なんでだあ？」

総田にはわからないだろう。僕だって理解不能だ。ただ、すべての出来事を僕が佐賀さんのために仕組んだのに対して、立村は杉本さんとおとひっちゃんを軸にすえて動かした。僕や佐賀さんを吊るし上げることであつたあの状況だったら簡単だったろう。けど立村はおとひっちゃんと取引をして……たぶんおとひっちゃんにその意識はないと思うけど……杉本さんと話をしてもらい、いい思い出しに持つて行つてもらつたこと、百パーセント振るよりもほんの少しだけ希望が持てる言葉で話してくれるよう頼んだつてわけだ。そのためだったらおとひっちゃんの要求、佐賀さんとさつきさんとの入れ替えを了解し、立村自身が恥をかかせられることもいとわない。

全部話すわけにも行かなくて、僕は総田にもう一度繰り返すだけだった。

「すべては、杉本さんを守るためだったんだ」

皮肉なことだけど同じ気持ちを、今、僕も理解している。

僕はできるだけ落ち着いた声で総田に今後の展望を語つた。

「これから考えなくちゃなんないのは、向こうの蠟人形がこれから

先、どういう罫をしかけてくるかだよ。今も言ったけど、あいつはとにかく杉本さんを守るためだったら手段を選ばないよ。おとひっちゃんがつかり忘れてばおっとしている間に、杉本さんと会わせたりするかもしれないよ。おとひっちゃんのところで止まるならともかく、水鳥中学生徒会にも飛び火したら、また大変なことになるよ。二重スパイが絶対必要だと俺、思うんだ。総田、俺だったらベストキャストだろ？ この前総田が言った通りの計画を、そのまま実行するんだ。さすが総田教授って、俺言いたくなっちゃったよ」

一通り説明を終えて僕は総田に話を振った。

「ナイスだな、けどなあ佐川、それってかなりやばくないか？ あおった俺が言うのもなんだけどな」

言葉を濁した。

「無謀じゃないよ。簡単だよ。この前総田も言っただろ？ お互い彼氏彼女がいれば、噂立ってもちゃんと違うつていえるって」

「おいおい、まさか」

「そうだよ、まさかだよ。仕入先はもう用意してあるんだよな」

僕は悪役のお殿様を作るような口許をこしらえてみた。鏡がないから見えないけれども、たぶんそうなってると思う。

「お前がめろめるの、例の彼女か？」

「了解済みだ。いいだろ」

「や、やばくねえかそれ。それに水野さんもOKしたのかよ？」

自分で提案したくせに総田の奴、まじであせってる。なんだかおかしくなった。

「そうだよ、ちゃんと話についているんだ。あとは総田、お前だけ」

「俺はどうしろってんだよ」

「ほら、俺生徒会室に暫く近づけないだろ？ どうしても生情報手にいれられないだろ？」

僕の口だけがするするすべる。ここんところはきつちりと約束しておかないと。自分の学校情報が曖昧なまま動きたくはない。無駄な動きはしたくない。

「俺はひとりで青大附中の子と連絡を取るよ。けど水鳥中学生徒会の状況がわかんないと、俺だつてうまく質問できないよ。だから、おとひつちゃんに気づかれないうちに、こっそり情報教えてほしいんだ。総田、お前しかないんだよな、その点頭のいい奴つてさ」
あいつの「教授」たるプライドをくすぐってやった。やっぱり反応した。

「まあそのくらいならいつでもできるよなあ。けどな、佐川、お前まじでばれたらどうするんだ。関崎はともかくも、彼女の彼とか」

「その彼氏は僕のことちゃんと知ってるし、何の問題もないよ。おとひつちゃんは僕とさっきたんが付き合えば安心するよ。要はあいつに、俺のことを手のかかる弟分だと思いつまませておけばいいんだよ。そんなのお茶の子さいさいだ。水鳥中学生徒会のためでもあるんだよ、これつて。俺だつておとひつちゃんをこれ以上、杉本さんと絡ませて神経ばるばるな運命に落としたくないし」

「ジェラシーの炎に対する対策つてねえのか？」

僕は首を振った。おとひつちゃんに限ってそれは心配ない。だって、

「おとひつちゃんは、さっきたんが笑っていれば、それでいいと思ってるよきつと」

関崎乙彦はそういう男だ。誰よりも、自分にとって大切な人が幸せだったらそれでいい。たとえ親友に片想いの子を取られても、純粹に応援してくれる奴なんだ。

俺だつておとひつちゃんのことは大好きだ。ばかだけどひたむきなあいつのことを助けてやりたい。けど、今のままの弟分のままではだめなんだ。

守られてるんでなく、守りたいんだ、おとひつちゃんも、佐賀さんも、なにもかも！

ふふふつと笑った後、総田は調子よく掛け声をかけてきた。

「待ってました、天才参謀佐川雅弘復活だな！」

総田の声を聞きながらも僕はすっかり冷めていた。今までは素直に喜んでいられた「天才参謀」の肩書きも、もうはしゃいで受取れない。僕しか気づいていないかもしれないけど、言っておかなくちや。きつちり念押しして。

「忘れるなよ総田、敵は立村、奴だけだ」

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6700e/>

葉牡丹の花～青潟大学附属シリーズ中学編

2010年10月8日15時03分発行